

伊丹市所在

有岡城跡・伊丹郷町

- 都市計画道路尼崎港川西線都市計画街路事業に伴う発掘調査報告書 -

平成22年（2010）3月

兵庫県立考古博物館

伊丹市所在

有岡城跡・伊丹郷町

- 都市計画道路尼崎港川西線都市計画街路事業に伴う発掘調査報告書 -



平成22年 (2010) 3月

兵庫県立考古博物館



遺跡遠景（南から）



遺跡近景（南から）



269次 (平成14年度) 調査Ⅲ区 第1面 (西から)



269次調査Ⅱ区 第1面 (西から)



269次調査Ⅰ区 第1面 (西から)



269次調査Ⅲ区 第2面 (西から)



269次調査Ⅱ区 第2面 (西から)



269次調査Ⅰ区 第2面 (西から)



269次調査
第1面 墓地
(北から)



269次調査
2号棺



269次調査
7号棺



255次（平成13年度）調査
I区全景（南から）



255次 I区北壁



255次 II区第2面



255次 II区第3面全景
（北から）



石塔集合写真



一石五輪塔



三田青磁



金銅製品



2号棺 木床義歯 W26 ~ W29



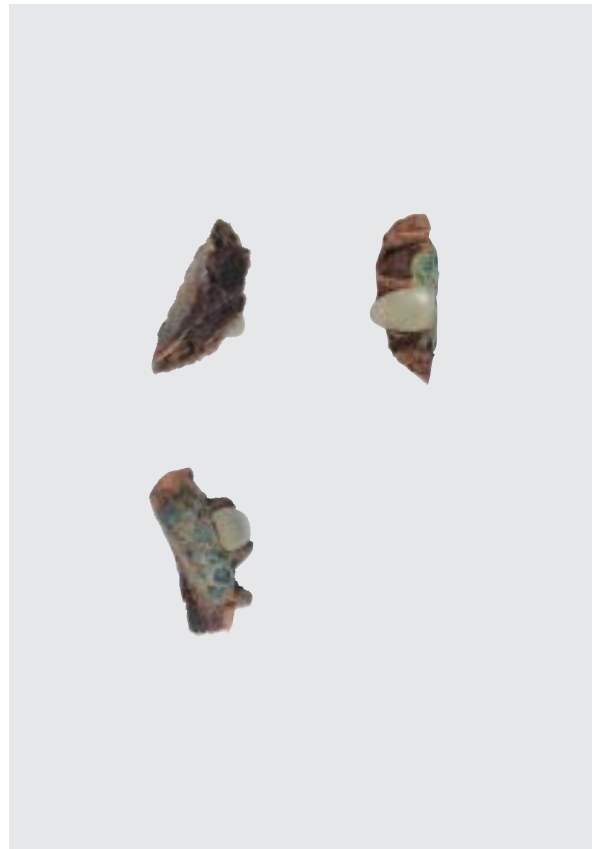
木床義歯 W26



同 W27



同 W29



同 W28

例 言

1. 本書は伊丹市南本町1丁目・伊丹4丁目・中央5丁目に所在する有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査報告書ある。
2. 本書は都市計画道路尼崎港川西線都市計画街路事業に伴う発掘調査報告書である。本工事に伴う発掘調査は確認調査を平成10年度に実施し、本発掘調査は平成13～15年度の3年度に亘って実施した。(各年度の詳細は後述の通り。)
3. 本報告書は兵庫県教育委員会が発行する有岡城跡・伊丹郷町遺跡報告書の第5冊目の報告書である。各地区の調査概要と担当者は第1章にそれぞれ記した。
4. 写真は遺構写真については各地区の調査担当者が撮影し、遺物写真については株式会社タニグチ・フォトに委託した。
5. 遺物のデジタル図化については、測点堂に委託した。
6. 本書の執筆は県立考古博物館 岡田章一・渡辺 昇・西口圭介・山上雅弘、および兵庫陶芸美術館 長谷川 眞・松岡千寿が分担し、文責は目次および本文中に明記した。
7. 出土人骨については、京都大学大学院理学研究科 自然人類学研究室の片山一道教授に鑑定を依頼し、藤澤珠織・片山一道氏より玉稿を頂戴している。
8. 木床義歯、布片についてはパリノ・サーヴェイ株式会社分析を依頼し、報告を掲載している。
9. 報告書の編集は岡田章一が池田悦子の協力を得て行った。
10. 本書では、遺構については調査年次ごとに成果を報告した。遺物については、平成13～15年度の調査分をまとめて報告した。
11. 遺物番号については、土器・土製品・陶磁器には通し番号を付し、瓦にはT、石製品にはS、玉類にはJ、金属製品にはM、銭貨にはC、木製品にはWをつけ、別番号とした。
12. 観察表については、土器・陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品について作成したが、書式は統一していない。
13. 本書で使用した標高は東京湾平均海水準を基とし、方位は世界測地系座標 系の座標北を用いた。
14. 出土遺物並びに写真・図面類は県立考古博物館及び魚住分館で保管している。
15. 本報告書において使用する25,000分の1地形図は、国土地理院発行の「伊丹」を使用し、調査区周辺の地形図については伊丹市発行の都市計画図を使用した。また、個別の遺構図・平面図などに関しては各担当者と調査補助員が現場で作成したものである。
16. 発掘調査および出土品の整理に際しては、下記の機関並びに個人からご指導・ご教示を頂いた。ここに、貴機関名および御芳名(敬称略)を記して深甚の謝意を表する。
伊丹市教育委員会・伊丹市立博物館・小長谷正治・中睦明日香

本文目次

第 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯	岡田章一	1
第 2 節 調査体制	岡田	1

第 章 遺跡をとりまく環境

第 1 節 伊丹城・有岡城の沿革	岡田	3
第 2 節 伊丹郷町	岡田	3
第 3 節 塚口城の調査	岡田	4

第 章 遺構

第 1 節 255次 (平成13年度) 調査区	渡辺 昇	5
(1) 概要	5	5
(2) 調査結果	5	5
第 2 節 269次 (平成14年度) 調査区	西口圭介	17
(1) 概要	17	17
(2) 堆積層序	17	17
(3) 遺構	18	18
第 3 節 平成15年度調査区	山上雅弘	32
(1) 調査の方法	32	32
(2) 調査の結果	32	32
(3) 小結	33	33

第 章 遺物

第 1 節 土器・陶磁器・土製品	岡田	34
第 2 節 瓦	渡辺	48
第 3 節 石製品	渡辺・西口	50
第 4 節 金属製品	西口・渡辺	58
第 5 節 木製品	西口	64

第 章 自然科学分析

第 1 節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡正覚寺墓地跡出土人骨	藤澤珠織・片山一道	108
第 2 節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社	113
(1) 木床義歯の分析	113	113
(2) 布片の分析	114	114

第 章 おわりに

第 1 節 正覚寺墓地跡の検討	西口	118
第 2 節 遺物の検討	岡田・長谷川 眞・松岡千寿	122
(1) 土器・陶磁器の分類	岡田・長谷川・松岡	122
(2) 時期設定と土器・陶磁器組成の変遷	岡田	146
(3) まとめ	岡田	148

挿 図 目 次

第 1 図	頭蓋骨写真.....111	第11図	土器・陶磁器変遷表(1).....153
第 2 図	腰骨・胸骨・大腿骨写真.....112	第12図	土器・陶磁器変遷表(2).....154
第 3 図	木材写真.....116	第13図	土器・陶磁器変遷表(3).....155
第 4 図	布片写真.....117	第14図	土器・陶磁器変遷表(4).....156
第 5 図	方形棺埋葬の手順.....121	第15図	土器・陶磁器変遷表(5).....157
第 6 図	土師器焙烙分類表.....123	第16図	土器・陶磁器変遷表(6).....158
第 7 図	土師器・瓦質土器火消壺分類表...125	第17図	土器・陶磁器変遷表(7).....159
第 8 図	丹波焼播鉢分類表.....127	第18図	土器・陶磁器変遷表(8).....160
第 9 図	備前焼・備前系陶器播鉢分類表...133	第19図	土器・陶磁器変遷表(9).....161
第10図	備前系陶器播鉢分類表.....134	第20図	土器・陶磁器変遷表(10).....162

表 目 次

第 1 表	石造品・石製品計測表..... 56	第 3 表	木製品計測表..... 65
第 2 表	金属製品計測表..... 61	第 4 表	土器・陶磁器・土製品観察表..... 66

図 版 目 次

図版 1	調査区 全体図	図版21	区 第 2 面 S K
図版 2	全体図 (上面)	図版22	区 第 2 面 S K
図版 3	全体図 (下面)	図版23	区 第 2 面 S K
図版 4	255次調査 区 西壁土層断面図	図版24	区 第 2 面 S D
図版 5	区 第 1 面 全体図	図版25	区 第 2 面 S X
図版 6	区 第 1 面 S I	図版26	区 第 3 面 全体図
図版 7	区 第 1 面 S I	図版27	区 第 3 面 堀断面図
図版 8	区 第 1 面 S E	図版28	区 第 3 面 S K
図版 9	区 第 1 面 S E ・ S K	図版29	区 第 3 面 S E ・ S X ・ S D
図版10	区 第 1 面 S K ・ S D	図版30	区 東壁土層断面図
図版11	区 第 1 面 S K	図版31	区 北壁土層断面図
図版12	区 第 1 面 S K	図版32	区 第 1 面 全体図
図版13	区 第 1 面 S K	図版33	区 第 1 面 S K ・ S P
図版14	区 第 1 面 S K	図版34	区 第 1 面 S D
図版15	区 第 1 面 S K (S E)	図版35	区 第 1 面 S D
図版16	区 第 1 面 S X	図版36	区 第 1 面 S D
図版17	区 第 1 面 S X	図版37	区 第 1 面 S X ・ S D
図版18	区 第 2 面 全体図	図版38	区 第 2 面 平面図
図版19	区 第 2 面 S K	図版39	区 第 2 面 S X
図版20	区 第 2 面 S K	図版40	区 第 2 面 S X ・ S D

図版41	区 第3面 全体図	図版79	出土遺物実測図11 (土器・土製品)
図版42	区 第3面 S E	図版80	出土遺物実測図12 (土器・土製品)
図版43	区 第3面 S E	図版81	出土遺物実測図13 (土器・土製品)
図版44	区 第3面 S X・S D	図版82	出土遺物実測図14 (土器・土製品)
図版45	区 第1面 S X・S D	図版83	出土遺物実測図15 (土器・土製品)
図版46	269次調査 遺構全体図	図版84	出土遺物実測図16 (土器・土製品)
図版47	区 南・西壁土層断面図	図版85	出土遺物実測図17 (土器・土製品)
図版48	区・ 区西壁土層断面図	図版86	出土遺物実測図18 (土器・土製品)
図版49	区 第1面 礎石建物	図版87	出土遺物実測図19 (土器・土製品)
図版50	区 第1面 S K	図版88	出土遺物実測図20 (土器・土製品)
図版51	区 第1面 正覚寺 寺域詳細図	図版89	出土遺物実測図21 (土器・土製品)
図版52	区 第1面 1・2・3号棺 (1)	図版90	出土遺物実測図22 (土器・土製品)
図版53	区 第1面 1・2・3号棺 (2)	図版91	出土遺物実測図23 (土器・土製品)
図版54	区 第1面 4・5号棺周辺	図版92	出土遺物実測図24 (土器・土製品)
図版55	区 第1面 4・5号棺	図版93	出土遺物実測図25 (陶磁器)
図版56	区 第1面 6・7号棺	図版94	出土遺物実測図26 (陶磁器)
図版57	区 第1面 墓域 東半部	図版95	出土遺物実測図27 (陶磁器)
図版58	区 第1面 火葬墓	図版96	出土遺物実測図28 (陶磁器)
図版59	区 第1面 S X	図版97	出土遺物実測図29 (陶磁器)
図版60	区 第1面 井戸	図版98	出土遺物実測図30 (陶磁器)
図版61	区 第2面 正覚寺 寺域詳細図	図版99	出土遺物実測図31 (陶磁器)
図版62	区 第1・2面 土葬墓・土坑	図版100	出土遺物実測図32 (陶磁器)
図版63	区 第2面 火葬墓	図版101	出土遺物実測図33 (陶磁器)
図版64	平成15年度 ・ 区 平面図	図版102	出土遺物実測図34 (陶磁器)
図版65	・ 区 平面図	図版103	出土遺物実測図35 (陶磁器)
図版66	・ 区 土層断面図	図版104	出土遺物実測図36 (陶磁器)
図版67	・ 区 土層断面図	図版105	出土遺物実測図37 (陶磁器)
図版68	・ ・ 区 S Kなど	図版106	出土遺物実測図38 (陶磁器)
図版69	出土遺物実測図1 (土器・土製品)	図版107	出土遺物実測図39 (陶磁器)
図版70	出土遺物実測図2 (土器・土製品)	図版108	出土遺物実測図40 (陶磁器)
図版71	出土遺物実測図3 (土器・土製品)	図版109	出土遺物実測図41 (陶磁器)
図版72	出土遺物実測図4 (土器・土製品)	図版110	出土遺物実測図42 (陶磁器)
図版73	出土遺物実測図5 (土器・土製品)	図版111	出土遺物実測図43 (陶磁器)
図版74	出土遺物実測図6 (土器・土製品)	図版112	出土遺物実測図44 (陶磁器)
図版75	出土遺物実測図7 (土器・土製品)	図版113	出土遺物実測図45 (瓦)
図版76	出土遺物実測図8 (土器・土製品)	図版114	出土遺物実測図46 (瓦)
図版77	出土遺物実測図9 (土器・土製品)	図版115	出土遺物実測図47 (瓦)
図版78	出土遺物実測図10 (土器・土製品)	図版116	出土遺物実測図48 (瓦)

図版117	出土遺物実測図49 (瓦)	図版136	出土遺物実測図67 (石製品)
図版118	出土遺物実測図50 (瓦)	図版137	出土遺物実測図68 (金属製品)
図版119	出土遺物実測図51 (瓦)	図版138	出土遺物実測図69 (金属製品)
図版120	出土遺物実測図52 (瓦)	図版139	出土遺物実測図70 (金属製品)
図版121	出土遺物実測図53 (瓦)	図版140	出土遺物実測図71 (金属製品)
図版122	出土遺物実測図54 (瓦)	図版141	出土遺物実測図72 (金属製品)
図版123	出土遺物実測図55 (瓦)	図版142	出土遺物実測図73 (金属製品)
図版124	出土遺物実測図56 (瓦)	図版143	出土遺物実測図74 (金属製品)
図版125	出土遺物実測図57 (瓦)	図版144	出土遺物実測図75 (金属製品)
図版126	出土遺物実測図58 (瓦)	図版145	出土遺物実測図76 (金属製品)
図版127	出土遺物実測図59 (瓦)	図版146	出土遺物実測図77 (金属製品)
図版128	出土遺物実測図60 (瓦)	図版147	出土遺物実測図78 (金属製品)
図版129	出土遺物実測図61 (瓦)	図版148	出土遺物実測図79 (金属製品)
図版130	出土遺物実測図62 (瓦)	図版149	出土遺物実測図80 (金属製品)
図版131	出土遺物実測図62 (石造品)	図版150	出土遺物実測図81 (銭)
図版132	出土遺物実測図63 (石造品)	図版151	出土遺物実測図82 (銭)
図版133	出土遺物実測図64 (石造品)	図版152	出土遺物実測図83 (木製品)
図版134	出土遺物実測図65 (石造品)	図版153	出土遺物実測図84 (木製品)
図版135	出土遺物実測図66 (石製品)		

卷頭写真図版目次

卷頭写真図版 1	遺跡遠景	卷頭写真図版 5	255次調査 区遺構
卷頭写真図版 2	遺跡全景	卷頭写真図版 6	出土遺物
卷頭写真図版 3	遺跡全景	卷頭写真図版 7	出土遺物
卷頭写真図版 4	269次調査 第1面遺構	卷頭写真図版 8	出土遺物

写真図版目次

写真図版 1	遺跡遠景	写真図版12	区 第1面 全景
写真図版 2	255次調査 区 第1面	写真図版13	区 第1面 全景・S K
写真図版 3	区 第1面 S E・S I	写真図版14	区 第1面 S K・S P・S D
写真図版 4	区 第1面 S I・S X	写真図版15	区 第1面 S D
写真図版 5	区 第1面 S X・S K	写真図版16	区 第1面 S D
写真図版 6	区 第2面 全景	写真図版17	区 第2面 全景
写真図版 7	区 第2面 S K	写真図版18	区 第2面 S X
写真図版 8	区 第2面 S K	写真図版19	区 第3面 全景
写真図版 9	区 第2面 S K	写真図版20	区 第3面 全景
写真図版10	区 第2面 S P・S D・S X	写真図版21	区 第3面 S D・S E
写真図版11	調査区	写真図版22	区 第3面 S E

写真図版23	区 第3面 S X	写真図版61	・ 区 第2面 墓地・寺域・落右
写真図版24	区 第3面 S X	写真図版62	区 第2面 墓地
写真図版25	区 第3面 調査風景	写真図版63	区 第2面 墓地・S X・土葬墓
写真図版26	269次調査 遺跡近景	写真図版64	平成15年度 ・ 区
写真図版27	調査区 土層	写真図版65	区
写真図版28	第1面 調査区	写真図版66	区
写真図版29	区 第1面 町屋	写真図版67	255次 出土土器・陶磁器 1
写真図版30	・ 区 第1面 建物	写真図版68	出土土器・陶磁器 2
写真図版31	区 第1面 町屋・墓地・S K	写真図版69	出土土器・陶磁器 3
写真図版32	区 第1面 S K	写真図版70	出土土器・陶磁器 4
写真図版33	・ 区 第1面 墓地	写真図版71	出土土器・陶磁器 5
写真図版34	区 第1面 墓地	写真図版72	出土土器・陶磁器 6
写真図版35	区 第1面 区画石列	写真図版73	出土土器・陶磁器 7
写真図版36	区 第1面 1号棺	写真図版74	出土土器・陶磁器 8
写真図版37	区 第1面 1号棺	写真図版75	出土土器・陶磁器 9
写真図版38	区 第1面 2号棺	写真図版76	出土土器・陶磁器10
写真図版39	区 第1面 2号棺	写真図版77	出土土器・陶磁器11
写真図版40	区 第1面 2号棺	写真図版78	出土土器・陶磁器12
写真図版41	区 第1面 3号棺	写真図版79	出土土器・陶磁器13
写真図版42	区 第1面 3号棺	写真図版80	出土土器・陶磁器14
写真図版43	区 第1面 3号棺	写真図版81	269次 出土土器・陶磁器15
写真図版44	区 第1面 4・5号棺	写真図版82	出土土器・陶磁器16
写真図版45	区 第1面 6号棺	写真図版83	出土土器・陶磁器17
写真図版46	区 第1面 6号棺	写真図版84	出土土器・陶磁器18
写真図版47	区 第1面 7号棺	写真図版85	出土土器・陶磁器19
写真図版48	区 第1面 7号棺	写真図版86	出土土器・陶磁器20
写真図版49	区 第1面 火葬墓	写真図版87	出土土器・陶磁器21
写真図版50	区 第1面 火葬墓	写真図版88	出土土器・陶磁器22
写真図版51	区 第1面 火葬墓	写真図版89	出土土器・陶磁器23
写真図版52	区 第1面 火葬墓	写真図版90	出土土器・陶磁器24
写真図版53	区 第1面 井戸	写真図版91	出土土器・陶磁器25
写真図版54	区 第1面 井戸	写真図版92	出土土器・陶磁器26
写真図版55	区 第1面 S K・S D	写真図版93	出土土器・陶磁器27
写真図版56	第2面 調査区	写真図版94	出土土器・陶磁器28
写真図版57	区 第2面 堀	写真図版95	出土土器・陶磁器29
写真図版58	区 第2面 堀	写真図版96	出土土器・陶磁器30
写真図版59	区 第2面 町屋	写真図版97	出土土器・陶磁器31
写真図版60	区 第2面 S K	写真図版98	出土土器・陶磁器32

写真図版99	出土土器・陶磁器33	写真図版116	出土石造品 1
写真図版100	出土土器・陶磁器34	写真図版117	出土石造品 2
写真図版101	平成15年度 出土土器・陶磁器35	写真図版118	出土石造品 3
写真図版102	出土土器・陶磁器36	写真図版119	出土石製品 1
写真図版103	出土土器・陶磁器37	写真図版120	出土石製品 2
写真図版104	出土瓦 1	写真図版121	出土金属製品 1
写真図版105	出土瓦 2	写真図版122	出土金属製品 2
写真図版106	出土瓦 3	写真図版123	出土金属製品 3
写真図版107	出土瓦 4	写真図版124	出土金属製品 4
写真図版108	出土瓦 5	写真図版125	出土金属製品 5
写真図版109	出土瓦 6	写真図版126	出土金属製品 6
写真図版110	出土瓦 7	写真図版127	出土金属製品 7
写真図版111	出土瓦 8	写真図版128	出土錢貨 1
写真図版112	出土瓦 9	写真図版129	出土錢貨 2
写真図版113	出土瓦10	写真図版130	出土木製品 1
写真図版114	出土瓦11	写真図版131	出土木製品 2
写真図版115	出土瓦12		

第 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

今回報告する調査は、西宮土木事務所伊丹出張所が計画する都市計画道路尼崎港川西線都市計画街路事業に伴うものである。

この事業予定地が周知の遺跡「有岡城跡・伊丹郷町遺跡」の範囲内にあたり、国指定史跡「有岡城跡」の指定範囲内に隣接するため、兵庫県教育委員会では、西宮土木事務所の依頼（平成10年8月31日付け西土第1435号）を受けて平成10年度に確認調査を実施した。

確認調査の結果、有岡城跡の惣構えラインを形成した堀と土塁が調査区の南側に位置し、北西から南東方向に横断することが判明した。さらに、伊丹郷町の遺構は18世紀後半～19世紀前半頃には、堀の内側全体に広がっており、確認調査では整地土層や廃棄土坑が検出された。

これらの結果から、県教育委員会では、工事予定地内での全面調査の必要性を認め、平成13年度～15年度の3カ年にわたって、全面調査を実施した。

第 2 節 調査体制

発掘調査

各年度の発掘調査体制は以下のとおりである。

1 平成10年度

遺跡調査番号 980122
所在地 伊丹市伊丹4丁目他
調査の種類 確認調査
調査期間 平成10年9月1日～2日
調査担当者 山上雅弘・岡本一秀
調査面積 32m²

2 平成13年度 (255次)

遺跡調査番号 2001101
所在地 伊丹市伊丹4丁目・南本町1丁目
調査の種類 本発掘調査
調査期間 平成13年8月1日～11月19日
調査担当者 渡辺 昇・松岡千寿
調査面積 779m²

3 平成14年度 (269次)

遺跡調査番号 2002149
所在地 伊丹市伊丹4丁目
調査の種類 本発掘調査
調査期間 平成14年10月23日～平成15年2月12日

調査担当者 西口和彦・西口圭介・岡田章一・山上雅弘
調査面積 700m²

4 平成15年度

遺跡調査番号 2003223
所在地 伊丹市中央5丁目・南本町1丁目
調査の種類 本発掘調査
調査期間 平成15年12月8日～平成16年1月27日
調査担当者 山上雅弘
調査面積 176m²

発掘調査補助員

永野 香・前田陽子・竹村陽子・野田希和子・土井領子・道成慶子・岡見亮衣・門田諭佳・高田祐一
望月悠祐・畑中真理・櫻井雅子・野村大作・濱野俊一・西山はるみ・北山由起子

整理調査

整理作業は平成19年度から21年度の3カ年にわたって実施した。平成19年度は遺物洗浄、ネーミング、接合・復原、土器の実測・拓本を、平成20年度は土器・木製品・金属製品の実測・拓本、写真整理を、平成21年度は図面補正、トレース、レイアウト、分析鑑定を行い、報告書を刊行した。

整理作業担当嘱託員

接合・復原作業

吉田優子・西口由紀・島村順子・三好綾子・又江立子・宮野正子・奥野政子・伊藤ミネ子・荒木由美子・荻野麻衣・嶺岡美見・小谷桂加・谷脇里奈・吉村あけみ・有田遥香

実測作業

池田悦子・柏原美音・松本嘉子・前川悦子・高瀬敬子・柏木明子

日々雇用職員

小川真理子・本庄瑛美・佐々木愛・山田美穂・井上知花・藤原砂織

第 章 遺跡をとりまく環境

有岡城跡・伊丹郷町の地理的・歴史的環境については、現在まで、有岡城跡・伊丹郷町 ~ までの報告書がすでに刊行されており、それらに既に詳述されている。ここでは、それらと重複するが、有岡城及び伊丹郷町の沿革について、その概要を述べ、併せて隣接する尼崎市内で調査された同時期の城郭である塚口城の調査成果について若干触れて、本報告書の歴史的環境に代えたい。

第 1 節 伊丹城・有岡城の沿革

伊丹城の名が文献上で確認されるのは、南北朝の動乱期の文和 2 年（1353）伊丹氏の一族であった森本佐衛門次郎基長の軍忠状に現れるのが初現である。

この伊丹城を居城とした伊丹氏は平安時代末期から伊丹を本拠とした武士で、室町時代に細川管領家が摂津守護となるとその被官となった。

応仁元年（1467）に勃発した応仁・文明の大乱はやがて全国的な争乱へと発展するが、この乱に際して、伊丹氏をはじめとする主だった摂津の国人は西上してきた西軍の大内政弘の軍門に一時的に降り、摂津の政治情勢は混迷の度を加えることになる。

やがて、文明11年（1479）、大内政弘が本拠の周防に帰還すると、伊丹氏をはじめとする国人層は、また細川氏の被官に復帰し、摂津の政治情勢は安定を取り戻す。

永禄11年（1568）、天下布武を目指す織田信長が摂津に侵攻すると、伊丹城の伊丹親興はいち早くこれに応じ、伊丹城を安堵された。その後、天正 2 年（1574）、信長の家臣荒木村重は伊丹城を攻めて伊丹親興を追い、伊丹城を有岡城と名付けてその城主となった。

有岡城に入った村重は城に大規模な改修を加え、強固な「惣構え」の城を完成させた。村重によって改修された有岡城は摂津を手中に収めた荒木氏の居城に相応しく、より強固なものに改められ、惣構えは南北1.7km、東西0.8kmに及び、その内側は大きく、主郭（城郭）部、内郭部、外郭部の 3 部分から構成されていた。

天正6年（1578）、村重は本願寺および毛利氏と結び、有岡城に籠もって信長に反旗を翻した。驚いた信長は家臣の滝川一益、丹羽長秀、明智光秀に命じて有岡城を攻撃させたが、城は容易に落城せず、10ヶ月にも及ぶ籠城の後、ついに翌天正 7 年（1579）11月に落城した。

落城後の有岡城は、羽柴秀吉の手によって、4年後の天正11年（1583）廃城となり、堅塁を誇った有岡城も村重の改修後僅か 9 年でその歴史を閉じた。

その後、伊丹の地には再び城が築かれることはなく、「惣構え」の構造は酒造業を中心に繁栄する近世の伊丹郷町へと引き継がれることになる。

第 2 節 伊丹郷町

伊丹における酒造はすでに江戸時代以前の文禄・慶長年間から始まっており、急速に発展する江戸を市場とする江戸積酒の産地として発展して行く。

伊丹の酒造業は元禄期には最盛期を迎え、元禄 8 年（1695）刊行の『本朝食鑑』には江戸を市場とする江戸積酒の銘醸造として伊丹酒があげられている。

江戸積酒造業はその後も伊丹の主要産業として継続され、江戸時代中頃の正徳5年（1715）には酒造

家72軒、酒造株数103件、株高6万石を記録し、元文5年（1740）には、伊丹酒は将軍の御前酒となり、「丹釀」として歓迎されている。

しかし、江戸時代中期の享保16年（1731）に米価の引き上げを目的として、幕府が従来の酒造統制策を転換して、酒造奨励策をとるようになると、新興の西摂の海岸地帯の灘目と呼ばれる地域を中心とする灘の酒造業が台頭して来る。灘の酒造業はその後、ますます発展し、18世紀後半には伊丹、池田を圧倒するようになる。

このように、伊丹の酒造業は18世紀後半以降も現在に至るまで継続するものの、江戸積酒の主要産地としての地位は完全に灘に奪われ、「灘の生一本」と呼ばれる銘酒とともに、灘がわが国を代表する酒造地帯となって、今日に至っている。

明治になると、江戸時代以来、酒造株制度で統制されていた酒造業は大きく変貌し、新たに酒造鑑札制度が導入され、増税と酒造業再編の動きの中で伊丹の酒造業は決定的な打撃を被る。

このような酒造業の衰退に伴い、酒造業にかわって、伊丹にはランプ、綿ネル、マッチなどの近代工業が移植されて、伊丹の産業構造は大きく変化してゆく。

大正6年、塚口 - 伊丹間に阪急電鉄伊丹線が開通すると、伊丹は大阪市の近郊住宅都市の一つとして脱皮し、伊丹台地上の住宅化が促進された。また、福知山線の開業を契機に、大正から昭和にかけて工業都市化が進み、第2次世界大戦を迎えることになる。

このように、酒造業を中心に近世を通じて発展してきた伊丹は明治維新を契機に大きく変貌し、工業都市あるいは住宅都市へとその性格を変えて行くことになる。

第3節 塚口城の調査

有岡城周辺の同時期の城には塚口城・富松城・原田城・池田城などがあり、それらの地点でも発掘調査が行われている。塚口城は有岡城の南側に位置し、平成13・16・17年度の3カ年にわたって、発掘調査が実施されている。調査では城を巡る二重の堀とその東西のコーナー部分が検出されている。外堀の幅は5m、内堀の幅は5.5m、深さは外堀が60cm、内堀が90cmを測る。出土遺物には、16世紀後半代の丹波焼壺、中国製白磁皿などの陶磁器類の他、漆椀、下駄、切匙などがある。また、堀の埋土中からは、18世紀後半代の肥前系染付磁器碗を中心に大量の陶磁器が出土しており、江戸時代後半の明和年間に残存していた土塁を崩して堀が埋め立てられたとされる文献上の記載を裏付けることとなった。

引用・参考文献

- 1 兵庫県史編集専門委員会 1978 『兵庫県史』第3巻 兵庫県
- 2 兵庫県史編集専門委員会 1980 『兵庫県史』第4巻 兵庫県
- 3 伊丹市史編纂専門委員会 1983 『伊丹市史』第3巻 伊丹市
- 4 兵庫県大百科事典刊行委員会 1983 『兵庫県大百科事典』 神戸新聞出版センター
- 5 小長谷正治・川口宏海 1996 「伊丹郷町の酒造業」『関西近世考古学研究』 関西近世考古学研究会
- 6 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2008 「塚口城跡」『平成17年度 年報』

第 章 遺 構

第 1 節 255次 (平成13年度) 調査区

(1) 概要

都市計画街路事業として尼崎港川西線(一般名称の産業道路)の整備事業が計画継続している。買収状況に合わせて順次発掘調査が継続して実施されている。今回の調査地点についても平成10年度に実施された確認調査の結果を基に、平成13年度に本発掘調査を行った。今回の調査地点は有岡城跡・伊丹郷町の外郭ラインに相当する。区は段丘崖の下に当たることから、南本町遺跡とする方が妥当かもしれない。大坂道から下りてくる道が現在でも生きており、それによって調査区を分けている。北側を区、南側を区として調査を行った。

調査地は伊丹市伊丹4丁目と南本町1丁目にあり、779m²(区382m²、区397m²)を調査した。調査は他調査と同じく兵庫県阪神北県民局県土整備部伊丹土木事務所の依頼を受けて実施した。調査は平成13年8月1日～11月19日までの実働68日間行った。兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が担当し、調査第4班職員2名が担当した。

作業ヤードや人力掘削残土置場の都合から、一気に調査を行うことは困難であったため、区から調査を行った。機械掘削時のコンクリートなどは掘削に合わせて残土処分地に運んだが、他の残土と人力掘削土は仮置場を設けて置いておいた。区の土を区へ、調査終了後反転し、区を埋め戻して区の土を区へ置くこととした。区は調査区内に生きた水路が存在したので、調査区南西部に付け替えてから撤去し調査を行った。確認調査結果を基に、主に盛土と旧耕土を機械掘削し、その下については人力による掘り下げののち、遺構面精査・遺構掘削を行った。2面以上の遺構面が想定されていたが、東側の段丘崖上の標高の高い部分ではほぼ同一面で検出した。2地区ともに2面の空中写真撮影と図化作業を委託して行った。各遺構の断面図などや写真撮影などの記録は随時担当者・調査補助員が実施した。一部3面の遺構面があったので、平面図も合わせて実測作業を行った。

(2) 調査結果

区

3面の調査を行った。第1面は耕土直下で検出した。東側の高い部分では伊丹段丘の礫層が認められた。地山と考えられたことから、東半では埋土や出土遺物・切り合い関係から所属遺構面を考えた。西側では初期の堀跡を検出し、堆積土の厚みもあったことから、垂直的に3面を分別できた。

第1面

検出した遺構は、井戸・溝・落ち込み・埋甕・土坑・ピットである。多くは幕末に近い時期で、19世紀の遺構である。また、上面で耕作痕を確認している。暗渠も水田時のものである。段丘に沿って途切れながら(かたまって記録作成しているのは2.5m)6m余り確認している。他例同様に拳大の礫を主に使用しており、底には木が置かれていた。

埋甕・埋桶 (SI)

5基検出している。第1面で検出しているが、すべてその中でも新しい時期であろうと思われる。伊

丹郷町廃絶前の町屋の遺構であろう。

SI01は調査区北東のSX01の西側に接して築かれている。径0.55～0.6mの不定円形の掘り方に大谷焼甕を据えている。掘り方には細砂を敷いてから甕を置いている。体部上半から口縁部は削平時に損失している。残存する深さは0.15mである。

SI02は大谷焼甕を使用しており、内面には漆喰が塗られていた。SI03と端部同士で0.4mと隣接している。南北に並ぶのではなく、SI03が東側にずれている。径0.6mの円形掘り方中央に甕を底面に接して据えている。

SI03も大谷焼甕を使用しており、内面には漆喰が塗られていた。SI02と並んで位置しており、2基で1対となるものと思われる。ただ水平に置かれているのではなく、やや傾いて据えられている。掘り方は南北に0.55m、東西に0.6mとやや楕円形になる。

SI04は調査区南東コーナーで検出している埋桶である。東西0.85mの掘り方で東側に接して桶は置かれている。東側は斜めに埋土が確認されており、西側から埋めて黄褐極細砂で水平に桶を据えたようである。底から0.45m残存しており、その上は攪乱によって削られている。桶内から陶器・瓦片が出土している。

SI05は南壁沿いにある土坑である。SI04と2.5m離れている。東西に長い楕円形の掘り方であろうと思われ、東西の最大径は1.2mである。やはり上部は攪乱によって削平されているが、残存する深さは0.35mである。垂直に掘り下げられている。桶は残存していないが、形状から埋桶と思われる。他遺跡の例から考えると大小1対の埋桶が多くあるので、SI04とセットになる可能性が高い。埋土に瓦片が見られる。

井戸 (SE)

6基検出している。それ以外に並んで現代井戸もあり、水が得られやすい位置であったことを示している。すべて深く掘られており、一部深掘りしたが底面には達していない。最低でも2.5m以上の深さがあることとなる。伊丹郷町の他地点の例では5m以上の深さがある。現代井戸は埋土に白色粘土を詰めて丁寧に埋め戻している。息抜きは上面まで達していない。

SE01は調査区南側に位置し、北西部を攪乱によって削平されている。攪乱の向かい側にSE02が存在する。隅円方形に近いプランで1辺1.4m前後である。現状では素掘りと思われる。底は調査しておらず、0.8mまで下げている。

SE02は南東隅を攪乱によって削られている。やはり隅円方形で1辺1.3mである。底は検出しておらず、0.4mまで下げている。水平堆積の埋土である。素掘りと思われる。

SE03は現代井戸の南側に位置する不定方形の掘り方を有する。最大長1.7mを測り、0.7mだけ掘り下げている。西側部分には井側外に埋めた埋土が残っており、井側は抜かれたものと思われる。内面は水平堆積をしていた。平瓦などを含んでいる。上面には漆喰なども認められる。瓦以外に播鉢・土師器・磁器が出土している。18世紀代に遡る遺物も含まれるが、19世紀のものが大半である。

SE04は段丘下の西壁近くで調査した。北側は隅円方形で、南側は楕円形に近い形状となっている。東西1.2m、南北1.3mを測る。深さは0.3mだけ調査しており、底は確認していない。井側は検出されていないが、裏込め状況がわかるので井側が存在したことは確実であろう。井戸用の瓦積みの可能性が高いと思われる。裏込めに瓦片が出土している。

SK10は土坑として調査したが、井戸と考えられるので本項で報告する。中央北側のSX03の東で検出している。径1.35mの不定円形の掘り方である。1.2mまで下げたが、底は検出していない。その範囲での断面観察で裏込めは見られず、この状況では素掘りとしが言えない。埋土は水平堆積であり、遺物は小片以外出土していない。

SK27も土坑として調査したが井戸であろう。SE02の北側1mのところの位置している。東西1.35m、南北1.15mの楕円形をしている。0.95mまで下げているが、この範囲では井側は確認されておらず、現状では素掘りとせざるを得ない。北側から大きく埋めている。

溝 (SD)

SD01は段丘上中央北側に東西に走っている溝である。東側は削平されて東壁まで残存していないが、屋敷地を東西に貫いていたものと思われる。幅0.4mで深さ0.15mの断面逆台形の溝である。中央に水溜めの機能を有するSK09が存在する。西側の段丘下に流れる部分は幅を2.4mに広げている。底も徐々に深くなっている。

土坑 (SK)

SK01は段丘北側にある長楕円形の土坑である。南北2.1m、東西1.15mを測り、北側の方の幅がやや広い。深さは全体的に5cm余り下がり、東側中央部分だけさらに10cm前後深くなっている。

SK02は北側に位置しSK01から北に0.5mと隣接している。径1.5mの不定円形である。深さは0.75mで底は平坦である。底から肩部まで同一の埋土で、中央西側に礫層が入れられている。

SK04はSI01の南西0.3mの位置にあり、南東にSK06が0.2m離れて存在する。径0.8mのやや歪な円形で、深さ0.15mを測る。底は平坦である。

SK05は段丘北側のSX01・SI01の西側に位置している。東西0.75m、南北0.4mの東西に長い長楕円形を呈している。深さは0.1mと浅く、断面は皿状である。

SK06は調査区北側でSK04の南東に位置している。南北0.85m、東西0.95mの不定円形である。東側から北側の肩部は緩やかだが、南西部は急である。底面は凹凸がある。深さ0.25mを測る。

SK07も段丘北側にあり、SK06の南西0.15mに位置している。南北0.6m、東西0.5mの楕円形を呈している。断面形は逆台形で、深さ0.25mである。

SK08は段丘上中央北側にある土坑で、南北2.6m、東西2.0mの長方形を呈する。SX03を切っている。南辺だけ2.3mに広がり深掘された部分の影響を受けている。南西部分の深掘されている部分は径1.3mの東西に長い楕円形で1.05m下がっている。全体は0.7m下がっており、底は平坦である。堆積は水平になっている。

SK09はSD01の中央付近に主軸を同じくして築かれた平面長方形の土坑である。内法で南北0.45m、東西0.6m、深さ0.2mを測る。平瓦を割って底と四壁に使っている。東辺は中央を幅10cm、深さ5cmの方形に開けている。西辺は開いておらず、閉じている。底には瓦の下に5～10cmの、四壁は10～20cmの黄白の精良な粘土を巻いている。周囲には粘土の中に瓦片を入れている。西壁と北壁が粘土が厚くなっている。埋土は2層の水平堆積で、そこには有機質が堆積している。東側から流れる水溜めと考えられる。

SK14は調査区中央付近にあり、SX03を切っている。V字状の不定形をしている。最大長で南北1.55m、東西1.65mを測る。西側が浅く東側が深くなっている。底は緩やかな傾斜となり、東端の深いところで

0.35mとなる。

SK20は段丘下の北側に位置している。南側を攪乱で切られている。東西1.0mで、南北は残存長0.7mを測る。弧線から東西に長い円形の土坑と推定される。深さは0.25mで底は平坦である。底面に円礫を置いており、埋土中にも被熱した礫や焼土が見られる。火を使う遺構があったものと思われる。

SK24は調査区南側にあり、SE01に隣接している。南西0.15mにSK33がある。径0.7mの不定円形であるが、弧は丸くなく歪である。底は平たく、深さは0.3mである。埋土はオリーブ褐中砂1層で瓦片や礫を含んでいる。

SK28はSK01の下層にある土坑である。径0.7mの不定円形の掘り方で、深さ0.3mを測る。底は平坦で埋土は北東部が上がっているが比較的水平的な堆積をしている。

SK32は段丘上南側にある径0.8mを測る不定円形の土坑である。底は平坦で断面形状は浅い逆台形である。深さは0.15mである。

SK33はSE01の東0.15mと近接している。南北1.1m、北辺0.35m、南辺0.6mの隅円となった長い台形プランである。深さ0.25mで底は平滑である。

SK34は段丘上南東部に位置しており、調査区東に延びている。溝状の土坑で西側は幅0.7mあるが、東側では幅0.35mと細くなる。調査範囲で1.5mの長さを調査している。深さは0.25～0.3mで底は平たく水平的な堆積をしている。

SK36は調査区南東隅近くに位置している。0.5×0.45mの卵形をした土坑である。深さは0.1mと浅く、底は平たい。

SK52は調査区中央にあり、土坑よりも落ち込みに近いものである。自然地形かもしれない。段丘崖に接して南北2.6mで最大幅0.8m窪んでいるもので、緩やかな傾斜ではなく、肩が明瞭なので遺構とした。堆積状況は東から西に向かって堆積している。深さは最大で0.5mを測る。

SK57は調査区南壁沿いで検出している。南側は攪乱坑によって切られている。南北0.6mで、東西の残存長は0.6mである。東西に長い長方形プランの土坑であろうと思われる。深さは0.1mと浅く、底は平坦である。

SK59は西壁沿いで検出した不定形の土坑である。東西2.0m調査しており、西側に続いている。南北は1.2mで西側はすぼんでいる。深さは0.1mと浅く、底は平たい。

落ち込み (SX)

SX01は調査区北東で検出しており、遺構は調査区外東側に延びている。鍛冶滓や炉壁が多く出土しており、隣接して炉跡が存在したものと思われる。その廃棄土坑であろう。検出した長さは、南北3.25m、東西0.7mである。深さは最も深いところで0.8mとなる。南側から北側に向かって深くなっており、3段になっている。最終段階を除いて、南側は埋められている。七厘も出土しているおり、火を使った遺構に伴うものであることは明らかである。

SX02は調査区北東隅で検出している。東側と北側調査区外に延びており、調査した長さは南北0.95m、東西0.5mを測る。深さが0.9mと深いことやSX01と同様の埋土であることから廃棄土坑と考えられる。

SX03は段丘上北側を南北に溝状となった落ち込みである。SK08・09・14やSD01に切られている。南北12.2mを調査している。幅は1.5m前後であるが、広いところは2.2mとなる。深さは最大で0.4mで、ほとんどは0.2m前後と浅く皿状の断面になっている。

SK04は段丘下の北端で検出した方形の落ち込みで北側に延びている。東西3.0mで南北の検出長は2.9mである。西側では肩から深さ0.4mとなる。底面は平坦で遺物も底から出土している。東側では埋土から段丘崖から延びており、0.65mとなるが、この部分は後世の水溜めなどとして使用されていた可能性が高い。底で幅1.0mの段丘下の水施設であろう。

第2面

東側の段丘部分の遺構は切り合いと出土遺物から判断している。西側半分だけは面的に掘り下げて調査している。この遺構面は焼土層が広がっており、火災面と考えられる。出土遺物は18世紀から19世紀であり、第1面と大きく離れていない時期と考えられる。元禄年間の大火とは考えられず、宝暦9年(1757)か明和年間の火災であろうか。

検出した遺構は少なく、溝・土坑・落ち込み・ピットである。ピットは数基検出しているが掘立柱建物に復原できるものはなく、明確に柱痕跡があるものもない。

溝 (SD)

SD02は調査区北半を南北に走る溝で、南側にも続いていたと思われるが、攪乱などで削平されて残っていない。段丘裾部に平行して存在する溝で幅40～55cm、深さ20～30cmで、残存長9.2mを測る。途中で2.2m途絶えているが、同一遺構と考えている。北側の方が幅がやや広く、南側は底面に段が見られる。断面形状はU字形から皿状になっている。

SD03は段丘下北側で検出した東西溝である。西壁沿いはSK43で切られている。細い部分で幅0.5m、深さ0.2mとなる。断面は箱型で底は平坦である。段丘崖沿いは幅1.2mと幅を広げている。深さは同じ0.2mである。第1面のSD01の延長上にあり、町屋の屋敷割りの溝である可能性が高い。

土坑 (SK)

大小各種の土坑があるが、遺構の性格がわかる土坑はない。

SK03は調査区北東隅近くにある土坑で、SK29・30を切っており、SK31とピットに切られている。東西1.5m、南北2.05m、深さ0.15mである。底は平坦である。

SK11は段丘部中央に位置しており、東西0.65m、南北0.6mの不定円形の平面形をしている。深さは0.1mと浅く、底は平坦である。

SK12も段丘部中央に位置しており、SK11の東側2.0mのところにある。歪な長方形を呈している。南北1.25m、東西1.0mで部分的に膨れている。深さ0.2mで箱状となって、底は平たいしっかりした土坑である。

SK13は調査区中央東側にあり、東壁から0.2m離れている。南北に長い不定形をしている。南北に長い楕円形であるが、南側の方の幅が0.7mと広く丸くなっている。北側が直線的で幅は0.55mと狭い。長さは1.2mで、深さ0.1mを測る。底は平坦でなく丸みを持つ。

SK15は段丘部中央北側にある。SK16の南西1.5mのところにある。東西0.65m、南北0.55mの楕円形で深さ0.1mである。底は平たい。

SK16は段丘上北側にあり、北西にSK37・19が並んでいる。東西0.7mで西側が尖った卵形プランで、南北は0.55mとなる。深さ0.2mで皿状断面である。

SK17は段丘中央南側にあり、東側に0.4m離れてSK18が存在し並んでいる。径0.6mの不定円形で深さは0.15mである。

SK18はSK17と並んでおり、調査区中央南側に位置している。南北0.7m、東西0.6mの南北に長い楕円形をしている。深さは0.15mで底は丸みをおびている。

SK19は中央北側でSK16の北西0.55mにある。間にSK37が存在している。SK16と断面形状が似通っており皿状になっている。深さは0.2mで埋土は水平堆積である。平面形状は不定形で南北0.8m、東西も0.8mを測る。

SK21は調査区中央南側に位置している。西側にSK11、東側にSK12が存在する。主軸をやや振った楕円形プランをしている。南北0.85m、東西0.6mである。深さは僅かしか残らず0.05mだけしかない。西側が深く、東側は平坦になっている。

SK23は段丘上中央南側で東壁沿いにあり、調査区外へ延びている。2基の土坑が連結した形状をしている。2基の土坑とした方が妥当かもしれない。南北1.35mで東西の残存長0.25mである南側の方が深くっており、後から切り込まれている。断面は半円形で深さ0.4mを測る。長さは南北0.8mである。北側の土坑は深さ0.3mで底は平たい。

SK25は段丘上中央南側にあり、SK26が南に0.15mしか離れていない位置にある。北西から南東方向に主軸を持ち0.75mで幅は0.6mの不定円形である。深さは0.1mで底は平たい。

SK26はSK25に隣接した調査区中央南側に存在する。東西0.75m、南北0.7mの不定円形をしている。深さは0.3mで浅いU字形の断面をしている。堆積はレンズ状になり、下層には瓦・陶磁器の遺物を含んでいる。

SK29は調査区北東にある土坑でSK03に切られている。幅0.5mで、残存長は0.45mである。深さは0.45mと深く、水平堆積をしている。形状は逆三角形に近い底の狭い形状である。

SK30は2時期の土坑が同一部に存在する可能性が高い。平面形状は径0.75mの不定円形である。深さは肩部から0.55m、SK03底面から0.4mである。瓦・礫を含んでいる。

SK31は調査区北東にありSK03に切られた下層にある土坑である。北西が0.7m、南東が0.4mの卵形をしており、幅は0.8mである。残存部の深さは0.1mである。底は平たい。

SK37は段丘中央北側に存在している。不定方形の平面形状をしている。SK16とSK19の間にある。0.4×0.3mの歪な方形で深さ0.15mを測る。底面は平たい。

SK40は段丘下北側に位置しており、隣接してSK44などの土坑が並んでいる。屋敷溝の可能性のあるSD03の南側に0.5m離れている。別遺構であろう幅0.15m、長さ1.0m、深さ0.3mの溝状土坑が南西部に築かれている。SK40本体は東西1.8m、南北0.7mの方形で深さ0.1mと非常に残存度の悪い遺構である。東側の方が幅0.9mと広がっている。

SK42は西壁沿いの遺構で調査区北西部にある。南側をSK43に切られている。ともに検出長となるが、南北1.8m、東西0.5mとなる。隅円長方形プランであろうか。深さは0.2mで底は平たいが北側の方の床面が下がっている。本来はそのまま延びてSK45と同一の遺構で大きな落ち込みであった可能性も残される。

SK43は西壁沿いの遺構で調査区北西部にある。SD03とSK42を切り、SK44に切られている。ともに検出長となるが、南北1.3m、東西1.0mとなる。不定円形プランであろうか。深さは0.2mで底は平たい。

SK44は調査区北西の西壁沿いにある土坑群の1基である。北側でSK43を南辺でSK45を切っている。南

北1.5mで西側に延びている隅円方形の土坑である。残存長は1.0mである。深さは0.2mで大きくは水平堆積を示しており、底は平坦である。

SK45は西壁沿いの不定形土坑である。上記したようにSK42と同一遺構の可能性も高い。現状では南北2.6m、東西0.8mを測る。SK42と同一遺構なら7.2mの長さになる。底は平たく、深さ0.2mで水平堆積を示している。

SK49は段丘下南側で検出している土坑である。径1m前後の円形土坑と思われるが、側溝などで面的な調査は行っていない。深さ0.15mで底は平たい。

SK50は段丘下中央のSX08の北側に位置している。南北0.6m、東西0.8mの歪な楕円形をしている。0.1mと浅く、皿状の断面をしている。

SK51は段丘下中央西壁沿いにある。東西の調査長0.9mで最大幅0.6mである。両端は細くなり丸くなっている。西へ延びているが大きくは延びないであろう。底は平坦で逆台形の断面をしており、深さ0.15mである。レンズ状の堆積をしている。

SK56は調査区南東隅にあり、東側を攪乱坑で切られている。底は平たく、深さ0.25mを測る。南北は1.0mで東西の残存長は0.6mである。

落ち込み (SX)

SX06は調査区北西隅で検出した方形の落ち込みである。東西2.2m、南北3.3mを調査しており、北側・西側に延びている。深さは0.1mと浅く底面は平たい。

SX07は段丘下の北側に位置している。SX06と0.5mだけ端部が離れている。隅円方形の落ち込みで西半は攪乱坑が認められる。南北2.3mで東西1.3mを測る。底は西側に向かって低くなっていき、最大で0.3mの深さとなる。

SX08は段丘下南側に位置している。東側は段丘崖からはじまる大形の落ち込みで、南東部分は攪乱坑で削平されている。東端で2.5mの幅があり、西端では2.1mと狭めている。西側調査区外へ延びており、検出長は2.1mである。深さは0.2mで底は平坦である。

第3面

段丘下で主に検出した遺構であるが、段丘上でも3基の遺構を確認している。土坑・落ち込み・溝を調査している。これら遺構も大きく遡ることはなく、18世紀代である。断ち割り調査によって堀状遺構の底面を確認しており、堀状遺構だけが17世紀前半の古い遺構と考えている。断ち割り調査は4ヶ所行い、第3面からさらに1.8mまで深く掘り下げた。その結果、堀の底を確認した。底面は平坦になっており、明確な構造物は確認されなかった。肩部は伊丹礫層であることから非常にしっかりしていた。底からの遺物はなかったが、0.1m上と0.6m上の層から唐津皿が出土しており、堀の時期を示すものと思われる。4ヶ所の断ち割り結果（底面のレベル）は異なっており、調査区中央南側だけが極端に深くなっている。北端は標高12.0m、北端から10m南では標高11.75m、そこから10m南では標高10.9mと最も深くなり、調査区南端では標高11.8mと上がっている。堀底が平坦でなく高低差を持って築かれたことが明らかになったことは大きな成果と思われる。

溝 (SD)

SD04は段丘下中央から南に続く遺構である。幅0.7m前後の大きめの溝である。北側は第1面の井戸SE03から南側に検出されている。南に5.3mのところ、西に曲がっているようであるが調査区西壁に当たるため形状は不明である。深さは5～8cmと浅いものである。洪水堆積と思われるオリブ褐粗砂が堆積している。直線的に延び直角に曲がっていくのは示唆的である。

井戸 (SE)

SE05はSK34の下層に位置しており、SK34の時期は幕末であるが、SE05の時期は明確にしがたい。下層であることから、3面の遺構としたが、2面の遺構である可能性も残されている。調査区南東に近く、井戸の中では最も高い位置にあたる。東西にやや長い楕円形の平面形状を示している。最大幅で2.2mを測り、深さは0.5mまで確認している。現状では素掘りの井戸である。上層には瓦片が多く含まれているが、その下では遺物は認められなかった。

土坑 (SK)

SK38は調査区北側の段丘崖上部に位置している。南北2.45mで、幅0.6mを測る。深さ0.4mとやや深い土坑である。底は平坦ではなく波打っている。埋土に炭が混じっていることから、火を伴う遺構が近くに存在したであろうと思われる。

SK54は段丘下中央北側の西壁沿いで検出している。最大長1.2mの弧状に調査している。円形土坑の東側を調査したもので、幅0.3mを測る。深さは0.3mで断面形状は緩やかな逆台形である。底は平坦でなく丸みを持つが本来の底でないからかもしれない。

SK55は調査区南側の段丘崖に位置している。北側を攪乱坑で切られている。南北1.55m、東西0.5mを調査している。深さは0.2mで底は丸い。堆積状態は水平である。

SK58は第1面SI02・03の下層にある不定形の土坑である。不定形をした土坑である。歪なL字形となり、南北2.0m、東西1.5mである。深さは0.2mで底は丸みを持つ。北側と南側にピット状の突出部を有する。

落ち込み (SX)

SX09は段丘下北側で検出した方形の落ち込みである。東西3.4m、南北2.0mの長方形をしている。段丘崖から西側に延びている。肩部は明瞭でなく緩やかな落ちを示している。深さ0.15mと浅く、底面も平坦でなく、凹凸がある。

SX15は段丘下中央の広い部分である。自然地形の落ち込みと思われる。最大幅6.5mの部分で最も深いところで0.45mの差がある。

区

里道を隔てた南側の調査区である。伊丹郷町の外郭線にあたる。段丘崖が有岡城跡・伊丹郷町遺跡の指定ラインになっている。調査対象地は段丘下にあたる。南側隣接地は南本町遺跡として兵庫県教育委員会から調査報告書がすでに刊行されている。今回調査が延びている溝など同一遺構も含まれている。

区同様3面で調査を行った。調査方法なども当然同じである。遺構番号も区から継続して使用し

ていることから 区では途中からはじまっている。機械掘削によって盛土・耕土を除去したところ、調査区北西部コンクリートを用いた池が検出された。第2次世界大戦時に防火用水として伊丹女学校の生徒を中心に造られたと言われている池跡である。昭和17年のものである。この池跡によって、第3面まですべての遺構面は削られていて、遺構は残存していなかった。

第1面

検出した遺構は溝7条と土坑6基・落ち込み1基とピット数基である。ピットは掘立柱建物には復原できなかったことは 区と同様である。

溝 (SD)

SD05は調査区中央の東壁付近で検出している。調査区東側に延びている。幅0.2~0.3mの細い溝で1.5m調査しており直線的に延びている。深さも0.15mと浅く、断面形状は浅いU字形である。SD11の肩を切っていることから最も新しい時期になるものと思われる。SD11だけが主軸方向が大きくずれているので、1段階古い遺構と考えられる。主軸方向は僅かに2~3°東西方向から振っているが、後述するSD06などとは多少角度が異なる。

SD06は調査区中央南側に位置しており、西側をSD07に切られているが東西方向に貫通していた溝である。SD07との接合部はSD07の横木が低くなっており、切っているのではなく一体となった溝である可能性もある。ただ、ストレートにつながっているわけではない。幅は0.6m~0.9mで杭列と横木を伴っている。杭で横木を留めているのではなく、両者は離れている。杭列は溝の北側のみ存在する。杭間は等間隔ではなく、まちまちである。横木の継ぎ目部分には集中しており、横木とは関連あることは確実である。深さは0.15mと浅く、断面は逆台形で底は平たい。7.5m直線に延びており、東側にさらに延びている。SD05より主軸の角度を変えている。横木は建築材の転用が多く利用されている。19世紀以降の屋敷地造営に伴う溝であろう。

SD07の西側には現在も生きている水路があった。その水路の内側に平行しているのがSD07である。前述したようにSD06と一体の溝である可能性もある。SD07は直線ではなく僅かに西側を内側にして弧を描いている。幅1.5~1.7mで調査区の外に南北とも延びている。調査した長さは21mである。外郭ラインの内側となる東側のみ低い石垣を意識した石組を確認している。底に胴木を置き、その上に石材を置く(一部のみ積む)程度の簡易なものである。基礎の胴木は建築材が利用されていた。SD06や、SD11の建築材よりは小規模な材が使われている。

SD08は調査区北東にあり、SD09につながり直角に曲がる溝である。南北方向には5.8mで南側は削平されていそうである。ここから直角に東に曲がりSD09となり調査区外に延びている。南北方向は0.4m前後の幅である。深さは0.1~0.2mである。SD10を切っている。

SD09はSD08につながる東西方向の溝で、一体の溝と考えて問題ないと思われる。SD08と比べて0.5~1.0mと幅を広げている。東側の一部が幅を1.0mと広げている。

SD10も調査区北東に位置しており、主軸方向はSD09・05と同じである。SD08に切られており、一時期古い溝となる。調査区東側に延びており、長さは5.0m調査している。幅は東側が0.5mと広く西側にいくほど狭くなって消滅している。

SD11は調査区中央にあり東西に走る溝で調査区外の東西に延びている。長さは11.4mである。第3面

の遺構であるSX11の埋め立てに際して構築された溝と思われ、居住地拡大のためと思われる造成工事である。今回調査した溝の中で最も立派な遺構である。柱材を主体とした大形の建築材を2段積んで、それを安定させるために両側を建築材に接して杭を打ち込んで止めている。溝そのものは幅1.0～1.4mで、西半を中心に構築している。杭列は全体にみられる。深さは0.6mである。杭の間隔は柱材を留めている部分は稠密で0.2mごとに打ち込んでいる。板材部分は0.6m間隔程度で打ち込んでいるが比較的密である。板材も挟みこむように両側に杭を打っている。角材（建築材）部分は主に北側に杭を打設している。

土坑 (SK)

土坑はすべて調査区北東で検出している。SK60はSD08の西側に位置している。南北1.1m、東西0.65mの楕円形プランである深さは0.25mである。SD10の残存部端に接している。

SK61は調査区北東隅近くにある南北0.7m、東西0.5mの楕円形の土坑である。深さは0.3mで断面は皿状である。

SK62はSD10の南側に0.6m離れた位置に存在する。南北0.4m、東西0.3mの隅円方形をしている。深さは0.2mで、箱形で底は平たい。

SK63は長方形プランでSD11の北側に位置している。東西1.1mで南北0.7mの隅円長方形である。深さは0.2mで、底は平たい。

SK64はSD11の北肩に接している。径0.6mの不定円形をしている。深さ0.15mと浅く断面形状は皿状である。

SK65はSK63の北東0.6m存在している。東西0.5m、南北0.3mの楕円形をしている。深さ0.2mで断面形状は皿状である。

落ち込み (SX)

SX10は調査区北東にある浅い落ち込みである。SD09・10などにきられている。南北12mの不定半円形で東側調査区外にのびている。東西は3.0m調査している。深さは0.15～0.25mと浅い。

第2面

検出した遺構は溝2条と落ち込み2基とピット数基である。ピットは掘立柱建物には復原できなかった。第2面は調査区全体ではなく、北東部のみ面的な調査をおこなった。第1面SD11より南側には第2面は明確にすることができなかった。

溝 (SD)

SD12は調査区東壁沿いに南北方向に走っている。北端から調査しているが、さらに調査区外へ続いている。溝の東肩は調査区東側に位置する。調査した幅は最大0.4mで長さは4.2mになる。壁沿いを直線に延びている。

SD13は南側をSD11に切られ、東側は調査区外に続く弧を描く溝である。今回の調査では珍しい溝である。幅0.2m前後で深さは0.2～0.3mの逆台形の断面である。

落ち込み (SX)

SX12は南北2.05m、北辺1.0.5m、南辺0.9mの台形プランである。深さ0.25mで上面全体に礫を敷き詰めている。人頭大の円礫を主体にやや大きめや指頭大の礫や角礫も使用されている。細かく円礫を敷いているのは中世の集石土坑に類似しているが、遺物は出土していない。底面は両端がやや高くなる皿状になっている。肩部は急で断面形状は箱形である。底には黒褐シルト質細砂が堆積し、その上の層はにぶい黄褐シルト質極細砂で炭が混じっている。この層上面に礫を配している。深さの半分くらいまで礫を詰めている。

SX13は第2面検出遺構の中心南寄りで見出している。隅円方形プランである。南北4.8mで調査区東側に延びている。北辺はSD12に切られている。東西方向は1.6m調査している。深さは0.3mと浅く、底は平坦である。

第3面

検出した遺構は溝2条と井戸2基・落ち込み2基とピット数基である。落ち込みの1基は池と考えている。ピットは明瞭に掘立柱建物には復原できなかったが、井戸の上屋と考えられる建物として1棟は復原可能と思われる。

溝 (SD)

SD14はSX11の落ち込み南西部にある溝である。幅2.5mで深さ1.2m以上を測る。調査した長さは9.2mである。建築材を利用した整地土の端部かもしれない、SX11より新しい遺構である。第1面の遺構かもしれない。第1面の遺構とすれば、SX11を埋め立てた後の溝でSD07がクランクして延びてきている部分かもしれない。建築材を利用している点でも類似している。

SD15は調査区北東部の東壁付近で見出している。東壁沿いに南北16.5m確認している。北側の幅が広く南側は狭くなっている。北端で2.5mと広がっている。

井戸 (SE)

SE06は調査区中央のSX11に面する位置に築かれている。他の井戸と同様に、やはり底は検出していない。上部は2段の掘り方になっている。上部は径1.8mの不定円形である。0.4m前後下がった位置で下段の掘り方を南側肩に接して掘り下げている。1回り小さくなった径1.2mの不定円形である。南側は上部掘り方を崩すように広げている。上段掘り方北側にSX11に向かってオーバーフローした水を流す施設を設けている。井戸掘り方北側に最大幅で1mの溝を設けている。これをSX11に向けて先細りになるように掘削している。SX11に入り込む部分では幅0.4mである。深さは南側で0.5m、北側で0.35m掘り下げている。上から0.3mのところ竹筒を据えている。竹が安定すると流れ調節のために板材や礫を筒下部や横に配している。一部暗渠にして竹筒で作った排水したものと思われる。内側には大きめの礫を竹の上に置いており、この礫は表面に露出していたと思われる。掘り方からSX11まで1.8m離れており、その距離溝を設けている。井戸内は0.6mだけ下げたが、井側は残存していなかった。裏込め土があり、井側が存在していたことは明らかである。木材が僅かに壁に接して出土しているので、桶を使用していた可能性が考えられる。瓦・礫が埋土に多く入っていた。井側部分は径1.2mの不定円形である。

SE06の周囲にピットが数基あり、1間×2間（もしくは1間）の小規模な掘立柱建物に復原される。井戸の上屋ではないかと考えている。柱穴は最大0.5mと大形である。1間×1間なら南半分にかかる建物になる。東西3.6m、南北2.0mの大きさである。上屋が架かる井戸とすれば特別な意味合いがあるのかもしれない。池に面した排水機能を有するなど丁寧なつくりであることは確実である。

SE07は調査区南側にある素掘りの井戸である。南北1.8mで調査区東側に延びている。東側の方が狭くなっており、平面形態はイチジク形をしている。最大幅で1.7mを測る。底はやはり検出していない。水平堆積をしている。

落ち込み (SX)

SX11は西辺で10.0m、東辺で6.0mで、東西8.6mを測る平面が台形の落ち込みである。深さ1.5mと深い遺構である。埋土はシルト質細砂～極細砂で水が滞留している底の状況を呈している。底から0.15mまでは比較的多くの遺物を包含していた。これらの状況から池跡であろうと考えている。底は南側の方が深くなっている。南端部分の底は平坦で南北2.1m、東西5.4mの面としている。

SX14は半円形の落ち込みで西半を昭和17年構築の池跡で欠いている。南北5.5m、東西2.3mを測る。深さは0.2mである。底は西側に向かって低くなっている。

第2節 269次（平成14年度）調査区

(1) 概要

平成14年度の調査地点は平成10年度に確認調査を行い、平成13年度に行われた当該地の南側の調査では、18世紀から19世紀の遺構及び有岡城の堀が検出され、当該地に延びることが確認されていた。当該地の調査前の状況は、人家及び正覚寺の敷地であり、寺の敷地は本堂の一部を除けば、墓地であった。

調査面積は700㎡である。周辺の家屋の出入り口の確保のため、調査は 区・区・区に分けて実施した。区は242㎡、区は330㎡、区は128㎡である。調査は、区・区を同時に行ったあと埋め戻し、区の調査を行った。

調査区の形状は、区に移転した正覚寺の出入り口を確保する必要があり、一部調査を見送った部分が存在するため、缶切り形の形状である。全長68m・横幅10～11mである。

調査の結果、各地区において、上下2面の遺構面を検出した。第1面が19世紀を中心とする時期、第2面は一部に有岡城の時代の遺構[外堀・井戸3基]を検出したが、概ね18世紀を中心とする時代の遺構面である。

区では、第1面では町屋遺構、第2面では町屋遺構に加え、有岡城の堀跡が検出されている。

区では第1面では北側3分の1で墓地跡が、残りの地点では町屋遺構が検出された。第2面では北側3分の1で墓地跡が、残りの地点で町屋遺構及び有岡城の堀跡が検出されている。

区では、第1面ではその大半は正覚寺に関わる遺構が検出されており、南半部では墓地跡が検出されている。時期は概ね18世紀後半～19世紀代である。第2面では有岡城跡の堀跡に加え、同時期に使用された井戸跡が検出されている。

(2) 堆積層序

調査区内の堆積は大きく3つに分かれる。

1つは、調査区南半部の内、中央から東半にかけては、現代の攪乱土の直下から遺構が出現しており、そのほとんどは地山面が出現した状態である。

2つ目は、調査区南半部の内、調査区の西壁際周辺である。この部分は、有岡城にともなう堀上にあたり、近世に入って堀を埋め立て嵩上げていく。これはそのまま堀の堆積でもあるが、下から 堀最下層の砂礫層、下層に火事片づけの炭層、砂礫土と旧地表の褐灰色土の混交土(盛土)、整地層、砂礫土と旧地表の褐灰色土の混交土(盛土)、旧地表、近現代の盛土の順である。層が大きく3時代の遺構面の形成を示していると考えられる。

3つ目は、調査区北半の墓地・寺院内の堆積である。

墓地部分の遺構は、明瞭な旧地表(褐色土)を境に第1面・第2面に分かれており、最下層の地山面上からは、有岡城跡に伴う遺構が出現しており、最上層には撤去前の正覚寺本堂礎石が存在する。

旧正覚寺の一層下からは、近代の骨壺が入る土坑が見つかっており、撤去前の墓地面と考えられる整地層(黄色砂質土)が存在する。

近代の墓地面の下には、18世紀後半～19世紀代の墓地に対応する層位(褐色土～暗灰黄色土)が出現しており、これは先述した土壌層の上面と至る堆積である。第1面の墓地はこの土壌層上面において検出している。

土壌層下～地山面上までが、18世紀前半及び有岡城跡に伴う遺構が出現する層位である。

(3) 遺構

遺構の概要

区・区・区は、調査工程上の区分であるため、以下記述については、すべてを通して述べる。今回の調査区から検出された遺構は、第1面では、大きく南半を中心とした町屋の遺構と、北半より検出された墓地・寺跡に分けることができる。以下、町屋跡の遺構と墓地・寺跡の遺構に分けて述べてゆく。

(第1面の概要)

第1面からは、19世紀を中心とする時期の遺構を検出した。

町屋跡の遺構

調査区の南側3分の1では、町家に伴う建物跡と考えられる礎石・埋桶遺構・溝・ごみ穴などが検出されている。また、西端には、幅約2m・長さ約35mにわたって有岡城(16世紀代)の外堀跡が南北方向に残っていた。18世紀代に埋め立てられ、19世紀代には溝状もしくは段状の痕跡となっていた。

町家遺構は、瓦列や石垣・石列溝によって東西方向に、7mから10mほどの幅に区切られていることが判明した。おおよそ6区画程度の屋敷割りがあったと推測される。

建物跡 (SB)

SB1001

検出状況 区中央に位置する。SB1002と切り合い先行する。

形状・規模 軸方位をN83°Eにとる礎石建物跡である。南北8間(11.6m)・東西7間(7.0m)以上の規模と考えられるが、一部礎石が欠失しているため性格な規模は不明である。建物の柱間は、1間約0.9mを基本としている。

礎石 径約40cm前後の石を使用する。

出土遺物 出土遺物はない。

SB1002

検出状況 区中央に位置する。SB1001と切り合い新しい。

形状・規模 桁行方位をN74°Eにとる礎石建物跡と考えられる。桁行東西3間(10.0m)以上・梁行南北2間(6.1m)以上の規模と考えられるが、一部礎石及び掘り方が消失しているため正確な規模は不明である。建物の柱間は、南北1間約3.0m・東西1間3.5mを基本としており、間を小径の礎石で埋めている。建物の方位は、墓地区画に伴う石組溝SD1021と方位を同じくしており、同時期に存在する可能性が高い。

礎石据え付け坑 方形土坑内に径30cm前後の石による集石をもつ。土坑は一辺1.3m前後の規模をもつ。

出土遺物 出土遺物はない。

土坑・落ち込み (SK・SX)

第1面では73基検出した。ここでは、SK1015・SK1016・SK1047・SK1048・SX1059をあげた。

SK1015

検出状況 区南端において検出された。

形状・規模 不整な円形を呈する。規模は長径約0.7m・短径0.65m、深さ約28cmを測る。土坑底は丸く掘られている。

埋土 暗褐色シルト質細砂を埋土としている。最下層には黄褐色土が入る。

出土遺物 土製品 (176・177)・染付磁器皿 (709)・仏花瓶 (710) が出土している。

SK1016

検出状況 区中央において検出された。

形状・規模 長方形を呈する。規模は長辺約1.0m・短径0.6m、深さ約30cmを測る。土坑底は平坦に掘られている。

埋土 オリーブ黒色シルト質極細砂を埋土としている。最下層には径10cm程度の角礫が密に含まれている。

出土遺物 図示できる出土遺物はない。

SK1047

検出状況 区中央において検出された。SK1048と切りあい新しい。

形状・規模 涙滴形を呈する。規模は長軸約1.40m・短径0.95m、深さ約50cmを測る。土坑底は平坦に掘られている。

埋土 オリーブ褐色シルト質極細砂を埋土としている。

出土遺物 施釉陶器蓋 (720)・瓦 (T30・T31) が出土している。

SK1048

検出状況 区中央において検出された。SK1047と切りあい古い。

形状・規模 楕円形であったと考えられる。規模は長径約1.0m・短径0.90m、深さ約20cmを測る。土坑は幾度か掘削されて形成されたと考えられる。

埋土 褐色シルト質細砂を埋土としている。

出土遺物 施釉陶器杯 (721) が出土している。

SX1059

検出状況 区中央において検出された。

形状・規模 円形を呈する。規模は径0.70m、深さ約25cmを測る。上面には一部に径10cm前後の河原石による集石があり、焼土が存在する。土坑底は平坦に掘られている。

埋土 オリーブ黒色シルト質極細砂を上層の埋土、下層には黄褐色シルト質極細砂を埋土としている。

出土遺物 瓦が出土している。

区画溝

町屋遺構には、墓地との境を示すSD1021を含め東西方向に走る溝・瓦列が7本検出されている。このうち、瓦列・石組溝SD1044・SD1021は調査区内を東西に貫通している。これらの溝はN82°Eに方位をとっており、大きな町屋の区画割りであった可能性が高い。

これに対し、小規模な素掘りの溝SD1009・SD1006・SD1007・SD1011は方位を瓦列・石組溝と同じくN80°E前後にとっており、大きな区画の中を更に小割りするための溝であったと考えられる。

墓地との境を示すSD1021は両肩に石組を施し、約90cmの溝幅をもつ。SD1044についても両肩に石組を

施しており、溝幅についても約30cmを測る。この2本の溝間は20.5mを測り、先述したSB1001などの礎石建物が建てられていたと考えられる。SD1044はN80°Eに方位をとっている。

瓦列とSD1044の溝間は19.0mを測り、今回建物は復原できなかったが、いくつかの建物が建てられていたと考えられる。瓦列・SD1006はSD1044と近い方位に軸をを持っており、6m～7mの間隔で、瓦列とSD1044の間を3分していた可能性が高い。瓦列の直下にはいくつかの土坑が存在することから、瓦列・SD1044による区画は永続的なものではなく、18世紀代にはSD1044によって調査区内の町屋は大きく2分されていた可能性が高い。なお、南北方向の区画については、旧堀跡が町屋の裏側を区切っていた可能性は、土間などの状況から推して乏しいと考えられる。

墓地跡・寺跡の遺構

調査区の北側3分の1は、正覚寺に係わる遺構である。当該地の北半部は調査直前まで正覚寺の墓地・本堂の一部・裏庭であり、調査の結果、南側の町屋との境をなす石列溝（SD1021）・北側の寺の本堂との境をなす石列溝（SD1045・SX1003）に区切られた墓地を検出した。

墓地は、2本の溝（SD1021とSD1045・SX1003）に区切られる形で存在している。

溝に区切られた南北約7m・東西約11mの範囲において漆喰を使用した墓室を持つ土葬墓7基（1号～7号棺）、火消し壺もしくは丹波焼きの壺を蔵骨器に使用した火葬墓15基（以上第1面）を検出しており、この部分が正覚寺墓地跡である。

墓地敷地中には墓跡の他、SK1089・SK1076などのゴミ穴、井戸SX1038・SK1077が敷地の南西半を中心に存在する。

SD1045は西端において南北に分岐しており、南側へは、3本の石列を持つ。その東側に火葬墓が集中しており、この3.5m×6.0mの部分が、大型の土葬墓以外の墓が集中するスペースである。

SD1045・SX1003よりも北側は墓地以外に利用された可能性が高いスペースである。区東壁面には礎石が等間隔に検出されており、本堂の西辺がほぼ区西壁にあったと考えられる。SX1003より北側には土坑・ゴミ穴・井戸などが存在する。

漆喰を使用した柳を持つ土葬墓群

漆喰を使用した柳を持つ土葬墓7基は墓地の西半分に位置している。これらを便宜的に1号棺～7号棺と呼称する。土葬墓群は1号から5号棺が並び列と、その東側に6号・7号棺が並び列の2列が存在する。

各棺の構造は基本的には同じであり、法量についても幼児棺である4号棺を除けばほぼ同じである。

以下の工程を経て墓が造られている。

一辺約1.2m前後、深さ約1.5m前後の墓壇を掘る。

一辺約75cm前後、高さ約85cm前後の外枠（外棺）を据える。

外棺底に厚さ10cm程度の漆喰を敷く。

一辺約60cm前後、高さ約75cm前後の内枠（内棺）を据える。

外枠と内枠の間に漆喰を充填する（漆喰柳）。

遺体を納める。

内枠に蓋をする。

蓋の上を漆喰で密封する。(6号棺はここまでで作業を終える。)

外枠に蓋をする。(4・5・7号棺はこの過程を省き 作業へ入る。)

蓋の上を漆喰で密封する。(1・2・3号棺)

標石を置く。

これらの漆喰を使用した墓の時期は、漆喰の使用例や、出土遺物、明治時代後半には当該地が庭になっていたことなどから、19世紀前半から中頃に営まれたものと考えられる。

1号棺～3号棺

1号棺・2号棺・3号棺は南北一列に並び、墓壙は連結しており、全長は3.14m、幅約1.15mを測るが、1号棺の墓壙はやや東寄りにずれており、2・3号棺の墓壙はほぼ一直線に並んでいる。墓壙の切り合いから推して1号棺が一番古く、2号棺、3号棺の順に構築されている。

1号棺 (SK1002)

検出状況 区南端において検出した。2号棺が近接する。

形状・規模 1辺1.40mの隅円方形の墓壙に1辺約75cmの漆喰によって構築した方形竪型を検出した。

墓壙 1辺1.40mの隅円方形、深さ1.80mを測る。埋土には砂礫を入れている。

標石 棺の上面に2本の竜山石製の延石を置いている。延石の接地面側に墨書がある。延石の全長は約1m、幅約15cm、厚みは約10cmを測る。

外棺 約1cmの厚みの板材を使用している。1辺78cm、高さ86cm以上の直方体の規模をもつ。

内棺 約1cmの厚みの板材を使用している。1辺62cm、高さ86cm以上の直方体の規模をもつ。

漆喰層 外棺と内棺の間に漆喰を充填している。漆喰層と仮称しておく。外棺底と内棺底の間に厚さ5cmの漆喰を敷く、外棺と内棺の側板の間の漆喰の厚みは約8cmである。

頭位 南面している。

出土遺物 棺に伴う多量の鉄釘 (M9～M28) が出土している。

被葬者 熟年 (40～59歳) の男性と考えられる。

2号棺 (SK1040)

検出状況 区南端・区北端において検出した。1号棺・3号棺と接する。

形状・規模 1辺1.17mの隅丸方形の墓壙に1辺約78cmの漆喰によって構築した方形竪型を検出した。

墓壙 1辺1.17mの隅丸方形、深さ1.96mを測る。埋土には砂礫を入れている。

標石 外棺の上面に厚さ15cmの漆喰を盛り、2本の竜山石製の延石を置いている。延石の接地面側に墨書がある。延石の全長は約1m、幅約20cm、厚みは約15cmを測る。

外棺 約2cmの厚みの板材を使用している。1辺75cm、高さ96cmの直方体の規模をもつ。

内棺 約2cmの厚みの板材を使用している。1辺60cm、高さ76cmの直方体の規模をもつ。

漆喰層 外棺と内棺の間に漆喰を充填している。外棺底と内棺底の間に厚さ5cmの漆喰を敷く。外棺と内棺の側板の間の漆喰の厚みは約8cmである。外棺蓋と内棺蓋の間に厚さ12cmの漆喰を充填する。

頭位 南面している。

出土遺物 多量の鉄釘 (M33～M60) のほか、棺内より木床義歯 (W26～W29)・煙管 (M31・M32)・銀環 (M30)・飾り金具 (M29) が出土している。

被葬者 老年 (60歳以上) の男性と考えられる。

3号棺 (SX1023)

検出状況 区北端において検出した。2号棺と接する。

形状・規模 隅円長方形の墓壇に1辺約78cmの漆喰によって構築した方形竪型を検出した。

墓壇 長辺1.23m・短辺1.15mの隅丸長方形、深さ1.96mを測る。埋土には砂礫を入れている。

標石 外棺の上面に厚さ9cmの漆喰を盛り、2本の竜山石製の延石を置いている。延石の設置面側に墨書がある。延石の全長は約1.05m、幅約23cmと15cm、厚みは約10cmを測る。

外棺 約2cmの厚みの板材を使用している。1辺78cm、高さ96cmの直方体の規模をもつ。

内棺 約1.5cmの厚みの板材を使用している。1辺61cm、高さ80cmの直方体の規模をもつ。

漆喰柳 外棺と内棺の間に漆喰を充填している。外棺底と内棺底の間に厚さ5cmの漆喰を敷く。外棺と内棺の側板の間の漆喰の厚みは約8cmである。外棺蓋と内棺蓋の間に厚さ8cmの漆喰を充填する。

頭位 南面している。

出土遺物 多量の鉄釘 (M66～M87) のほか棺内より銅環 (M61・M62)・煙管 (M63～M65) が出土している。

被葬者 成人 (60歳以上) 女性と考えられるが、一部部位が重複する複数個体の人骨が存在する。

4号棺・5号棺及びSX1060・SX1061 (SK1073内丹波焼蔵骨器)

1号棺・2号棺・3号棺の南側延長上に並ぶ。3号棺と4号棺の間にはSK1073があり、内部より火葬墓SX1060・丹波焼蔵骨器・竜山石製延石1本が出土している。SK1073からは鉄釘・鉄鍋片などが出土し、土葬墓が存在した可能性がある。

4号棺 (SX1044)

検出状況 5号棺と切り合い、新しい。

形状・規模 隅円方形の墓壇に1辺約57cmの漆喰によって構築した方形竪型を検出した。

墓壇 長辺0.78m・短辺0.70mの隅円方形、深さ0.55mを測る。埋土にはシルト質極細砂を入れている。

標石 上面に2本の竜山石製の延石を置いている。延石の接地面側に墨書がある。延石の全長は約0.9m、幅約15cm、厚みは約12cmを測る。

漆喰柳 外棺と内棺の間に漆喰を充填していると考えられるが、棺の木質は確認できていない。底面に厚さ4cmの漆喰を敷く。側板の漆喰の厚みは約6cmである。柳の内法は1辺約42cm四方である。

出土遺物 棺内より、鉄釘 (M90～M99) のほか幼児の奥歯、飾り金具 (M88)、不明鉄片 (M89)、ガラスの薄板や、ミニチュアの土器 (295～298) が出土している。

被葬者 幼児 (2～3歳) と考えられる。

5号棺 (SX1043)

検出状況 4号棺と切り合い、古い。

形状・規模 隅円方形の墓壇に1辺約73cmの漆喰によって構築した方形竪型を検出した。

墓壇 長辺1.05m・短辺1.00mの隅円方形、深さ1.00mを測る。埋土にはシルト質細砂を入れている。

標石 上面に厚2本の竜山石製の延石を置いている。延石の接地面側に墨書がある。延石の全長は約0.95m、幅約20cm、厚みは約10cmを測る。

漆喰柳 外棺と内棺の間に漆喰を充填していると考えられるが、棺の木質はほとんど確認できていな

い。底面及び南壁の漆喰は残存していない。側板の漆喰の厚みは約10cmである。槨の内法は1辺54cm四方と考えられる。

出土遺物 棺内よりごく少量の成人人骨が出土している。性別は不明である。

SX1061丹波焼蔵骨器 (355・356)

検出状況 SK1073内より検出された。

形状・規模 径14cm・高さ16cmの丹波焼壺を蔵骨器として使用している。

標石 直上に1本の竜山石製の延石を置いている。延石の全長は約0.8m、幅約18cm、厚みは約10cmを測る。

被葬者 蔵骨器内より火葬骨が出土しているが年齢性別は不明である。

SX1060

検出状況 SK1073内より検出された。

形状・規模 径33cm・残存高24cmの瓦質火消壺を蔵骨器として使用している。

墓 壙 径50cm・深さ25cmの墓壙をもつ。

被葬者 蔵骨器内より火葬骨が出土しているが年齢性別は不明である。

6号棺・7号棺

1号棺～5号棺の東側に約90cmの間を空けて南北方向に6・7号棺が営まれている。火葬墓群の区画石列との間もまた、1m前後の間隔をもつ。

墓壙の切り合いから推して6号棺が古く、7号棺が新しい。

6号棺 (SX1041)

検出状況 区北端において検出した。7号棺と切り合い古い。

形状・規模 隅円方形の墓壙に1辺約78cmの漆喰によって構築した方形竪型を検出した。

墓 壙 1辺1.10mの隅円方形、深さ1.40mを測る。埋土には砂礫を入れている。

標石 外棺の上面に2本の竜山石製の延石を置いている。延石の接地面側に墨書がある。延石の全長は約0.95mと0.80m、幅約18cmと16cm、厚みは約13cmを測る。

外棺 約2cmの厚みの板材を使用しているが、外蓋の存在は確認できない。1辺80cm、高さ1.17mの直方体の規模をもつ。

内棺 約1.5cmの厚みの板材を使用している。1辺58cm、高さ95cmの直方体の規模をもつ。

漆喰槨 外棺と内棺の間に漆喰を充填している。外棺底と内棺底の間に厚さ6cmの漆喰を敷く。外棺と内棺の側板の間の漆喰の厚みは8cm～10cmである。内棺蓋の上には厚さ13cmの漆喰を充填する。

頭位 詳らかではない。

出土遺物 多量の鉄釘 (M108～M126) のほか棺内より銅環 (M107) が出土している。

被葬者 壮年女性 (20～39歳) と考えられるが、一部に部位が重複する複数個体の人骨が存在する。

7号棺 (SX1042)

検出状況 区北端において検出した。6号棺と切り合い新しい。

形状・規模 隅円方形の墓壙に1辺約78cmの漆喰によって構築した方形竪型を検出した。

墓 壙 1辺1.20mの隅円方形、深さ1.25m (復元高1.47m) を測る。埋土には砂礫を入れている。

標石 存在しない。

外棺 約2cmの厚みの板材を使用しているが、外蓋の存在は確認できない。1辺80cm、高さ88cmの

直方体の規模をもつ。

内 棺 約2cmの厚みの板材を使用している。1辺61cm、高さ82cmの直方体の規模をもつ。

漆喰層 外棺と内棺の間に漆喰を充填している。外棺底と内棺底の間に厚さ2cm程度の漆喰を敷く。外棺と内棺の側板の間の漆喰の厚みは約8cmである。内棺蓋の上に厚さ8cmの漆喰を充填し、蓋とする。

頭 位 東面している。

出土遺物 多量の鉄釘 (M132～M148) のほか、棺内より煙管 (M129・M130)・銅環 (M128)・鉄鎌片 (M131) が出土している。煙管は衣類の断片に包まれて遺存しており、衣類の懐などに入れられていた可能性もある。

被葬者 熟年 (40～59歳) の男性と考えられる。

火葬墓群

火葬墓は、3・4号棺の間にある2基の火葬墓を除き、すべて墓地の東側より検出されている。火葬墓はSD1021・SD1045(東西溝)・SD1045南分枝に囲まれた部分に固まっている。大きくは、SX1051、SX1052・SX1056・SX1058及びSX2074、SX1049・SX1050・SX1064、SX1039・SX1040・SX1045・SX1048、SX1055に分けることができる。

火葬墓は3基から4基の蔵骨器が密集して検出されており、それぞれが家族墓であった可能性が考えられる。蔵骨器の大半は土師質もしくは瓦質の火消し壺を使用しており、時期は18世紀末から19世紀前半と考えられる。

SX1051 (上層)

検出状況 区北端において検出した。

形状・規模 円形の墓壇をもち、下層からは土葬墓 (早桶 - 第2面)、上層からは、火消し壺5個による蔵骨器による火葬墓を検出した。

墓 壇 下層の土葬墓を掘り崩し、径1.15mの円形、深さ0.55mを測る。埋土には砂礫を入れている。

標 石 存在しないが、墓壇上に径10cm前後の礫を敷き詰める。

蔵骨器 火消し壺 (337～344) による蔵骨器を5個、複数期に渡って埋納している。

その他施設 上面に陶器製花立 (389) をもつ。

出土遺物 火葬骨以外出土していない。

時 期 18世紀末～19世紀前半である。

SX1052・SX1056・SX1058及びSX2074

SX1051の東側に位置する。南北方向に一列に並ぶ。いずれも攪乱によって墓壇の東肩を削られている。

SX1052

検出状況 区北端において検出した。SX2074の西側にある。攪乱によって上半を失う。

形状・規模 径40cm・深さ約32cmの円形の墓壇をもち、火消し壺による蔵骨器をもち。

墓 壇 径40cmの円形、深さ32cm。

標 石 存在しないが、蓋上に径15cm程度の石を載せている。

蔵骨器 蓋 (347) を伴う火消し壺 (348) による蔵骨器を埋納している。

出土遺物 径20cmの土師器皿2枚 (345・346) が出土した。

時 期 18世紀後半と考えられる。

SX1056

検出状況 区北端において検出した。SX1058の南側にある。攪乱によって上半を失う。

形状・規模 径25cmの円形の墓壙をもつ。火消し壺による蔵骨器をもつ。

墓 壙 径25cmの円形の墓壙をもつ。

蔵骨器 火消し壺 (349) による蔵骨器を埋納している。

出土遺物 火消し壺以外の出土はない。

時 期 18世紀末～19世紀前半である。

SX1058

検出状況 区北端において検出した。SX1052の南側にある。攪乱によって上半を失う。

形状・規模 長軸60cm・短軸40cmの楕円形の墓壙をもつ。丹波焼甕片が多量に入る。

墓 壙 長軸60cm・短軸40cm、深さ80cmを測る。

出土遺物 丹波焼甕 (351・352) を埋納している。

備 考 土葬墓 (甕棺) の可能性がある。

時 期 18世紀前半と考えられる。

SX2074

検出状況 区北端において検出した。SX1052の東側にある。攪乱によって大半を失う。

形状・規模 径30cmの円形の墓壙をもつ。

墓 壙 径30cmの円形の墓壙をもつ。埋土には円礫を密に入れている。

出土遺物 出土遺物はない。

備 考 蔵骨器を抜き取った跡と考えられる。第2面に伴う可能性がある。

時 期 18世紀前半と考えられる。

SX1049・SX1050・SX1064

火葬墓地の中央に位置する。SX1049・SX1050・SX1064は東西方向に並ぶが、切り合う。

SX1049

検出状況 区北端において検出した。SX1050の西隣にあり切り合い新しい。削平によって上半を失う。

形状・規模 径28cmの円形の墓壙をもつ。火消し壺による蔵骨器をもつ。

墓 壙 径28cmの円形の墓壙をもつ。

蔵骨器 火消し壺による蔵骨器を埋納している。

出土遺物 火消し壺 (335) 以外の出土はない。

時 期 18世紀末～19世紀前半である。

SX1050

検出状況 区北端において検出した。SX1049の東隣にあり切り合い古い。削平によって上半を失うが、SX1049よりも墓壙は深い。

形状・規模 径48cm・深さ18cmの円形の墓壙に火消し壺による蔵骨器を埋納する。

墓 壙 径48cmの円形の墓壙をもつ。

蔵骨器 火消し壺による蔵骨器を埋納している。

出土遺物 火消し壺 (336) 以外の出土はない。

時 期 18世紀末～19世紀前半である。

SX1064

検出状況 区北端において検出した。SX1050の東隣にあり切り合い古い。削平によって上半を失い、SX1050よりも墓壇は深い。

形状・規模 楕円形の墓壇である。

墓 壇 長軸53cm・短軸39cm・深さ35cmの楕円形である。

出土遺物 出土遺物はない。

時 期 18世紀後半代の可能性がある。

SX1039・SX1040・SX1045・SX1048

SX1049・SX1050・SX1064の南東側に位置する。南北方向に並ぶ。SX1045・SX1040・SX1039の順に切り合い新しい。また、SX1048とSX1039は切り合い、SX1039が新しい。

SX1048

検出状況 区北端において検出した。SX1039の北隣にあり切り合い古い。攪乱によって北半を失い、また、削平によって上半を失う。

形状・規模 径34cm・深さ12cmの円形の墓壇に火消し壺による蔵骨器を埋納する。

墓 壇 径34cmの円形の墓壇をもつ。

蔵骨器 火消し壺による蔵骨器を埋納している。上部はなく、体部の下半が残る。蔵骨器は墓壇底より10cmほど高いレベルに据えられている。

出土遺物 火消し壺 (334) 以外の出土はない。

時 期 18世紀後半と考えられる。

SX1039

検出状況 区北端において検出した。SX1048の南隣にあり切り合い新しい。削平によって上半を失う。

形状・規模 径45cm・深さ20cmの円形の墓壇に瓦質火鉢による蔵骨器を埋納する。

墓 壇 径45cmの円形の墓壇をもつ。

蔵骨器 瓦質火鉢による蔵骨器を埋納している。上部はなく、体部の下半が残る。蔵骨器は墓壇底より4cmほど高いレベルに据えられている。

出土遺物 瓦質火鉢 (330) 及び鉄釘 (M149) が出土している。

時 期 18世紀後半以降と考えられる。

SX1040

検出状況 区北端において検出した。SX1039の南隣にあり切り合い古い。

形状・規模 径約35cm・深さ20cmの円形の墓壇に火消し壺による蔵骨器を埋納する。

墓 壇 径約35cm・深さ20cmの円形の墓壇をもつ。

蔵骨器 火消し壺による蔵骨器を埋納している。蔵骨器の中には径5cm前後の石が入れられている。蔵骨器は墓壇底より3cmほど高いレベルに据えられている。

出土遺物 火消し壺 (331・332) 以外の出土はない。

時 期 18世紀末～19世紀前半である。

SX1045

検出状況 区北端において検出した。SX1039の南隣・SX1040の東隣にあり、切り合い古い。削平に

よって上半を失う。

形状・規模 径約40cmの円形の墓壙に火消し壺による蔵骨器を埋納する。

墓 壙 径約40cmの円形の墓壙をもつ。

蔵骨器 火消し壺による蔵骨器を埋納している。

出土遺物 火消し壺以外の出土はない。

時 期 18世紀後半～19世紀前半代と考えられる。

SX1055

検出状況 火葬墓地の南半に位置する。

形状・規模 SX1047の上層から、火消し壺による蔵骨器を検出した。

墓 壙 明確でない。

蔵骨器 火消し壺による蔵骨器を埋納している。削平によって上半を失う。

出土遺物 火消し壺 (333) 以外出土していない。

時 期 18世紀末～19世紀前半である。

井 戸

井戸は5基検出されている。SK1007・SK1003・SK1001・SX1077・SX1038である。いずれも素掘りの井戸である。内SK1007・SK1003の2基からは土師器皿類、瓦質火舎、丹波焼搦鉢・甕・壺、備前焼の搦鉢及び瀬戸・美濃の天目茶碗、青花磁器碗や白磁の皿・碗などの輸入磁器類、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、一石五輪塔、石臼、小型の硯が出土している。16世紀末（有岡城期）から17世紀初頭の時期の遺物である。2基の井戸は有岡城の時期に使われていた可能性が高く、他の3基は瓦類を主とした遺物から18世紀代に使用されていた井戸と考えられる。

これら2基は第2面の遺構において述べるべきであるが、第1面まで継続して使用されており、5基すべて、第1面において述べることとする。

SK1007

検出状況 区南端において検出された素掘りの井戸である。

形状・規模 形状は楕円形を呈する。規模は長径90cm・短径約75cm、深さ3.1mを測る。

井戸の断面形は、下部壁面が湧水で崩落したために下膨れに膨らむ形を呈する。堆積層は上層の長方形の落ち込み2層を含めると大きく6層に分かれる。上層の第3層の黄褐色シルト質細砂及び第4層褐色シルト質細砂に関しては、微細な土器片しか出土せず、出土遺物の大半が第5層のオリブ褐色礫混粘土層に集中する。第5層は拳大から人頭大の石塊を含む粘土層で、少量の炭・灰が混じる。

出土遺物 土師器などの土器類・瓦質火舎と国産陶器類の丹波焼の搦鉢・甕・壺と備前焼の搦鉢及び瀬戸美濃の天目茶碗が出土している。輸入磁器類としては青花磁器の碗や白磁の小皿・碗などが出土している。また、瓦類も軒丸瓦1種・軒平瓦2種と丸瓦・平瓦が出土している。石造品としては六甲花崗岩製の一石五輪塔1基と石臼3個が出土している。珍しいものとしては小型の硯が出土している。特に、石臼は第5層のオリブ褐色礫混粘土層と最下層である第6層褐色シルト質細砂との境目に沿って水平に置かれた状態で出土しており、井戸内に意図的に置かれた可能性がある。

SK1001

検出状況 区南端において検出された素掘りの井戸である。SK1007の北側にある。

形状・規模 形状は円形を呈する。規模は直径約1m、深さ約3.2mを測る。井戸の堆積層は大きく10層に分かれ、上面は木の根などで攪乱されているが第3層以降はプライマリーな堆積状況を示す。井戸の断面形は下部壁面が湧水のため崩落したために下膨れ形を呈し、最下部には水溜め状に凹む。出土遺物は微細な土師器片が出土しているが量的には少なく、井戸の形成時期に関しては前述の一括遺物群を検出した井戸（SK1007）と同時期の所産のものと考えられる。

出土遺物 土師器片が出土している。

SK1003

検出状況 区南端において検出された素掘りの井戸である。SK1007の西側にある。

形状・規模 形状は隅円方形に近い円形を呈する。直径約0.78m、深さ約4.4mを測る。井戸の堆積層は大きく6層に分かれ、出土遺物の大半を第4層の黄褐色礫混粘質土層から、近世瓦を中心に近世染付などが多量に出土している。

出土遺物 近世瓦（T11～T16）・染付が出土した。

SX1038

検出状況 SD1021に近接して墓地内より検出された。

形状・規模 形状は上面では楕円形、一段下がって円形を呈する。規模は上面では長径90cm・短径約75cm、円形となって、径約78cm、深さ3.0mを測る。井戸の上半は黄褐色土によって埋められている。

出土遺物 鉄鎌（M150）が出土した。

SX1077

検出状況 7号棺と切り合い古い。

形状・規模 形状は円形を呈する。規模は径約1.40m、深さ3m以上掘削されている。

出土遺物 土師器焙烙（359）・土師器皿（357・358）などが出土している。

土 坑

SX1007

検出状況 区の火葬墓地北半に位置する。

形状・規模 径65cmの円形の掘り方に腹径50cmの丹波焼甕を据える。掘り方には漆喰を巡らせる。

出土遺物 丹波焼甕（402）を出土した。

時 期 18世紀前半代の丹波焼甕である。

（第2面の概要）

第2面からは、有岡城に伴う遺構及び18世紀前半を中心とする時期の遺構を検出した。

町屋跡の遺構

調査区の南3分の2からは、伊丹郷町の町屋に伴う土坑・ごみ穴などを検出しているが、第2面に明確に伴う遺構は検出されていない。

また、西端においては、幅3m・長さ59mにわたって有岡城の外堀跡を検出した。堀は部分的に3m程度途切れて検出されている。また、18世紀代に埋め立てられたものと考えられる。第1面ではSD1004として調査している。

堀状遺構は調査区北半部において調査区の西端から検出している。南半の堀と同じく、堀の肩にあた

る可能性がある。

堀 SD2001 a・SD2001 b

検出状況 区・区の西壁に沿って検出した。SD2001 a・b間には土橋状の浅い区間があり、b部分は更に矩形に深く掘削されている。

形状・規模 西肩は調査区外にある。SD2001 a・bを合わせ約35mを測る。

埋土 両溝は幾度か掘り返しているが、ともに溝底には無遺物の堆積層が存在している。

SD2001 a

検出状況 区西壁沿いに位置する。北端はSD2001 bが取りつく。第1面ではSD1004として精査している遺構である。

形状・規模 現況では、断面形状は一端箱型に掘削し、中央部を更に深く掘り下げているが、当初の形状は上半を何度も掘り下げているため不明である。規模は幅2.2m以上、全長22m、深さ約1.6mを測る。

埋土 下層灰黄褐色混礫土、中層暗灰黄色混礫土、上層褐色混礫土が堆積している。

出土遺物 図示できる出土遺物はない。

SD2001 b (SX1012)

検出状況 区・区にかけて西壁沿いに検出している。SD2001 aの北端から始まり、矩形の形状を呈する。SD2001 aとの先後関係は不明である。第1面ではSX1012として精査を実施している遺構である。

形状・規模 断面形状は箱型に掘削しており、幅2.5m以上、延長10m以上、深さ約1.6mを測る。

埋土 最下層には暗褐灰色シルト、中層には炭を含む黒褐色土、上層には褐灰色混礫土が堆積している。中層・上層はいずれも投入土（盛土）である。

出土遺物 SX1012から土師器皿（205～216）・焙烙（217～221）、陶器鉢（222・223）・椀（224～226）などが出土している。

堀状遺構 SX2003 a・SX2003 b

調査区の西壁に沿って南北方向に約30mに及び検出した。a・b間において一部途切れを見せている。

SD2003 a

検出状況 区・区にかけて西壁沿いに検出している。区の第1面ではSD1004として精査している。墓地区画手前で途切れる。SD2001 bとは切り合い、先行する。

形状・規模 浅い皿状に掘る。検出全長14m以上・幅2m以上・深さ50cmを測る。

埋土 灰黄褐色土・明黄褐色土が堆積している。人為的な埋土と考えられる。

出土遺物 区SD1004として土製品（366・367）・土師器皿（364）・焙烙（365）などが出土している。

SD2003 b

検出状況 区にかけて西壁沿いに検出している。

形状・規模 浅い皿状に掘る。検出全長15m・幅2m以上・深さ45cmを測る。

埋土 暗灰黄色土～明赤褐色土が入る。人為的な埋土と考えられる。

出土遺物 図示できる出土遺物はない。

墓地跡・寺跡の遺構

調査区の北3分の1からは、墓地跡・柵列・堀状の落ち込みを検出している。

土葬墓は4基が検出された。これらは桶を棺として使用したものである。

内1基は、径60cmの小規模な物で、棺内からはミニチュアの土器が出土している。また、他の1基には桶の底板が残存していた。これらの土葬墓は、火葬墓の下層より検出されており、時期を18世紀代と推測することができる。

また、火葬墓1基を確認しており、18世紀前半代の火消し壺を蔵骨器としている。

柵列

柵列と考えられる柱穴列を3基検出した。

SA2001

検出状況 区・区西端において検出した。SX2003の肩部と並行している。

形状・規模 軸方位をN0°Eにとる。検出全長は約15mを測る。

柱穴 11個の柱穴を検出している。円形を基本とし径40cm前後である。柱間はばらつきがあるが、約1mが基本である。

出土遺物 柱穴には礫が入っており、遺物の出土はない。

性格・時期 SX2003に伴う可能性が高い。

SA2002

検出状況 墓地の南を区切る溝SD1021の肩部を走るSA2003から分岐し、北北西に延びる。

形状・規模 軸方位をN14°Wにとる。検出全長は約7.3mを測る。

柱穴 7個の柱穴を検出している。円形を基本とし径50cm前後である。柱間はばらつきがあり、約1mと1.2mが混在する。

出土遺物 柱穴には礫が入っており、遺物の出土はない。

性格・時期 墓地の区画に伴う可能性が高い。

SA2003

検出状況 墓地の南を区切る溝SD1021の肩部を走る。SA2003が分岐する。

形状・規模 軸方位をN76°Eにとる。検出全長は約5.0mを測る。

柱穴 5個の柱穴を検出している。円形を基本とし径30cm前後である。柱間は約1mが基本である。

出土遺物 柱穴には礫が入っており、遺物の出土はない。

性格・時期 墓地区画に伴う可能性が高い。

土葬墓

土葬墓は4基が確認された。これらは桶を棺として使用したものである。これ以外にもSX1004からは人骨が出土するなど、土葬墓と考えられる土坑が数基存在している。

SX1028

検出状況 墓地中央において検出した。攪乱によって上部を失っている。

形状・規模 楕円形の墓壇に、円形の棺痕跡がある。

墓壇 楕円形である。長径0.93m・短径0.72m・深さ0.58mを測る。

桶棺 径48cmの円形の痕跡をもつ。棺内にはシルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 18世紀代のミニチュア土器(326・834・835)が出土している。

SX1047

検出状況 区北端において検出した。

形状・規模 円形の墓壙をもち、上層からは、火消し壺の蔵骨器による火葬墓SX1055を検出している。

墓 壙 径0.8mの円形、深さ0.65mを測る。

桶 棺 底部径0.55m・上部での径約0.7mの桶痕跡をもつ。棺内下半には灰褐色粘質土が堆積している。

出土遺物 図示できる遺物の出土はない。

SX1051 (下層)

検出状況 区北端において検出した。

形状・規模 円形の墓壙をもち、上層からは、火消し壺5個による蔵骨器による火葬墓を検出している。

墓 壙 早桶に伴う墓壙は、径0.70mの円形、深さは0.68mを測る。上面からの深さは、約1.30mである。

桶 棺 底板が残存している。径52cm・厚み1cmを測る。

出土遺物 底板以外には出土していない。

SX1053

検出状況 区北端、墓地の北東端において検出した。攪乱によって上部を失っている。

形状・規模 円形の墓壙をもち、円形の桶棺痕跡がある。

墓 壙 早桶に伴う墓壙は、径0.92mの円形、深さは0.27mを測る。

桶 棺 径73cmの円形の痕跡をもつ。棺内にはオリーブ褐色シルト質細砂が堆積している。

出土遺物 出土していない。

火葬墓

SX1033 (SX2073)

検出状況 区北端において検出した。第1面では浅い痕跡 (SX1033) として出現している。

形状・規模 円形の墓壙に火消し壺による蔵骨器を埋納する。

墓 壙 径約52cm・深さ16cmの円形の墓壙をもつ。

蔵骨器 火消し壺による蔵骨器を埋納している。

出土遺物 火消し壺 (361・362) 以外の出土はない。

時 期 18世紀前半

その他の土坑

SX2067

検出状況 区北端において検出した。

形状・規模 空豆形の平面形状、断面形は箱形である。長軸0.85m・短軸0.55m・深さ0.27mを測る。

埋土は、黄褐色シルト質極細砂である。

出土遺物 出土遺物はない。

性格・時期 土坑の性格は不明である。

第3節 平成15年度調査区

(1) 調査の方法

調査地点は舗装道路直下のため、事前に舗装部分（約30cm）を撤去しておこなった。調査は道路の通行や作業工程の都合から ～ 区（南から北側へ）の4区に分割した。各区の規模は次のとおりである。

区18×2m、 区30×2m、 区21×2m、 区19×2mである。

(2) 調査の結果

調査地点は255次・269次調査の西側隣接地にあたる。今回の調査区は南端の伊丹段丘の裾から、北端では段丘崖の一部を含む範囲に及んでいる。

調査の結果、調査区の周辺は幕末から明治期と、昭和初期に大きな造成が行なわれていることが確認された。幕末のものは町屋の裏庭を拡張するためのもので、層中に大量の陶磁器を混入することから、伊丹郷町内の土砂を造成土に使用したことが推測される。この造成は、町屋の空間が稠密になってきたことを物語るもので、幕末ごろに町屋内の暮らしが充実し人口が増加したことを推測させた。

また、昭和初期の造成は道路建設に伴うもので、遺構面は軟弱な土砂で造成が行なわれ、完全に被覆されていた。以下、各区について報告する。

区

調査区の南端にあたり、標高12.0m前後で地山を検出した。調査の結果、土坑・溝・落ち込み状遺構が検出され、多量の陶磁器が出土した。

出土遺物には肥前系磁器・丹波焼・土師器皿などがあり、これらから遺構の時期は幕末期と判断される。また、遺構面の上層には土砂が厚く堆積し、遺構はこれらの盛土の上に掘削されていた。このため当該地区は幕末期に東側の町屋の裏地として造成されたようである。

区

区と同じく幕末期の遺構を検出した。検出遺構には土坑・溝・杭列などがある。上層には幕末期の遺物を含む盛土が検出された。

土坑は方形ないし長方形を呈し、大半が調査区外に延びている。調査区東端には浅い溝が2条検出されたが、これは段丘地形の裾に掘削された溝で、段丘裾の排水ないしは雨水処理のために掘削されたと考えられる。

出土遺物には肥前系磁器・丹波焼・土師器皿などがある。

区

区の北側に続く調査区で土坑・溝・杭列のほか、北端で堀が検出された。土坑・溝・堀は幕末のものと判断され南側に集中する。この上層からは陶磁器を含む土砂が盛土されて、 区と同じく町屋の裏地として造成が行われている。

一方、調査区中ほどには洗い場が検出されたが、これは昭和初期まで確実に下る遺構である。また、この直上にはガラス片などを含む土砂が盛土されており、現道敷設の際（昭和初期）の盛土と推定される。このため、 区は南側の一部を除くと幕末期の盛土造成が及ばず、中央から北側は昭和初期まで、

段丘崖が残されていたと考えられる。

調査区の北側では堀状の落ち込みが検出された。これは 区で検出された石垣基礎工事の痕跡と考えられる。

区

正覚寺西端の段丘崖面にあたる調査区である。調査の結果、北端では段丘崖面が調査区に向かって迫り出していることが判明したが、この崖面に石垣が構築されていたことが明らかになった。ただし、この石垣は基底部分のみが残存するもので、大半が昭和初期の道路建設にともなって損壊したものと考えられる。石垣は段丘崖面に沿って西北 南東方向に延びており、基底部分は幅1.5m前後の掘削を行い、下端に胴木を据えていた。

この石垣は正覚寺境内の法面保護のために構築されたものと考えられ、花崗岩の粗割り石を使用する。状況から旧状は正覚寺境内の高さまで構築されていたと推測される。

このほか、石垣根石からは墨書「久兵衛」の文字が確認され、石材に水準の墨引きが確認されている。この石垣に平行して、長さ2m前後の板材を2段に並べ、要所を杭で固定した遺構が検出された。これは石垣面から1mの間隔を置いて構築されるもので、内部に土砂を充填するものである。状況から石垣基礎部の孕みを防ぐ土留めのためのものと考えられる。

(3) 小結

有岡城跡・伊丹郷町の西側、段丘裾にあたる部分を調査した。この結果、江戸時代後半の遺構を検出し、北側（ ・ 区）では有岡城惣構の外郭線を検出した。この外郭線は既往調査区では江戸時代後半に埋められるが、今回の調査地点では正覚寺の西側崖面の土留め石垣によって覆われていた。また、今回の調査では外堀は検出されず、惣構西側の既往調査を裏付ける結果となった。この意味で重要な成果をもたらした。

また、 ・ 区及び 区南端では幕末期から町屋の裏地拡大に伴う造成が行われたことが明らかになった。これは、この時期に伊丹郷町内の再開発があったことを示唆するもので、幕末頃に町屋内部の暮らしが充実したか、あるいは人口が増加したことが推測される。

この他、調査区は昭和初期に現道路の新設に伴って造成が行われており、正覚寺西側の石垣がこのときの工事で大きく破壊され、調査区は埋め立てられた。

第 章 遺物

第 1 節 土器・陶磁器・土製品

255次調査区

区

SE03 SE03からは土師器五徳（1）、明石産播鉢 B 1 類（2）、京焼系壺蓋（3）、京焼系陶器鉢（4）、近代以降のクローム青磁皿（461）、銅版転写で輪違い文などを描く染付磁器輪花皿（462）・濃い藍色の酸化コバルトで市松文などを描く鉢（463）などが出土している。

SK02 5～7はいずれも内外面ともヨコナデ調整を施す非ロク口成形の土師器皿である。8は堺産播鉢 A 類である。9は丹波焼の植木鉢である。10は19世紀前半代の信楽焼灯明皿と考えられる。464は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。外面に簡易な草花文を描く。18世紀後半代に比定される。465は肥前系の杯である。19世紀前半代の製品である。

SK03 11は肥前系波佐見産の粗製の白磁皿で18世紀前半代に比定される。466は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代の製品である。

SK06 12は土師器焙烙の播磨型 D 類である。底型作りで底部は平底である。灰褐色を呈する。13は無釉陶器の筒形容器である。備前焼の水指あるいは建水と考えられる。14は瀬戸・美濃系の灰釉陶器椀で19世紀前半代の所産である。467は口縁部を波状に成形し、内外面とも白泥を刷毛塗りする鉢である。468・469は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。外面にコンニャク印判で菊花文を施文する。18世紀前半代に比定される。470は肥前系鉢で、18世紀後半代に比定される。

SK08 471は近代以降の青磁碗である。472は外面に菱形文と菊花文を型紙摺りで施文する染付碗で、近代以降の製品と考えられる。

SK09 15は丹波焼の植木鉢である。底部の1ヶ所をヘラ状工具でえぐる。外面には赤土部を塗布する。

SK10 16は備前焼皿である。底部外面には糸切痕が残る。17は備前焼甕である。口縁部は断面楕円形状に肥厚し、外面に凹線が2条施される。備前焼 期の製品で16世紀代に比定される。473は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代に比定される。474は口縁部を輪花状に成形する肥前系染付磁器鉢である。

SK25 18は非ロク口成形の土師器皿である。口縁部に煤が附着する。

SK27 19は堺産播鉢 A 類である。体部内面に10条1単位の櫛描きの播目を施す。20は丹波焼徳利である。外面全面に灰釉を柄杓掛けする。21は瀬戸・美濃系の腰錆茶椀である。19世紀前半代に比定される。22は京焼系施釉陶器の落し蓋である。475は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。476は肥前系染付磁器碗である。外面に割筆で二重網目文を描く。

SK30 477は肥前系染付の半磁器の碗である。外面に蔦草文を施文し、底部内面は蛇の目状に釉ハギする。

SK36 478は肥前系染付磁器碗である。外面に菊唐草文を描く。18世紀代の製品と考えられる。

SK38 23は丹波焼播鉢 B 2 類である。17世紀初頭～中葉に比定される。

SK43 24は瓦質土器火鉢 A 1 類である。体部外面中位に幾何学文を印花で施文する。焼成はややあまい。

SK44 479は肥前系染付磁器碗である。外面に草花文・流水文を描き、内面は無文である。19世紀前半代に比定される。

SK52 25は京焼系施釉陶器蓋である。26・27は京焼系施釉陶器土瓶である。26は体部が大きく内彎し、体部外面上半に灰釉を施釉する。27は体部の断面形状が算盤形を呈する。26同様体部外面上半に灰釉を施釉する。

SK53 28は丹波焼播鉢 B 3類である。口縁端部は若干横方向に拡張する。体部内面に7条1単位の櫛描きの播目を施文する。

SK54 29は唐津焼溝縁皿である。口縁部内面に凹線が1条巡る。17世紀中頃の製品である。

SI02 30は大谷焼甗である。内外面とも鉄釉を施釉する。近代以降の製品と考えられる。

SI03 31も30と同様に大谷焼の甗である。

SI05 32は丹波焼徳利である。18世紀後半代の製品である。

SX01 33は珪藻土で作られた七輪である。重量は比較的軽い。34は丹波焼壺蓋である。外面は鉄釉を施釉し、内面は露胎である。

SX03 35は美濃焼志野皿である。内外面とも長石釉を施釉する。17世紀前半代に比定される。480は肥前系初期伊万里皿である。

SX05 36は唐津焼緑釉皿である。底部内面は蛇の目状に釉ハギし、外面の体部下半以下は露胎である。

481は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。外面に簡易な草花文を描く。18世紀後半代に比定される。

SX07 37は堺産播鉢 B類である。体部内面には8条1単位の櫛描きの播目を施す。482は肥前系の半球形碗である。

SX09 483は初期伊万里皿である。内面に草花文を施文し、高台畳付に砂が附着する。17世紀前半代の製品である。

堀 38は唐津焼皿である。17世紀初頭に比定される。

堀上層 502は肥前系の京焼風碗である。外面に菊唐草文を描く。503は染付磁器鉢である。漳州窯系青花の可能性が高い。

SP01 484は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。外面にコンニャク印判で菊花文を施文する。

SP05 39は丹波焼播鉢 B 3類である。口縁部は断面長方形形状を呈する。体部外面に指頭圧痕が残る。17世紀中頃～18世紀前半に比定される。

第2面精査 40は京焼系施釉陶器蓋である。外面は露胎で火襷が見られる。内面には鉄釉が施釉される。

包含層 包含層中からは土師器皿 (41～47)、備前焼灯明皿 (48・49)、丹波焼播鉢 B 3類 (50)、期の備前焼播鉢 (51)、堺産播鉢 A類 (52)、丹波焼火入れ (53～56)、期の備前焼甗 (57)、丹波焼甗 - 2 - a類 (58)、肥前系唐津碗 (59・61～64)・皿 (60・66・67)、京焼系陶器碗 (65)、信楽焼灯明皿 (68)、丹波焼蓋 (70)、青磁皿 (71)、白磁碗 (72・73)・皿 (74・75)、鞆の羽口 (76・77)、土製人形 (78・79) などが出土している。

第2面包含層 485はいわゆるピラ掛け碗である。486・487は明石・舞子産と考えられる施釉陶器蓋である。19世紀前半代に比定される。488は染付磁器碗である。近代～現代の製品である。489は碗蓋である。内外面とも銅版転写で細かい草花文を施文する。490は初期伊万里皿である。底部外面にト巾を削り残す。17世紀前半代に比定される。491は肥前系染付磁器皿である。蛇の目凹形高台を持ち、口縁端

部は小さい玉縁状に肥厚する。492は色絵磁器の碗蓋である。外面に赤絵と金彩で斜格子文を、内面には「魁」を赤絵で施文する。

第3面包含層 493は京焼系陶器碗である。494は二彩唐津鉢である。内面に白濁釉、鉄釉、緑釉の3釉を掛け分ける。495は青磁皿である。496～498は染付磁器碗である。496は外面に半截菊花文を施文し、畳付には砂が附着する。497は外面に一重網目文と魚文を施文する。いずれも肥前系で496は17世紀前半に、497は17世紀後半代にそれぞれ比定される。498は瀬戸・美濃系で19世紀前半代の製品と考えられる。499～501は初期伊万里皿である。畳付に砂が附着する。

攪乱層 攪乱層中からの出土遺物には土師器皿(80)・焙烙播磨型 C類(81)、丹波焼播鉢中世 B3類(82)、明石産播鉢 B1類(83)、堺産播鉢 A類(84・85)、明石産播鉢 B2類(86)、丹波焼甕類(87)、美濃焼志野皿(88)、丹波焼壺蓋(89)、瀬戸・美濃系白磁皿(90)、ミニチュア土器鉢(91)、土製の西行像(92)・遊女像(93)などがある。504は肥前系京焼風陶器碗である。505は肥前系青磁碗である。内面に型押しで花卉文を施文する。507は近代～現代の染付青磁碗である。508～512は肥前系染付磁器碗である。513は肥前系染付磁器の碗蓋である。514は中国製の青花磁器皿である。515・516は肥前系初期伊万里皿で17世紀前半代に比定される。517・518は肥前系波佐見産の染付磁器皿である。519～522は近代以降の染付磁器皿である。523は近代以降の蓋付鉢である。

区

SK63 524は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代に比定される。

SX10 94は明石産播鉢 A類である。体部内面には9条1単位の櫛描きの播目を施す。95は備前焼火入れである。96は瀬戸・美濃系灰釉陶器碗である。形押しで外面に亀甲文を施文する。97も瀬戸・美濃系灰釉陶器碗と考えられる。525は肥前系染付青磁の碗蓋である。底部内面にコンニャク印判で五弁花文を施文する。526～530はいずれも肥前系染付磁器碗である。526は外面に割筆で二重網目文を描く。

527～530は肥前系波佐見産のくらわんか手碗で18世紀前半～後半代の所産である。531は外面に酸化コバルトで植物文を施文する碗で近代以降の製品である。532は清朝青花写しの碗で瀬戸・美濃系と考えられる。533は肥前系波佐見産の粗製の染付皿で18世紀前半代に比定される。

SX11 98・99は土師器皿である。98は非ロク口成形である。99はロク口成形でやや上げ底気味の平底を呈する。100は瓦灯皿で脚部に半月形の透かしをもつ。

101～104は無釉陶器播鉢である。いずれも口縁部が上下に拡張して縁帯をもつもので、101は明石産播鉢 C類、102は堺産播鉢 C類、103は明石産播鉢 A類、104は明石産播鉢 B1類にそれぞれ分類される。

105～110は施釉陶器碗である。105・106・108・110は京焼系、107は萩焼で、109は産地不明である。

111～114は施釉陶器蓋である。112・113は丹波焼、114は京焼系、111は京・信楽系と考えられる。

115は京・信楽系の灯明皿である。内面には凸帯が1条巡り、灰釉を施釉する。外面は露胎である。116は桶を模倣した水盤である。瀬戸・美濃系陶器と考えられる。117は瀬戸・美濃系鉢である。内面～体部外面上半には白濁釉を施釉し、体部外面下半以下は露胎である。

118は施釉陶器甕である。口縁部が内外に拡張して上面に端面をもち、内外面に鉄釉を施釉した後、外面に灰釉を柄杓掛けする。119・120はいずれも丹波焼甕である。119は口縁部は上面に端面をもち、外面に灰釉を柄杓掛けする(- 3 - b類)。120は口縁端部が上面に端面をもち、内面に灰釉を、外面には鉄釉をそれぞれ施釉する(- 3 - a類)。121は高台をもち、外面には緑釉を施釉する壺である。

京焼系と考えられる。122は備前焼の朱泥小壺と考えられる。123は外面にイッチン掛けで文字文を施文する丹波焼徳利である。124は外面に緑釉を施釉する御神酒徳利である。125は外面にガラス質の鉄釉を施釉する花瓶である。近代以降の製品と考えられる。126は京・信楽系の注口容器である。油差と考えられる。127～129は乗燭である。127・128は同タイプで内外面とも鉄釉を施す。129は口縁部内面に凸帯が1条巡り、1ヶ所えぐりが入る。内外面とも透明釉を施釉し、赤褐色に発色する。130は肥前系の白磁皿である。型押しで菊花状に整形する。19世紀前半代に比定される。131は肥前系白磁の紅皿である。体部外面は型押しで放射状に施文する。132は肥前系と考えられる白磁壺である。133は三田青磁碗である。置付は釉をかきとり、淡赤褐色に発色する。19世紀前半代に比定される。534は京焼系陶器碗である。535は京焼系陶器蓋である。536は瀬戸・美濃系陶器馬ノ目皿である。19世紀前半代に比定される。537は京焼系陶器の急須の把手と考えられる。538は京焼系陶器の燭台の底部と考えられる。539は陶胎染付の鉢である。540は三田青磁鉢である。541は近代以降の染付磁器碗である。542は肥前系染付青磁杯である。543は肥前系染付青磁鉢である。口縁部は型打ちで花卉状に成形する。545～551は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。552は明末～清初の青花磁器碗あるいはその写しと考えられる。553は瀬戸・美濃系染付磁器の広東碗である。554は京焼風の染付磁器碗である。555は肥前系の半球形碗である。556は高台が「八」の字状に開く染付磁器碗である。557～561・563・564・566～569は瀬戸・美濃系染付磁器の端反碗である。571～575は肥前系染付磁器の杯である。576は瀬戸・美濃系染付磁器碗である。577～580は19世紀前半以降の染付磁器碗である。581は瀬戸・美濃系染付磁器碗で19世紀前半以降に比定される。582は染付磁器杯で近代以降の製品と考えられる。583～590は染付磁器碗蓋である。591～602は染付磁器皿である。591～595・598・600は肥前系、597は瀬戸・美濃系と考えられる。603は植木鉢である。口縁部の平面形状は八角形を呈する。604～607は染付磁器鉢である。606は蓋受けをもつ蓋付鉢である。608～610は肥前系染付磁器の仏具碗である。611～613は肥前系染付磁器の御神酒徳利である。

SX12 134は丹波焼播鉢 A類である。体部内面に7条1単位の櫛描きの播目を施す。135は備前焼 期の製品で16世紀代に比定される。136は肥前系唐津碗で17世紀前半代に比定される。

614は肥前系波佐見産の染付磁器碗である。18世紀前半代に比定される。

SX13 137は土師器風炉もしくは火鉢である。色調はにぶい橙色を呈する。138は口縁部が外方にひらき、端部は波状に成形するひだ皿である。瀬戸・美濃系の製品で、19世紀前半代に比定される。139はミニチュアの鍋である。140・141は白磁碗である。615は京焼系陶器碗である。内外面とも白泥をランダムに施した後、透明釉を施釉する。616～618は肥前系染付青磁碗である。18世紀代に比定される。

619～622は肥前系染付青磁の碗蓋である。内面に四方禪文と五弁花文を描き、つまみの裏に渦福文を描く。18世紀代に比定される。623は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代の所産である。624は染付磁器碗である。肥前系と考えられる。625は外面に雨降り文を描く肥前系の小碗である。626は蛇の目凹形高台をもち、口縁部を輪花状に成形する鉢である。外面に唐草文、内面に墨弾きで唐草文を描く。19世紀前半以降の製品と考えられる。

SD05 627は肥前系染付磁器皿である。18世紀代に比定される。

SD06 142は備前焼火入れである。外面に火禪が見られる。143は三田青磁の鉢である。型作り成形で、内面に型押しで牡丹唐草文を施文する。19世紀前半代に比定される。628は染付磁器碗である。肥前系と考えられる。629・630は瀬戸・美濃系染付磁器碗である。629は外面に壽字と簡易な草花文を描く。

630は清朝青花写しと考えられる。いずれも19世紀前半以降の所産である。631・632は碗蓋で、いずれも線描きの簡易な草花文を描く。634は肥前系の段重である。635は肥前系の御神酒徳利である。外面に杜若文を描く。18世紀代に比定される。633は肥前系染付磁器皿である。19世紀前半代に比定される。SD07 144は口縁部成形のいわゆる柿釉の灯明皿である。145は土師器焙烙である。型作り成形で口縁部は断面三角形に肥厚する。焙烙型 類に分類される。146は明石産播鉢 C類である。147は乗燭である。京・信楽系の製品で19世紀前半代に比定される。148は灰釉を施す蓋である。149は白磁皿である。蛇の目凹形高台をもつ。型打ちで内外面を菊花状に成形する。肥前系で19世紀前半代の製品である。150は型作り成形の三田青磁鉢である。内面に型押しで牡丹文を施す。19世紀前半代の製品である。151は竹筒形の青磁鉢である。肥前系と考えられる。636は瀬戸・美濃系施釉陶器の椀蓋である。637・638は京焼系陶器の蓋である。639は陶胎染付の蓋である。640はクローム青磁の蓋である。近代以降の製品である。641は肥前系の瑠璃釉皿である。642～644は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。645は染付磁器碗である。646・647は肥前系染付磁器碗である。648は銅版転写の染付磁器碗である。近代以降の製品である。649は瀬戸・美濃系染付磁器端反碗である。650は肥前系の杯である。651～653は肥前系波佐見産のくらわんか手皿である。655・656は染付磁器鉢である。657は肥前系染付磁器の御神酒徳利である。658は肥前系色絵磁器の蕎麦猪口である。659は色絵磁器の鉢である。

SD08 152は非口縁部成形の土師器皿である。底部外面に指頭圧痕が残る。色調は褐灰色～黒色を呈する。660は口縁部が外方にひらく染付磁器の碗である。外面に簡易な草花文を描く。

SD11 153は非口縁部成形の土師器皿である。154は瓦質土器火鉢 A2類である。体部外面には型押し魚々子文を施す。155は土製品の火舎である。156は堺産播鉢 B類である。157は内面に灰釉を施す灯明皿である。京・信楽系の製品で19世紀前半代の所産である。158は三田青磁碗である。159は施釉陶器椀である。内外面とも灰釉を施す。661～663は染付青磁である。661は口縁部を波状に成形する蕎麦猪口である。内面に菱形文を描く。肥前系で19世紀前半以降に比定される。662は碗蓋である。肥前系で18世紀代の所産である。663は皿である。蛇の目凹形高台を持ち、底部の器壁は厚い。肥前系で18世紀代の製品と考えられる。664～672は染付磁器碗である。664は外面に紅葉唐草文を、内面に菊花文をコンチャク印判で描く。665・666は外面に菊唐草文を、内面に665は菊花文、666は五弁花文をそれぞれ描く。いずれも18世紀前半代の肥前系染付である。667は外面に二重網目文を割筆で施す。肥前系で18世紀代に比定される。668～670は肥前系波佐見産のくらわんか手碗で18世紀後半代に比定される。671は肥前系の広東碗で、19世紀前半代に比定される。672は瀬戸・美濃系の端反碗と考えられる。外面に菊唐草文を描く。19世紀前半以降に比定される。673・674は肥前系の杯である。673は外面に半截菊花文を、674は細かい草花文をそれぞれ描く。19世紀前半代に比定される。675は口縁部が外方にひらく鉢である。肥前系で18世紀代の製品と考えられる。676は肥前系染付磁器の仏具碗である。18世紀代の製品である。

677は型作り成形の水滴である。上面に型押しで菊花文を施す。

SD12 160は土製品のミニチュア椀である。678は染付青磁の碗蓋である。肥前系と考えられる。679は広東碗である。外面に八曜星を描く。肥前系と考えられ、18世紀後半～19世紀前半代に位置づけられる。680は京焼風染付磁器碗である。高台は「八」の字状に外方にひらく。

SD14 681は肥前系波佐見産のくらわんか手皿である。底部内面は蛇の目状に釉ハギする。18世紀後半代に比定される。

SD14下層 161は唐津焼椀である。内外面とも灰釉を施釉する。外面の体部下半以下は露胎である。17世紀前半代の製品である。

SP11 162は土師器焙烙の焙烙型 類である。型作り成形で、色調はにぶい褐色を呈する。682は二重網目文を施文する染付磁器碗である。肥前系で18世紀代の製品である。

SD11・SX11 163は堺産播鉢 B類である。体部内面には櫛描きの播目を施す。18世紀代の時期が与えられる。164は無釉陶器の急須である。器壁は全体に薄い。165も無釉の急須である。底部外面に「古曾部」銘を押印する。煎茶用の急須で摂津の古曾部焼である。166は四耳壺である。口縁端部は玉縁状に肥厚する。信楽焼と考えられる。167は秉燭である。内面～体部外面にかけて鉄釉を施釉し、底部外面は露胎である。

第1面包含層 683は肥前系染付青磁の碗蓋である。684～687は染付磁器碗である。684は波佐見産のくらわんか手碗である。685は底部内面に壽字文を描く碗で肥前系と考えられる。686は器壁が全体に薄い京焼風碗である。687は高台が高い広東碗で、瀬戸・美濃系と考えられる。

688は小型の碗で近代～現代の製品と考えられる。689は肥前系の杯で底部内面に崩れたコンニャク印判で五弁花文を施文する。690は肥前系染付磁器鉢である。

包含層 168は明石産播鉢 B1類である。169は瀬戸・美濃系の腰鑄椀である。19世紀前半代に比定される。170は丹波焼の壺蓋である。外面は鉄釉施釉の後、灰釉で施文し、内面は露胎である。171は青磁鉢である。肥前系と考えられる。172は丁銀形の土製品である。型作り成形で外面に型押しで「賈」の文字を施文する。691は型作り成形の緑釉鉢である。692～694は染付青磁である。692・693は碗で、いずれも肥前系で18世紀代に比定される。694は鉢である。蛇の目凹形高台をもち、肥前系と考えられる。

695は色絵磁器碗である。近代以降の製品と考えられる。696～698は染付磁器碗である。696は口縁部が直口する。697は口縁部が僅かに外方にひらく。いずれも瀬戸・美濃系で19世紀前半以降に比定される。698は外面にやや濃い呉須で柳文等を施文する。近代以降の製品と考えられる。699～701は染付磁器皿である。699は外面に唐草文、内面に松・梅文を描く。肥前系で18世紀代に比定される。700は型打ちにより口縁部を波状に成形する。肥前系と考えられる。701は内面に型打ちで梅花文・唐草文を施文する。702は段重である。肥前系と考えられる。703は仏具碗である。肥前系で18世紀代の製品と考えられる。

攪乱坑 704は京焼系陶器蓋である。705・706は外面に割筆で二重網目文を施文する染付磁器碗である。肥前系で18世紀代の製品と考えられる。707は碗蓋である。708は肥前系のくらわんか手の皿である。内面に簡易な草花文を施文する。18世紀後半代に比定される。

269次調査区

区

SK1012 173・174は土師器焙烙である。173は型作り成形で体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。播磨型 B類に分類される。174は粘土紐巻き上げ成形で体部外面に斜め方向の平行叩き目が残る。播磨型 A2類に分類される。175は頸部を欠落するが徳利である。外面に灰釉を施釉する。

SK1015 176は土製の十能である。型作り成形で平面形状は台形状を呈する。177は灯籠形土製品である。型作り成形で、4面に鳥居と丸文を施文する。709は肥前系波佐見産のくらわんか手の皿である。18世

紀後半代に比定される。710は肥前系の仏花瓶である。18世紀代の製品である。

SK1017 711は京焼系陶器の急須である。外面はトビガンナ施文の後、外面に部分的に鉄釉を施釉し、内面は全面に鉄釉を施釉する。

SK1022 178は土製品の人形である。型作り成形で前面と背面とを中央部で貼り合わせる。モチーフは魚籠をもつ釣り人と考えられる。712は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀前半代の製品である。713は碗蓋である。

SK1023 179～183は土師器焙烙である。179は粘土紐巻上げ成形で底部外面には平行叩き目が残る。播磨型 A1類に分類される。180～182は型作り成形で内外面ともヨコナデ調整を施す。183は粘土紐巻上げ成形で体部外面には平行叩き目が残る。180・181は播磨型 B類、182は播磨型 C類、183は播磨型 A2類に分類される。

184は丹波焼甕 - 1類である。185はミニチュアの擂鉢である。内外面とも透明釉を施釉し明赤褐色に発色する。186は土製の硯である。714は陶胎染付碗で、外面に草花文を描く。715は染付磁器碗である。京焼系と考えられる。

SK1024 187～189は口ク口成形の土師器皿である。いずれも内面に透明釉を施すいわゆる柿釉の灯明皿である。19世紀前半代の所産である。190は土師器焙烙で、焙烙型 類に分類される。191は瓦質土器火鉢 B1類である。体部外面に型押しで亀甲文を施文する。192は施釉陶器の片口鉢である。体部は大きく内彎し口縁端部は若干内側に引き出す。京焼系陶器と考えられる。193はミニチュアの鉢である。型作り成形で内面に指頭圧痕が見られる。194はミニチュアの提灯形である。片型作りで背面は平坦である。716は京焼系陶器の鍋蓋である。19世紀前半以降の製品と考えられる。717は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代に比定される。

SK1029 718は717と同形の丸文を描く肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代に比定される。719は底部内面を蛇の目状に釉ハギする碗である。肥前系と考えられる。

SK1031 195は瓦質土器火鉢 類である。粘土板を貼り合わせて成形する。底部外面の四隅には「L」字形の脚を貼り付ける。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。

SK1035 196・197は肥前系白磁の紅皿である。19世紀前半代に比定される。198は土製の面子である。型作り成形で上面に型押しで施文する。

SK1036 199は口ク口成形の土師器皿である。内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉の灯明皿である。

SK1037 200は丹波焼甕 - 3 - b類である。口縁部は「T」字形を呈する。内面は全面に灰釉を施釉し、外面は鉄釉を施釉した後、灰釉を柄杓掛けする。底部内面に砂目跡が5箇所見られる。

SK1047 201は非口ク口成形の土師器皿である。内外面ともヨコナデ調整を施し、体部～底部外面に指頭圧痕が残る。720は京焼系陶器の壺蓋である。鉄釉と白泥で草花文を施文の後、透明釉を施釉する。

SK1048 721は京焼系陶器の杯である。内外面とも白濁釉施釉の後、赤・黄・緑釉で菊花文を施文する。

SK1049 722は瀬戸・美濃系染付磁器碗である。19世紀前半以降の時期が考えられる。723は清朝青花写しの碗である。

SK2001 202は土師器焙烙である。型作り成形で平底、体部は僅かに内傾する。播磨型 A2類に分類される。203は土製のミニチュア面である。型作り成形でナデ調整を施す。布袋の面と考えられる。204はミニチュア皿である。型作り成形で内面には型押しで魚鱗文を施文する。724は肥前系染付磁器碗である。外面に一重網目文を施文する。725は肥前系のくらわんか手碗である。外面に雑な筆致で唐草文を

施文する。18世紀後半代に比定される。

SK2002 726は瀬戸・美濃系の染付磁器碗である。外面に漢詩を描く。19世紀前半以降の製品である。

727は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代に比定される。

SX1012 205～216は土師器皿である。205～207・209～213は口ク口成形である。208・214～216は非口ク口成形である。205～209は無釉で、210～213は内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉の灯明皿である。217～221は土師器焙烙である。217・218は播磨型 C類、219・220は播磨型 B類、221は焙烙型 類にそれぞれ分類される。

222は堺産播鉢 A類である。体部内面には10条1単位の播目を施文する。色調は赤褐色を呈する。223は丹波焼の片口鉢である。内面全面に灰釉を施釉し、外面は露胎である。224は肥前系唐津の緑釉陶器碗である。17世紀後半～18世紀前半代に比定される。225は同じく肥前系の朝鮮唐津碗である。17世紀前半代に比定される。226は京焼系陶器碗である。

227は無釉陶器（素焼き）の急須である。器壁は全体に比較的薄い。京焼系の煎茶器と考えられる。228は肥前系波佐見産の粗製の白磁で18世紀前半に比定される。229は肥前系の白磁紅皿である。19世紀前半代の所産である。230は土鍾である。焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。728～730は施釉陶器碗である。728・729は京焼系陶器と考えられる。17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

730は瀬戸・美濃系碗である。19世紀前半代に比定される。731は肥前系刷毛目唐津鉢である。17世紀後半～18世紀前半代に比定される。732は施釉陶器鉢である。内外面とも灰釉施釉の後、刷毛で白濁釉を横方向に施釉する。733は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。733～750は肥前系染付磁器碗である。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で、外面にコンニャク印判で施文するもの（733～736・747）と手描きで雪輪文などの草花文を描くもの（737～746・748～750）に分類される。前者は18世紀前半代、後者は18世紀後半代にそれぞれ比定される。751～753は肥前系の半球形碗で、751は外面に草花文を、752は外面に氷裂文と菊花文を、753は窓絵に草花文・山水紋・波頭文をそれぞれ描く。19世紀前半代に比定される。

754は外面に線描きの松葉文を描く。755は草花文を描き、肥前系と考えられる。756は蕎麦猪口である。757は肥前系波佐見産の小碗である。外面に雨降り文を描く。18世紀代の製品である。758は蓋である。外面に草花文・細かい格子目文を描く。759～761は肥前系波佐見産のくらわんか手の皿である。759は内面に墨弾きで草花文を描く。いずれも18世紀後半代に比定される。762は肥前系皿である。底部内面は蛇の目状に釉ハギする。19世紀前半代に比定される。763は内面に紅葉を施文する皿で、外面は唐草文を描く。肥前系と考えられる。764は外面に草花文を描く肥前系鉢である。18世紀代に比定される。SX1013 231は土師器焙烙である。型作り成形で平底、体部は内彎気味に外上方に延びる。焼成は良好で色調はにぶい橙色を呈する。播磨型 D類に分類される。232は肥前系唐津の皿である。内外面とも灰釉を施釉する。17世紀前半代に比定される。233は唐津碗である。内外面とも灰釉を施釉する。17世紀前半代の製品である。765は肥前系染付磁器碗である。19世紀前半代の製品である。

SX1014 234は備前焼皿である。型作り成形で口縁部は輪花状に成形する。235は蓋である。外面に灰釉を施釉する。236は蓋である。京焼系と考えられる。766は瀬戸・美濃系の染付磁器碗である。近代以降の製品と考えられる。767は香炉で、内面は露胎である。肥前系と考えられる。

SX2001 237は丹波焼鉢である。238は肥前系の唐津碗である。17世紀前半代に比定される。

SX2002 239は非口ク口成形の土師器皿である。240は丹波焼播鉢 A類である。768は肥前系碗である。

外面に一重網目文と水草を描く。18世紀代に比定される。769は肥前系初期伊万里の皿で、内面に草花文を施文する。17世紀前半代に比定される。

SD1004 241・242・244～247はいずれも非ロク口成形、243・248はロク口成形の土師器皿である。249～253は土師器焙烙である。249・251は播磨型 B類、250は播磨型 A2類、252・253は播磨型 C類に分類される。

254は瓦質土器火鉢 B2類である。255は瓦質土器で灯火具と考えられる。脚は高く上位に長方形の透かしを入れる。皿部の平面形状は楕円形で底部内面に×印状の粘土紐を貼り付ける。256は丹波焼播鉢 A2類である。体部内面にへら描きの播目を施文する。16世紀後葉～17世紀中頃の製品である。257は堺産播鉢 A類である。体部内面には9条1単位の播目を施文する。

258・259は丹波焼の火入れである。いずれも同タイプで、口縁部には多数の打ち欠き痕をもつ。260は備前焼鶯口壺である。16世紀代に比定される。261は丹波焼甕類である。16世紀後半～17世紀前半代の製品である。262は肥前系唐津椀である。17世紀前半代に比定される。263は内外面とも緑釉を施釉する。総織部椀あるいは復興織部の椀と考えられる。264は京焼系陶器椀である。265・266は肥前系唐津皿である。いずれも17世紀前半代に比定される。266は緑釉皿で17世紀後半～18世紀前半代の製品である。267は唐津焼の向付である。底部内面に低い段をもつ。17世紀前半代の製品である。268は京焼系陶器蓋である。269・270は白磁碗である。肥前系と考えられる。271は土製のミニチュア竈である。型作り成形で上部と下部を貼り合わせて成形する。272は土製の人形である。型作り成形で正面と背面を中央で貼り合わせる。色調はにぶい褐色を呈する。770は堺産播鉢 A類である。体部内面には11条1単位の櫛描きの播目を施文する。片口上面に「びぜん」銘をスタンプする。18世紀前半～中頃に比定される。771は施釉陶器播鉢である。口縁部内外面に鉄釉を施釉する。肥前系播鉢と考えられる。772は刷毛目唐津鉢である。17世紀後半～18世紀前半代に比定される。773は染付青磁碗である。肥前系で18世紀代に比定される。774～783・785～787は肥前系染付磁器碗である。774・777～781は波佐見産のくらわんか手で、コンチャク印判で紅葉文などを施文するもの(774・781)と手描きの雪輪文などを施文するもの(777・779・780)がある。前者は18世紀前半代、後者は18世紀後半代にそれぞれ比定される。776・778は割筆で二重網目文を施文するもので18世紀代に比定される。775は外面に山水文を描くもので18世紀代の製品である。782は広東碗で18世紀後半～19世紀前半代に比定される。783は半球形碗で19世紀前半代の時期が考えられる。786は外面に一重網目文を施し、18世紀代に比定される。787は外面に半截菊花文を施文するもので、17世紀前半代に比定される。784は外面に牡丹唐草文を描く。

785は外面に丸に桜文を施すもので、近代以降の時期が考えられる。いずれも産地は不明である。788は肥前系の杯である。外面に簡易な草花文を描く。肥前系波佐見産のくらわんか手で、18世紀後半代に位置づけられる。789～794は肥前系の染付磁器皿である。789～791は初期伊万里である。いずれも畳付に砂が附着する。789は内面に松葉文を、790は草花文を、791は月に柳文をそれぞれ描く。また、791は口縁部を輪花状に成形する。いずれも17世紀前半代に比定される。792～794はいずれも波佐見産の皿で底部内面は蛇の目状に釉ハギする。792は18世紀前半に、793・794は18世紀後半にそれぞれ比定される。SD1028・SD1004 273は肥前系唐津皿である。17世紀前半代に比定される。

SX2002・SD1004 274は京焼系陶器椀である。内外面とも透明釉を施釉し淡黄色に発色する。

SX1012・SD1004 275・276は土師器焙烙である。275は型作り成形でやや丸底気味に成形し、体部は直立する。播磨型 A2類に分類される。276は器壁が比較的厚く、体部は直立する。播磨型 B類に分

類される。277は堺産播鉢 A類である。体部内面に11条1単位の櫛描きの播目を施文する。278は備前焼徳利である。体部内面の上半部にしぼり目が見られる。279は丹波焼鉢である。280は丹波焼火入れである。

SX1013・SD1004 281は丹波焼播鉢 B3類である。体部内面に7条1単位の櫛描きの播目を施文する。17世紀中頃～18世紀前半代に比定される。

SD2001 795は内面に草花文を施文する。高台裏にト巾が残り、畳付には砂が附着する。初期伊万里と考えられ17世紀前半代に比定される。

SP1013 796は肥前系波佐見産のくらわんか手の皿である。18世紀後半代に比定される。

SP1016 797は肥前系染付磁器皿である。口縁部～体部にかけて型打ちで花弁状に成形する。19世紀前半代に比定される。

SP1023 798は瀬戸・美濃系染付磁器碗蓋である。外面に草花文を描き、内面は太い界線と草花文を描く。

攪乱坑 282は土製の人形である。型作り成形で前面と背面を中央で貼り合わせる。810はミニチュアの壺蓋である。外面は緑・黄釉を施釉する。811は徳利である。白泥を横方向にハケ塗りした後、透明釉を施釉する。812は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。813は肥前系の染付磁器碗である。外面に雨降り文を施文する。814は染付磁器蓋である。外面に同心円を施文する。815は染付磁器皿である。内面に草花文、雷文帯を施文する。

包含層 283・284は非ロクロ成形の土師器皿である。285は施釉陶器の乗燭である。平底で底部外面に1ヶ所穿孔する。内外面とも鉄釉を施し、底部外面は露胎である。286は瓦質土器火鉢 A1類である。体部外面に型押しで細かい刺突文を施文する。287は瓦質土器風炉片である。型作り成形で、体部に透かしが入る。外面に型押しで青海波文を施文する。色調は灰色を呈する。288は丹波焼甕 - 2 - b類である。口縁部は断面T字状を呈する。内面に灰釉を施釉し、外面は鉄釉施釉の後、灰釉を柄杓掛けする。799は京焼系施釉陶器蓋である。外面にトビガンナで施文する。800は外面に一重網目文を描く肥前系染付磁器碗である。17世紀代に比定される。801～804は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。コンニャク印判で桐文(801)、菊花文(802)、紅葉文(804)を描くものと、手描きで草花文を描くもの(803)とがある。801・802・804は18世紀前半代に、803は18世紀後半代にそれぞれ比定される。805は肥前系染付磁器杯である。底部内面にコンニャク印判で五弁花文を描く。806・807は肥前系染付磁器皿である。806は波佐見産のくらわんか手で18世紀後半代に比定される。807は外面に菊花文を施文するもので、19世紀前半以降の時期が考えられる。808・809は肥前系の仏具碗である。808は半截菊花文を、809は雨降り文をそれぞれ描く。いずれも18世紀代の製品と考えられる。

区

SK1024 (SX1024) 289は土製の釣鐘形である。型作り成形で中空である。290は備前焼壺である。底部外面にヘラ描きで「吉」字を施文する。816は肥前系染付青磁碗である。18世紀代に比定される。817は瀬戸・美濃系染付磁器碗である。19世紀前半以降の製品である。

SK1038 291は丹波焼播鉢 A1類である。体部内面にヘラ描きの播目を施文する。16世紀後半～17世紀前葉に比定される。292は丹波焼播鉢 A1類である。体部内面にヘラ描きの播目を施文する。焼成は堅緻で色調は橙色を呈する。16世紀後半～17世紀前葉に比定される。293は陶胎染付皿で体部外面に界線を2条施文する。294は白磁皿である。口縁部は水平に外方にひらく。

SK1044 295～298はミニチュア陶器である。295・296は皿である。型作り成形で平面形状は八角形を呈する。内面は白釉施釉の後、鉄絵で松葉文を施文し、僅かに緑釉を加える。外面は露胎である。297は高杯である。型作り成形で平面形状は六角形で脚は円形を呈する。298は急須である。型作り成形で体部に注口と把手を貼り付ける。

SK1061 299は非ロク口成形の土師器皿である。色調はにぶい黄橙色を呈する。

SK1064 300は土製の笛の破片である。吹き口と頂部は欠損する。外面は透明釉を施釉の後、点的に緑釉を施釉する。

SK1066 301は土師器火鉢である。型作り成形で平面形状は方形もしくは長方形である。302は丹波焼の鉢である。内面に灰釉を施釉し、外面は露胎である。303は堺産播鉢 A類である。体部内面に10条1単位の櫛描きの播目を施文する。304は染付磁器碗の底部である。釉ハギした部分に煤が全面に附着しており、灯明皿に転用されたものと考えられる。818は肥前系染付青磁碗である。18世紀代の製品である。819は肥前系波佐見産のくらわんか手碗、820は同じく皿である。いずれも18世紀後半代に比定される。

SK1067 305は円筒埴輪片である。外面に箍が1条巡る。器面の摩滅が著しい。306は土製の人形である。天神像と考えられる。821は施釉陶器碗である。内外面とも灰釉施釉の後、外面の中位に横縞状に鉄釉を施釉する。19世紀前半以降の製品である。

SK1068 822はクローム青磁碗である。青磁釉施釉の後、白・茶・緑釉で植物文を施文する。近代以降の製品である。

SK1069 823は京焼系施釉陶器土瓶である。外面の体部上半に白濁釉施釉の後、丸に「花野峰」を鉄釉で施釉する。824は染付磁器鉢である。外面に銅版転写で扇・梅花・蓮弁文などを施文する。近代以降の製品である。

SK1071 307は丹波焼甕 - 3 - a類である。内外面とも鉄釉を施釉し、底部内面に砂目跡が4箇所残る。焼成は堅緻で色調は茶褐色を呈する。

SK1073 308は非ロク口成形の土師器皿である。309は美濃焼志野碗である。内外面とも長石釉を施釉し、黄色味を帯びた灰白色に発色する。17世紀前半代に比定される。825は肥前系染付磁器碗である。

SK1077 310は丹波焼植木鉢である。外面に赤土部を塗布する。311は土製の焔炉の分炎盤であるさなである。826は三田青磁急須である。19世紀前半代に比定される。828は瀬戸・美濃系染付磁器端反碗である。19世紀前半代に比定される。829は肥前系染付磁器杯である。19世紀前半代に比定される。830は碗蓋である。外面に線描きの鳥に藤文を描く。肥前系と考えられる。

SK1077・SX2077 312は京・信楽系の灯明皿である。19世紀前半代に比定される。

SK1083 313は備前焼の急須である。煎茶器と考えられる。

SK1085 314は肥前系唐津の皿である。底部内面に砂目跡が4カ所残る。

SK1089 315は肥前系陶胎染付碗である。316は肥前系京焼風陶器の碗もしくは皿の底部片である。高台裏に「木下弥」銘をスタンプする。17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

SK1096 317は匣鉢と考えられる。焼成は堅緻で色調は褐色を呈する。

SK2077 318はロク口成形の土師器皿である。内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉の灯明皿である。

319は丹波焼と考えられる尿瓶である。

SX2007・SK2077 320は堺産播鉢 B類である。底部内面にはウールマーク状の播目を櫛描きで施文す

る。

SX2098 321は土製の飾り板である。型作り成形で背面は扁平である。

SX2101 831は肥前系染付磁器碗である。外面に雨降り文を描く。19世紀前半代の製品である。

SX2102 322は丹波焼甗 - 2 - a類である。内外面とも土部を塗布し、色調は灰褐色を呈する。17世紀代の製品と考えられる。

SX1023 832は肥前系染付青磁碗である。底部内面に五弁花文を施文する。18世紀代に比定される。833は肥前系染付磁器の仏具碗である。

SX1024 323は丹波焼甗 - 2 - b類である。体部は内彎し、口縁部断面はT字形を呈する。

SX1026 324は土製の力士像である。型作り成形で色調は灰褐色を呈する。325は同じく型作り成形の土製の猿像である。

SX1028 326は用途不明の土製品である。型作り成形で底部外面に「」銘をスタンプする。833は肥前系染付磁器の仏具碗である。834はミニチュア皿である。内面に型押しで施文し、緑釉を施釉する。835はミニチュア碗である。834・835はいずれも玩具と考えられる。

SX1029 836は肥前系染付青磁碗蓋である。18世紀代に比定される。

SX1038 327は丹波焼鉢である。328は京焼系の施釉陶器鉢である。329は丹波焼甗 - 2 - a類である。17世紀代に比定される。837は肥前系染付磁器の仏具碗である。波佐見産のくらわんか手で18世紀代に比定される。838は京焼系施釉陶器碗である。839は肥前系染付磁器碗である。18世紀代に比定される。

SX1039 330は瓦質土器火鉢 B 2類である。

SX1040 331・332は瓦質土器火消し壺と蓋 B類である。

SX1047 (SX1055) 333は土師器の火消し壺 B類である。

SX1048 334は土師器の火消し壺 A類である。

SX1049 335は瓦質土器の火消し壺 B類である。

SX1050 336は土師器の火消し壺 B類である。

SX1051 337～340は土師器の火消し壺である。338は A類、その他はいずれも同タイプで、 B類に分類される。341～343は土師器火消し壺の蓋である。343は A類、341・342は B類に分類される。かぶせ蓋で器壁は比較的厚い。840・841は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。840は18世紀後半、841は18世紀前半代にそれぞれ比定される。842は染付磁器碗である。

SX1051・2078 344は338と同タイプの土師器火消し壺 A類である。

SX1052 345・346はいずれも非ロク口成形の土師器皿である。347は343と同タイプの土師器火消し壺の蓋 A類である。348は土師器火消し壺 A類の下半部である。

SX1056 349は土師器の火消し壺 B類である。

SX1057 350は瀬戸・美濃系灰釉陶器の菊皿である。16世紀後半代に比定される。

SX1058 351・352は丹波焼甗 - 2 - b類である。いずれも17世紀代に比定される。

SX1060 353は瓦質土器の火消し壺 B類である。354は瓦質土器の火消し壺蓋 B類である。

SX1061 355は丹波焼の壺蓋である。356の蓋と考えられる。356は丹波焼壺である。

SX1077 357・358は非ロク口成形の土師器皿である。358は底部内面に「薬師如来」、底部外面に「開」の墨書が見られる。359は土師器焙烙播磨型 A2類である。型作り成形で体部は僅かに内傾する。843は瀬戸・美濃系陶器腰鍔茶碗である。19世紀前半代に比定される。844は肥前系波佐見産のくらわんか

手碗である。18世紀後半代に比定される。

SX2066 845は肥前系初期伊万里皿である。17世紀前半代の時期が考えられる。

SX2068 360は丹波焼徳利である。体部外面にヘラ描きで「河内 仁条」の銘を施文する。

SX2073 361は土師器の火消し壺蓋 類である。

SX2073・2065 362は土師器火消し壺 類である。

SX2077 363は京焼系施釉陶器鉢である。846は京焼系陶器の壺蓋である。847は肥前系波佐見産のくらわんか手皿である。18世紀後半代に比定される。

SX2079 848は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代の製品である。

SD1004 364は非ロク口成形の土師器皿である。365は土師器焙烙播磨型 D類である。型作り成形で平底、体部はやや内傾する。366は土製の亀形である。型作り成形で頭部は別型で作り、後から貼り付ける。亀形水滴の蓋とも考えられる。367は土製人形である。型作り成形の袷を着けて正座する人物像である。849は肥前系染付磁器碗である。19世紀前半代に比定される。

SD1021 368は土師器焙烙播磨型 B類である。型作り成形で丸底である。850は肥前系染付磁器杯である。外面に梅・松・菊花文を描く。19世紀前半代に比定される。

包含層 369は非ロク口成形の土師器皿である。370は土師器焙烙播磨型 C類である。型作り成形で平底である。371は土師器の火鉢である。型作り成形で、平面形状は方形または長方形を呈する。372も371同様の土師器の角形の火鉢である。373・374は土師器火消し壺 A類である。375～377は土師器火消し壺の底部及び蓋である。378は丹波焼播鉢 類である。体部内面に6条1単位の櫛描きの播目を密に施文する。近代以降の製品と考えられる。379は無釉陶器の鉢である。堺・明石産の可能性が高い。380は丹波焼甕 - 3 - a類である。口縁部はT字状を呈する。19世紀代に比定される。381は無釉陶器皿である。焼成は良好で色調は灰黄色を呈する。382は土製のミニチュア提灯形である。851は肥前系染付磁器碗である。外面に墨弾きで梅花文を施文する。19世紀前半代に比定される。852は肥前系波佐見産の粗製の染付磁器皿である。18世紀前半代に比定される。853・854は肥前系波佐見産のくらわんか手皿である。18世紀後半代に比定される。855は色絵磁器の重ね鉢である。

攪乱坑 383は非ロク口成形の土師器皿である。384は土師器焙烙の焙烙型 類である。型作り成形で丸底、器壁は全体に薄い。385・386は土師器の火消し壺 B類(385)、A類(386)である。387は土師器火消し壺の蓋 B類である。388は明石産播鉢 A類である。体部内面に9条1単位の櫛描きの播目を施文する。389は施釉陶器花立てである。丹波焼の可能性が高い。390は丹波焼壺である。391・392は京焼系施釉陶器鍋である。393は白釉を施釉する尊形の花瓶である。856は瀬戸・美濃系の鎧茶碗である。19世紀前半代の製品である。857は肥前系染付磁器皿である。19世紀前半代の製品である。858は皿である。近代以降の製品である。859は肥前系波佐見産のくらわんか手鉢である。18世紀後半代の製品である。860は染付磁器火舎香炉である。肥前系と考えられる。

区

SK1007 394・395は非ロク口成形の土師器皿である。396は土師器鉢である。397・398は丹波焼播鉢中世 B3類である。体部内面にはヘラ描きの播目を施文する。いずれも16世紀後半代に比定される。

399・400は備前焼播鉢である。いずれも備前焼 期相当で16世紀後半代に比定される。401は丹波焼甕 類である。16世紀後半代に比定される。

SK1009 403は非ロク口成形の土師器皿である。

SK1045 404は非口口成形の土師器皿である。861は染付磁器皿である。

SX1001 405～418は口口成形で内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉の灯明皿である。415～418は底部内面に断面三角形の低い凸帯が巡る。いずれも19世紀前半代に比定される。419は明石産播鉢 B 2類である。体部内面には9条1単位の櫛描きの播目が施される。18世紀代末～19世紀前葉に比定される。420は丹波焼徳利である。18世紀代に比定される。421・422は京焼系施釉陶器椀である。内外面とも灰釉を施釉し、浅黄色に発色する。422は京・信楽系の小杉椀である。体部外面に鉄釉で木の葉文を描く。19世紀前半代に比定される。423は施釉陶器蓋である。京焼系陶器と考えられる。424は施釉陶器鉢である。瀬戸・美濃系と考えられる。425は京・信楽系の灯明皿である。862・863は施釉陶器椀である。いずれも近代以降の製品と考えられる。864は京焼系陶器の蓋である。865は施釉陶器の鉢である。丹波焼の建水の可能性が考えられる。866は京焼系の土瓶である。867は三田青磁鉢である。19世紀前半代に比定される。

868は瀬戸・美濃系染付磁器端反碗である。19世紀前半以降の時期が考えられる。869は赤絵磁器広東碗である。肥前系と考えられる。

SD1004 426は土師器焙烙播磨型 D類である。型作り成形で平底、体部は直立する。

SD2002 427は無釉陶器蓋である。備前焼と考えられる。

平成15年度調査区

区 428は肥前系唐津椀である。17世紀前半代に比定される。429は土師器火消し壺の蓋である。430は明石産播鉢 B 2類である。体部内面に11条1単位の櫛描きの播目を施文する。431は洋酒瓶を模倣した変形の徳利と考えられる。焼成は堅緻で重量は極めて重い。432は京焼系の土瓶である。

433は丹波焼甕 - 3 - b類である。口縁部はT字状を呈する。434は信楽焼壺である。底部外面に「信楽谷 製」のスタンプが見られる。近代以降の製品と考えられる。

870は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代に比定される。871は京焼系陶器の壺蓋である。872は美濃系の灰釉陶器鉢と考えられる。19世紀前半以降の製品である。873は三田青磁鉢の底部片である。19世紀前半代に比定される。874は青磁碗である。近世末～近代の製品と考えられる。

875は肥前系染付青磁の碗蓋である。18世紀代に比定される。876・877は染付磁器碗である。876は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代に比定される。877は内外面とも細かい幾何学文をプリントする。近代～現代の製品と考えられる。878は碗蓋である。879は合子蓋である。外面に扇・巻物などをプリントする。近代～現代の製品と考えられる。880～884は染付磁器皿である。880は18世紀代に比定される。881は肥前系波佐見産のくらわんか手皿である。18世紀後半代の製品である。882は、内面に笹葉文と二重格子目文を描く。883は内面に銅版転写で細かい楕円形を放射状に描く。近代以降の製品である。884は内面に雷文帯、放射状文、壽字文を描く。近代～現代の製品と考えられる。885は清朝青花写しの碗で、外面に草花文、内面に墨弾きで雲文などを描く。886はミルクポットで現代の製品と考えられる。

区 435は丹波焼の植木鉢である。436～439は播鉢である。436は明石産播鉢 A類、437は堺産播鉢 B類、438は丹波焼播鉢 B類、439は堺産播鉢 C類に分類される。440・441は施釉陶器鉢である。442は丹波焼甕 類である。近代以降の製品と考えられる。443は京焼系鍋である。19世紀前半代に比定される。444はいわゆるピラカケ椀である。445は丹波焼徳利である。体部外面に白泥のイチチン掛けで

「天神？」を施文し、背面は山形を施文する。いわゆる貧乏徳利である。446～448は御神酒徳利である。外面に緑釉を施釉する。447・448は梅瓶形を呈する。449はインク瓶である。体部外面に「TOKYO CH ANPION INK」銘をスタンプする。近代以降の製品である。450は施釉陶器の花瓶である。近代以降の丹波焼と考えられる。451は乗燭である。内外面とも鉄釉を施釉する。452は土製のミニチュアの打出の小槌である。外面に型押しで寶尽くし、隠れ蓑、唐草文などを施文する。887は合子の蓋と考えられる。888は施釉陶器蓋である。近代～現代の製品である。889は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀前半代の製品である。890は肥前系染付磁器碗で、18世紀代に比定される。891は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。18世紀後半代に比定される。892は肥前系の広東碗である。19世紀前半代の製品である。893・894は染付磁器碗である。19世紀前半～近代の製品と考えられる。895は湯呑み碗である。近代以降の製品である。896～899は染付磁器皿である。896は肥前系波佐見産のくらわんか手皿である。18世紀後半代に比定される。897は肥前系で19世紀前半代に比定される。898は口縁部～体部内外面を型押しで花卉状に成形する。899は内面に巴文を施文する。近代以降の製品と考えられる。

900は碗である。901は御神酒徳利である。肥前系で18世紀代に比定される。902は徳利である。近代以降の製品である。903は色絵磁器碗である。近代以降の製品である。

区 453は非ロク口成形の土師器皿である。454は土師器焼塩壺である。体部外面に「泉州麻生」銘をスタンプする。455・457は備前焼甕の口縁部片である。備前焼 期相当で16世紀代に比定される。456は土師器焼塩壺の蓋である。泉州堺産と考えられる。904は肥前系染付磁器碗である。18世紀代の製品である。905は肥前系染付青磁碗である。18世紀代に比定される。906・909は肥前系の広東碗である。19世紀前半代に比定される。907は杯である。近代以降の製品である。908・910は蓋である。908は壺蓋で外面にコンニャク印判で紅葉を施文する。肥前系で18世紀代に比定される。910は碗蓋で、細かい草花文を全面に施文する。911は水滴である。型作りの京焼風磁器である。

区 458はロク口成形の土師器皿である。内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉の灯明皿で19世紀前半代に比定される。912～914は染付磁器碗である。912は肥前系で外面に一重網目文と魚文を描く。17世紀代に比定される。913は雑な筆致で外面に半截菊花文・稲束文などを描く。914は清朝青花写しの碗である。915は染付磁器皿である。瀬戸・美濃系と考えられ、19世紀前半以降の時期が考えられる。

表採遺物 459は堺産播鉢 C類である。体部内面に9条1単位の櫛描きの播目を施文する。460は瓶蓋である。近代以降の丹波焼と考えられる。916は肥前系染付磁器杯である。19世紀前半代に比定される。917は碗蓋である。918は皿である。近代～現代の製品である。

第2節 瓦

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧瓦・鬼瓦と棟瓦が出土している。井戸が多く検出されているにも関わらず、井戸に使用される平瓦（塼瓦）は出土していない。

軒丸瓦

図化した点数は47点であるが、出土点数は200点を越えている。文様は巴文と卍文の2種だけである。珠文の数を中心に文様構成などで分類した。

巴文は他遺跡同様ほとんどが逆時計回りであるが、1点（T53）だけ時計回りである。珠文のないものをA、圈（界）線を有するものをC、それ以外の通有のものをBとした。それを珠文の数と巴の形状で小分類した。T84は砥石転用された例で全面に使用痕が認められる。

巴文A 珠文がなく、巴体部の厚みがあり、尾が長い。面径15.2cm通常である。文様からは古相を示している。(T42・49)

巴文B 珠文を持ち、圏線のないもので、珠文の数によって小分類した。巴の幅の厚さなどでさらに細分可能である。

- 1 珠文が12個
- 2 珠文が13個
- 3 珠文が15個
- 4 珠文が16個
- 5 珠文が26個

巴文C 珠文を持ち、巴文と珠文の間に圏線を有するもので、さらに2つに小区分する。珠文はすべて16個である。

- 1 巴体部の幅が太いもの。(T81)
- 2 巴体部の幅が細いもの。(T11・12・13・58)

卍文A 大形のもの(面径20cm)で周囲に唐草文が巡らされている。卍文の周囲に圏線がある。(T14・85)

卍文B 小形のもので、周縁の内側に1条の圏線がある。文字は裏字になり斜めになっている。(T86・87)

小形軒丸瓦

卍文(T89)と菊花文がある。垂先瓦の大きさであるが、時代的には棟込瓦と考える方が妥当であろうか。特に小形の菊花文は棟内に入れる菊丸と呼ばれるものであろう。出土地点が269次調査に限られていることは寺院に使用されたことを示し、そのことから棟込瓦と考えられる。菊花文には八葉(T90・91)と十二葉(T92)がある。菊丸と呼ばれる小形品(T52・93~95)はすべて八葉である。T52だけ少し大きい。

軒平瓦

図化したものは23点であるが、出土点数は100点を越えている。軒棧瓦も含まれている。大きく3つに分類した。唐草文と水波文で、さらに文様の違いから小分類可能である。

唐草文A 左右の周縁幅が狭いもの(文様帯が広い)もの。(T15・70)

唐草文B 左右の周縁幅が広いもの(文様帯が狭い)もの。主に中心飾りから7つに小区分した。

さらに唐草文の太い細いで細分可能である。

- 1 中心飾り全体が蕾状の丸いもの(T18)
- 2 中心飾りは丸く2つに分かれる(T98・99)
- 3 中心飾りは丸く3つに分かれる(T26・96・97)
- 4 中心飾りは尖り3つに分かれる(T35・36・40)
- 5 中心飾りは余り意識されず丸い(T39・66・100)
- 6 中心飾りと両側の二葉が一体となる(T17・19)
- 7 中心飾りがない(T21)

水波文 1点だけ出土している。棧瓦である。(T2) 軒部の幅は26.9cmで中央13.2cmに文様帯としてある。左右の周縁の幅は同じでなく、左側の方が広い。砂粒多く、灰白を呈する。

軒平瓦の中心飾りは明石城跡出土例では徐々に丸くなっていくとされているので、伊丹郷町でも同様の流れを持つとすれば、唐草文B 4以外は19世紀代になるのではないかと思われる。

丸瓦

出土点数は多いが図化したものは7点である。完形のもを主に図化した。T 101は上面中央に「大瓦藤」のスタンプが施されている。長さ22.75cm、幅15.1cmで端面はヘラで面取りしている。内面は削りである。T 1はほぼ完形で長さ21.2cm、幅11.5cmで、内面は布目が残リナデで仕上げている。端面はヘラで面取りをしている。釘孔はないものと1孔・2孔のものがある。

平瓦

出土点数は極めて少ないわけではないが、すでに棧瓦が主体となっていることは確実である。図化したものはT 25の1点だけである。縦横比が0.92と正方形に近く、新しい要素であることを示している。平面形は台形で前面25.3cm、後面23.6cmで長さ27.25cmである。色調は灰で、型作りでナデ調整。

棧瓦

7点図化している。1ヶ所もしくは対面する2ヶ所のコーナーを方形に切り込んでいる。完形品は出土していないが、ほぼ完形のT 73で長さ27.05cmで、幅も復原すると近い数値となる正方形である。型押しで凹面はナデている。

鬼瓦

T 102を図化している。鼻・口から下半を欠いている。頭髪は巻き毛をヘラによる丁寧な刺突で表現している。角は内彎し丁寧にヘラミガキを施している。左目は1回できれいに開けるが、右目は2回彫り直している。眉は貼り付けている。

鳥衾瓦

卍文のもの（T 64・88）と無文のもの（T 104）がある。卍文のT 88は軒丸瓦と同一の文様で、界線の外に唐草文がある。T 64は界線だけで文字が裏字で斜めに配置されていることも軒丸瓦と特徴が類似している。無文のT 104は大きく反っている。

棟瓦

棟を構成する道具瓦と棟上を装飾する飾り瓦がある。菊丸と呼称される小形の軒丸瓦も本来はここで扱うべき瓦であろう。T 56は長さ17.4cm、幅8.65cm、厚さ1.7cmの長方形で暗灰～灰白色を呈する熨斗瓦で、T 57はT 56を2枚直角に接合したような棟瓦である。T 63も一見すると棟瓦と酷似するが、脆弱であることから火鉢類の脚かと思われる。T 31・54・55は伏間瓦や紐丸瓦とされるものである。紐丸瓦の存在から大形の建物が想定され、寺院建築の瓦と考えられる。T 16・37は飾り瓦でいずれも鳩である。T 16はほぼ完形で顔以外にも羽などリアルに表現している。中空で、高さ13.15cm、長さ21.05cmを測る。T 65は丸瓦の前部分を斜めに切り落としたもので、コーナー部や接合部に利用される瓦である。釘孔があり、面取りしている。内面は布目が残る。

第3節 石製品

(1) 石造物

(一石五輪塔)

S 1は風空輪で火輪の上部で割れている。風輪も一部を欠いている。宝珠の先は極端に尖らず空輪は高いが余り丸くない。六甲花崗岩。

S 2は風空輪で火輪の上部で割れている。空輪の宝珠先端を欠いている。断面は円形に近い丸みのある形状であり、部材の間も深く彫り込んでいる。残存長15.75cmで、風輪の幅14.1cm、空輪の幅12.7cmを測る。風空輪の幅に変化がある。六甲花崗岩。

S 3は地輪を欠いている。水輪は扁平で丸みが少ない。断面は隅円方形で、幅は15.8cmで高さは7.5cmである。火輪も幅はほぼ同じで高さは9cmである。軒は3.8cmと厚めである。風空輪が小さくなっているのが特徴である。断面も円形になっている。風輪は長めで尖らせている。残存長は28.6cmで六甲花崗岩。

S 4は地輪を欠いている。残存高30.8cmで最大幅16.55cmを測る。水輪は丸みを持たそうとしているが、9.9cmと低い。火輪は水輪と同じ幅で、高さはほぼ同じ9.5cmである。軒は中央で3cm、隅部で5cmになっている。輪階かに反っている。風輪は高さ3.8cmと低いが空輪への彫りこみは深く断面も円に近い。空輪は幅11.5cmで高さ7.5cmとなる。宝珠は尖っており、断面は完全に丸く仕上げている。六甲花崗岩。

S 5は水・火輪と風輪の一部が残っている。水輪は断面隅円方形で丸みを持たせようとしている。幅は火輪とほぼ同じであるが、大きく繰り込むことによって火輪を大きく見せている。高さは水輪が11.5cm、火輪が10cm、風輪が5.5cmである。上下の残部があるので、残存高は27.3cmとなる。火輪の軒は3.5cmと低く、隅部は4.5cmに上がっていく。風輪は幅11.5cm前後と狭めている。六甲花崗岩。

S 6は水輪・火輪部の破片で上下とも割れている。僅かに扁平になった用石法である。水輪で幅15.2cm、奥行12.85cmとなり、丸みを持たせようとしているが顕著ではない。火輪の軒は高めで3cm近く、降り棟にしている。六甲花崗岩。

S 7は水輪・火輪部の破片で上下とも割れている。水輪は最大幅14.3cmで上下左右ともに彫り込んで丸くしている。火輪は軒がやや反り高くなっている。上面は残っていない。六甲花崗岩。

S 8は地輪・空輪を欠いている。火輪が幅14.6cmと大きく、水輪はほぼ同じだがやや小さめである。風輪は11cmと幅を狭めている。火輪の軒は直立し降り棟が残っている。水輪の断面は比較的丸くなっている。割れ面が新鮮な面となっていることから、表面の風化が進むような状況に置かれていたようである。最大幅14.6cm、残存長21.35cmを測る。六甲花崗岩。

S 9は残存長30.6cmで風空輪を欠く。地輪は幅14.7cm、高さ12.3cmでやや低い安置式である。水輪はやや上位に最大幅を有する。下側は深く彫り込んでいるが断面は隅円方形で、余り丸くしていない。火輪の軒は中央で3cm、隅部で4.2cmとなり、隅部近くで急激に変化する。六甲花崗岩。

S 10は風空輪を欠く。地輪は幅14.5cm、高さ16cmで底面は粗く整形した安置式のものである。底面が歪で安定感は余りよくない。水輪は14cmと僅かに細くなっているが、ほぼ同じ数値である。隅を削ることで丸くしようとしている。それによって僅かに丸くなっている。高さは6cmと低い。火輪の軒は直立で半円形に段を付けることで軒を表現している。高さ8cmで軒は中央で4cm、端で6cmあり降り棟となっており、軒が高い。六甲花崗岩。

S 11は風空輪を欠いている。定置式であるが地輪の底は不安定である。断面も台形になり、地輪の方がより歪んでいる。幅16.1cmで奥行は広い方で13cm、高さは19cmである。水輪は6.8cmと扁平であるが、断面は丸くしようとしている。火輪も扁平で、高さは水輪と同じ6.8cmである。軒の高さは中央で2.8cm、隅で4.5cmとなり弧状になっている。六甲花崗岩。

S 12は残存長34.85cmを測り風空輪を欠いている。地輪は1辺16.5cmで高さ18cmの安置式である。底面

はある程度平滑にしているが粗加工で止まっている。水輪は高さ8cmで1辺14.9cmの断面隅円方形である。余り丸くならず扁平である。火輪は高さ9cmで幅は14cmと地輪から幅を減じている。二期は中央で3cm、隅部で5cmになっている。隅部近くで上がり棟は半円形となる。六甲花崗岩。

S13も安置式で底は平たくしている。風空輪を欠いている。地輪は幅18.2cm、奥行13.8cm、長さ19.0cmを測る。全体にやや歪である。水輪は隅を削って丸くしようとしているが角張っている。火輪は高さ11.0cmで、軒は中央で4.7cm、隅で6.8cmとやや高い。六甲花崗岩。

S14は風空輪を欠く。地輪の最大幅16.8cm、奥行16.0cm、高さ13.5cmで底面は平たい定置式である。水輪は断面隅円方形で幅は16.8cm、奥行16.0cmを測る。火輪は幅15.2cmとやや細くなり高さ9.5cmとなる。軒は3.5cmと厚めである。隅では6.2cmになる。六甲花崗岩。

S15は宝珠部分を僅かに欠くがほぼ全容のわかるものである。現状の高さ42.6cmを測るが復原すると44cm近くになるろうか。地輪の最大幅は13.5cm、奥行12.3cm、高さ16cmである。4行の銘文が記され、「慶長拾九年 月照宗縁圓 信士靈位 八月十二日」とあり、その上に「地」が彫られている。金泥を施している。底は平坦に加工した定置式である。水輪の最大幅は12.5cm、高さ6.5cmで扁平である。隅は削り丸く仕上げている。火輪も幅は水輪と同じ12.5cm、高さ7.3cmで軒は中央で3cm、隅で4.5cmを測り、隅部の稜線も丁寧に彫り出している。風輪は10cmと幅を減じている。断面は空輪とともに円形に近い。空輪は幅9.5cmとさらに細くなり、高さ9cm余りである。宝珠を明らかに表現している。各部位には梵字でなく、漢字で地水火風空と彫られている。文字はすべてやや右上がりになっている。和泉砂岩。

S16は地輪だけの破片である。底面を平たく加工している安置式である。やや歪であるが、ほぼ方形である。断面形も方形で幅16.75cm、奥行14.5cmで高さ15.8cmである。六甲花崗岩。

S17の地輪は断面が僅かに台形となっている。正面で19cm、右側で18.5cm、裏面で20.4cmとなる。高さ15cmと直方体よりは扁平になっている。底は平坦にしている。加工痕が全面に見られる。水輪は高さ13.2cmで最大幅19.5cmである。地輪端部から水輪下左右ともに2.5cm削りこんでいることから、幅など減じているように見えるが、石材の幅はほとんど同じ値である。上部では幅13cm前後（下部15cm）となり火輪に続く。断面形状は隅円方形であるが、視覚的には円に近く見える。六甲花崗岩。

(五輪塔)

S18は大形の火輪である。最大幅32.15cm、最小幅31.0cmの方形で高さは21.8cmである。上面は1辺13cmで中央に風輪との接合の柄穴を設けている。径8cm余りの不定円形で、深さは2.4cmを測る。軒は隅に向かって反っており、古い要素であろう。軒中央は高さ6.5cm、隅部で8cmである。水輪との接合部には嵌め込みは見られない。六甲花崗岩。

S19は火輪で最大幅20.8cmの方形で高さ13.3cmである。辺によっては中央部分が出ており、隅に向かって狭くなる。隅部は残存していない部分が多く、軒先端はすべて欠けている。軒は厚く6cmぐらいになりそうである。端部から3.5cmの中央部に降り棟となる。上面は8cm四方である。風輪本体との接合のための柄穴は径4cm深さ0.8cmである。下面は僅かに彫り窪めているが明瞭ではない。六甲花崗岩。

S20は水輪で最大幅25.1cm、高さ17.8cmを測る。中位よりやや上に最大径を有し、やや肩が張っている。断面形は円形に仕上げている。地輪との接合部は径9.8cmで中央を僅かに（最大で8mm）凹ませている。火輪との接合部も同様で11cmでさらに4mm程度の窪みを有している。

S21は地輪である。最大幅28.3cm、奥行28.0センチの方形で角は鋭い。高さは18.0cmで上面中央に直

径6cmの円形で深さ1.5cmの擂鉢状の柄穴を設けている。形状から水輪に柄が存在するものである。上面に漆喰状のものが直線に残っており、接合に伴うものであろうか。底は歪である。領家帯花崗岩。

S22は地輪で幅23.3cm、奥行22.8cm、高さ15.0cmでやや扁平である。上面に径6cm、深さ1.8cmの柄穴がある。下面は歪ながら安定している。六甲花崗岩。

(宝篋印塔基礎もしくは五輪塔台座)

S23は1辺26cmで高さ12.75cmの方形台座である。幅は中央部分が広く26.75cmとなる。底面は平滑に整形している。底面は平滑であるがやや傾いている。図上で左側は10cmであるが、右側は12.75cmと高くなっている。ただ、蓮弁の下の界線は水平になっていることから、作成時から左右の高さが変わっていたことになる。隅部と中央に各1葉を設ける8葉の蓮華座である。すべて複弁で隅部を配してからそれに付けるように蓮弁を陽彫している。隅部の方が花卉は豊かである。隅にガクを配置して際立たせようと意図している。上面には1辺16cmの台座を設けている。高さは3～8mmと低い。部分的に段がない箇所もある。六甲花崗岩。

S24は幅29.6cm、奥行29.2cmの方形で高さ10cmである。宝篋印塔基礎にすると薄すぎる気がする。複弁八葉の蓮華座で、隅に各一葉中央に各一葉を彫り出している。隅部の方が肉厚になっている。隅部を先に彫り、それに付けるように各辺中央に施している。5mm程度の低い段を設けて塔を載せる基壇としている。下面はやや割っているのかもしれない。六甲花崗岩。

(臼)

S25は径30.15cmの上臼で上面は28cmになっている。厚さ9.85cmで上面から4.5cm彫り込んでいる。周縁は幅3cm前後で丸みがある。厚みの中位に方形で中になるほど狭くなる方孔が存在する。4.5×3.5cmの隅円方形で深さ3.5cmの回し棒の挿入孔である。下面に接して幅4cmの方形の孔が3.5cmの深さで彫られている。把手の機能となる孔と思われ、残存していない対面にも存在したものであろう。中央横に径5cmの円孔がある。下面は凹面になり、6本か7本の摺り目が彫られているが使用によって磨滅している。中央に3.5×2.5cmの楕円形の貫通していない孔がある。軸木の孔であろう。六甲花崗岩。

S26は上臼の破片である。六甲花崗岩で2次焼成を受けている。厚さ11.5cmの円柱状の材で、幅5cm前後の周縁を残して中央部分を最大で5cm彫り窪めている。ノミで彫ったもので工具痕が明瞭に残っている。底面には摺り目が施されている。7本単位で時計回りに線彫りされている。中央に軸木を挿す柄穴が残っている。復原すると、径28cmになる。側部に孔の一部が残っている。他例から深さを推定した。下に位置していることから、把手ではなく回し棒の挿入孔となるものであろう。

S27は上臼で一部を欠いている。径30cmで厚さ12cmを測る。4cmの周縁を持って中央は3.5cm彫り窪めている。断面はレンズ状で中央が深くなっており、工具痕が残っている。下端から2.5cmのところには穀物を入れる孔がある。上端で径5.5cm、下端で4.5cmの円孔を上下から開けている。中央付近は2.8cmの断面鼓形をしている。下面には摺り目が時計回りであるが単位は固定せず、3本か5本で幅広の線彫りしている。凹面となっており、1cm中央が凹んでいる。六甲花崗岩。

S28は径32cmとやや大きい上臼である。よく使用されたようで摺り面は大きく凹んでいる。摺り目は4～6本で幅広に彫りこんでいるが、使用によって磨滅している。下面中央に2.5×3.3cm、深さ1.7cmの楕円形の軸孔がある。その横に上が6cmと広く、下が3.5cmになっている。上面は幅5cmの周縁を持ち

深さ3.5cm彫り窪めている。両側面に把手孔を設けている。下面に接するように幅・深さともに4cm前後の方形孔である。2次焼成を受けている。六甲花崗岩。

S29は下臼で鉄の軸が残っている。径28cmでほぼ正円である。周囲には工具痕が残されている。側面・上（摺り）面に付着しているものがあり、埋没時か2次的利用がなされていたものと思われる。摺り面には4本単位の摺り目が施される。中央の孔には径3cmの軸棒が残り、孔は中央から下面に向かって裾広がりになっている。下面で加工部分は12cmに及び孔自体は5cmの径になる。下面の加工は粗雑である。高さ10cmで和泉砂岩製。

S30は下臼で摺り面が凸面になり、中央下面から柄穴が穿たれている。下面で6cmを測る三角錘状になる。貫通せず上から1.5cmのところまで止まっている。径28cmに復原され、高さは9.4cmである。時計回りに摺り目が施されている。5本か6本で幅広の線彫りである。S28とセットかと思われる。

S31は径28.8cm、高さ9.3cmの下臼で柄穴は下面中央から穿たれ上面まで貫通している。下面で径8cm、上面で径3.5cmを測る。上面は凸面になり、摺り目は5本か6本である。六甲花崗岩。

(茶臼)

S32は下台の破片である。底面から内側に削り込み凹ませている。内面は内彎するように彫りこむが深さ3.5cmと浅めである。径は42.5cmに復原され、2.5cmの周縁を持つ。高さは9cmを測り、砂岩製で2次焼成を受けている。

(渡辺)

(2) 墨書標石（竜山石製延石）

墓地からは、14本の竜山石製の延石が出土している。うち9本に墨書が存在する。これらの延石は基本的には2本並行に、棺の上面に水平に置かれており、蓋石の状態で検出されている。また、記された墨書には墓の存在を喚起する文面があることから、標石の役目を負っていたこともわかる。以下、墨書標石として、墨書が存在するものを中心に述べる。また、これら標石は墨書を全て下面（棺側）へ向けて埋置されていた。以下釈読が明瞭な部分は太楷書、やや不明瞭な部分は明朝、不明な部分は による空白とした。

標石S33 6号棺において、S36と1対で設置されていた。全長99.75cm・幅19.8cm・厚さ14.65cmを測る。墨書は以下の通り。

「(右行) 此下にひつきあり (左行) うつみたまゑ」。左行の不明部分はS34から推して「あわれみて」が入ると考えられる。

標石S34 2号棺において、S35と1対で設置されていた。全長95.8cm・幅20.2cm・厚さ14.2cmを測る。墨書は以下の通り。

「(右行) 此下にくわんあり (左行) あわれみてうすみたまゑ」。右行「くわんあり」は文字が明瞭ではないが、S35から推して「くわんあり」即ち棺ありと考えられる。

標石S35 2号棺においてS34と1対で設置されていた。全長97.5cm・幅20.2cm・厚さ14.6cmを測る。墨書は以下の通り。

「(右行) 此したにくわんあり (左行) あわれみてうすみたまゑ」。くわんは、棺と考えられる。

標石S36 6号館から出土した。全長81.1cm・幅17.9cm・厚さ13.15cmを測る。墨痕は存在するが墨書は明確でない。

標石 S 37 5号棺において、S 38と1対で設置されていた。全長93.45cm・幅19.6cm・厚さ11.45cmを測る。墨書は以下の通り。

「(右行) 此下ニひつき阿り (左行) あはれ」。左行は墨書の残りが悪く、文意が通じ難いが、S 38と一連の文章であった可能性も残る。

標石 S 38 5号棺において、S 37と1対で設置されていた。全長93.9cm・幅19.6cm・厚さ12.75cmを測る。墨書は以下の通り。

「(右行) 見志人阿は連 (左行) うつみたまえ」。墨書の残りが悪く、文意が通じ難いが、他の墨書から推して、「みしひとあはれ(みて)うつみたまえ」と記されたと考えられる。

標石 S 39 3号館から出土した。全長103.4cm・幅16.8cm・厚さ8.6cmを測る。墨書は以下の通り。

「(右行) 此下にくわんカあり (左行) み人あわみたまゑ」。左行は、S 40から推して「みし人あわれみてうつみたまゑ」と記されたと考えられる。

標石 S 40 3号棺においてS 39と1対で設置されていた。全長104.9cm・幅17.4cm・厚さ17.1cmを測る。側面に矢穴跡が顕著である。墨書は以下の通り。

「(右行) 見し人あわれみて (左行) うつみたまゑ」

標石 S 41 4号棺から出土した。全長92.2cm・幅16.3cm・厚さ10.1cmを測る。墨書はない。頭部が圭頭になっている点の特徴である。未実測の延石 S 42と1対で設置されていた。(西口)

(3) 硯 (S46～S54)

S46は海部の一部を欠いているが、ほぼ完存している。裏面も一段彫り込んでいるのが特徴である。周縁が0.5cm前後と狭いのも特徴であろう。長さ19.8cm、幅9.3cm、厚さ3.2cmとやや大形である。S47は下半と海部側の周縁を欠いている。周縁は0.4cmと狭く、海部も狭く余り深くない。S48は海部と陸部にかけての破片である。陸部での周縁は幅0.3～0.4cmで深さ0.5cmと狭く浅い。海部も緩やかに彫り込んでいる。SX1012の火災層からの出土である。S49は長さ17.35cm、幅7.05cm、厚さ2.45cmの一般的な大きさである。陸部中央から左手前にかけて大きく凹んでいる。そのまま緩やかに海部に続く。S50も陸部中央部分が凹んでいる。長さ15.4cmとやや小さい。SX2067出土。S51も陸部中央部分が大きく凹んでいる。擦痕が多く残っている。SK1002出土。S52は陸部端部の破片である。幅は7.45cmで、厚さ2.6cmであるが、周縁からの彫り込みは0.5cmと浅い。S53は海部を欠いている。幅7.25cm、厚さ1.95cmである。周縁の幅は0.5cmで深さ0.7cmである。SK1003出土である。

S46・47は黒色をしており粘板岩と思われる。

S48・49・52・53は灰白～橙色をした石目文様のある石材で、虎斑石と呼称されるものであろう。S50・51は緑灰色の丹波石である。

(4) 砥石 (S56～S67)

S56は硯S46と同じ層から出土している。断面長方形の硯で一方の端部を欠く。S57は断面台形で片面のみ使用している。S58はSD1005出土で擦痕は少ない。断面長方形である。S59は墓域から出土しており、火消壺と接して出土している。副葬品の可能性が残る。他方向の擦痕が認められる。S60はよく使われた砥石で、堀と考えているSD1004からの出土である。一方の端部が斜めになっているが、欠損ではなく使用減りによる磨滅であろう。そのため、平面形状は台形になっている。S61はSK1067出土で、小形の

幅3.35cmで片側に磨り減っている。細かい擦痕が多く残る。S62は裏面に数条溝状に彫り下げた部分があり、木台との接合面と思われる。平面・断面ともに長方形で細かい擦痕が他方向にある。中央に向かって磨り減っている。S63は小形で中央に向かって僅かに磨り減っている。SX2077出土で細かい擦痕が残る。S64は鼓形になる中央が大きく凹んだ砥石である。S66は断面台形の大きめの製品である。SK1029出土。S67は残存長23.7cmと大形の板状砥石で厚さ3cm前後である。SK2002出土で他方向の擦痕が認められる。

(5) その他の石製品

S54は基石である。黒色のもので、径2.2cm、厚さ0.5cmで断面形状はレンズ状にならず、片側に傾いている。墓域内の攪乱から出土している。

S68は乳鉢で両側に彫り込んで把手としている。把手は中央より僅かに下に1cm近く彫り窪めており、上部は平坦にしている。口径14.2cmで高さ9.6cm、底径11.2cmを測る。内面は断面半球形で深さ5.4cm彫り込んでいる。底面中央は0.2cmほどだが径8cm彫り下げて安定を図っている。

玉

S55はガラス玉である。直径1.5cmの球形で、表面は凹凸があり、白っぽくなっている。緑青色を呈する。J1はガラス小玉である。SK1077出土でオリーブに近い緑色をしている。径6mmで高さ4mm、中央に1mmの孔を開ける。断面は算盤玉に近い。(渡辺)

第1表 石造品・石製品計測表

	種類	出土地区	遺構	法量(cm) ()は残存値			備考
				長さ	幅	厚み	
S 1	一石五輪塔	269次 区	墓域 2 段目テラス	(19.90)	13.90	12.70	風空輪残
S 2	一石五輪塔	269次 区	墓域	(15.75)	14.10	12.90	風空輪残
S 3	一石五輪塔	269次 区	北部	(28.60)	15.65	15.80	地輪欠
S 4	一石五輪塔	269次 区	北部	(30.80)	16.55	15.60	地輪欠
S 5	一石五輪塔	269次 区	北部	(27.30)	17.80	17.75	火水輪残
S 6	一石五輪塔	269次 区	北部	(19.80)	15.20	12.85	火水輪残
S 7	一石五輪塔	269次 区	北部	(17.20)	14.30	14.10	火水輪残
S 8	一石五輪塔	269次 区	SK1007	(21.35)	14.60	14.60	火水輪残
S 9	一石五輪塔	269次 区	北部	(30.60)	14.70	14.30	風空輪欠
S 10	一石五輪塔	269次 区	北部	(30.80)	14.60	13.70	風空輪欠
S 11	一石五輪塔	269次 区	攪乱坑 4	(33.10)	16.10	13.00	風空輪欠
S 12	一石五輪塔	269次 区	墓域	(34.85)	16.50	14.65	風空輪欠
S 13	一石五輪塔	269次 区	北部	(40.35)	18.20	14.70	風空輪欠
S 14	一石五輪塔	269次 区	北部	(34.30)	16.80	16.00	風空輪欠
S 15	一石五輪塔	269次 区	北部	(42.60)	13.05	12.30	ほぼ完
S 16	一石五輪塔	269次 区	北部	(16.65)	16.75	14.50	地輪残
S 17	一石五輪塔	269次 区	南拡張	(29.90)	20.40	19.50	地水輪残
S 18	五輪塔	269次 区	墓域	32.15	32.15	21.80	火輪
S 19	五輪塔	269次 区	攪乱坑 4	13.30	20.80		火輪
S 20	五輪塔	269次 区	墓域	(17.75)	25.10	23.50	水輪
S 21	五輪塔	269次 区	墓域	28.30	28.30	18.00	地輪
S 22	五輪塔	269次 区	墓域	23.30	23.30	15.00	地輪
S 23	宝篋印塔	269次 区	北部	26.95	27.90	12.75	基礎
S 24	宝篋印塔	269次 区	北部	29.20	29.60	10.00	基礎

	種 類	出土地区	遺 構	法量(cm) ()は残存値			備 考
				長さ	幅	厚み	
S 25	石臼 (上臼)	269次 区	SK1007	30.15	30.15	9.85	1/2残
S 26	石臼 (上臼)	269次 区	SK1007	(28.15)	(16.60)	11.50	残欠
S 27	石臼 (上臼)	269次 区	SK1007	29.70	29.70	11.80	一部欠
S 28	石臼 (上臼)	269次 区	遺構面直上	32.10	32.10	8.50	一部欠
S 29	石臼 (下臼)	269次 区	南端	27.50	27.50	10.10	完存
S 30	石臼 (下臼)	269次 区	SK1007	(27.05)	(20.60)	(9.35)	残欠
S 31	石臼 (下臼)	269次 区	SK1007	28.80	28.80	9.25	一部欠
S 32	石臼 (茶臼)	269次 区	SX2002北半	(42.50)	(42.50)	8.90	破片
S 33	標石 (延石)	269次 区	6号棺 (SX1041)	99.75	19.80	14.65	
S 34	標石 (延石)	269次 区	2号棺 (SX1040)	95.80	20.20	14.20	
S 35	標石 (延石)	269次 区	2号棺 (SX1040)	97.50	20.20	14.60	
S 36	標石 (延石)	269次 区	6号棺 (SX1041)	81.10	17.90	13.15	
S 37	標石 (延石)	269次 区	5号棺 (SX1043)	93.45	19.60	11.45	
S 38	標石 (延石)	269次 区	5号棺 (SX1043)	93.90	19.60	12.75	
S 39	標石 (延石)	269次 区	3号棺 (SX1023)	103.40	16.80	8.60	
S 40	標石 (延石)	269次 区	3号棺 (SX1023)	104.90	17.40	17.10	
S 41	標石 (延石)	269次 区	4号棺 (SX1044)	92.20	16.30	10.10	
S 42	標石 (延石)	269次 区	SX1073	80.50	19.00		
S 43	標石 (延石)	269次 区	4号棺 (SX1044)	89.50	15.50		
S 44	標石 (延石)	269次 区	1号棺 (SX1002)	99.50	16.00		
S 45	標石 (延石)	269次 区	1号棺 (SX1002)	101.50	16.00		
S 46	硯	269次 区	墓域西半	19.80	9.30	3.20	上欠
S 47	硯	269次 区	墓域	(9.00)	5.40	1.35	上下欠
S 48	硯	269次 区	SX1012	(6.20)	6.85	2.25	陸部中央残
S 49	硯	269次 区		17.35	7.05	2.45	ほぼ完
S 50	硯	269次 区	SX2067	15.40	11.20	2.00	
S 51	硯	269次 区	1号棺 (SK1002)	(14.20)	6.15	(1.65)	海部一部欠
S 52	硯	269次 区	墓域	(7.15)	7.45	2.60	海部欠
S 53	硯	269次 区	SK1003	(10.05)	7.25	1.95	海部欠
S 54	碁石	269次 区	墓域	2.20	2.20	0.50	完形
S 55	ガラス玉	269次 区	瓦列	1.50	1.50	1.50	ほぼ完
S 56	砥石	269次 区	SX1012	(12.50)	8.55	1.50	上下欠
S 57	砥石	269次 区	東半	(10.25)	7.55	3.00	下欠
S 58	砥石	269次 区	SD1005	(10.70)	7.75	1.60	下欠
S 59	砥石	269次 区	西壁付近	(5.80)	6.05	1.10	下欠
S 60	砥石	269次 区	SD1004	9.25	5.80	1.35	下欠
S 61	砥石	269次 区	SK1047	(7.55)	3.40	0.85	下欠
S 62	砥石	269次 区	SK1067	(9.20)	6.90	1.35	下欠
S 63	砥石	269次 区	SX2077	6.50	3.65	1.20	ほぼ完
S 64	砥石	269次 区	SK1066	(5.00)	7.90	3.10	1/3残
S 65	砥石	269次 区	SK1066	21.60	10.60	5.70	ほぼ完
S 66	砥石	269次 区	SK1029	12.80	4.55	2.15	ほぼ完
S 67	砥石	269次 区	SK2002	(23.70)	(11.05)	3.65	
S 68	乳鉢	15年度 区		14.20	11.20	9.60	完
J 1	ガラス玉	269次 区	SK1077	0.60	0.60	0.40	完

第4節 金属製品

(1) 255次調査の銅・真鍮製品

3点図示した。M1は真鍮製の飾金具である。SX01より出土した。19角形の稜をもつ菊花型で、中央に方形の釘孔があり、周囲に6個の円孔（鋳孔か）が開く。M2は笄の竿部である。SX34より出土した。付け根に飾りを固定した痕跡が残る。M3は天秤の皿部と考えられる。攪乱より出土した。皿と蔓は鋳留めしており、蔓の頂部には棹から吊り下げるための金具がつく。

(2) 255次調査の鉄製品

5点図示した。M4は鉄鍋である。口縁部内側に沈線が廻る。堀の上層から出土した。M5は煽り留めの受け金具と考えられる。SX11から出土した。M6・M7は角釘である。M6はSD11から、M7はSI01から出土した。M8は一端が欠失している。鋳の可能性が高い。包含層からの出土である。

(3) 平成15年度調査の金属（銅・鉄）製品

平成15年度出土の金属製品は少なく、2点図示した。M187は煙管の雁首である。首は緩やかに湾曲して立ちあがっており、火皿の下に粗雑な補強帯が残る。区SK03より出土した。M188は大型の鉄楔である。区包含層から出土した。

(4) 269次調査の金属（銀・銅・鉄）製品

（墓地に伴う金属製品）

図示した鉄製品の大半は棺に使用された釘類である。また、そのほぼ全てが断面方形の和釘である。これらは大まかには、頭作りだし類・折釘類・切釘（合釘）類に分けることができ、形状によって更に細分される。また、全長3～4cmの小釘・6cmを前後する中釘・9cmを前後する大釘に分類した。

1号棺出土の金属製品 鉄釘は全部で114点出土し、20点を図示した。M9～M28は鉄釘である。M9～M11は平頭の小釘、M12は折釘（平折釘）の中釘である。M13・M14は折釘（平折釘）の大釘である。M15は頭作りだし類の巻頭釘の大釘である。M17～M21・M24・M25は折釘（階折釘）の大釘で、9cmを切るものが多い。M22は丸頭の中釘である。M23は折れ合釘である。M26～M28は合釘である。

2号棺出土の金属製品 M29～32は内棺内から出土した副葬品である。M29は蛸ほどの大きさの金銅製の金具である。衣服に付けられていたものか。M30は銅製環である。全体の半分ほどに繊維と考えられる有機物が付着する。類似例が3号棺・6号棺・7号棺からも出土している。M31・M32は煙管である。羅宇の大半は消失している。火皿は短く屈曲し、補強帯はない。鉄釘は全部で147点出土したが、うち27点を図示した。M33～M52は内棺から出土した。M33～M35は頭作りだし類の頭巻釘の小釘である。M36・M37は頭巻釘の大釘、M38～M40は頭部が大きい巻頭釘の大釘である。M41は折釘である。M42～M47は何れも階折釘の大釘である。M47は全長13cmを超える製品である。M48～M52は合釘である。M48は中釘、他は大釘である。

M53～M60は外棺に伴うものである。M53は半球状の製品である。棺の飾りなどの可能性があるが用途は不明である。M54は棺材に貫通した状態で出土した。頭はなく、頭巻釘と考えられる。M55は平頭の小釘である。M55～M58は頭巻釘の大釘である。M59は巻頭釘の大釘である。M60は角折れ釘と考えられる。

3号棺出土の金属製品 M61～65は内棺内から出土した。M61・M62は銅製環である。M61には繊維が付着している。M63は煙管の銅製吸い口である。対になる雁首は出土しなかった。M64・M65は煙管である。羅宇の大半は消失している。火皿は短く屈曲し、補強帯はない。鉄釘は全部で131点出土したが、うち21点を図示した。M66～M81は内棺から出土した。M66～M70は頭巻釘の小釘である。M68～M70は半ばで曲げている。M71・M72は頭巻釘の中釘である。M73～M78は階折釘の大釘である。M79は中釘の合釘である。M80・M81は大釘の合釘である。M82～M87は外棺から出土した。M82～M85は頭部が大きい巻頭釘の大釘である。M86は頭部の形状は不明確である。M87は中釘の合釘である。

4号棺出土の金属製品 M88は薄板に鋸で留められた小さな飾り取手がつく。M89は刀子片と考えられる。

鉄釘は全部で118点出土し、うち10点を図示した。M90～M92は頭巻釘の中釘である。M93～M96は巻頭釘の大釘である。M93～M94は中釘、他は大釘であろう。M97は頭部が屈曲しており、角折れ釘と考えられる。M98は平頭の小釘である。M99は半ばで曲げている。

5号棺出土の金属製品 鉄釘は全部で51点出土し、うち7点を図示した。M100は頭巻釘の小釘である。M101・M102・M106は頭巻釘の中釘、M104・M105は巻頭釘の中釘、M103は大釘の合釘である。

6号棺出土の金属製品 M107は内棺内から出土した銅製環である。類似例が2号棺・3号棺・7号棺からも出土している。鉄釘は全部で100点出土したが、うち19点を図示した。M108～M121は内棺から出土した。M106は平頭の小釘である。M109は折れ合釘と考えられる。M110～M116は階折釘の中釘である。M118～M121は大釘の合釘である。M122～126は外棺から出土した。M121～M125は頭部が大きい巻頭釘の中釘である。M126は中釘の合釘である。

7号棺出土の金属製品 M127～131は内棺内から出土した副葬品である。M127は蛸ほどの大きさの金銅製の金具である。類似例が2号棺から出土している。衣服に付けられていたものか。M128は銅製環である。類似例が2号棺・3号棺・6号棺からも出土している。全体の半分ほどに繊維と考えられる有機物が付着する。M129・M130は煙管である。羅宇の大半は消失している。火皿は短く屈曲し、補強帯はない。M129は絹布に包まれており、衣類の懐に入っていた可能性がある。M131は鉄鎌の中子と考えられる。刃部は出土していない。鉄釘は全部で129点出土したが、うち17点を図示した。M132～M144は内棺から出土した。M132・M133は頭巻釘の小釘である。M134・M135は棺材に連続して打ち込まれた巻頭釘の中釘である。M136は先端が折り曲げられた頭巻釘の中釘である。M137・M138は頭部が大きい巻頭釘の大釘である。

M139・M140・M143は階折釘の大釘である。M144はやや短い階折釘である。M141・M142は合釘の大釘である。M145～M148は外棺に伴うものである。M145は頭巻釘の大釘である。M146・M147は頭巻釘の大釘である。M147は大きく屈曲する。M148は階折釘の中釘である。

火葬墓SX1039出土の金属製品 M149は緩やかに湾曲する角釘の先端である。頭部を欠く。

井戸SX1038出土の金属製品 M150は鎌で、刃部のわずかを欠損するだけで、ほぼ完存している。刃の長さは17cm、中子の長さは4.5cmを測る。目釘孔は確認されない。

土坑SK1073・SX1077出土の金属製品 M151は全長約5cmの頭巻釘である。M152は頭部が広がらない切釘である。M153は頭部が環状になる掛金に伴う釘と考えられる。M154は鉄鍋の口縁部である。M155は性格不明の鉄片である。M156は刀子(小柄)の柄部破片と考えられる。M157は性格不明の鉄片である。鍋類などの破片の可能性もある。M158は銅線である。M159と同じく茶瓶の蔓の一部と考えられる。

土坑SX1001出土の金属製品 M159は茶瓶の蔓である。M160は銅製の針である。

墓地内出土の金属製品 M161は鍍着した頭巻の鉄釘(3点)である。M162は金銅製の飾金具である。花弁状の毛彫りと魚々子の打ち出しがある。金具には小孔があり、その部分を境に両端がそれぞれコの字状に折り込まれていたと考えられる。

墓地以外の遺構及び包含層に伴う金属製品

M163～M173は銅製品である。

M163は銅製の釘である。やや頂部が盛り上がった鋳釘である。土坑SK1064から出土した。M164は銅線である。M158・M159と同じく茶瓶の蔓の一部と考えられる。溝SD1004から出土した。SD1004からは他にM172の煙管雁首・M183が出土している。M165は鉄の本体に銅製の5枚の花弁を取りつけた製品である。花弁と裏面にある花弁と同じ大きさの円盤によって鉄板を挟み込んでいる。土坑SK2102から出土した。M166は遺存状態が悪く明確ではないが、8枚の花弁を表した銅製飾金具である。花弁は薄板に凹凸をもたせ、一端に小孔が開く。M167は銅製の丸頭釘である。土坑SK1015から出土した。M168は銅製の針もしくは線状の製品である。一端を欠き用途、性格は不明である。土坑SK1064から出土した。M169は銅製の針である。一端に糸通し孔が開く。先端は緩やかに湾曲する。土坑SK1031から出土した。

M170は中央部が山形に盛り上がる小判型の薄板製品である。左右に3個ずつの孔が開き、中央部に打痕がある膝・肘当て様の製品である。区遺構面から出土した。

以下は煙管である。M171・M172は雁首である。ともにSD1004から出土した。いずれも脂返しに線刻があり、短い湾曲がある。補強帯は微かに認められる。M173はSK1066から出土した雁首である。根元に6本の沈線が巡る。M174・M175は吸い口である。M174は区の遺構面から出土している。羅宇が一部残っている。M175はSK2098より出土した。継ぎ目が顕著に残る。

M176～M186は鉄製品である。

M176はSK1029より出土した。頭部が大きく巻頭釘の大釘である。先端を欠く。M177は先端が勾げられた頭巻釘の中釘である。SK1064から出土した。M179は先端が鋭く尖った鉄杭である。頭部を欠く。

区の遺構面上から出土した。M180は端部が角折れする棒あるいは釘様の製品である。区の包含層から出土した。M180はSK1008から出土した煽り留め金具である。

M181～M184は刃物である。M181はSK2102より出土した包丁である。刃部は両刃に近く、関の部分が直角である。M182はSK2002から出土した。刃部は片刃、関の部分が弧を描く。M183は包丁である。柄の木部が残る。刃部を欠くが、関の部分は直角である。M184は三角形の刃部に柄部が付く切り出し様の製品である。峰側にも刃が付けられているが、幾度か研磨し刃部が短くなった可能性が高い。M185はSD2002より出土した。切先を欠くが、両刃が着く。槍砲の可能性もある。M186はSK1003より出土した。鉄鍋の口縁部と考えられる。(西口)

(5) 銭貨

42枚拓本を採っている。C1は北宋銭の熙寧元寶である。1枚だけが渡来銭である。C2～C38は寛永通寶で、C39～C42は大正年間の1銭である。寛永通寶の中でC2～C6は古寛永、C7～C10は文銭、C11～C38は新寛永である。文銭以外で背文字があるのは、2点でC11に「佐」、C12に「元」と鋳出されている。(渡辺)

第2表 金属製品計測表

報告	種 別	品 目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	地 区	出 土 場 所	層 位
M1	銅製品	飾金具の部品	2.50	2.55	0.01	255次Ⅱ区	S X 10	
M2	銅製品	斧の柄	13.55	0.20	0.20	255次Ⅰ区	S K 34	
M3	銅製品	天秤の皿	14.30	14.90	0.10	255次Ⅰ区	攪乱	C - 7
M4	鉄器	鍋	(8.15)	(6.30)	0.70	255次Ⅰ区		堀上層包含層(焼土より上)
M5	鉄器	不明品	(3.10)	0.85	0.25	255次	S X 11	
M6	鉄器	釘	4.25	0.30	0.30	255次Ⅱ区	S D 11	
M7	鉄器	釘	4.45	0.25	0.30	255次Ⅱ区	S I 05	
M8	鉄器	不明品	(11.90)	0.90	0.35	255次Ⅱ区	B - 4	包含層
M9	鉄器	釘	3.10	0.20	0.20	269次Ⅱ区 北	1号棺	棺内埋土
M10	鉄器	釘	(2.85)	0.20	0.15	269次Ⅱ区 北	1号棺	棺内埋土
M11	鉄器	釘	2.80	0.25	0.20	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M12	鉄器	釘	6.70	0.40	0.35	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M13	鉄器	釘	8.25	0.40	0.30	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M14	鉄器	釘	8.55	0.45	0.35	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M15	鉄器	釘	(7.60)	1.00	0.45	269次Ⅲ区 南部	1号棺	埋土下層
M16	鉄器	釘	8.60	0.48	0.45	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M17	鉄器	釘	8.90	0.40	0.35	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M18	鉄器	釘	7.85	0.50	0.35	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M19	鉄器	釘	8.65	0.35	0.40	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M20	鉄器	釘	7.65	0.40	0.40	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M21	鉄器	釘	8.30	0.40	0.35	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M22	鉄器	釘	4.30	0.85	0.40	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M23	鉄器	釘	(2.60)	0.40	0.45	269次Ⅲ区 南部	1号棺	埋土下層
M24	鉄器	釘	8.50	0.70	0.40	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M25	鉄器	釘	8.70	0.45	0.35	269次Ⅱ区 北	1号棺	棺内埋土
M26	鉄器	釘	8.40	0.40	0.50	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M27	鉄器	釘	7.20	0.25	0.45	269次Ⅱ区 北	1号棺	
M28	鉄器	釘	6.95	0.35	0.35	269次Ⅱ区 北	1号棺	完掘時
M29	金銅製品	金具	1.80	0.60	0.02	269次Ⅱ区 北	2号棺	2面から3面下げた時 埋土
M30	銅製品	銅環	2.23	2.18	0.15	269次Ⅱ区 北部	2号棺	117下層 113付近
M31	銅製品	煙管(雁首)	4.15	1.15	1.15	269次Ⅱ区 北部	2号棺	埋土
M32	銅製品	煙管(吸口)	4.13	1.16	1.10	269次Ⅱ区 北部	2号棺	埋土
M33	鉄器	釘	(2.00)	0.25	0.15	269次Ⅱ区 北	2号棺	埋土
M34	鉄器	釘	2.95	0.65	0.20	269次Ⅱ区	2号棺	
M35	鉄器	釘	(2.10)	0.35	0.20	269次Ⅱ区 北部	2号棺	埋土
M36	鉄器	釘	8.55	0.65	0.40	269次Ⅱ区 北	2号棺	
M37	鉄器	釘	6.80	0.60	0.30	269次Ⅱ区 北	2号棺	
M38	鉄器	釘	8.25	1.10	0.30	269次Ⅱ区 墓域	2号棺	埋土
M39	鉄器	釘	8.70	1.00	0.40	269次Ⅱ区 墓域	2号棺	埋土
M40	鉄器	釘	8.60	1.10	0.40	269次Ⅱ区 北部	2号棺	埋土
M41	鉄器	釘	2.85	2.00	0.35	269次Ⅱ区 北	2号棺	
M42	鉄器	釘	(7.40)	0.85	0.40	269次Ⅱ区 北部	2号棺	埋土
M43	鉄器	釘	9.10	0.40	0.40	269次Ⅱ区 墓域	2号棺	埋土内
M44	鉄器	釘	(9.05)	(1.30)	0.45	269次Ⅱ区 北部	2号棺	埋土
M45	鉄器	釘	8.20	0.50	0.40	269次Ⅱ区 墓域	2号棺	埋土
M46	鉄器	釘	8.10	0.50	0.30	269次Ⅱ区 墓域	2号棺	埋土内
M47	鉄器	釘	13.00	0.60	0.50	269次Ⅱ区 墓域	2号棺	埋土
M48	鉄器	釘	(6.95)	0.30	0.30	269次Ⅱ区 墓域	2号棺	埋土
M49	鉄器	釘	9.20	0.55	0.45	269次Ⅱ区 墓域	2号棺	埋土内
M50	鉄器	釘	9.80	0.52	0.52	269次Ⅱ区 北部	2号棺	埋土
M51	鉄器	釘	10.00	0.45	0.45	269次Ⅱ区 墓域	2号棺	埋土内
M52	鉄器	釘	(9.75)	0.40	0.45	269次Ⅱ区 北	2号棺	埋土
M53	鉄器	不明品	3.75	4.17	1.30	269次Ⅲ区 拡張	2号棺	
M54	鉄器	釘	4.75	0.45	0.35	269次Ⅲ区 拡張	2号棺	
M55	鉄器	釘	4.65	0.90	0.42	269次Ⅲ区 拡張	2号棺	
M56	鉄器	釘	(5.10)	0.85	0.25	269次Ⅱ区 北	2号棺 掘り方	
M57	鉄器	釘	7.50	0.50	0.40	269次Ⅱ区 北	2号棺 掘り方	
M58	鉄器	釘	8.15	0.80	0.40	269次Ⅱ区 北	2号棺 掘り方	
M59	鉄器	釘	7.10	0.30	0.30	269次Ⅱ区	2号棺 掘り方	
M60	鉄器	釘	(3.90)	0.95	0.40	269次Ⅲ区 拡張	2号棺	
M61	銅製品	銅環	2.20	2.25	0.20	269次Ⅱ区 北	3号棺	
M62	銅製品	銅環	3.80	0.15	0.18	269次Ⅱ区 北	3号棺	
M63	銅製品	煙管(吸口)	(5.20)	0.75	0.75	269次Ⅱ区 北部墓域	3号棺	上層 埋土
M64	銅製品	煙管(雁首)	7.55	1.90	1.05	269次Ⅱ区	3号棺	第1次 10
M65	銅製品	煙管(吸口)	10.80	1.20	1.05	269次Ⅱ区 北部(墓域)	3号棺	第2次 201
M66	鉄器	釘	(1.75)	0.40	0.20	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土 上層
M67	鉄器	釘	(2.65)	0.60	0.22	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土
M68	鉄器	釘	2.45	0.55	0.20	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土 上層
M69	鉄器	釘	2.80	0.60	0.25	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土
M70	鉄器	釘	2.50	0.48	0.20	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土
M71	鉄器	釘	6.80	1.25	0.40	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土
M72	鉄器	釘	7.90	0.95	0.40	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土
M73	鉄器	釘	8.50	0.80	0.45	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土 上層
M74	鉄器	釘	7.95	0.50	0.35	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土
M75	鉄器	釘	8.45	0.55	0.30	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土
M76	鉄器	釘	8.50	0.45	0.40	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土

報告	種別	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	地区	出土場所	層位
M77	鉄器	釘	8.00	0.50	0.40	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土
M78	鉄器	釘	8.20	0.60	0.40	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土
M79	鉄器	釘	6.90	0.45	0.50	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土
M80	鉄器	釘	(8.68)	0.50	0.45	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土 上層
M81	鉄器	釘	(8.10)	0.55	0.50	269次Ⅱ区 北	3号棺	埋土 上層
M82	鉄器	釘	7.40	1.10	0.30	269次Ⅱ区	3号棺 掘り方内	
M83	鉄器	釘	(6.80)	1.10	0.45	269次Ⅱ区 北	3号棺 掘り方	
M84	鉄器	釘	7.70	1.00	0.40	269次Ⅱ区 北	3号棺 掘り方	
M85	鉄器	釘	7.60	1.75	0.50	269次Ⅱ区	3号棺 掘り方内	
M86	鉄器	釘	(4.85)	0.75	0.55	269次Ⅱ区	3号棺 掘り方内	
M87	鉄器	釘	7.20	0.35	0.30	269次Ⅱ区	3号棺 掘り方内	
M88	銅製品	引き出しの把手?	3.35	1.55	0.65	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M89	鉄器	不明品	(2.7)	(0.95)	0.35	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M90	鉄器	釘	5.15	0.75	0.30	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M91	鉄器	釘	(5.65)	0.85	0.40	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M92	鉄器	釘	(5.15)	1.00	0.30	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M93	鉄器	釘	(4.70)	1.30	0.40	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M94	鉄器	釘	(5.10)	1.30	0.40	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M95	鉄器	釘	(5.20)	1.35	0.40	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M96	鉄器	釘	8.30	1.10	0.30	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M97	鉄器	釘	(1.75) + (5.45)	0.40	0.40	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M98	鉄器	釘	(1.10)	0.30	0.10	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M99	鉄器	釘	(2.20)	1.50	0.25	269次Ⅱ区	4号棺	埋土
M100	鉄器	釘	(1.70)	0.65	0.20	269次Ⅱ区	5号棺	埋土
M101	鉄器	釘	(6.35)	1.00	0.35	269次Ⅱ区 北部(墓域)	5号棺	埋土
M102	鉄器	釘	6.65	0.90	0.35	269次Ⅱ区 北部(墓域)	5号棺	埋土
M103	鉄器	釘	(8.68)	0.25	0.28	269次Ⅱ区 北部(墓域)	5号棺	埋土
M104	鉄器	釘	7.25	1.15	0.30	269次Ⅱ区 北部(墓域)	5号棺	埋土
M105	鉄器	釘	7.40	1.65	0.35	269次Ⅱ区 北部(墓域)	5号棺	埋土
M106	鉄器	釘	7.32	0.70	0.35	269次Ⅱ区 北部(墓域)	5号棺	埋土
M107	銅製品	銅環	(1.71)	(0.68)	0.10	269次Ⅱ区 北部	6号棺	埋土
M108	鉄器	釘	(1.85)	0.20	0.20	269次Ⅱ区	6号棺	棺内埋土
M109	鉄器	釘	(1.35)	0.20	0.20	269次Ⅱ区	6号棺	棺内埋土
M110	鉄器	釘	6.80	0.45	0.25	269次	6号棺	あご周辺
M111	鉄器	釘	7.25	0.45	0.30	269次Ⅱ区 北部(墓域)	6号棺	
M112	鉄器	釘	7.50	0.40	0.30	269次Ⅱ区 北部(墓域)	6号棺	
M113	鉄器	釘	7.92	0.68	0.38	269次Ⅱ区 北部(墓域)	6号棺	
M114	鉄器	釘	6.80	0.65	0.25	269次Ⅱ区 北	6号棺	
M115	鉄器	釘	7.00	0.55	0.38	269次Ⅱ区 北部(墓域)	6号棺	
M116	鉄器	釘	7.40	0.75	0.40	269次Ⅱ区 北部(墓域)	6号棺	
M117	鉄器	釘	(5.30)	0.38	0.38	269次Ⅱ区 北部(墓域)	6号棺	
M118	鉄器	釘	9.05	0.40	0.35	269次Ⅱ区 北部(墓域)	6号棺	
M119	鉄器	釘	8.70	0.55	0.45	269次Ⅱ区 北部(墓域)	6号棺	
M120	鉄器	釘	9.25	0.50	0.45	269次Ⅱ区 北	6号棺	
M121	鉄器	釘	8.05	0.50	0.30	269次Ⅱ区 北部(墓域)	6号棺	
M122	鉄器	釘	6.35	1.05	0.35	269次Ⅱ区	6号棺	
M123	鉄器	釘	(6.40)	1.00	0.45	269次Ⅱ区	6号棺	
M124	鉄器	釘	6.15	1.05	0.45	269次Ⅱ区	6号棺	
M125	鉄器	釘	6.20	1.45	0.30	269次Ⅱ区	6号棺	
M126	鉄器	釘	7.35	0.40	0.45	269次Ⅱ区	6号棺	
M127	金銅製品	金具	2.05	0.65	0.45	269次Ⅱ区 北	7号棺	棺内埋土
M128	銅製品	銅環	1.72	1.720	0.20	269次Ⅱ区 北部	7号棺	水群
M129	銅製品	煙管(雁首)	3.80	1.30	1.30	269次Ⅱ区	7号墳	F群
M130	銅製品	煙管(吸口)	4.00	1.30	1.30	269次Ⅱ区	7号棺	G群
M131	鉄器	鎌	(7.65)	2.00	0.30	269次Ⅱ区	7号棺	埋土
M132	鉄器	釘	3.20	0.56	0.17	269次Ⅱ区 墓域	7号棺	埋土
M133	鉄器	釘	(2.72)	0.19	0.18	269次Ⅱ区	7号棺	埋土
M134	鉄器	釘	(2.90)	0.20	0.18	269次Ⅱ区	7号棺	埋土
M135	鉄器	釘	6.70	0.30	0.30	269次Ⅱ区	7号棺	埋土
M136	鉄器	釘	5.65	0.35	0.25	269次Ⅱ区	7号棺	
M137	鉄器	釘	7.75	1.35	0.9	269次Ⅱ区 北部(墓域)	7号棺	
M138	鉄器	釘	(5.45)	1.40	0.65	269次Ⅱ区	7号棺	埋土
M139	鉄器	釘	8.70	0.60	0.30	269次Ⅱ区	7号棺	
M140	鉄器	鉄	9.90	0.55	0.35	269次Ⅱ区 墓域	7号棺	埋土
M141	鉄器	鉄	8.55	0.50	0.45	269次Ⅱ区 墓域	7号棺	埋土
M142	鉄器	釘	8.80	0.40	0.45	269次Ⅱ区 北部(墓域)	7号棺	
M143	鉄器	釘	8.95	0.50	0.90	269次Ⅱ区 北部(墓域)	7号棺	
M144	鉄器	釘	8.05	0.55	0.40	269次Ⅱ区 (北?)	7号棺	134と132の下層群
M145	鉄器	釘	7.60	0.45	0.40	269次Ⅱ区	7号棺	
M146	鉄器	釘	(7.35)	1.50	0.35	269次Ⅱ区	7号棺	
M147	鉄器	釘	7.00	0.95	0.35	269次Ⅱ区	7号棺	
M148	鉄器	釘	6.75	0.30	0.35	269次Ⅱ区	7号棺	
M149	鉄器	釘	(2.55)	0.40	0.40	269次Ⅱ区 墓域	S X 1039	
M150	鉄器	鎌	19.40	3.55	0.65	269次Ⅱ区 北	S X 1038	埋土
M151	鉄器	釘	4.55	0.60	0.25	269次Ⅱ区 北部 墓域	S X 1073 西半	
M152	鉄器	釘	8.20	0.65	0.45	269次Ⅱ区 北部 墓域	S X 1077 埋土内	
M153	鉄器	釘	7.60	1.70	0.45	269次Ⅱ区 北部 墓域	S X 1073 東半	
M154	鉄器	鉄鍋	1.45	3.75	0.20	269次Ⅱ区 北部 墓域	S X 1073 西半	

報告	種別	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	地区	出土場所	層位
M155	鉄器	不明品	4.50	0.65	0.45	269次Ⅱ区 北部(墓域)	S X 1077	埋土内
M156	鉄器	刀子破片	(2.75)	(0.90)	0.30	269次Ⅱ区 北部(墓域)	S X 1077	埋土内
M157	鉄器	不明品	3.90	2.62	0.45	269次Ⅱ区 北部 墓域	S X 1073 東半	
M158	銅製品	銅線	7.75	1.65	0.30	269次Ⅱ区 北部(墓域)	S X 1077	埋土内
M159	銅製品	蔓	(17.10)	0.25	0.25	269次Ⅲ区 南西端	S X 1001	埋土内
M160	銅製品	針	5.95	0.60	0.20	269次Ⅲ区 南西端	S X 1001	埋土内
M161	鉄器	釘	1.55 3.55 2.80	0.55 0.55 0.45	0.20	269次Ⅱ区 北部(墓域)	西壁側溝内	
M162	金銅製品	飾金具	5.00	1.00	0.03	269次Ⅱ区 北部(墓域)		盛土層 直下層
M163	銅製品	釘	3.85	0.80	0.20	269次Ⅱ区 中央部	S K 1064	暗灰色埋土
M164	銅製品	銅線?	4.70	2.05	0.20	269次Ⅰ区 南部・南西端	S D 1004(堀)	埋土最上層～上層(焼土・炭層)
M165	銅製品鉄製品	金具?	(3.55)	(3.35)	1.10	269次Ⅱ区 中央部	S K 2102	埋土
M166	銅製品	飾金具	(2.50)	(1.70)	0.02	269次不明		
M167	銅製品	釘	(5.80)	1.20	0.60	269次Ⅰ区 南部	S K 1015(西半部)	埋土内
M168	銅製品	銅線	(10.00)	0.20	0.20	269次Ⅱ区 中央部	S K 1064	暗灰色埋土
M169	銅製品	針	6.80	0.40	0.20	269次Ⅰ区 北部	S K 1031	埋土内
M170	銅製品	不明	9.15	5.85	1.10	269次Ⅱ区 北部・北西端		遺構面直上精査中
M171	銅製品	煙管(雁首)	5.85	1.55	1.10	269次Ⅰ区・南部・南西端	S D 1004(堀)	埋土最上層～上層(焼土・炭層)
M172	銅製品	煙管(雁首)	(5.45)	1.45	0.90	269次Ⅱ区 中央	S K 1066	
M173	銅製品	煙管(雁首)	4.80	1.85	1.08	269次Ⅱ区 中央	S K 1066	
M174	銅製品	煙管(吸口)	8.50	1.05	1.05	269次Ⅱ区 中央部西半		遺構面直上包含層
M175	銅製品	煙管(吸口)	6.780	0.95	0.95	269次Ⅱ区 中央群	S K 2098	埋土
M176	鉄器	釘	10.90	1.88	0.50	269次Ⅰ区 中央部	S K 1029	埋土内
M177	鉄器	釘	(6.85)	0.90	0.35	269次Ⅱ区 中央部	S K 1064	埋土内
M178	鉄器	釘	(13.30)	0.75	0.50	269次Ⅱ区 中央 西半		遺構面直上包含層
M179	鉄器	杭	(16.20)	0.60	1.10	269次Ⅱ区 南部		遺構面直上包含層
M180	鉄器	釘?	(12.05)	1.85	0.80	269次Ⅲ区 中央部	S K 1008	埋土内
M181	鉄器	包丁	(13.55)	(4.00)	0.80	269次Ⅱ区 中央	S K 2102	埋土内
M182	鉄器	包丁	(8.65)	(4.30)	0.50	269次Ⅰ区 中央部	S K 2002	埋土内
M183	鉄器	包丁	(6.15)	3.05	0.75	269次Ⅱ区 中央西側	S D 1004	埋土
M184	鉄器	不明	(5.35)	2.60	0.40	269次Ⅱ区 東半	S X 1037西	
M185	鉄器	不明品	22.70	3.55	0.60	269次Ⅰ区 南部	S D 2002(区画 瓦列堀方溝)	埋土
M186	鉄器	鍋	1.70	8.60	0.48	269次Ⅲ区 南部	S K 1003	埋土中層
M187	銅製品	煙管(雁首)	5.50	1.65	0.85	平成15年度Ⅰ区	S K 03	
M188	鉄器	楔	14.60	1.65	0.60	平成15年度Ⅱ区		包含層
C 1	銅銭	銭(昭寧元寶)				255次	S K 54	
C 2	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅲ区 南西端	S X 1001	埋土内
C 3	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区 中央部西半南端		遺構面直上包含層
C 4	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区 中央部西半南端		遺構面直上包含層
C 5	銅銭	銭(寛永通寶)				255次Ⅰ区 中央部・西端	S D 1004(堀)	埋土最上層～上層
C 6	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅰ区 中央部	S K 2003	埋土内
C 7	銅銭	銭(寛永通寶)				255次Ⅰ区	S X 04	上面
C 8	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区 中央部西半南端		遺構面直上包含層
C 9	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅰ区 北 墓域	攪乱12	埋土
C 10	銅銭	銭(寛永通寶)				平成15年度Ⅱ区		包含層
C 11	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅲ区 南部	S P 1001	掘り方内埋土
C 12	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅲ区 南部	S P 1001	掘り方内埋土
C 13	銅銭	銭(寛永通寶)				255次Ⅰ区	B - 4	第2面包含層
C 14	銅銭	銭(寛永通寶)				255次Ⅰ区	B - 5	第2面包含層
C 15	銅銭	銭(寛永通寶)				255次Ⅱ区	S X 11	
C 16	銅銭	銭(寛永通寶)				255次	S K 31	
C 17	銅銭	銭(寛永通寶)				255次	S K 31	
C 18	銅銭	銭(寛永通寶)				255次Ⅱ区	S X 11	
C 19	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅲ区 中央部東側	S X 1002	埋土内
C 20	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅰ区 中央部東側		遺構面直上包含層
C 21	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅰ区 北部		遺構面直上包含層
C 22	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅰ区 北部 東側		遺構面直上精査
C 23	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅰ区 南部	S K 1015(西半部)	埋土内
C 24	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区 北部(墓域)	西壁側溝内	
C 25	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区 中央部西半北より		遺構面直上包含層
C 26	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区 中央 墓域石垣南		掘り方内埋土
C 27	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区		廃土
C 28	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区 北部	S P 1021 西端北	2面掘削
C 29	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区 北部墓域	S X 1023	上層 埋土
C 30	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区 北部墓域	S X 1023	上層 埋土
C 31	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅱ区 北部	S P 1021 西端北	2面掘削
C 32	銅銭	銭(寛永通寶)				平成15年度Ⅳ区		埋土
C 33	銅銭	銭(寛永通寶)				平成15年度Ⅲ区	S D 02	
C 34	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅰ区 南部	S K 1015(東半部)	埋土内
C 35	銅銭	銭(寛永通寶)				269次Ⅰ区 南部	S K 1015(西半部)	埋土内
C 36	銅銭	銭(寛永通寶)				平成15年度Ⅱ区		包含層
C 37	鉄銭	銭(寛永通寶)	(1.90)	2.05	0.15	269次		
C 38	鉄銭	銭(寛永通寶)	直径2.50	-	-	269次Ⅱ区 北部(墓域)	西壁側溝内	
C 39	銅銭	銭(一銭)				269次Ⅱ区 中央 墓域石垣南		掘り方内埋土
C 40	銅銭	銭(一銭)				255次Ⅱ区	S D 07	
C 41	銅銭	銭(一銭)				269次Ⅰ区	S D 1005	埋土内
C 42	銅銭	銭(一銭)				269次Ⅱ区 南部		遺構面直上包含層

第5節 木製品

木製品は28点図示した。以下、調査年度、遺構ごとに述べてゆく。

W 1 ~ W19は255次調査に伴い出土した。

W 1・W 2はSE06取水口より出土した。W 1は曲物底板である。側面に2ヵ所釘孔が残る。W 2は樽類に伴う木栓と考えられる。頭部に打ち込んだ際についた複数の打痕がある。

W 3 ~ W 9はSX11より出土した。W 3・W 4は中央に卵形の孔が開く円盤状の木製品である。玩具の木刀あるいは刀形の鏝と考えておく。W 5は柄の先端を欠く杓文字である。W 6・W 7は曲物底板である。W 8は溝に収まるよう縁を削り出した手桶の底板である。W 9はW 8に伴う側板であろう。継ぎ目には釘孔があく。

W10~W13はSD07より出土した。W10は漆椀の蓋である。外面は黒漆、内面に朱漆を施す。

W11は白木の横櫛である。山が平坦で歯の間が粗い解き櫛である。W12は六角形の加工材である。中央から斜めに角釘が貫通しており、板などに垂直に打ちつけたものと考えられる。W13は八角形に面取りされた棒状の部材である。折損し一端を欠く。一面に約2.6cm間隔で鋸痕様の小孔があく。

W14はSD15より出土した。桶底板の一部と考えられる。側面に釘孔が残る。

以下は機械掘削に伴い出土した。W15は小型容器の挽きものである。臼を模したものか。W16は小型の合子型容器の挽きものである。碁けか。W17は曲物の側板である。上下端を欠き、法量は不明である。W18は小判型の連歯下駄である。

W19~W29は269次調査に伴い出土した。

W19・W20はSK1066より出土している。W19は大型の桶あるいは樽の底板の一部と考えられる。縁の加工は粗い。W20は箱物の部材と考えられる。内外面に赤漆が残る。

W21~W25は数珠玉である。W21~W23は3号棺から出土した数珠玉である。いずれも扁平・楕円形を呈する。W23は遺存状態が悪く数珠以外の木質の可能性もある。W24・W25は6号棺より出土した数珠玉である。共に扁平・楕円形を呈する。W21~W23に比べ一回り大きい。

W26~W29は2号棺から出土した木床義歯である。W29は分析の結果、木製ではなく骨製であることが判明したが、本項で述べておく。出土した義歯は何れも上顎用の義歯である。

W26は外面に化粧歯が廻り、咀嚼部分には左右各2列計18本の銅鋳が打ち込まれている。滑石製の化粧歯は糸（類例では三味線糸）によって木床に括りつけられていたらしく、歯及び木床のソケットには1歯につき2個ずつ孔が開いている。本義歯の木床部分の内外面には漆が塗布されている。また、幾分自歯（臼歯）が残っていたため自歯が当たる部分に抉りを加工している。この抉りの位置はW27・W29よりも手前にあり、また口蓋に密着する部分の盛りあがりがある他の2点よりも低いことから、2点よりも古い時代に誂えられた義歯と判断できる。

W27は外面に化粧歯が廻り、咀嚼部分には左右各2列計17本の銅鋳が打ち込まれている。滑石製の化粧歯は糸（類例では三味線糸）によって木床に括りつけられていたらしく、歯及び木床のソケットには1歯につき2個ずつ孔が開いている。また、幾分自歯（臼歯）が残っていたため自歯が当たる部分に抉りを加工している。この抉りの位置はW26よりも奥にあり、また口蓋に密着する部分の盛りあがりがあるW26よりも高く、W29よりも低いことから、2点の間の時代に誂えられた義歯と判断できる。

W28は右歯列の一部が残存している。3個の化粧歯が残り、咀嚼部分には2列9本の銅鋳が打ち込まれている。残存する義歯は末端が残り、臼歯部分にあたるが、遺存状態が悪く明確な部位は不明である。

W29は木床ではなく骨床の非常に精巧な義歯である。化粧歯は全て脱落しているが、棺内から非常に光沢のある白い石製の歯が出土しており、この義歯に使用されていたと考えられる。本義歯は他の義歯に比べ格段に精巧にできており、咀嚼部分に鋸打ちがなく、内外面に糸を牽引したと考えられる溝が刻まれ、ソケットには1歯につき1個ずつ孔が開いている。W26に比べ更に左奥に自歯をはめ込む挟りが開けられており、W27に比べ口蓋部の盛りあがりが見られる点から、最も新しい時期に遡ると判断できる。(西口)

第3表 木製品計測表

報告番号	出土地区	出土遺構	種類	器種	残存	長さ(口径)	幅(器高)	厚さ(底径)	備考
W 1	255次Ⅱ区	SE06取水口	容器	曲物	1/2	11.30	5.90	0.70	
W 2	同Ⅱ区	SE06取水口	容器	木柱	完形	5.70	5.85	3.60	
W 3	同Ⅱ区	SX11	武具	鐔	完形	4.50	5.15	0.45	
W 4	同Ⅱ区	SX11	武具	鐔	完形	6.10	6.00	1.05	
W 5	同Ⅱ区	SX11	食事具	杓文字	柄の先欠損	(14.85)	7.70	0.60	
W 6	同Ⅱ区	SX11	容器	曲物底板	完形	5.40	5.30	0.55	
W 7	同Ⅱ区	SX11	容器	曲物底板	2/3	11.30	(9.40)	0.55	
W 8	同Ⅱ区	SX11	容器	曲物底板	1/3	(10.85)	(4.40)	0.60	
W 9	同Ⅱ区	SX11	容器	桶側板	上下端欠	(15.60)	8.05	0.90	
W10	同Ⅱ区	SD07	容器	漆椀蓋	3/4	(8.60)	(1.55)	0.30	
W11	同Ⅱ区	SD07	服飾具	櫛	1/2	(6.90)	4.25	0.90	
W12	同Ⅱ区	SD07	不明	部材	1/2	(6.25)	12.80	2.50	釘あり
W13	同Ⅱ区	SD07	不明	部材		(13.30)	3.60	3.00	側面に鋸痕
W14	同Ⅱ区	SD15	容器	桶底板		31.60	6.00	1.00	釘孔あり
W15	同Ⅱ区	機械掘削	容器	不明	ほぼ完形	7.00	6.45	6.55	
W16	同Ⅱ区	機械掘削	容器	不明	ほぼ完形	7.50	4.05	9.05	
W17	同Ⅱ区	機械掘削	容器	曲物側板		21.90	22.35	4.15	
W18	同Ⅱ区	機械掘削	服飾具	下駄	ほぼ完形	21.15	8.40	2.85	
W19	269次Ⅱ区	SK1066	容器	桶・樽底板		44.90	(14.80)	2.90	
W20	同Ⅱ区	SK1066	容器	箱材	両端欠損	18.85	8.50	0.50	赤漆塗り
W21	同Ⅱ区	3号棺内	仏具	数珠玉	ほぼ完形	0.85	0.75	0.25	
W22	同Ⅱ区	3号棺内	仏具	数珠玉	ほぼ完形	0.80	0.45	0.20	
W23	同Ⅱ区	3号棺内	仏具	数珠玉カ	残欠	0.80	0.35	0.40	
W24	同Ⅱ区	6号棺内	仏具	数珠玉	ほぼ完形	0.85	0.70	0.38	
W25	同Ⅱ区	6号棺内	仏具	数珠玉	ほぼ完形	0.83	0.43	0.22	
W26	同Ⅱ区	2号棺内	服飾具	木床義歯	ほぼ完形	(3.65)	(5.95)	(2.00)	
W27	同Ⅱ区	2号棺内	服飾具	木床義歯	ほぼ完形	(4.90)	(5.90)	2.00	
W28	同Ⅱ区	2号棺内	服飾具	木床義歯	残欠	(2.80)	(2.05)	1.00	
W29	同Ⅱ区	2号棺内	服飾具	骨製義歯	ほぼ完形	4.95	6.58	2.00	

(単位はcm)

第4表 土器・陶磁器・土製品 観察表

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
1	区	SE03	土師器	七輪の五徳?	(24.20)	6.90	(18.40)	体部は僅かに外反気味に外上方に延びる。口縁部は断面方形形状に肥厚。外面に凹線1条。	体部内外面 回転ナデ調整。体部外面下半 板ナデ調整。体部内面に板状の粘土塊を鋳受け用に貼り付け。	内面に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。
2	区	SE03	無釉陶器	播鉢		10.40		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して、断面三角形の縁帯を形成する。口縁部下部は外方に引き出す。口縁部外面に凹線2条。	口縁部内外面 回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。体部内面 12条1単位の櫛描きの描目施文。外面に赤土部塗布。	焼成 良好。色調 にぶい赤褐色。明石産播鉢。B1類。18世紀末～19世紀前葉。
3	区	SE03	施釉陶器	蓋	(12.00)	1.75		体部は薄い円盤状。かえりは短く直立する。	上面 灰釉施釉の後、鉄絵で施文。淡暗緑色に発色。下面 露胎。	広義の京焼系陶器。19世紀前半以降。
4	区	SE03	施釉陶器	鉢	(17.70)	(6.75)	(8.40)	高台は幅が広く低い。底部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、体部はほぼ直立する。口縁部は断面方形形状に若干肥厚する。	内面～体部外面上半 灰釉施釉。淡黄緑色に発色。外面にイッチン掛けて松葉文施文。体部外面下半以下露胎。露胎部は回転ヘラケズリが認められる。	広義の京焼系陶器。19世紀前半以降。
5	区	SK02	土師器	皿	7.65	1.05		非ロク口成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後、ナデ調整。体部～底部内面 1方向のナデ調整。底部内面 ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。
6	区	SK02	土師器	皿	(14.15)	(1.95)		非ロク口成形。器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部外面 指おさえの後、ナデ調整。	焼成 良好。色調 褐灰色。
7	区	SK02	土師器	皿	12.60	(2.90)		非ロク口成形。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部～底部内面 指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。	内面 全面に黒斑が見られる。焼成 良好。色調 黄褐色。
8	区	SK02	無釉陶器	播鉢	(35.20)	(10.80)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凹線1条・凸帯1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 板ナデ調整。体部内面 9条1単位の描目施文。	焼成 堅緻。色調 にぶい赤褐色。堺産播鉢 A類。18世紀前半～中頃。
9	区	SK02	無釉陶器	植木鉢	(21.10)	(15.10)	11.05	体部最下部に塊状の脚を3ヶ所貼り付ける。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げる。口縁部側面は指整形で凹凸をつける。底部中央に穿孔1ヶ所。	内外面とも回転ナデ調整。外面 円形浮文・菊花文を貼り付け施文。外面 赤土部塗布。	焼成 良好。色調 暗茶褐色。丹波焼。19世紀前半。
10	区	SK02	施釉陶器	灯明皿	(11.40)	2.10	(4.40)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。底部内面に灯心を立てる凸帯が1条巡る。口縁部は丸味をもつ。	内面 灰釉施釉 淡暗緑色に発色。外面露胎。露胎部に回転ヘラケズリ痕が認められる。	器面に細かい貫入。信楽焼。19世紀前半。
11	区	SK03	白磁	皿	8.80	2.50	3.15	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。外面の体部下半以下露胎。底部内面 蛇の目状釉八半。	肥前系。波佐見産。粗製の白磁皿。18世紀前半。
12	区	SK06	土師器	焙烙	30.20	5.35		器形は全体に大きく歪む。底型作り。平底。体部は僅かに内傾して上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面 指押さえの後、強いヨコナデ調整。底部外面 板ナデ調整。	体部外面に煤附着。焼成 良好。色調 灰褐色。播磨型 D類。
13	区	SK06	無釉陶器	筒形容器	(12.40)	(9.25)		体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面全面 ヘラ描き洗線施文。	焼成 良好。色調 赤褐色。備前焼。水指or建水か?
14	区	SK06	施釉陶器	椀	10.50	6.55	4.40	断面台形状の比較的低い削り出し高台。平底。体部は下位で僅かに屈曲して、ほぼ直上に延びる。口縁部は丸味を持つ。	内外面とも透明釉施釉。淡黄色に発色。部分的に灰釉施釉。淡黄緑色に発色。外面の高台脇以下露胎。	器面に細かい貫入。瀬戸・美濃系灰釉椀。本業焼。19世紀前半?
15	区	SK09	無釉陶器	植木鉢	(17.50)	10.70	9.00	平底。底部の外周を残して、内側を浅く削り出す。底部の1ヶ所をヘラ状工具で抉る。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は水平方向に外方につまみ出す。	内外面とも回転ナデ調整。外面 赤土部を塗布。	底部外面に鉄滓附着。焼成 良好。色調 暗赤褐色。丹波焼。
16	区	SK10	無釉陶器	皿	7.90	2.30	3.70	平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。	焼成 良好。色調 赤褐色。備前焼。
17	区	SK10	無釉陶器	甕	(41.70)	(9.00)		口縁部は断面楕円形状に肥厚する。口縁部外面に凹線2条。	内外面とも強い回転ナデ調整。	内外面とも胡麻状に灰被り。焼成 堅緻。色調 にぶい赤褐色。備前焼 期。16世紀代。
18	区	SK25	土師器	皿	(13.00)	(2.95)		非ロク口成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後、ナデ調整。体部～底部内面 1方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。
19	区	SK27	無釉陶器	播鉢	(35.70)	(14.00)	(16.70)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凸帯1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。底部外面 回転ナデの後、ヨコナデ調整。体部内面 10条1単位の櫛描きの描目施文。	内面は使用により平滑。焼成 堅緻。色調 灰赤色。堺産播鉢。A類。18世紀前半～中頃。
20	区	SK27	施釉陶器	徳利	(14.10)	8.35		平底。やや上げ底気味。体部は内彎して、ほぼ直上に延び、体部中央で屈曲して、内傾する。	内外面とも回転ナデ調整。外面 全面に灰釉施釉の後、さらに灰釉を柄杓掛ける。	色調 暗緑色。丹波焼。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備 考
					口 径	器 高	底 径			
21	区	SK27	施釉陶器	椀	9.60	5.75	4.50	高台は断面台形状で低い。平底。体部は大きく内彎して、ほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面に5～6条の凹線施文。内外面とも白化粧土塗布。内面～口縁部外面 透明釉施釉。灰白色に発色。外面の体部～底部鉄釉施釉。茶褐色に発色。高台壘付の釉 かきとり。	器面に貫入。瀬戸焼。腰錆茶椀。19世紀前半。
22	区	SK27	施釉陶器	蓋	(11.10)	2.35	7.00	落とし蓋。体部は直立。上面中央に型作りの菊花形のつまみを貼り付ける。	外面 鉄釉施釉。赤灰色に発色。内面 霏胎。霏胎部 回転ヘラケズリ痕が見られる。	壺蓋。京焼系。
23	区	SK38	無釉陶器	搦鉢	(27.10)	(4.70)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面 回転ナデ調整。体部内面 ヘラ描きの楯目施文。	焼成 良好。色調 赤褐色。丹波焼。 B 2類。17世紀初頭～中葉。
24	区	SK43	瓦質土器	火鉢	(28.60)	(14.95)		体部はほぼ直立。口縁部は若干外方にひらく。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面上位 ヘラナデ調整。体部外面 凹線4条。体部外面中位 幾何学文 印花で施文。体部外面下位 魚々子文施文。体部内面 指おさえの後、ナデ調整。	焼成 ややあまい。色調 暗灰色。 A 1類。
25	区	SK52	施釉陶器	蓋	(6.80)	(3.50)	つまみ径 1.85	体部は山笠形。かえりは比較的高く直立。上面中央に円形つまみを貼り付け。	内外面とも回転ナデ調整。外面に鉄釉施釉。内面 霏胎。	色調 外面 黒褐色。内面にぶい黄褐色。京焼系。
26	区	SK52	施釉陶器	土瓶	(11.20)	(12.50)	8.60	平底。体部は大きく内彎。口縁部は短く直立。体部上半に提げ手を留める環を2ヶ所貼り付ける。底部外面に小さい団子状の脚を貼り付け。	外面 灰釉施釉。灰黄色に発色。外面の体部下半以下及び内面は霏胎。	京焼系。19世紀前半以降。
27	区	SK52	施釉陶器	土瓶	(7.95)	(14.05)	(9.00)	平底。体部は算盤玉状に中央部で屈曲する。口縁部は短く直立。体部上面に提げ手を留める環を2ヶ所貼り付ける。底部外面に小さい団子状の脚を貼り付け。	体部外面上半に27条の沈線施文。外面 灰釉施釉。にぶい淡黄緑色に発色。外面の体部下半以下及び内面は霏胎。	京焼系。19世紀前半以降。
28	区	SK53	無釉陶器	搦鉢	(25.30)	(10.00)	(11.20)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は若干横方向に拡張する。口縁部の一部を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 ヨコナデの後、不定方向のナデ。体部外面下位 横方向の板ナデ調整。体部内面 7条1単位の櫛描きの楯目施文。内外面とも斑に赤土部を塗布。	焼成 やや軟質。色調 にぶい赤褐色。丹波焼。 B 3類。17世紀中頃～18世紀前半。
29	区	SK54	施釉陶器	皿	(11.85)	(2.80)	(4.60)	高台は断面台形状で幅が広く、比較的低い。体部は僅かに内彎気味に緩やかに外上方に延びる。口縁端部は外方にひらく。口縁部内面に凹線1条。	内外面とも灰釉施釉。黄色味を帯びた灰白色に発色。底部内面 砂目跡1ヶ所。外面の体部下半以下 霏胎。	肥前系。唐津。溝線皿。17世紀中頃。
30	区	S102	施釉陶器	甕		(29.10)	24.90	平底。体部は直線的に外上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面 不調整。内外面とも鉄釉施釉。底部外面 霏胎。	内面に有機物附着。焼成 良好。色調 極暗赤褐色。大谷焼。近代以降か? 便槽として使用。
31	区	S103	施釉陶器	甕		(34.25)	21.45	平底。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。	内外面とも鉄釉施釉。底部外面 霏胎。板ナデ調整。砂附着。	内面に有機物附着。焼成 良好。色調 暗赤褐色。大谷焼。近代以降か? 便槽として使用。
32	区	S105	施釉陶器	德利	3.30	(19.00)		器壁は全体に薄い。体部は僅かに内彎してほぼ直上に延びる。頸部は直立。口縁端部は小さい玉縁状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整(水挽き口ロ整形)。外面 鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。	焼成 良好。丹波焼。18世紀後半。
33	区	SX01	土製品	七輪	25.70	21.50	(17.00)	平底。体部は直立。口縁部は外方にひらく。体部外面下位に長方形の送風孔を穿孔する。	外面 横方向の板ナデ調整。内面 ナデ調整。口縁部内面に鍋受けの五徳を3ヶ所貼り付け。体部内面下位にロストル受けを4ヶ所貼り付ける。	比較的軽い。焼成 普通。色調 淡赤褐色。
34	区	SX01	施釉陶器	蓋	7.90	3.05		体部は内彎。口縁端部は斜め方向に切る。上面中央につまみを貼り付ける。	外面 鉄釉施釉。内面 霏胎。	壺蓋。丹波焼。
35	区	SX03	施釉陶器	皿		(2.30)	(7.30)	平底。高台は断面三角形形状で細く低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。	内外面とも長石釉施釉。黄灰色に発色。器面に細かい貫入。	美濃焼。志野皿。17世紀前半。
36	区	SX05	施釉陶器	皿	(11.40)	(3.40)	4.05	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に緩やかに外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	体部外面下位 回転ヘラケズリ調整。内外面とも銅緑釉施釉。底部内面 蛇の目状釉八ギ。体部外面下半以下霏胎。	肥前系。緑釉唐津。18世紀前半。
37	区	SX07 (攪乱)	無釉陶器	搦鉢	(31.20)	(8.80)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凹線2条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 板ナデ調整。体部内面 8条1単位の櫛描きの楯目施文。内外面とも赤土部塗布。	焼成 堅緻。色調 暗赤褐色。堺産搦鉢。 B 類。18世紀後半～19世紀初頭。
38	区	堀	施釉陶器	皿	(11.40)	(3.90)	(3.60)	高台は浅く削り出す。体部は直線的に外上方に立ち上がり、中位で屈曲。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界に段をもつ。	内外面とも灰釉施釉。灰黄色に発色。体部外面下半以下 霏胎。	底部内面 胎土目跡 2ヶ所。高台は三日月高台。底部外面に墨書あり。肥前系唐津。17世紀初頭。
39	区	SP05	無釉陶器	搦鉢	(34.00)	(12.50)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は断面長方形を呈する。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整の後、指おさえ。指頭圧痕が残る。体部内面 8条1単位の櫛描きの楯目を施文。	焼成 良好。色調 にぶい褐色。丹波焼。 B 3類。17世紀中頃～18世紀前半。

255次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備 考
					口 径	器 高	底 径			
40	区	第2面 精査中	施釉陶器	蓋	(13.20)	(3.05)	つまみ径 (3.50)	器壁は全体に薄い。体部は内彎。 つまみは円形で、切り込みが2 ヶ所認められる。	内外面とも回転ナデ調整。つま み上面 凹線1条。体部外面 沈線2条・波状文2条・沈線2 条。外面 露胎。1ヶ所 火襷 状に赤褐色に変色(鉄銹?)。 内面 鉄釉施釉 茶褐色に発色。	京焼系。体部内彎 類。
41	区 B-4	第3面 包含層	土師器	皿	(8.00)	(1.45)		非ロクロ成形。平底。体部と底 部の界は不明瞭。体部は僅かに 内彎気味に外上方に延びる。口 縁端部は尖り気味。	内外面とも指おさえの後、ナデ 調整。体部外面に指頭圧痕が残 る。	口縁部外面に部分的に煤附 着。焼成 良好。色調 に ぶい黄褐色。
42	区 B-4	第3面 包含層	土師器	皿	(9.90)	(1.55)		非ロクロ成形。器壁は全体に薄 い。平底。底部と体部の界は不 明瞭。体部は僅かに内彎気味に 外上方に延びる。口縁端部は尖 り気味。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。 体部内面 ヨコナデ調整。底部 内面 ナデ調整。外面の体部 - 底部 指おさえの後ナデ調整。	口縁部内外面の全面に煤附 着。焼成 良好。色調 に ぶい黄褐色。
43	区 a-4・5	第3面 包含層	土師器	皿	(9.70)	(1.80)		非ロクロ成形。平底。体部は直 線的に外上方に延びる。口縁端 部は丸味をもつ。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。 体部内面 ヨコナデ調整。底部 内面 仕上げナデ調整。体部 - 底部外面 指おさえの後、ナデ 調整。指頭圧痕が残る。	口縁部内外面 煤附着。焼 成 良好。色調 灰白色。
44	区	第3面 包含層	土師器	皿	(10.00)	(2.00)		非ロクロ成形。器壁は全体に薄 い。体部は直線的に外上方に延 びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調 整。外面の体部 - 底部 指おさ えの後、ナデ調整。指頭圧痕が 残る。底部内面 仕上げナデ調 整。	焼成 良好。色調 浅黄色。
45	区 B-4	第3面 包含層	土師器	皿	(9.40)	(1.50)		非ロクロ成形。器壁は全体に薄 い。平底。体部は直線的に外上 方に延びる。口縁端部は尖り気 味。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。 体部内面 ヨコナデ調整。底部 内面 仕上げナデ調整。外面の 体部 - 底部 指おさえの後ナデ 調整。	口縁部に部分的に煤附着。 焼成 普通。色調 灰白色。
46	区	第3面 包含層	土師器	皿	(10.90)	(1.70)		非ロクロ成形。平底。体部と底 部の界は不明瞭。体部は緩やか に外上方に延びる。口縁端部は 丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調 整。体部外面 指おさえの後、 ナデ調整。指頭圧痕が残る。底 部内面 仕上げナデ調整。	焼成 良好。色調 浅黄色。
47	区	西側包含 層(焼土 まで)	土師器	皿	(11.10)	(2.70)		非ロクロ成形。平底。体部と底 部の界は不明瞭。体部は僅かに 内彎気味に斜め上方に延びる。 口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。 体部 - 底部内外面 指おさえの 後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	口縁部に煤附着。焼成 良 好。色調 明褐色。
48	区 B-4	第3面 包含層	無釉陶器	皿	(11.00)	(2.10)	(4.10)	平底。体部と底部の界は不明瞭。 体部は僅かに内彎気味に外上方 に延びる。口縁部に把手を貼り 付ける。	口縁部 - 体部内外面 回転ナデ 調整。底部外面 糸切痕が残る。 内外面とも赤土部塗布。暗赤褐 色に発色。	焼成 良好。色調 暗赤褐 色。備前焼の灯明皿。
49	区	第3面 包含層	無釉陶器	皿	(10.70)	(2.15)		平底。体部と底部の界は不明瞭。 体部は僅かに内彎気味に外上方 に延びる。口縁部に弧形の把手 を貼り付ける。	口縁部 - 体部内外面 回転ナデ 調整。底部外面 回転ヘラケズ リ。内外面とも赤土部塗布。暗 茶褐色発色。	焼成 良好。色調 暗茶褐 色。備前焼の灯明皿。
50	区 B-4	包含層	無釉陶器	播鉢	(38.70)	(7.20)		体部は直線的に外上方に延びる。 口縁端部は断面長方形状で上面 に端面をもつ。口縁部上面・内 面に凹線各1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調 整。体部内面 4条1単位の櫛 描きの播目施文。体部外面 指 おさえの後、ヨコナデ調整。指 頭圧痕が残る。	焼成 良好。色調 明赤褐 色。丹波焼。 B3類。 17世紀中頃 - 18世紀前半。
51	区 B-4	第3面 包含層	無釉陶器	播鉢		(5.60)		体部は直線的に外上方に延びる。 口縁部は上下に拡張して縁帯を 形成する。口縁端部は丸味をも つ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調 整。体部内外面 回転ナデ調整。 体部内面 櫛描きの播目施文。	口縁部外面 灰被り。重ね 焼き痕、焼成 堅緻。色調 暗赤褐色。備前焼 期。 15世紀代。
52	区	西側包含 層(焼土 まで)	無釉陶器	播鉢	(29.20)	(9.45)		体部は直線的に外上方に延びる。 口縁部は上下に拡張して縁帯を 形成する。口縁部外面に凹線2 条。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調 整。口縁部外面下部 指おさえ の後、ナデ調整。体部外面 回 転ナデ調整。体部内面 10条1 単位の櫛描きの播目施文。	焼成 良好。色調 赤褐色。 堺産播鉢。 A類。18世紀 前半 - 中頃。
53	区 B-4	包含層	無釉陶器	火入れ	(10.30)	6.30	(9.40)	平底。体部は直線的に外上方に 立ち上がり、体部下位で屈曲、 体部は外反気味にほぼ直上に延 びる。口縁部は上面に端面をも ち、端部は若干内側に引き出す。 外面に把手を貼り付け。	口縁部 - 体部内外面 回転ナデ 調整。底部外面 ナデ調整。	外面 灰被り。焼成 良好。 色調 外面 暗赤褐色。内 面 淡黄褐色。丹波焼。
54	区 B-5	第2面 包含層	無釉陶器	火入れ	(11.70)	(6.35)	(9.50)	平底。体部は屈曲してほぼ直上 に延びる。口縁端部は上面に端 面をもつ。	口縁部 - 体部内外面 強い回転 ナデ調整。底部外面 不調整。 口縁部 - 体部内外面上半 赤土 部塗布。暗赤褐色に発色。	口縁部に欠けた箇所が多く 見られる。(煙管で叩いた 跡か?) 丹波焼。
55	区 B-2	第2面 包含層	無釉陶器	火入れ	(12.70)	(7.60)	9.40	平底。体部は直線的に外上方に 立ち上がり、下位で屈曲し、僅 かに外反気味に直上に延びる。 口縁部は断面方形状に肥厚する。	口縁部 - 体部内外面 強い回転 ナデ調整。底部外面 ナデ調整。 口縁部内外面 赤土部塗布。暗 赤褐色に発色。底部内面 灰粉 附着。	焼成 堅緻。色調 黄褐色。 丹波焼。
56	区	第3面 包含層	無釉陶器	火入れ	(10.00)	(8.10)	(10.70)	平底。体部は内彎気味に外上方 に立ち上がり、中位で屈曲して、 外反気味にほぼ直上に延びる。 口縁端部は横方向に拡張し、口 縁端部上面に端面をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調 整。体部内外面 回転ナデ調整。 底部外面 ナデ調整。外面の口 縁部 - 体部上半 赤土部塗布。 内面と外面の体部下半以下は露 胎。	口縁端部に打ち欠き痕。焼 成 良好。色調 暗赤褐色。 丹波焼。
57	区	西側堀 包含層(焼 土まで)	無釉陶器	甕	(57.80)	(7.45)		口縁部は断面楕円形状に肥厚す る。	内外面とも強い回転ナデ調整。	口縁部内外面 胡麻状に灰 被り。焼成 堅緻。色調 にぶい赤褐色。備前焼 期。 15世紀代。
58	区	第3面 包含層	無釉陶器	甕	(61.00)	(7.25)		口縁端部は上面に端面をもち、 水平方向に内側に引き出す。口 縁部外面に沈線5条。	内外面とも回転ナデ調整。内外 面とも赤土部塗布。茶褐色に発 色。	丹波焼。甕 - 2 - a類。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
59	区 C - 5	第2面 包含層	施釉陶器	椀		(2.85)	4.95	高台は比較的浅く、削り出す。 高台裏中央にト巾をケズリ残す。	外面 回転ナデの後、回転ヘラ ケズリ調整。内外面とも灰釉施 釉の後、白濁釉施釉。暗灰緑色 に発色。	肥前系。唐津。17世紀前半。
60	区 a - 4・5	第3面 包含層	施釉陶器	皿		(2.90)	(5.10)	高台は断面台形状で比較的低い。 体部は直線的に外上方に立ち上 がる。内面の底部と体部の界に 段をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。底部 外面 回転ヘラケズリ。内外面 とも灰釉施釉。灰白色に発色。 外面の高台脇以下 露胎。	底部内面 砂目跡 2ヶ所。 肥前系。唐津。17世紀前半。
61	区 B - 4	第3面 包含層	施釉陶器	椀		(4.05)	4.90	高台は断面台形状で比較的低い。 体部は内彎気味に外上方に延び る。	内外面とも灰釉施釉。青味を帯 びた灰白色に発色。外面の高台 脇以下露胎。高台裏に釉附着。	畳付に砂目跡 4ヶ所。肥 前系。唐津。17世紀前半。
62	区 B - 4	第3面 包含層	施釉陶器	椀		(5.00)	4.70	高台は比較的幅が広く、高い。 体部は内彎して外上方に延びる。	内面 鉄釉施釉、外面 白濁釉 施釉。外面の高台脇以下 露胎。	底部内面 灰被り。また、 白濁釉が附着して若干滲む。 肥前系。朝鮮唐津。17世紀 前半。
63	区	第3面 包含層	施釉陶器	椀		(3.45)	5.30	高台は比較的細く高い。底部の 器壁は比較的厚い。体部は内彎 気味に外上方に立ち上がる。	内外面とも灰釉施釉。暗オリー ブ灰色に発色。畳付に砂附着。	肥前系。唐津。17世紀後半 ～18世紀前半。
64	区	第3面 包含層	施釉陶器	椀		(3.05)	4.40	高台は比較的細く高い。体部は 僅かに内彎気味に外上方に立ち 上がる。	内面 灰釉施釉。黒褐色に発色。 外面 白濁釉施釉。灰白色に発 色。外面の高台脇以下 露胎。	肥前系。唐津。17世紀前半。
65	区 B - 4	第3面 包含層	施釉陶器	椀		(5.20)	(4.60)	高台は比較的細く高い。体部は 内彎気味に外上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。黄灰色 に発色。	器面に細かい貫入。京焼系。
66	区 B - 2	第2面 包含層	施釉陶器	皿	10.55	3.30	4.10	高台は浅く削り出す。底部の器 壁は厚い。体部は内彎気味に外 上方に延びる。口縁端部は尖り 気味。	内外面とも白濁釉施釉。灰白色 に発色。外面の体部下以下 露胎。底部内面 胎土目跡 3 ヶ所。	肥前系。唐津。17世紀前半。
67	区 B - 2	第2面 包含層	施釉陶器	皿	13.40	3.90	4.00	高台は断面台形状で比較的低い。 平底。体部は内彎気味に緩やか に外上方に延びる。口縁端部は 尖り気味。	内外面とも灰釉施釉。灰被りの ため黄色味を帯びた白色に発色。 体部外面下半以下 露胎。底部 内面 砂目跡 4ヶ所。	肥前系。唐津。17世紀前半。
68	区	包含層中	施釉陶器	灯明皿	11.10	2.45	4.45	平底。体部は内彎気味に外上方 に延びる。口縁端部は尖り気味。	体部内面 ヘラ状工具で格子目 状文施文。内面 - 口縁部外面 灰釉施釉。外面 口縁部以下 露胎。露胎部にヘラケズリ痕が 認められる。底部内面 胎土目 跡 2ヶ所。	焼成 良好。色調 淡暗緑 色。信楽焼。
69	区 B - 5	第2面 包含層	施釉陶器	蓋	(9.55)	(3.40)	5.05	落とし蓋。体部は直立。口縁部 は外方に水平に折り曲げる。	内外面とも回転ナデ調整。外面 灰釉施釉。外面の口縁部と体 部の界 線状に鉄釉施釉。黄緑 灰色に発色。内面 露胎。	壺蓋。京焼系。
70	区 D - 6	包含層	施釉陶器	蓋	8.80	2.70		円盤状。口縁部端面は斜め方向 に切る。上面に環状のつまみを 貼り付け。	上面 鉄釉施釉。暗茶褐色に発 色。下面 露胎。指ナデ・指お さえ痕あり。	壺蓋。丹波焼か。
71	区 B - 4	包含層	青磁	皿	(24.10)	5.55	(8.00)	高台は幅が広く低い。体部は緩 やかにほぼ直線的に外上方に延 びる。口縁端部は尖り気味。	体部内面 ヘラ状工具で花卉文 (菊花文) 施文。内外面とも青 磁釉施釉。淡青緑色に発色。底 部内面 蛇の目状釉八ギ。高台 畳付 露胎。	肥前系。18世紀代?
72	区 B - 4	第3面 包含層	白磁	碗	(10.70)	(5.95)	(4.80)	器壁は全体に薄い。高台は細く 比較的高い。体部は内彎気味に 外上方に延びる。口縁端部は尖 り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色 に発色。畳付の釉かきとり。	肥前系?
73	区 B - 4	第2面 包含層	白磁	碗	(9.05)	(5.20)	3.30	高台は断面台形状。底部の器壁 は厚い。体部は内彎気味にほぼ 直上に延びる。口縁端部は尖り 気味。	内外面とも透明釉施釉。青味を 帯びた灰白色に発色。高台畳付 の釉はかきとる。	肥前系。波佐見産の粗製の 白磁。18世紀前半。
74	区 B - 2	第2面 包含層	白磁	皿	8.80	2.30	3.40	高台は断面台形状で低い。底部 の器壁は厚い。体部は直線的に 緩やかに外上方に延びる。口縁 端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。青味を 帯びた白色に発色。底部内面 蛇の目状釉八ギ。外面の高台脇 以下 露胎。	肥前系。波佐見産の粗製の 白磁。18世紀前半。
75	区 A - 4	包含層	白磁	皿	10.00	2.60	3.70	高台は断面台形状で比較的低い。 底部の器壁は厚い。体部は内彎 気味に外上方に延びる。	内外面とも透明釉施釉。やや青 味を帯びた白色に発色。底部外 面の高台脇以下 露胎。底部内 面 蛇の目状釉八ギ。	肥前系。波佐見産の粗製の 白磁。18世紀前半。
76	区	第3面 包含層	土製品	鞆の 羽口	長(10.10)	径 8.95		形態は円柱状で、内部に穿孔。	外面 指おさえの後ナデ調整。	色調 にぶい黄橙色。
77	区 B - 4	包含層	土製品	鞆の 羽口	長(14.50)	径 8.40		円柱状。	外面 ナデ調整。内面 縦方向 のヘラナデ調整。	外面 鉄滓附着。色調 浅 黄橙色。
78	区	西側堀包 含層(焼 土まで)	土製品	土人形	長(3.25)	幅(2.70)	厚(1.70)	天神像。頭部は欠失。彩色 剥 落。	両型作り。上面と背面を型作り し、貼り合わせる。	焼成 良好。色調 にぶい 橙色。18世紀後半～19世紀 初頭。
79	区	西側堀包 含層(焼 土まで)	土製品	土人形	長(7.31)	幅(4.05)	厚(1.95)	地藏菩薩像。底部の一部 破損。 彩色 剥落。	片型作り。背面 ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい 橙色。
80	区 A・B - 1・2	攪乱	土師器	皿	7.20	1.80		非口口成形。平底。やや丸底 気味。体部と底部の界は不明瞭。 体部は内彎気味に外上方に延び る。口縁端部は尖り気味。	器面の剥落が著しい。内外面と も指おさえの後、ナデ調整。指 頭圧痕が残る。	口縁部内外面 部分的に煤 附着。焼成 比較的良好。 色調 にぶい橙色。
81	区 A・B - 1・2	攪乱	土師器	焙烙	(30.80)	(4.95)		体部は直立。口縁端部は丸味を もつ。	内外面ともヨコナデ調整。	底部外面に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。 播磨型 C類。
82	区 A・B - 1・2	攪乱	無釉陶器	擂鉢		(4.25)		体部は直線的に外上方に延びる。	内面にヘラ描きの播目を施文。	焼成 良好。色調 橙色。 丹波焼。中世 B 3類。16 世紀後半。

255次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
83	区 A・B - 1・2	攪乱	無釉陶器	擂鉢	(31.20)	(6.55)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面 凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ、外面 赤土部塗布。体部内面 8条1単位の櫛描きの描目施文。	焼成 堅緻。色調 外面 暗赤褐色。内面 にぶい赤褐色。明石産擂鉢。 B 1 類。18世紀末～19世紀前半。
84	区	機械掘削	無釉陶器	擂鉢	(34.70)	(7.25)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凹線1条・凸帯1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。体部内面 10条1単位の櫛描きの描目を施文。内外面とも赤土部塗布。	焼成 堅緻。色調 暗赤褐色。堺産擂鉢 A 類。18世紀前半～中頃。
85	区 A・B - 1・2	攪乱	無釉陶器	擂鉢	(33.60)	(12.70)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面 凸帯・凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。体部外面下位 回転ヘラケズリ調整。体部内面 9条1単位の櫛描きの描目施文。	焼成 良好。色調 明赤褐色。堺産擂鉢 A 類。18世紀前半～中頃。
86	区 A・B - 1・2	攪乱	無釉陶器	擂鉢	(38.40)	(6.75)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凹線2条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ。体部内面 9条1単位の櫛描きの描目施文。	焼成 堅緻。色調 にぶい赤褐色。明石産擂鉢。 B 2 類。18世紀末～19世紀前半。
87	区	西半攪乱	施釉陶器	甕	(50.20)	(23.60)		体部は内彎して、ほぼ直上に延びる。口縁部は体部との界で屈曲し、内彎して直上に延びる。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。部分的に斜め方向のナデ調整。外面 赤土部塗布。灰釉を部分的に流し掛け。	焼成 良好。色調 赤褐色。丹波焼。甕 類。形態的には備前焼に酷似する。
88	区		施釉陶器	皿	(11.10)	(2.40)	(6.60)	平底。高台は断面三角形で低い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。口縁部～体部は型押しで花弁状(菊花)に成形。	内外面とも長石釉施釉。灰黄色に発色。	美濃焼。志野皿。17世紀前半。
89	区 A・B - 1・2	攪乱	施釉陶器	蓋	(12.70)	(4.05)	つまみ径 1.45	かぶせ蓋。上面は扁平。上面に環状のつまみを貼り付ける。	内外面とも回転ナデ調整。外面 灰釉施釉。暗緑灰色に発色。内面 霽胎。	焼成 良好。丹波焼。壺蓋。
90	区	攪乱	白磁	皿	8.45	1.85	4.70	平底。高台は断面三角形で低い。体部は僅かに外反気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁部は尖り気味。	底部内面 印花で文字文(壽?)に施文。内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	瀬戸・美濃系。19世紀前半以降。
91	区 A・B - 1・2	攪乱	土製品	ミニチュア鉢?	(5.70)	(2.30)		平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。底部に脚を貼り付け。口縁部外面に把手貼り付け。	手づくね成形の後、底部内面に型押しで菊花文施文。彩色は剥落。	焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。
92	区 A・B - 1・2	攪乱	土製品	土人形	長(3.70)	幅(2.40)	厚(1.65)	西行像。頭部は欠失。彩色 剥落。	両型作り。笠と荷は後に貼り付け。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。
93	区 A・B - 1・2	攪乱	土製品	土人形	長(6.55)	幅(4.05)	厚(2.40)	女立像(遊女か)。頭部は欠失。彩色 剥落。	両型作り。帯と袖は後に貼り付け。背面 ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。
94	区	SX10	無釉陶器	擂鉢	(41.70)	(12.40)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部の一部を捻って片口を形成する。口縁部上面は水平に端面をもつ。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面 凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 ヘラケズリの後、板ナデ調整。体部内面 9条1単位の櫛目施文。	焼成 やや不良。色調 にぶい褐色。明石産擂鉢。 A 類。18世紀後半。
95	区	SX10・SX13	無釉陶器	火入れ	(12.50)	(6.20)	(13.80)	平底。体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 指ナデ及び指おさえ。底部外面 不調整。	体部外面 一部灰被り。焼成 良好。色調 暗赤褐色。備前焼。
96	区	SX10	施釉陶器	椀	(8.20)	(6.05)	(4.00)	高台は比較的細く高い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。	ロク口成形の後、型押しで外面に亀甲文を施文。体部外面下位に櫛描きの刺突文施文。内外面とも透明釉施釉。	焼成 良好。色調 浅黄色。瀬戸・美濃系。19世紀前半。
97	区	SX10	施釉陶器	椀	(10.60)	6.10	3.55	高台は比較的幅が広く、低い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	体部外面中央に鉄釉で太い帯状文施文。内外面とも透明釉施釉。外面の高台脇以下霽胎。	高台裏に墨書。焼成 良好。色調 浅黄色。瀬戸・美濃系。19世紀前半。
98	区	SX11	土師器	皿	(14.10)	(2.30)		非ロク口成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。外面の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面の体部～底部 不定方向のナデ調整。	口縁部内外面に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。
99	区	SX11	土師器	皿	5.70	0.90	3.00	ロク口成形。平底。やや上げ底気味。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。橙色に発色。外面 霽胎。	口縁部に部分的に煤附着。焼成 良好。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
100	区	SX11	瓦質土器	瓦灯皿	(16.20)	(6.95)		脚部に半月形の透かしをもつ。皿部の器壁は厚い。口縁部に1ヶ所折りを入れる。口縁部は短く外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。脚部外面 横・縦方向のヘラナデ調整。脚部内面 ヘラケズリ調整。	焼成 良好。色調 黒色。上に瓦灯傘を載せるタイプ。
101	区	SX11	無釉陶器	擂鉢	(25.00)	(7.00)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部下端は外方に引き出す。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面 凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 板ナデ調整。体部内面 11条1単位の櫛描きの描目を密に施文。	焼成 良好。色調 外面 暗赤褐色。内面 赤色。明石産擂鉢。 C 類。19世紀。
102	区	SX11	無釉陶器	擂鉢	(27.20)	(10.90)		体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部の下端を外方に引き出す。口縁部の1ヶ所を弱く捻って片口を形成する。口縁部外面に浅い凹線2条。口縁部内面に凹部が巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 板ナデ調整。体部内面 15条1単位の櫛目施文。	焼成 堅緻。色調 暗赤褐色。堺産擂鉢。 C 類。19世紀前半～後半。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
103	区	SX11	無釉陶器	搦鉢	(44.60)	(9.60)		体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯をつくる。口縁部は丸味をもつ。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面 凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 横方向の板ナデ調整。体部内面 9条1単位の櫛描きの描目を施文。内外面とも赤土部塗布。	焼成 良好。色調 内面にぶい赤褐色。外面 黒褐色。明石産搦鉢。 A 類。18世紀後葉。
104	区	SX11	無釉陶器	搦鉢		(7.40)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁部の1ヶ所を弱く捻って片口を作る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 板ナデ調整。体部内面 8条1単位の櫛描きの描目施文。	焼成 堅緻。色調 暗赤灰色。明石産搦鉢。 B 1 類。18世紀末 - 19世紀前葉。
105	区	SX11	施釉陶器	椀	9.15	5.40	3.10	高台は比較的細く高く、若干外方にひろく。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひろく。口縁部は尖り気味。	内外面とも透明誘施釉。淡黄色に発色。口縁部内外面に緑釉を流し掛け。外面の高台脇以下露胎。	京焼系。 C b 類。
106	区	SX11	施釉陶器	椀	(8.75)	(4.95)	3.30	高台は比較的低く、「ハ」の字状に外方にひろく。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひろく。	内外面とも施釉。淡黄色に発色。外面の高台脇以下露胎。器面に細かい貫入。	京焼系。 B b 類。19世紀前半。
107	区	SX11	施釉陶器	椀	(8.80)	4.80	(3.30)	高台は幅が広く、浅く削り出す。高台裏の中央部を大きく削り残す。体部は屈曲しながら外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内外面とも白濁釉施釉。灰黄色に発色。外面の高台脇以下露胎。	萩焼か? A 類。
108	区	SX11	施釉陶器	椀?	(11.30)	4.05	(3.30)	高台は幅が比較的広く低い。体部は大きく内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は尖り気味。	内面 鉄絵で草花文施文。内外面とも透明釉施釉。黄色味を帯びた灰白色に発色。外面の高台脇以下露胎。	焼成 良好。京焼系。
109	区	SX11	施釉陶器	椀	10.60	(4.95)	5.20	高台は比較的幅が広く低い削り出し高台。底部は緩やかに外上方に延び、体部は短く直立する。口縁部は丸味をもつ。	内面 - 体部外面 鉄釉施釉。極暗赤褐色に発色。底部外面 露胎。	焼成 良好。産地不明。
110	区	SX11	施釉陶器	椀	(10.35)	(6.75)	5.45	高台は断面長方形状で低い。体部は大きく内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は斜め上方に引き上げる。	口縁部内外面 回転ナデ調整。体部内面 ナデ調整。体部外面 下半 回転ヘラケズリ調整。内面 - 体部外面 上半 鉄釉施釉。体部外面 下半以下 露胎。	底部内面 目跡2ヶ所。焼成 良好。色調 黒褐色。京焼系。 A 類。
111	区	SX11	施釉陶器	蓋	5.05	1.75	つまみ径 3.45	落とし蓋。体部は短く直立。口縁部は外方に水平に折り曲げる。上面中央に丸いつまみを貼り付け。	口縁部 - 体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。外面 透明釉施釉。赤褐色に発色。下面 露胎。	焼成 良好。壺蓋。
112	区	SX11	施釉陶器	蓋	5.55	2.05		山笠形。器形は大きく歪む。上面に棒状のつまみを貼り付ける。	下面 糸切痕が残る。上面 全面に鉄釉施釉の後、黒釉で「つ」の字施文。下面 露胎。	壺蓋。丹波焼。
113	区	SX11	施釉陶器	蓋	7.95	2.20		器壁は全体に比較的厚い。体部は山笠形。上面に棒状のつまみを貼り付け。	上面 鉄釉施釉。黒褐色に発色。下面 露胎。	焼成 良好。丹波焼。
114	区	SX11	施釉陶器	蓋	(11.30)	2.75		落とし蓋。平底。体部は短く直立。口縁部は外方にほぼ水平に折り曲げる。上面中央につまみを貼り付ける。	上面 白濁釉施釉。下面 露胎。露胎部 回転ヘラケズリ調整。	色調 灰白色。京焼系。
115	区	SX11	施釉陶器	灯明皿	(12.60)	2.50	(4.50)	平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。体部内面に凸帯が1条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。外面の体部 - 底部 回転ヘラケズリ調整。内面 透明釉施釉。灰白色に発色。外面 露胎。	焼成 良好。京・信楽系。19世紀前半。
116	区	SX11	施釉陶器	水盤	(24.70)	(7.60)	(25.30)	平底。底部外面に台形状の脚を貼り付ける。体部は短く直立。口縁部は上面に端面をもつ。	体部外面に2条の凸帯を貼り付け、籬を表現する。内外面とも灰釉施釉。オリーブ黄色に発色。	桶を模倣した水盤。瀬戸・美濃産か? 19世紀前半。
117	区	SX11	施釉陶器	鉢	(22.00)	(8.35)	8.90	高台は比較的幅が広く、低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部 - 体部内外面 回転ナデ調整。体部外面 下半 回転ヘラケズリ調整。内面 - 体部外面 上半 白濁釉施釉。淡黄色に発色。体部外面 下半以下 露胎。	底部内面 胎土目跡3ヶ所。器面に虫喰いが目立つ。焼成 良好。瀬戸・美濃系。
118	区	SX11	施釉陶器	甕	(26.20)	(29.40)		体部は内彎してほぼ直上に延びる。頸部はほぼ直立。口縁部は内外に拡張する。	体部外面中央に12条の凹線施文。内外面 回転ナデ調整。内外面に鉄釉施釉。外面 灰釉を柄杓掛け。	大谷焼。
119	区	SX11	施釉陶器	甕	(25.50)	(7.40)		体部は内彎。口縁部は横方向に拡張。口縁部は上面に端面をもつ。	口縁部外面 - 体部内面 灰釉施釉。体部外面 鉄釉施釉の後、灰釉を柄杓掛け。	焼成 良好。色調 外面 暗赤褐色。内面 暗オリーブ色。丹波焼。甕 - 3 - b 類。
120	区	SX11	施釉陶器	甕	(15.80)	(12.05)		体部は内彎。頸部は短く直立。口縁部は横方向に拡張。口縁部は上面に端面をもつ。	内面 灰釉施釉。外面 赤土部塗布。	焼成 良好。色調 外面 暗赤褐色。内面 オリーブ褐色。丹波焼。 - 3 - a 類。
121	区	SX11	施釉陶器	壺	(6.20)	5.80		高台は比較的細く高い。平底。体部は大きく内彎。口縁部は欠失。	外面 緑釉施釉。オリーブ灰色に発色。内面及び底部外面 (高台以下) は露胎。	底部外面に墨書。京焼系。
122	区	SX11	無釉陶器	壺	(6.00)	(5.45)	3.45	平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は大きく内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は若干上方につまみ上げる。	体部外面 上半に11条の沈線施文。口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。内外面とも赤土部塗布。	焼成 良好。色調 赤褐色。備前焼。朱泥小壺。
123	区	SX11	施釉陶器	德利	4.00	(9.00)		体部は内傾。頸部は直立。口縁部は玉縁状に肥厚する。	外面 鉄釉施釉。内面 灰釉施釉。外面 白泥をイッチン掛けで文字文施文。	丹波焼。19世紀前半以降。
124	区	SX11	施釉陶器	御神酒德利	1.40	8.10	2.60	高台は比較的細く高い。体部は内彎。頸部は僅かに外傾気味にほぼ直上に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部内面 - 外面 施釉。暗緑色に発色。内面および高台以下は露胎。	焼成 良好。神棚用の御神酒德利。産地不明。

255次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
125	区	SX11	施釉陶器	花瓶		(10.05)	6.45	高台は断面方形で低い。体部は直立。体部中位で竹節状に屈曲。	外面 鉄釉施釉。ガラス質で黒色に発色。内面及び底部外面 露胎。	焼成 堅緻。近代以降か？
126	区	SX11	施釉陶器	注口容器	4.20	(3.05)	4.90	高台は細く比較的低い。平底。体部は直立。口縁部は内傾する。注口と把手は欠落。	内外面とも白濁釉施釉。浅黄色に発色。外面の高台脇以下 露胎。	焼成 良好。京・信楽系。19世紀前半。油差しか。
127	区	SX11	施釉陶器	乗燭	(5.55)	3.30	3.25	平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上面に水平に端面を持ち、端部は若干内側に引き出す。底部内面に灯芯立てを貼り付け。底部外面 穿孔1ヶ所。	内外面とも鉄釉施釉。底部外面 露胎。	焼成 普通。色調 暗茶褐色。
128	区	SX11	施釉陶器	乗燭	4.25	2.60	2.45	平底。底部外面中央に穿孔1ヶ所。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。底部内面中央に灯芯立てを貼り付け。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 - 体部外面上半 鉄釉施釉。体部外面下半以下 露胎。	焼成 良好。色調 黒色。
129	区	SX11	土師器	乗燭	(5.00)	(6.45)	5.90	平底。体部は大きく外反。口縁部は水平方向にひろく。口縁部内面に凸帯が1条巡る。凸帯には1ヶ所抉りを入れる。	口縁部 - 体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不定方向のヘラナデ調整。内外面とも透明釉施釉。赤褐色に発色。底部外面 露胎。	口縁部外面に煤附着。焼成良好。いわゆる柿種の灯火具。
130	区	SX11	白磁	皿	(13.70)	4.20	(8.10)	高台は比較的細く高い。平底。蛇の目凹形高台。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部成形の後、形押しで菊花状に整形。内外面とも透明釉施釉。白色に発色。高台裏は中央部を残して露胎。口縁部に鉄釉施釉。口紅。	肥前系。19世紀前半代。
131	区	SX11	白磁	紅皿	4.05	1.40	1.60	型作り成形。高台は小さく低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。	体部外面に型押しで放射状に施文。内面 透明釉施釉。外面 露胎。	肥前系。紅皿。19世紀前半。
132	区	SX11	白磁	壺		(6.60)	(6.55)	高台は幅が広く低い。体部は内彎して、ほぼ直上に延びる。	外面 透明釉施釉。明オリブ灰色に発色。内面 露胎。部分的に釉が附着する。	肥前系？18世紀代。
133	区	SX11	青磁	碗	(8.80)	(4.30)	(3.20)	高台は断面台形状で比較的幅が広く、低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は若干外方にひろく。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。量付の釉はかきとり。淡赤褐色に発色。	焼成 良好。三田青磁。19世紀前半。
134	区	SX12	無釉陶器	播鉢	(31.40)	(6.40)		器壁は全体に比較的薄い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面に凹部が巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。体部内面 7条1単位の櫛描きの罫目施文。口縁部外面 - 内面 鬼板を塗布。	焼成 やや軟質。色調 外面 にぶい褐色。内面 明赤褐色。丹波焼。A類。17世紀後半 - 18世紀中頃。
135	区	SX12	無釉陶器	甕		(9.10)		口縁部は上下に拡張して、断面楕円形上に肥厚する。口縁部外面に凹線2条。	内外面とも強い回転ナデ調整。	焼成 堅緻。色調 にぶい赤褐色。備前焼 期。16世紀代。
136	区	第2面包含層	施釉陶器	椀		(4.80)	(3.80)	高台は比較的幅が広く低い。体部は直線的に外上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。高台量付に砂附着。	焼成 良好。色調 灰オリブ色。肥前系。唐津。17世紀前半。
137	区	SX13	土師器	風炉 or 火鉢		(14.30)	(22.00)	高台は細く高い。高台に浅い半月状の抉りを入れる。平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。	体部外面 板ナデ調整。体部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。	焼成 普通。色調 にぶい褐色。
138	区	SX13	施釉陶器	皿	(11.45)	2.65	5.55	高台は断面台形状で比較的幅が広く、低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は大きく外方にひろく。口縁部は波状に成形する (ひだ皿)。	内外面とも透明釉施釉。淡灰黄色に発色。底部外面 沈線1条。	瀬戸・美濃系。ひだ皿。19世紀前半。
139	区	SX13	施釉陶器	ミニチュア鍋	7.15	3.40	3.00	平底。体部外面の最下部に団子状の小さい脚を3ヶ所貼り付ける。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は外側に折り曲げ、端部は上方につまみ上げる。	口縁部 - 体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 回転ヘラケズリ。内面 - 体部外面上半 鉄釉施釉。体部外面下半 露胎。	焼成 良好。色調 施釉部にぶい赤褐色。露胎部にぶい褐色。
140	区	SX13	白磁	碗	(9.50)	(6.20)	(4.10)	器壁は全体に比較的厚い。高台は細く低い。平底。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	体部内面 針目跡。産地？
141	区	SX13	白磁	碗	(11.10)	(6.10)	(4.30)	高台は比較的細く高い。底部の器壁は厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰黄色に発色。量付の釉がかきとり。	底部内面に砂附着。肥前系？
142	区	SD06	無釉陶器	火入れ	(9.80)	(5.40)	(11.00)	平底。体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	口縁部 - 体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 指おさえの後、ナデ調整。	外面に火禰が見られる。焼成 良好。色調 にぶい赤褐色。備前焼。
143	区	SD06	青磁	鉢	(12.80)	5.00	(5.90)	型作り成形。高台は断面台形状で幅が広く比較的低い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は大きく外方にひろく。口縁部は輪花状に成形。高台の平面形状は円形。	内面 型押しで牡丹唐草文施文。内外面とも青磁釉施釉。淡黄緑色に発色。量付は露胎で、淡赤褐色に発色。	焼成 良好。三田青磁。19世紀前半。
144	区	SD07	土師器	皿	5.65	1.20	3.00	口縁部成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部 - 体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内外面とも透明釉施釉。外面の釉の剥離が著しい。	口縁部に一部煤附着。焼成 良好。色調 褐色。いわゆる柿種の灯明皿。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
145	区	SD07	土師器	焙烙	(43.60)	(5.90)		型作り成形。丸底。体部は緩やかに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は断面三角形に肥厚する。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内面 ヨコナデ調整。	外面全面に煤附着。焼成良好。色調 灰黄褐色。焙烙型類。
146	区	SD07	無釉陶器	擂鉢		(7.85)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部の1ヶ所を弱く捻って片口を作り出す。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁部の下端を外方に引き出す。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ。体部内面 11条1単位の櫛描きの溝目を施文。内外面とも赤土下部塗布。	焼成 堅緻。色調 暗赤褐色。明石産擂鉢。C類。19世紀。
147	区	SD07	施釉陶器	乗燭	3.10	(3.85)	4.80	平底。体部は大きく外反。口縁部は水平方向にひろく。口縁部内面に凸帯が1条巡る。凸帯には1ヶ所抉りを入れる。	口縁部内面～体部外面 灰釉施釉。体部～底部内面及び底部外面 露胎。底部外面 回転ヘラケズリ調整。	焼成 良好。色調 灰オリープ色。京・信楽系。19世紀前半。
148	区	SD07	施釉陶器	蓋	4.40	0.90		かえりは断面三角形で細く低い。体部は山笠形で口縁部は斜め下方に延びる。	上面 灰釉施釉。淡緑灰色に発色。下面 露胎。	焼成 良好。瀬戸・美濃系。
149	区	SD07	白磁	皿	(13.25)	(3.80)	8.25	高台は細く比較的低い。平底。蛇の目凹形高台。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	型打ちで内面に菊花文施文。内外面とも透明釉施釉。白色に発色。口縁部は鉄釉施釉(口紅)。底部外面は中央部を残して露胎。	肥前系。19世紀前半。
150	区	SD07	青磁	鉢	(14.75)	5.60	(6.45)	型作り成形。高台は断面台形状で幅が広く比較的低い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は大きく外方にひろく。口縁部と高台の平面形状は八角形。	内面 型押しで牡丹文施文。底部内面 型押しで草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。オリープ灰色に発色。体部外面に釉切れが見られる。	焼成 良好。三田青磁。19世紀前半。
151	区	SD07	青磁	鉢	(15.40)	(5.35)		体部は直立。口縁部は上面に端面をもつ。体部外面中に凸帯が1条巡る。	内外面とも青磁釉施釉。オリープ灰色に発色。	器面に細かい貫入。竹筒形容器を模倣か。肥前系。
152	区	SD08	土師器	皿	(13.10)	(2.80)		非ロクロ成形。器壁は全体に厚い。器面の剥離が著しい。平底。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナデ調整。底部外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成 良好。色調 褐灰色～黒色。2次焼成を受けた為か全体に黒っぽく発色。
153	区	SD11	土師器	皿	(13.30)	(2.70)		非ロクロ成形。平底。体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 不定方向のナデ調整。底部外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	口縁部外面に煤附着。焼成良好。色調 にぶい黄褐色。
154	区	SD11	瓦質土器	火鉢	(21.40)	(8.25)		体部は直立。口縁部は内側に肥厚し、端部は丸味をもつ。	口縁部上面 ヘラミガキ調整。器面は平滑。体部内面 指おさえの後、ヨコナデ調整。体部外面 型押しで魚子文施文。型作りの不遊環貼り付け。	焼成 良好。色調 暗灰色。A2類。
155	区	SD11	土製品	火舎		(15.95)	(28.40)	高台は細く高い。平底。体部は直立。	体部外面 不定方向のナデ調整。体部内面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部外面に化粧土塗布。	焼成 良好。色調 外面 明赤褐色。内面 褐灰色。
156	区	SD11	無釉陶器	擂鉢	(34.60)	(10.90)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 板ナデ調整。体部内面 9条1単位の櫛描きの溝目施文。	焼成 良好。色調 明赤褐色。堺産擂鉢。B類。18世紀後半～19世紀初頭。
157	区	SD11	施釉陶器	灯明皿	6.60	1.20	2.25	平底。体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。底部に凸帯が1条巡る。凸帯に抉りを1ヶ所入れる。	体部外面 回転ヘラケズリ調整。内面 透明釉施釉。淡黄灰色に発色。外面 露胎。	焼成 良好。京・信楽系。19世紀前半。
158	区	SD11	青磁	碗	(9.10)	4.70	3.90	高台は断面三角形で比較的高い。平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内外面とも青磁釉施釉。暗黄緑色に発色。量付の釉かきとり。淡赤褐色に発色。	焼成 良好。三田青磁。19世紀前半。
159	区	SD11	施釉陶器	椀	(8.50)	(5.30)	(3.20)	高台は断面長方形で比較的高く、若干外方にひろく。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひろく。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。器面に細かい貫入。外面の高台脇以下露胎。	京焼系。B b類。
160	区	SD12	土製品	ミニチュア椀	4.60	2.35	1.90	型作り成形。高台は幅が広く低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。	内外面ともナデ調整。内面に指紋が見られる。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。
161	区	SD14下層	施釉陶器	椀		(4.70)	3.60	器壁は全体に非常に厚い。高台は浅く削りだす。体部は内彎気味に外上方に延びる。	体部外面 回転ヘラケズリ調整。内外面とも灰釉施釉。灰黄色に発色。外面の体部下半以下 露胎。	焼成 良好。肥前系。唐津。17世紀前半。
162	区	SP11	土師器	焙烙	(40.40)	(7.30)		型作り成形。体部は内彎。口縁部は若干内傾し、断面楕円形状に肥厚する。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい褐色。焙烙型類。
163	区	包含層	無釉陶器	擂鉢	(35.10)	(5.90)		口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内面 櫛描きの溝目施文。	焼成 堅緻。色調 にぶい褐色。堺産擂鉢。B類。18世紀後半～19世紀初頭。
164	区	包含層	無釉陶器	急須	(7.00)	(6.55)	(13.95)	器壁は全体に比較的薄い。体部は大きく内傾。口縁部は短く内傾。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	体部内面 回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ調整。体部外面 把手の貼り付け痕が見られる。	焼成 良好。色調 外面 褐灰色。内面 灰赤色。煎茶器か？

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
165	区	包含層	無釉陶器 (素焼き)	急須	(7.90)	3.95	3.60	平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。体部外面上位に注口を貼り付ける。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。体部外面下半～底部外面 回転ヘラケズリ調整。底部外面に「古曽部」銘押印。	焼成 良好。煎茶用の急須。高視の古曽部焼。19世紀前半以降。
166	区	包含層	施釉陶器	壺 (四耳壺)	(7.70)	(5.10)		頸部は短く直立。口縁部は小さい玉縁状に肥厚する。体部外面上半部に横耳を貼り付ける。	外面～口縁部内面 灰釉施釉。体部内面 霏胎。	焼成 堅緻。色調 黄褐色。信楽焼か？
167	区	包含層	施釉陶器	秉燭	(4.90)	(4.15)	3.75	平底。体部は直立。口縁部は若干内側に引き出す。底部内面に灯芯立を貼り付け。底部外面に穿孔1ヶ所。	体部～口縁部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面～体部外面 鉄釉施釉。底部外面 霏胎。	焼成 良好。色調 黒色。
168	区	第1面 包含層	無釉陶器	播鉢	33.25	(11.35)	(16.60)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁下端部は外方につまみ出す。口縁部内外面 凹縁2条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 横方向の板ナデ調整。体部内面 11条1単位の播目施文。底部内面 9条1単位の放射状の播目施文。底部外面 不調整。	焼成 堅緻。色調 明赤褐色。明石産播鉢。B1類。18世紀末～19世紀前半。
169	区	北壁沿い 側溝	施釉陶器	椀	(9.00)	5.40	(3.35)	高台は断面台形状で比較的低い。体部は内彎して、ほぼ直上に延びる。口縁部は尖り気味。	体部外面中央部 沈線6条。内面から体部外面上半 灰釉施釉。淡緑色に発色。外面の体部下半以下 鉄釉施釉。暗褐色に発色。量付の釉はかきとり。	焼成 堅緻。瀬戸・美濃系。腰筒椀。19世紀前半。
170	区	包含層	施釉陶器	蓋	8.20	1.85		器壁は全体に比較的厚い。体部は山笠形。上面に棒状のつまみを貼り付け。	上面 鉄釉施釉の後、灰釉で施文。下面 霏胎。回転ナデ調整。中央部は不調整で糸切痕が残る。	焼成 やや軟質。色調 施釉部 黒褐色。霏胎部 にぶい橙色。丹波焼。
171	区	包含層	青磁	鉢	(4.40)		(8.60)	器壁は全体に厚い。高台は断面台形状で比較的高い。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内外面とも青磁釉施釉。明オリープ灰色に発色。器面に粗い貫入。量付の釉かきとり。	焼成 良好。肥前系か？
172	区	第1面 包含層	土製品	丁銀	長(3.00)	幅(3.10)	厚(0.80)	型作り成形。	外面に型押しして「賈」字施文。背面 無文。	焼成 良好。色調 赤褐色。
173	区南部	SK1012	土師器	焙烙	(24.60)	6.30	(24.65)	型作り成形。底型作り。平底。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は丸味をもつ。体部外面中央に浅い凹縁2条。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 ヨコナデ調整。底部外面 板ナデ調整。	外面の体部～底部 煤附着。焼成 普通。色調 にぶい黄褐色。播磨型 B類。
174	区南部	SK1012	土師器	焙烙	(26.40)	(5.40)	(27.30)	底型作り。体部は粘土細巻上げ成形。平底。底部の器壁は比較的薄い。体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。体部外面に部分的に斜め方向の平行叩き目が残る。底部内外面 ナデ調整。	外面の体部下半～底部 煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。播磨型 A2類。
175	区南部	SK1012	施釉陶器	德利		(13.70)	7.60	平底。体部は内彎する。頸部は欠落。	外面 灰釉施釉。黒褐色に発色。頸部に部分的に白濁釉施釉。体部外面下半以下 白釉施釉。内面 霏胎。	焼成 良好。丹波焼。
176	区南部	SK1015	土製品	十能	長(16.80)	幅 14.60	厚 2.75	型作り成形。平面形状は台形。	内面 ナデ調整。外面 不調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。
177	区南部	SK1015	土製品	灯籠形	長 5.20	幅 2.80		形作り成形。底部外面に穿孔1ヶ所。	4面に鳥居と丸を施文。	彩色は全て剥落。
178	区	SK1022	土製品	人形	長(4.20)	幅 4.40	厚 1.85	型作り成形。両型作り。前面と背面を型作りして、貼り合わせて成形。底部外面に穿孔1ヶ所。	全体にナデ調整。	彩色は全て剥落。魚籠をもつ釣り人。
179	区南部	SK1023	土師器	焙烙	(27.55)	(6.35)	(26.70)	粘土細巻上げ成形。平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。内面の底部～体部 ヨコナデ調整。体部外面 不調整。平行叩き目が残る。底部外面 板ナデ調整。	焼成 普通。底部外面 煤附着。焼成 良好。色調 にぶい褐色。播磨型 A1類。
180	区南部 南西隅	SK1023	土師器	焙烙	(22.70)	5.65	(22.20)	型作り成形。底型作り。平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内面 ヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内外面 2方向のナデ調整。	体部外面に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。播磨型 B類。
181	区南部	SK1023	土師器	焙烙	(25.50)	(5.75)	(25.10)	型作り成形。底型作り。平底。やや丸底気味。体部は若干内傾。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内面 ヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部外面 ナデ調整。	外面に煤附着。焼成 良好。色調 褐色。播磨型 B類。
182	区南部 南西隅	SK1023	土師器	焙烙	(28.50)	6.00	(28.70)	型作り成形。平底。体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 一方向～多方向のナデ調整。	体部～底部外面 煤附着。焼成 良好。色調 灰黄褐色。播磨型 C類。
183	区南部	SK1023	土師器	焙烙	(24.00)	(4.50)		粘土細巻上げ成形。体部は直立。口縁部は尖り気味。	口縁部～体部内外面 ヨコナデ調整。体部外面に斜め方向の平行叩き目が残る。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。播磨型 A2類。
184	区南部 南西隅	SK1023	無釉陶器	甕	(32.00)	(10.05)		体部は内彎。頸部は短く直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。口縁部は外方に引き出す。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい赤褐色。丹波焼。甕 - 1類。
185	区南部	SK1023	土製品	ミニチュア 播鉢	(4.90)	2.50	(2.50)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上方につまみ上げる。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面 4条1単位の櫛描きの播目施文。内外面とも透明釉施釉。	焼成 良好。色調 明赤褐色。
186	1区南部 南西隅	SK1023	土製品	硯	長(10・95)	幅 7.05	高 1.80	型作りか。平面形状は長方形。	外面はミガキ調整。使用により内面は大きく窪む。	焼成 良好。色調 黒褐色。
187	区	SK1024	土師器	灯明皿	5.90	1.10	3.35	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。浅黄褐色に発色。外面 霏胎。	口縁部～体部に煤附着。焼成 良好。いわゆる柿釉の灯明皿。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
188	区	SK1024	土師器	灯明皿	6.05	0.90	2.90	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。内面の体部と底部の界に段をもつ。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。にぶい黄橙色に発色。外面 霏胎。	口縁部に点々と煤附着。焼成良好。いわゆる柿釉の灯明皿。
189	区	SK1024	土師器	灯明皿	(5.60)	1.10	2.50	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。内面の体部と底部の界に段をもつ。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。にぶい黄橙色に発色。外面 霏胎。	内面 ほぼ全面に煤附着。焼成良好。いわゆる柿釉の灯明皿。
190	区	SK1024	土師器	焙烙	(34.90)	(3.70)		型作り成形。口縁部は断面三角形形状に肥厚。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。口縁部外面に煤附着。	焼成良好。色調 にぶい橙色。焙烙型類。
191	区	SK1024	瓦質土器	火鉢	28.00	9.60		体部は僅かに内彎。口縁部は大きく外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面～口縁部外面 回転ナデ調整。体部外面 型押しで亀甲文施文。	焼成良好。色調 黒褐色。B1類。
192	区	SK1024	施釉陶器	片口鉢	10.25	6.70	(5.65)	高台は幅が広く低い。体部は大きく内彎。口縁端部は若干内側に引き出す。体部外面上半に注口を貼り付ける。	内面～体部外面上半 鉄釉施釉。極暗赤褐色に発色。外面の体部下半以下 霏胎。	焼成良好。京焼系。
193	区	SK1024	土製品	ミニチュア鉢?	3.00	1.05	1.75	型作り成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。	内面に指頭圧痕が見られる。	焼成普通。色調 灰白色。
194	区	SK1024	土製品	ミニチュア提灯	長(3.50)	幅 3.65	厚 1.15	型作り成形。片型作り。背面は平坦。	ナデ調整。	彩色は全て剥落。焼成良好。色調 にぶい橙色。
195	区北部	SK1031	瓦質土器	火鉢	18.20	(12.15)	(14.35)	粘土板を貼り合わせて成形。形状は直方体。「L」字形の脚を底部外面の四隅に貼り付ける。体部は直立。口縁部は上面に端面をもつ。	体部外面 ヘラミガキ調整。底部外面 多方向のナデ調整。底部内面 横方向の粗いハゲ目調整。体部内面 縦方向の粗いハゲ目調整。	焼成良好。色調 暗灰色。類。
196	区北部	SK1035	白磁	紅皿	4.30	1.45	1.50	型作り成形。高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は上面に端面をもつ。	体部外面 型押しで放射状花卉文施文。内面 透明釉施釉。白色に発色。外面 霏胎。	焼成良好。肥前系。19世紀前半。
197	区北部	SK1035	白磁	紅皿	2.25	1.00	1.05	型作り成形。高台は細く低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は上面に端面をもつ。	体部外面 型押しで放射状花卉文施文。内外面とも透明釉施釉。白色に発色。	焼成良好。肥前系。19世紀前半。あるいはミニチュアか?
198	区北部	SK1035	土製品	面子	径 2.90	0.85		型作り成形。上面に型押しで施文。	下面 ナデ調整。	焼成良好。色調 にぶい黄褐色。
199	区北部	SK1036	土師器	皿	5.60	1.10	3.90	ロクロ成形。平底。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界に段をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。橙色に発色。	焼成良好。いわゆる柿釉の灯明皿。
200	区中央	SK1037	施釉陶器	甕	(28.40)	35.60	(17.30)	平底。体部は直線的に外上方に立ち上がり、中位で屈曲し内彎して上方に延びる。口縁部は上面に端面をもち、横方向に拡張する。	内面 全面に灰釉施釉。淡黄綠色に発色。外面 鉄釉施釉の後、灰釉を柄杓掛け。	底部内面 砂目跡5ヶ所。底部外面 砂附着。焼成良好。色調 外面 暗茶褐色。丹波焼。 - 3 - b類。
201	区中央部北端	SK1047	土師器	皿	6.90	1.50		非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部～底部外面 指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面 ナデ調整。	焼成良好。色調 浅黄褐色。
202	区南西端	SK2001	土師器	焙烙	(25.70)	(6.40)	(24.80)	型作り成形。平底。体部は僅かに内傾。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部～底部内外面 ナデ調整。	焼成良好。色調 にぶい橙色。播磨型 A2類。
203	区中央部	SK2002	土製品	ミニチュア面	長 4.80	幅(4.50)	厚 2.05	布袋か?	ナデ調整。	焼成良好。色調 にぶい橙色。
204	区中央部	SK2003	土製品	ミニチュア皿	長(5.25)	幅 4.00	厚 1.45	型作り成形。高台の平面形状は長方形。	内面 型押しで魚鱗文施文。外面 無文。	焼成良好。色調 にぶい橙色。
205	区北部	SX1012	土師器	皿	6.80	1.40	4.00	ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。	焼成良好。色調 にぶい橙色。
206	区北部	SX1012	土師器	皿	6.50	1.35		ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。	口縁部に点々と煤附着。焼成良好。色調 橙色。
207	区北西端	撰坑9・SX1012	土師器	皿	6.30	1.35		ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内外面とも全面に煤附着。	焼成良好。色調 にぶい黄褐色。
208	区北西端	撰坑9・SX1012	土師器	皿	12.00	2.90		非ロクロ成形。器形は全体に歪む。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部～底部外面 指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面 指ナデ調整。	焼成良好。色調 にぶい黄褐色。
209	区北部	SX1012	土師器	皿	6.40	1.50	3.30	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。	口縁部外面に部分的に煤附着。重ね焼き痕。焼成良好。色調 橙色。
210	区北部	SX1012	土師器	皿	6.20	1.30	2.70	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面に透明釉施釉。赤褐色に発色。	焼成良好。色調 外面 橙色。いわゆる柿釉の灯明皿。

269次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備 考
					口 径	器 高	底 径			
211	区北部	SX1012	土師器	皿	6.50	1.40	2.80	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面に透明釉施釉。暗赤褐色に発色。外面 露胎。	口縁端部に煤附着。焼成良好。色調 にぶい橙色。いわゆる柿釉の灯明皿。
212	区北西端	攪乱坑9・SX1012	土師器	皿	6.20	1.10	3.40	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。底部内面に凸帯が1条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面に透明釉施釉。暗赤褐色に発色。外面 露胎。	口縁部に煤附着。焼成良好。色調 橙色。いわゆる柿釉の灯明皿。
213	区北部	SX1012	土師器	皿	10.40	2.20	6.00	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内外面とも透明釉施釉。釉の剥離が著しい。	口縁部に煤附着。焼成良好。色調 赤褐色。いわゆる柿釉の灯明皿。
214	区北部	SX1012	土師器	皿	(10.60)	1.90		非ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 ヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後、ナデ調整。底部外面 指おさえの後、ナデ調整。	内面 煤が全面に附着。焼成良好。色調 褐色。
215	区北部	SX1012	土師器	皿	(10.80)	(1.80)		非ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外面の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面の底部～体部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	口縁部外面に煤附着。焼成良好。色調 にぶい黄橙色。
216	区北部	SX1012	土師器	皿	(9.70)	(2.50)		非ロクロ成形。内外面とも器面の剥離が著しい。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外面の体部～底部 指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。器面は著しく剥離する。	口縁部に煤附着。焼成良好。色調 にぶい橙色。
217	区北部	SX1012	土師器	焙烙	(31.60)	(6.05)		型作り成形。平底。体部はほぼ直立。口縁端部は玉縁状に若干内側に肥厚。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 多方向のナデ調整。底部外面の一部 板ナデ調整。底部外面 ヨコナデ調整。	焼成良好。色調 橙色。底部内外面に煤附着。播磨型 C。
218	区北部	SX1012	土師器	焙烙	(31.40)	(5.75)		型作り成形。平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 2方向のナデ調整。底部外面 不調整。	底部内外面に煤附着。焼成良好。色調 橙色。播磨型 C類。
219	区北部	攪乱坑9・SX1012	土師器	焙烙	(31.00)	(6.15)		型作り成形。平底。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。内面の体部～底部 ヨコナデ調整。一部指おさえ。指頭圧痕が残る。体部外面 ヨコナデ調整の後、指おさえ。指頭圧痕が残る。	外面全面に煤附着。焼成良好。色調 にぶい橙色。播磨型 B類。
220	区北西端	攪乱坑9・SX1012	土師器	焙烙	(30.10)	(4.95)		型作り成形。平底。やや丸底気味。体部はほぼ直立。	口縁部～体部内外面 ヨコナデ調整。底部外面の一部 板ナデ調整。	焼成良好。色調 にぶい黄橙色。播磨型 B類。
221	区北部	SX1012	土師器	焙烙	(30.80)	(3.80)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部外面に断面三角形の凸帯が1条巡る。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。	焼成良好。色調 にぶい黄橙色。焙烙型 類。
222	区北部	SX1012	無釉陶器	播鉢	(35.60)	12.70	(15.70)	平底の外縁部を削って、断面台形状の低い高台を削り出す。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して、断面長方形の縁帯を作り出す。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面に凸帯1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面上位 指おさえの後、板ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部外面下位 板ナデ調整。体部内面 10条1単位の櫛描きの播目施文。	焼成良好。色調 赤褐色。塚産播鉢。A類。18世紀前半～中頃。
223	区北部	SX1012	施釉陶器	片口鉢	(14.30)	6.25	8.10	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は若干内側に引き出し、上面に水平に端面をもつ。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。体部外面下位 ヘラケズリ調整。底部外面 ナデ調整。体部内面 全面に灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。外面 露胎。	焼成 堅緻。色調 外面 淡暗赤褐色。丹波焼。
224	区北部	攪乱坑9・SX1012	施釉陶器	椀	(10.50)	4.55	3.60	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも銅緑釉施釉。にぶい黄緑色に発色。底部内面 蛇の目状釉八ギ。外面の高台脇以下 露胎。	肥前系。唐津緑釉椀。17世紀後半～18世紀前半。
225	区北部	SX1012	施釉陶器	椀	(9.10)	7.20	5.50	高台は断面台形状で、幅が広く低い削り出し高台。器壁は全体に厚い。平底。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。体部外面下半 回転ヘラケズリ調整。内外面とも灰釉施釉の後、白濁釉施釉。	焼成良好。色調 灰色。灰釉の剥離が目立つ。肥前系。朝鮮唐津。17世紀前半。
226	区北部	攪乱坑9・SX1012	施釉陶器	椀	(10.65)	(5.30)		体部は直線的に外上方に立ち上がり、中位で屈曲し、ほぼ直立する。	底部内面に鉄絵で施文した後、内外面とも透明釉を施釉する。浅黄色に発色。	京焼系。C a類。
227	区北部	攪乱坑9・SX1012	無釉陶器(素焼)	急須	(7.95)	9.60	8.25	器壁は全体に比較的薄い。上げ底。体部は大きく内彎。頸部は短く直立。口縁端部は丸味をもつ。体部外面上半に把手と注口を貼り付け。	内面～口縁部外面 回転ナデ調整。体部外面 丁寧な回転ヘラケズリ。仕上げは端整。	体部外面下半に煤附着。焼成良好。色調 明赤褐色。京焼系。
228	区北部	SX1012	白磁	碗	(8.40)	4.85	3.10	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも生掛けで透明釉施釉。オリーブ灰色に発色。	器面に虫喰いが見られる。肥前系。波佐見産の粗製の白磁。18世紀代。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
229	区北西端	攪乱坑9・SX1012	白磁	紅皿	4.70	1.65	1.55	型作り成形。高台は細く低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	型押しで外面に放射状の花弁文施文。内面 全面に透明釉施釉。外面 部分的に透明釉がかかる。(基本的には露胎)	肥前系。19世紀前半。
230	区北部	攪乱坑9・SX1012	土製品	土鍾	長3.10	幅0.82	孔径0.31	棒状のものに粘土を巻きつけて成形。	外面 ナデ調整。	焼成 良好。色調 赤褐色。
231	区北部	SX1013	土師器	焙烙	(28.10)	(4.90)		型作り成形。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁端部を僅かに肥厚させて耳を作る。	体部～口縁部内外面 ヨコナデ調整の後、部分的に指おさえ。部分的に指頭圧痕が残る。底部内面 ヨコナデ調整。	外面全面に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。播磨型 D類。
232	区北部	SX1013	施釉陶器	皿		(2.55)	(5.20)	高台は浅い削り出し高台。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。外面の高台脇以下露胎。	底部内面に重ね焼痕。肥前系。唐津。17世紀前半。
233	区北部	SX1013	施釉陶器	椀		(2.55)	(5.70)	高台は浅い削り出し高台。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。外面の高台脇以下露胎。	底部内面に重ね焼痕。肥前系。唐津。17世紀前半。
234	区中央部	SX1014	無釉陶器	皿	8.20	(1.20)		型作り成形。器壁は全体に薄い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は輪花状に整形する。	内面に型押しで鶴に草花文施文。外面 無文。内外面とも赤土部塗布。赤褐色に発色。	備前焼。
235	1区中央部	SX1014	施釉陶器	蓋	3.35	1.60		体部は円盤状。上面に棒状のつまみを貼り付け。かえりは短く直立。	外面 灰釉施釉。灰白色に発色。内面 露胎。	瀬戸・美濃系。
236	区中央部	SX1014	施釉陶器	蓋	(14.45)	つまみ径(3.25)		山笠形。体部は内彎。体部中央に円形のつまみを貼り付け。	体部外面中央部に8～9条の凹線施文。内外面とも灰釉施釉。口縁端部の釉はかきとり。	焼成 良好。色調 灰オリーブ色。京焼系。体部内彎類。
237	区南西端	SX2001	無釉陶器	鉢	(14.50)	(3.55)	(11.00)	器壁は全体に厚い。平底。体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 ナデ調整。	焼成 堅緻。色調 黒褐色。丹波焼。
238	区	SX2001	施釉陶器	椀		(4.90)	4.10	器形は若干歪む。高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。	内外面とも鉄釉施釉。黒色に発色。外面の高台脇以下露胎。	焼成 良好。肥前系。唐津。17世紀前半。
239	区中央部	SX2002	土師器	皿	10.20	1.90		非ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外面の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面 櫛状工具による粗い調整。	焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。
240	区中央部	SX2002	無釉陶器	播鉢	(33.30)	(4.70)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上方につまみ上げる形。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面 8条1単位の櫛描きの播目を施文。内外面とも赤土部塗布。	焼成 堅緻。色調 褐色。丹波焼。A類。17世紀後半～18世紀中頃。
241	区北西端	SD1004	土師器	皿	7.40	1.30		非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	器面は摩滅が著しい。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面の体部～底部 ナデ調整。	口縁端部に若干煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。
242	区北西端	SD1004	土師器	皿	7.40	1.50		非ロクロ成形。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面の体部～底部 多方向のナデ調整。	口縁端部に若干煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。
243	区北西端	SD1004	土師器	皿	6.55	1.35		ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は側面に端面をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 仕上げナデ。底部外面 不調整。糸切痕が残る。	口縁端部に若干煤附着。焼成 良好。色調 橙色。
244	区北西端	SD1004	土師器	皿	8.00	1.75		非ロクロ成形。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面 ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい褐色。
245	区北西端	SD1004	土師器	皿	10.25	2.30		非ロクロ成形。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後、指ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部外面 指ナデ調整。	口縁端部に部分的に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。
246	区南部南西端	SD1004	土師器	皿	(10.90)	(2.00)		非ロクロ成形。器壁は全体に薄い。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 ナデ調整。内面の体部～底部 多方向のナデ調整。	焼成 良好。色調 褐色。
247	区	SD1004内西側溝南端	土師器	皿	11.50	2.60		非ロクロ成形。器壁は全体に厚い。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 ナデ調整。内面の体部～底部 多方向のナデ調整。	口縁部に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。
248	区北西端	SD1004	土師器	皿	10.55	2.10		ロクロ成形。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 ヘラケズリ調整。内面 透明釉施釉 明赤褐色に発色。	部分的に釉の剥離が見られる。口縁端部に煤附着。焼成 普通。色調 外面 橙色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
249	区北西端	SD1004	土師器	焙烙	(29.00)	(6.20)		型作り成形。底型作り。平底。体部はやや内傾。口縁端部は上面に端面をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。体部内面 ナデ調整。底部外面 ヘラ状工具によるケズリ調整。	底部内外面に煤附着。焼成 良好。色調 褐色。播磨型 B類。

269次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
250	区北西端	SD1004	土師器	焙烙	(30.80)	(7.20)		型作り成形。平底型作り。平底。やや丸底気味。体部は短く直立。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 ナデ調整。底部外面 ヘラ状工具によるケズリ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。播磨型 A 2類。
251	区南西端	SD1004	土師器	焙烙	(25.70)	6.40	(28.00)	型作り成形。平底。体部は短く直立。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 ヨコナデ調整。底部外面 ナデ調整。	底部外面に部分的に煤附着。焼成 良好。色調 灰褐色。播磨型 B類。
252	区北西端	攪乱坑9・SX1012・SD1004	土師器	焙烙	(30.70)	(5.80)		型作り成形。平底。体部は直立。体部の器壁は比較的厚い。口縁部上面の一部をやや肥厚させ、耳を作る。耳に穿孔1ヶ所。紐通しの孔か？	口縁部～体部内外面 指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。底部外面の一部 板ナデ調整。底部外面 ナデ調整。	底部外面全面に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。播磨型 C類。
253	区北西端	SD1004	土師器	焙烙	(32.60)	(6.20)		型作り成形。平底。やや丸底気味。体部はほぼ直立。体部の器壁は比較的厚い。口縁部上面の一部をやや肥厚させ、耳を作る。耳に穿孔1ヶ所。紐通しの孔か。	口縁部～体部内外面 指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。底部外面の一部 板ナデ調整。底部外面 ナデ調整。	底部外面全面に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。播磨型 C類。
254	区北西端	SD1004	瓦質土器	火鉢	(26.40)	(15.35)		体部は大きく内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は内傾し、端部は内側に端面をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 黒褐色。B 2類。
255	区中央部西端	SD1004	瓦質土器	灯火具？	(32.95)	16.20	(25.35)	脚は比較的高い。脚の上位に透かしを入れる。皿部の平面形状は楕円形。平底。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。底部内面に×印状に粘土紐を貼り付け。	口縁部～体部内外面 ヨコナデ調整。底部内外面 多方向のナデ調整。脚部内外面 ヨコナデ調整。	焼成 ややあまい。色調 灰色。器種不明。
256	区北部北端	SD1004	無釉陶器	播鉢				体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。口縁部内面に凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面 ヘラ描きの播目施文。	焼成 良好。色調 明赤褐色。丹波焼。A 2類。16世紀後葉～17世紀中頃。
257	区北西端	SD1004	無釉陶器	播鉢	(30.10)	(14.60)	(15.40)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面 沈線2条。口縁部内面 沈線1条と凸帯が1条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ。体部内面 9条1単位の櫛描きの播目施文。底部外面 ナデ調整。	焼成 堅緻。色調 にぶい赤褐色。堺産播鉢。A類。18世紀前半～中頃。
258	区南部	SD1004	無釉陶器	火入れ	(10.80)	(5.95)		平底。体部は直線的に外上方に立ち上がり、下位で屈曲、屈曲しながらほぼ直上に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。体部内面最下部 指ナデと指おさえ。指頭圧痕が残る。	口縁部に多数の打ち欠き痕。焼成 良好。色調 にぶい赤褐色。丹波焼。
259	区南西端	SD1004	無釉陶器	火入れ	(10.15)	(6.15)	7.40	平底。体部は直線的に外上方に立ち上がり、下位で屈曲、屈曲しながらほぼ直上に延びる。体部外面にねじり棒状の把手を貼り付ける。口縁部は上面に端面をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。体部内面最下部 指ナデと指おさえ。指頭圧痕が残る。	口縁部に多数の打ち欠き痕。焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。丹波焼。
260	区北西端	SD1004	無釉陶器	壺	5.45	9.00	7.50	平底。体部は大きく内彎。頸部は短く直立。口縁部は玉縁状に肥厚する。口縁部の1ヶ所を捻って窩口状に成形する。口縁部の平面形状は楕円形状に大きく歪む。	口縁部内外面とも強い回転ナデ調整。体部外面上半 回転ナデ調整。体部外面下半 回転ヘラ削り調整。底部外面 不調整。口縁部～体部外面 赤土部塗布。内面 露胎。体部外面 灰被り。	焼成 良好。色調 暗赤褐色。備前焼。窩口壺。16世紀代。
261	区北西端	SD1004	無釉陶器	甕	(36.00)	(6.50)		口縁部は大きく外方にひろく。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 明赤褐色。丹波焼。甕類。16世紀後半～17世紀前半。
262	区中央部-北部	SD1004	施釉陶器	椀	(2.80)	5.05		断面台形状で比較的低い削り出し高台。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも灰釉施釉。明オリブ灰色に発色。外面の高台脇以下露胎。	焼成 良好。肥前系。唐津。17世紀前半。
263	区北部・北西端	攪乱坑9・SX1012・SD1004	施釉陶器	椀	(13.20)	(5.00)		体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも緑釉施釉。深緑色に発色。外面の高台脇以下露胎。	焼成 良好。美濃系。総織部。復興織部か？
264	区中央部西端	SD1004	施釉陶器	椀	(9.00)	6.50	4.10	高台は幅が狭く、比較的高い。底部の器壁は厚い。体部はほぼ直立する。口縁部は尖り気味。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。内外面とも透明釉施釉。淡黄色に発色。量付の釉かきとり。	器面に細かに貫入。京焼系。C a類。
265	区中央部西端	SD1004	施釉陶器	皿	(12.20)	(2.50)	(3.90)	高台は断面台形状で低い。高台裏はト巾をケズリ残す。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は水平に外方にひろく。口縁部内面に凹線1条(溝縁)	内外面とも灰釉施釉。淡緑灰色に発色。外面の体部下半以下露胎。底部内面に砂目跡2ヶ所。	焼成 良好。肥前系。唐津。17世紀前半。
266	区中央部	SD1004	施釉陶器	皿	(13.00)	3.60	(4.50)	断面台形状の比較的低い削り出し高台。高台裏にト巾が残る。体部は緩やかに僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内外面とも銅緑釉施釉。淡いオリブ灰色に発色。底部内面 蛇の目状釉八ギ。外面の高台脇以下露胎。	焼成 良好。肥前系。唐津。17世紀後半～18世紀前半。
267	区北部北端	SD1004	施釉陶器	向付	(3.80)	(4.80)		断面長方形の低い削り出し高台。底部内面に低い段をもつ。体部は屈曲して外上方に立ち上がる。	内外面とも灰釉施釉。暗灰白色に発色。外面の高台脇以下露胎。	肥前系。唐津。17世紀前半。
268	区北西端	SD1004	施釉陶器	蓋	7.50	3.50		形態は山笠形。口縁部は尖り気味。上面中央に扁平なつまみを貼り付ける。	上面 透明釉施釉。淡黄色に発色。下面 露胎。回転ナデ調整。	焼成 やや軟質。京焼系。
269	区中央部-北部	SD1004	白磁	碗	(11.40)	(6.20)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。色調 やや青味を帯びた白色。生掛けの釉のノリは悪い。	焼成 良好。肥前系？

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
270	区北西端	SD1004	白磁	碗	(10.80)	(6.30)		体部はやや反気味に外上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。明オリーブ灰色に発色。	所々に釉切れが目立つ。肥前系か？
271	1区南部	SD1004	土製品	ミニチュア壺	4.70	(3.10)		型作り成形。上部と下部を別々に型作りし、中央部で貼り合わせる。底部に脚を3ヶ所貼り付ける。口縁部～体部にかけて1ヶ所抉りを入れる(焚口)。	内面の口縁部～体部 強いナデ調整。	彩色は全て剥落。焼成良好。色調 にぶい橙色。玩具。
272	1区北西端	SD1004	土製品	人形	長(5.35)	幅(3.50)	厚(1.90)	頭巾を被る人物像。上半身のみ残存。	型作り成形。両型作り。正面と背面を別々に型作りし、中央部で貼り合わせる。	彩色は全て剥落。焼成良好。色調 にぶい褐色。伏見人形？
273	区中央部北西端	SK1028・SD1004	施釉陶器	皿	(12.15)	(2.85)	4.45	高台は断面台形状で低い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。量付に砂目跡3ヶ所。	焼成良好。肥前系。唐津。17世紀前半。
274	区中央部・中央部西端	SK2002・SD1004	施釉陶器	椀	9.10	(6.60)	4.50	器形は全体に歪む。高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	体部内面 鉄絵で施文。内外面とも透明釉施釉。淡黄色に発色。	焼成良好。京焼系。C a類。
275	区北部北西端	SX1012・SD1004	土師器	焙烙	(28.20)	(6.45)		型作り成形。平底。やや丸底気味。体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 強いヨコナデ調整。底部内面 ナデ調整。底部外面 不調整。	焼成良好。色調 にぶい橙色。播磨型 A 2類。
276	区北部北西端	攪乱坑9・SX1012・SD1004	土師器	焙烙	(29.30)	(6.10)		型作り成形。体部の器壁は比較的厚い。体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 強いヨコナデ調整。底部内面 ナデ調整。底部外面 不調整。	底部外面に煤附着。焼成良好。色調 にぶい褐色。播磨型 B類。
277	区北部北西端	SX1012・SD1004	無釉陶器	播鉢	(33.50)	(8.40)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面に凹部をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ。体部内面に11条1単位の櫛描きの播目を施文する。	焼成良好。色調 暗褐色。堺産播鉢。A類。18世紀前半～中頃。
278	区	SX1012・SD1004	無釉陶器	德利		(13.50)		体部は内傾して上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。外面赤土塗布。体部内面の上半部に絞りに目が見られる。	焼成良好。色調 にぶい赤褐色。備前焼。
279	区北西端・北部	SD1004・SX1012	施釉陶器	鉢	27.50	8.00	16.10	平底。やや上げ底気味。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。体部外面下位 ヘラ状工具による回転ナデ。内面 全面に灰釉施釉。オリーブ灰色に発色。外面 露胎。底部外面 不調整。	焼成 堅緻。色調 外面 にぶい黄褐色。丹波焼。
280	区北部	SD1004・SX1013	無釉陶器	火入れ	(10.10)	(6.00)	(8.10)	平底。体部は大きく屈曲しながらほぼ頂上に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 指おさえの後、ナデ調整。底部外面 ナデ調整。	口縁部に灰釉附着。焼成 堅緻。色調 灰褐色。丹波焼。
281	区北部	SD1004・SX1013	無釉陶器	播鉢	(29.80)	(5.80)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。口縁部内面に凹部をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 指ナデ調整。体部内面 7条1単位の櫛描きの播目施文。	焼成 堅緻。色調 にぶい黄褐色。丹波焼。B 3類。17世紀中頃～18世紀前半。
282	区北部	攪乱坑9	土製品	ミニチュア人形	長(6.60)	幅(3.55)	厚2.25	型作り成形。両型作り。前面と背面を別々に作り、中央で貼り合わせる。	ナデ調整。彩色は全て剥落。	焼成良好。色調 にぶい橙色。
283	区北部北西部分	遺構面直上精査中	土師器	皿	7.05	1.75		非ロク口成形。平底。やや丸底気味。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外面の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面の体部～底部 ナデ調整。	口縁部に部分的に煤附着。焼成良好。色調 にぶい橙色。
284	区北西端	攪乱坑9・SX1012	土師器	皿	10.25	2.15		非ロク口成形。器形は著しく歪む。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外面の体部～底部 指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面の体部～底部 指ナデ調整。器面は著しく剥離する。	焼成良好。色調 にぶい黄褐色。
285	区北部北西部分	遺構面直上精査中	施釉陶器	乗燭	(5.80)	6.00	3.90	平底。底部外面に穿孔1ヶ所。脚部短い。体部は大きく内傾し、口縁部は内側に折り曲げる形。底部内面の灯芯台は欠損。	内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。底部外面 露胎。底部外面 糸切痕が残る。	焼成 ややあまい。
286	区北部	攪乱坑9	瓦質土器	火鉢	(21.40)	(9.70)	(22.20)	器壁は全体に比較的厚い。平底。体部はほぼ直立。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁部は丸味をもつ。外面の口縁部と体部の界に沈線2条。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面に型押しで細かい刺突文施文。器面は剥離が目立つ。	焼成 やや軟質。色調 暗灰色。A 1類。
287	区中央部東側	遺構面直上包含層	瓦質土器	風炉		幅20.35	高(5.5)	型作り成形。体部上半～口縁部のみ残存。体部に透かしを入れる。	外面 型押しで青海波文施文。内面 ヨコナデ調整。	焼成 普通。色調 灰色。
288	区中央部西側	遺構面直上包含層	施釉陶器	甕	(27.00)	(20.70)		体部は大きく内彎。頸部は短く直立。口縁部は上面に水平に端面を持ち、口縁部は若干外方に引き出す。	内外面とも回転ナデ調整。内面 灰釉施釉。外面 鉄釉施釉の後、灰釉を流し掛け。	焼成良好。色調 暗赤褐色。丹波焼。甕 - 2 - b類。
289	区中央	SX1024内SK1024	土製品	ミニチュア鐘	長5.50	幅4.20		型作り成形。中空。	型押しで体部外面に施文。彩色は全て剥落。	焼成良好。色調 にぶい橙色。
290	区北	SX1038	無釉陶器	壺		(9.45)	(9.90)	平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。	体部内外面 回転ナデ調整。体部外面最下部 板状工具によるナデ調整。指頭圧痕が残る。底部外面 一方向のナデ調整。底部外面にヘラ書きで「吉」字施文。	焼成 堅緻。色調 にぶい褐色。備前焼。
291	区北	SX1038	無釉陶器	播鉢	(28.60)	(9.40)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。体部内面 ヘラ描きの播目を施文。	焼成 堅緻。色調 褐色。丹波焼。A 1類。16世紀後半～17世紀前半。

269次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
292	区北	SX1038	無釉陶器	播鉢	(29.40)	(8.40)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。体部内面 ヘラ描きの播目を施文。	焼成 堅緻。色調 橙色。丹波焼。A 1類。16世紀後半～17世紀前半。
293	区北	SX1038	施釉陶器	皿	(13.80)	(3.30)		体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも淡い呉須で界線2条施文。	焼成 ややあまい。肥前系? 陶胎染付皿。
294	区北	SX1038	白磁	皿	(11.90)	2.80	(6.30)	高台は断面三角形で比較的低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は水平に外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉。やや暗い灰白色に発色。底部外面 露胎。	焼成 良好。
295	区	SX1044	土製品	ミニチュア皿	2.25	0.55	1.20	型作り成形。平面形状は八角形。高台は細く低い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内面 白釉施釉の後、鉄絵で松葉文施文。僅かに緑釉を加える。外面 露胎。	焼成 軟質。色調 橙色。
296	区	SX1044	土製品	ミニチュア皿	2.30	0.55	1.20	型作り成形。平面形状は八角形。高台は細く低い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内面 白釉施釉の後、鉄絵で松葉文施文。外面 露胎。	焼成 軟質。色調 橙色。
297	区	SX1044	土製品	ミニチュア高杯	1.30	1.00	1.10	型作り成形。平面形状は六角形。脚は円形。	全面に透明釉施釉。	焼成 軟質。色調 にぶい橙色。
298	区	SX1044	土製品	ミニチュア急須	2.60×2.95	2.00		型作り成形。体部に注口と把手を貼り付ける。	彩色は全て剥落。	焼成 軟質。色調 にぶい橙色。
299	区南部	SK1061	土師器	皿	(7.60)	(1.40)		非ロク口成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。口縁部に穿孔1ヶ所。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	口縁部に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい黄橙色。
300	区中央部	SK1064	土製品	笛	長4.40	幅2.25	厚2.00	吹き口と頂部は欠損。	外面 透明釉施釉の後、点的に緑釉施釉。	焼成 良好。色調 淡黄色。あるいは鳩笛か?
301	区中央墓域・区北部	SK1066	土師器	火鉢	長23.35	(10.30)	幅(22.3)	型作り成形。平面形状は方形もしくは長方形。平底。体部は直立。口縁部は内側に引き出す。	器面は著しく摩滅。体部外面 ナデ調整か?。体部内面 縦方向のナデ調整。底部内面 指ナデ調整。	口縁部内面に煤附着。焼成 ややあまい。色調 明褐色。灰色。
302	区中央部	SK1066	無釉陶器	鉢	(21.40)	10.40	(12.00)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 ナデ調整。底部外面 ヘラおこしの後、ナデ調整。内面 灰釉施釉。	焼成 良好。色調 灰黄褐色。丹波焼。
303	区中央部	SK1066	無釉陶器	播鉢	(30.20)	(11.90)	(16.00)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凹線1条及び凸帯が1条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ調整。底部外面 多方向のナデ調整。体部内面 10条1単位の櫛描きの播目施文。	焼成 良好。色調 にぶい褐色。堺産播鉢。A類。18世紀前半～中頃。
304	区中央東・東南部	SK1066	染付磁器	碗		(2.90)	(4.00)	高台は断面台形状で比較的低い。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	内外面とも透明釉施釉。青味を帯びた灰白色に発色。底部内面 蛇の目状釉ハギ。釉ハギした部分に煤が全面に附着。	肥前系? 灯明皿に転用か?
305	区	SK1067	土師質	埴輪	長(9.20)	幅(9.85)	厚0.85	円筒埴輪片。外面に箍が1条巡る。	器面は摩滅が著しい。外面 横方向のハゲ目調整。内面 ナデ調整。	焼成 普通。色調 浅黄橙色。
306	区中央部	SK1067	土製品	人形	長3.40	幅(2.85)	厚1.20	型作り成形。両型作り。前面と背面をそれぞれ型で作り、中央で貼り合わせる。束帯を着け、笏を持つ人物。	ナデ調整。彩色は全て剥落。	焼成 良好。色調 浅黄褐色。天神像。
307	区中央部	SK1071	施釉陶器	甕	(14.60)	(20.60)	12.35	平底。体部は内彎。口縁部は横方向に拡張する。	口縁部内外面 回転ナデ調整。体部外面上位 櫛描きで葉状文施文。体部外面上半 横方向の刷毛目調整。内外面とも鉄釉施釉。底部内面に砂目跡4ヶ所。底部外面 砂附着。	焼成 堅緻。色調 茶褐色。丹波焼。甕 - 3 - a類。
308	区北部(墓域)	SK1073	土師器	皿	7.35	1.45		非ロク口成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 ヨコナデ調整。器面は一部剥離する。	口縁部に煤附着。焼成 普通。色調 にぶい黄褐色。
309	区北部(墓域)	SK1073	施釉陶器	椀	7.35	4.35	3.90	高台は幅が広く低い。体部はほぼ直立。口縁部は大きく外方にひらく。	内外面とも長石釉施釉。黄色味を帯びた灰白色に発色。	焼成 良好。美濃系。志野。17世紀前半。
310	区北部(墓域)	SX1038・SX1077	無釉陶器	植木鉢	(22.20)	(12.90)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面に円形浮文貼り付け。体部外面 花文貼り付け。外面に赤土塗布。内面 露胎。	焼成 堅緻。色調 赤褐色。丹波焼。
311	区北部墓域	SX1038・SX1077	土製品	さな	10.20	厚1.15		円盤状。8ヶ所穿孔。	器面 ナデ調整。	焼成 良好。色調 橙色。焔炉の分炎盤。
312	区北部	SK1077・SX2077	施釉陶器	灯明皿	12.30	2.85	4.05	平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内面に型作りの菊花文を貼り付ける。内面 櫛描き施文。体部外面 回転ヘラケズリ。内面 透明釉施釉。灰白色に発色。外面 露胎。	口縁部外面に煤点々も附着。焼成 良好。色調 露胎部 浅黄色。京・信楽系。19世紀前半。
313	区北部墓域	SK1083	無釉陶器	急須	5.50	7.90	6.60	平底。体部は直立。口縁部は内傾。口縁部は外上方に摘み出す。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面最下部 ケズリ調整。底部外面 ヘラケズリ調整。体部外面に注口と環状の把手を貼り付ける。	焼成 堅緻。色調 暗赤灰色。備前焼。煎茶器。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
314	区中央南端	SK1085	施釉陶器	皿	(13.80)	4.10	5.20	平底。底部の器壁は厚い。高台裏は中央部をト巾状にケズリ残す。内面の底部と体部の界に浅い段をもつ。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は若干外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。灰黄色に発色。底部内面に砂目跡4ヶ所。	焼成 ややあまい。肥前系。唐津か。
315	区墓域	SK1089	施釉陶器	椀	(8.90)	(5.80)	(4.80)	高台は断面台形状で比較的低い。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 やや黒ずむ呉須で山水文施文。内外面とも透明釉施釉。	焼成 良好。色調 淡黄色。肥前系京焼風陶器。17世紀後半～18世紀前半。
316	区北部墓域	SK1089	施釉陶器	椀		(1.75)	(4.85)	高台は断面長方形で端整。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	内面 やや黒ずむ呉須で山水文施文。内外面とも透明釉施釉。外面の高台脇以下露胎。高台裏に「木下弥」銘スタンプ。	焼成 良好。色調 淡黄色。肥前系京焼風陶器。17世紀後半～18世紀前半。
317	区南部	SK1096	土製品	匣鉢	16.30	12.00	17.50	器形は全体に歪む。平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに外反気味に直上に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。体部外面下半 板状工具による粗い回転ケズリ調整。底部内面 ナデ調整。底部外面 板状工具によるケズリ調整。	焼成 堅緻。色調 褐色。窯道具の匣鉢。
318	区北部墓域	SK2077	土師器	皿	5.70	1.20	2.20	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。橙色に発色。外面 露胎。	焼成 良好。いわゆる柿釉の灯明皿。
319	区北部墓域	SK2077	施釉陶器	尿瓶	(5.70)	(13.00)	14.00	平底。体部は算盤玉状に中位で大きく屈曲する。体部上面に注口と把手を貼り付ける。	外面 回転ナデ調整。外面全面に灰釉施釉。黒色に発色。底部外面 刷毛塗りで薄く灰釉施釉。縁辺に砂附着。内面 露胎。	焼成 良好。丹波焼。
320	区北部墓域	SX2077・SK2007	無釉陶器	擂鉢	35.10	14.05	16.55	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部の一部を捻って浅い片口を作る。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面に凹線1条・凸帯1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ。体部内面 10条1単位の櫛描きの溝目施文。底部内面 ウールマーク状の溝目施文。底部外面 ナデ調整。砂附着。	焼成 堅緻。色調 暗赤褐色。堺産擂鉢。B類。18世紀後半～19世紀初頭。
321	区中央(西半)	SK2098	土製品	飾り板	長4.50	幅(4.65)	厚1.00	型作り成形。背面は扁平。上部に穿孔1ヶ所。	正面に型押しで梅花文施文。背面 指おさえ。	彩色は全て剥落。焼成 良好。色調 淡黄色。
322	区中央部	SX2102	無釉陶器	甕	55.00	60.00	21.70	器形はやや歪む。平底。体部は内彎気味外上方に延びる。口縁部は横方向に拡張し、上面に端面をもつ。体部外面上に凹線をもち。口縁部上面に凹線2条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部内外面 ナデ調整。内外面とも土部塗布。灰褐色に発色。	焼成 良好。色調 灰褐色。丹波焼。甕 - 2 - a類。
323	区中央部	SX1024	施釉陶器	甕	(28.00)	(21.00)		体部は内彎。口縁部は短く直立。口縁部は上面に端面をもち、横方向に拡張する。口縁部上面に凹線2条。	内外面とも赤土部塗布。外面 灰釉を柄杓掛け。	焼成 良好。色調 暗赤褐色。丹波焼。甕 - 2 - b類。
324	区東半	SX1026	土製品	人形	長(4.10)	幅3.30	厚1.70	型作り成形。両型作り。化粧まわしを着けた力士像。頭部と足は欠損。中央部で正面と背面を貼り付け。	ナデ調整。	彩色は全て剥落。焼成 良好。色調 灰褐色。
325	区中央	SX1026	土製品	動物形	長4.20	幅2.45	厚1.95	型作り成形。両型作り。面をもち腰掛ける猿像。中央部で正面と背面を貼り付け。	ナデ調整。	彩色は全て剥落。焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。
326	区北部墓域	攪乱11内SX1028	土製品	?	5.80	5.55		型作り成形。	外面 ナデ調整。底部外面に「」銘 押印。	焼成 良好。色調 浅黄橙色。
327	区北部(墓域)	SX1038	施釉陶器	鉢	(30.40)	14.75	(16.80)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は玉縁状に肥厚し、端部は内側に引き出す。口縁部の一部を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 ナデ調整。内面 全面に灰釉施釉。灰褐色に発色。外面は露胎。	焼成 堅緻。色調 オリブ黒色。丹波焼。
328	区北部(墓域)	SX1038	施釉陶器	鉢	(9.80)	5.40		平底。器壁は全体に薄い。体部外面の最下部に団子状の形骸化した脚を貼り付ける。体部は大きく内彎。口縁部は「L」字状に外方にひらく。	内外面とも灰釉施釉。灰オリブ色に発色。口縁部内面と体部外面下半以下は露胎。	焼成 良好。京焼系。
329	区北部墓域	SX1038	無釉陶器	甕	25.30	(26.15)		体部は大きく内彎。頸部はなく、口縁部は横方向に拡張。口縁部上面に端面をもち、凹線が2条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。体部外面上位の全面に凹線が巡る。内外面とも赤土部塗布。暗赤褐色に発色。	焼成 良好。色調 暗赤褐色。丹波焼。甕 - 2 - a類。
330	区墓域	SX1039	瓦質土器	火鉢	(19.20)	(9.25)		体部は内傾。口縁端部は内側に引き出す。	体部外面 横方向のミガキ調整。体部内面 ナデ調整。	焼成 良好。色調 暗灰色。B2類。
331	区墓域	SX1040	瓦質土器	火消し壺蓋		(2.15)	つまみ径3.75	上面は扁平。上面中央につまみを貼り付け。	外面 ミガキ調整(器面を平滑に仕上げる)。内面 回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 黒色。B類。
332	区墓域	SX1040	瓦質土器	火消し壺	14.15	21.55	16.50	平底。体部は僅かに外反気味に外上方に延び、体部上位で屈曲し、内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内面 回転ナデ調整。体部外面 上位は横方向のミガキ調整。下位は縦方向のミガキ調整。暗文が残る。底部外面 不調整。	焼成 良好。色調 暗灰色。B類。
333	区	SX1047	土師器	火消し壺	11.10	11.75	13.00	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は外反気味に立ち上がり、体部上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。体部外面下位 横方向の板ナデ調整。底部内面 ヨコナデ調整。底部外面 板状工具によるナデ調整。	焼成 良好。色調 浅黄橙色。B類。

269次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
334	区北部(墓域)	SX1048	土師器	火消し壺		(12.70)	(18.50)	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。	体部外面 横方向の板ナデ及びナデ調整。内面の体部-底部ヨコナデ調整。底部外面 板ナデ調整。	焼成 良好。色調 橙色。A類。
335	区北部(墓域)	SX1049	瓦質土器	火消し壺		(7.95)	14.50	器形はやや歪む。粘土紐巻上げ成形。平底。体部は僅かに外反気味に外上方に延びる。	体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 ナデ調整。	焼成 良好。色調 暗灰色。B類。
336	区墓域	SX1050	土師器	火消し壺	18.65	25.90	20.70	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は外反気味に立ち上がり、体部上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面上半 ヨコナデ調整。体部外面下半 板ナデ調整。体部内面 ヨコナデ調整。底部内面 ナデ調整。底部外面 板状工具によるナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。B類。
337	区北	SX1051	土師器	火消し壺	10.85	11.25	14.85	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は外反気味に立ち上がり、体部上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 ヨコナデ調整。底部外面 板状工具によるナデ調整。	体部内面に煤附着。焼成 良好。色調 橙色。B類。
338	区北	SX1051	土師器	火消し壺	11.20	17.90	12.55	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は外反気味に立ち上がり、体部上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 ヨコナデ調整。底部外面 未調整。	焼成 良好。色調 浅黄橙色。A類。
339	区北	SX1051	土師器	火消し壺	11.65	17.70	14.40	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は外反気味に立ち上がり、体部上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 ヨコナデ調整。底部外面 未調整。	焼成 良好。色調 にぶい黄橙色。B類。
340	区墓域	SX1051	土師器	火消し壺	13.25	19.68	(15.40)	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は外反気味に立ち上がり、体部上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。体部外面下位 横方向のケズリの後ナデ調整。底部内面 ヨコナデ調整。底部外面 不調整。	焼成 良好。色調 橙色。B類。
341	区北	SX1051	土師器	火消し壺蓋	14.50	4.45	つまみ径 3.95	器壁は全体に比較的厚い。かぶせ蓋。上面は扁平。上面中央に円形のつまみを貼り付ける。体部は短く直立。	内外面とも回転ナデ調整。	内面に墨書。焼成 良好。色調 にぶい橙色。B類。
342	区墓域	SX1051	土師器	火消し壺蓋	14.70	4.20	つまみ径 3.65	器壁は全体に比較的厚い。かぶせ蓋。上面は扁平。上面中央に円形のつまみを貼り付ける。体部は短く直立。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。B類。
343	区北	SX1051	土師器	火消し壺蓋	(14.50)	4.00	つまみ径 4.45	かぶせ蓋。上部は扁平。体部は直立。上面に円形のつまみを貼り付け。	体部上面 板状工具によるナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 浅黄橙色。A類。
344	区北	SX1051・SX2078	土師器	火消し壺	(18.40)	(15.15)		体部は直線的に外上方に延び、上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は上面に端面をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 横方向のヘラミガキ調整。体部内面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成 普通。色調 橙色。A類。
345	区墓域	SX1052	土師器	皿	13.55	(3.10)		非ロクロ成形。器壁は比較的厚い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。内面の体部-底部 指ナデ調整。外面の体部-底部 ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい黄橙色。骨壺内。
346	区墓域	SX1052	土師器	皿	(3.50)	2.80		非ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外面の体部-底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。内面の体部-底部 ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい黄橙色。
347	区墓域	SX1052・SX1050	土師器	火消し壺蓋	(22.20)	(4.25)	つまみ径 (4.90)	かぶせ蓋。上面は扁平。上面中央に円形のつまみを貼り付ける。体部は短く直立。	上面 回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。A類。
348	区墓域	SX1052	土師器	火消し壺	(20.40)	20.70		粘土紐巻上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。	器面の摩滅が著しい。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 ナデ調整。底部外面 不調整。	焼成 ややあまい。色調 にぶい橙色。A類。
349	区北部(墓域)	SX1056	土師器	火消し壺	(16.95)	14.40		粘土紐巻上げ成形。平底。体部は大きく外反気味に外上方に延び、体部上位で大きく「く」の字状に屈曲する。	体部-底部内外面 ヨコナデ調整。	焼成 良好。色調 橙色。B類。
350	区墓域	SX1057	施釉陶器	皿	(13.38)	2.90	(7.50)	高台は幅が狭く低い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は内側に巻き込む形。	体部内面にヘラ彫りで菊花弁を施文。内外面とも灰釉施釉。明黄褐色に発色。底部内面の釉は円形にかきとる。	焼成時に外面に灰被り。瀬戸・美濃系灰釉陶器。黄瀬戸菊皿。16世紀後半。
351	区墓域	SX1058	無釉陶器	甕	32.70	(29.55)		体部は内彎。体部外面上半に沈線が全面に巡る。口縁部は横方向に拡張し、上面に端面をもち、沈線が3条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。内外面とも薄く赤土塗布。	焼成 普通。色調 暗褐色。丹波焼。甕 - 2 - b類。
352	区墓域	SX1058	無釉陶器	甕	(30.40)	21.00		平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。	体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。内外面とも赤土塗布。	底部内面に灰粉附着。焼成 普通。色調 暗茶褐色。丹波焼。甕 - 2 - b類。
353	区北部	SX1060	瓦質土器	火消し壺	(23.10)	(28.80)	23.35	平底。体部は外反気味に外上方に延び、体部上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内面 回転ナデ調整。体部外面 ヘラケズリ調整の後、横と斜め方向のミガキ調整。暗文が残る。底部外面 板ナデ調整。	焼成 良好。色調 黒色。器面は平滑に仕上げる。B類。
354	区	SX1060	瓦質土器	火消し壺蓋	(23.00)	(2.45)		上面は扁平。体部は直立。	上面 ミガキ調整。多方向の暗文が見られる。体部外面 ミガキ調整。横方向の暗文が見られる。体部内面 ヨコナデ調整。	焼成 良好。色調 黒色。B類。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備 考
					口 径	器 高	底 径			
355	区	SX1061	施釉陶器	蓋	8.85	2.10		体部は扁平な円盤形。上面に棒状のつまみを貼り付ける。口縁端部は斜め方向に切る。	外面 鉄釉施釉の後、灰釉で施文。内面 露胎。	壺蓋。焼成 良好。色調 暗茶褐色。丹波焼。
356	区	SX1061	施釉陶器	壺	10.35	17.10	8.70	平底。やや上げ底気味。体部は内彎。口縁部は斜め上方につまみ上げる。蓋の受け部をもつ。	外面 全面に鉄釉施釉の後、灰釉を雨状に柄杓掛けする。内面及び底部外面は露胎。	焼成 良好。色調 暗茶褐色。丹波焼。
357	区北	SX1077	土師器	皿	9.80	2.15		非ロク口成形。平底。やや丸底気味。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部～底部内外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。
358	区北	SX1077	土師器	皿	10.65	2.40		非ロク口成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部～底部内外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面 「薬師如来」墨書。底部外面 「開」墨書。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。
359	区北	SX1077	土師器	焙烙	(31.40)	(5.85)		型作り成形。平底。体部は僅かに内傾。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 ヨコナデ調整。体部内面 強い指ナデ調整。指頭圧痕が残る。底部内面 多方向のナデ調整。底部外面 ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。播磨型 A2類。
360	区北	SX2068	施釉陶器	德利		(16.70)	9.70	平底。やや上げ底気味。体部は直線的に外上方に立ち上がり、下位で屈曲し、大きく内彎する。頸部より上は欠失。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面 ヘラ書きで「河内 仁条」銘施文。外面 鉄釉施釉。茶褐色に発色。内面 露胎。外面 胡麻状に灰被り。	焼成 堅緻。丹波焼。
361	区北部	SX2073	土師器	火消し壺蓋		(3.70)	つまみ径 4.60	上面は扁平。上面中央に円形の扁平なつまみを貼り付け。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成 やや不良。色調 にぶい橙色。類。
362	区墓域・北部	SX2073・2065	土師器	火消し壺	18.70	(26.35)		粘土紐巻上げ成形。体部は直線的に外上方に延びる。肩部は丸味をもつ。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 ヨコナデ調整。体部内面 指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成 良好。色調 橙色。類。
363	区北部墓域	SX2077	施釉陶器	鉢	8.45	6.50	5.65	平底。体部は直立。口縁端部は水平方向に切る。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。口縁端部上面及び底部外面は露胎。	焼成 良好。京焼系。
364	区中央西側	SD1004	土師器	皿	10.00	2.05		非ロク口成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部～底部内外面 指おさえの後ナデ調整。指頭圧痕が残る。	口縁端部に若干煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。
365	区中央西側	SD1004	土師器	焙烙	(28.60)	(4.70)	(30.00)	型作り成形。平底。体部は僅かに内傾。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。播磨型 D類。
366	区中央西側	SD1004	土製品	亀形or水滴の蓋?	長(5.60)	幅(3.65)	厚(1.45)	型作り成形。頸は別型で作って、後から貼り付け。甲羅に穿孔1ヶ所。	外面 型押しで亀甲文施文。内面 無文。指おさえ痕。	彩色は全て剥落。焼成 良好。色調 にぶい橙色。
367	区中央西側	SD1004	土製品	人形	長5.80	幅(5.00)	厚2.70	型作り成形。両型作り。正面と背面を別型で作って、中央で貼り合わせる。底部外面に穿孔1ヶ所。	ナデ調整。彩色は全て剥落。袷を着て正座する男子像。	焼成 良好。色調 橙色。伏見人形。
368	区中央墓域境	SD1021	土師器	焙烙	(27.50)	(6.00)	(28.40)	型作り成形。平底。やや丸底気味。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 ヨコナデ調整。底部内面 ナデ調整。底部外面 不調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。播磨型 B類。
369	区北部墓域	西壁側溝内	土師器	皿	11.20	2.20		非ロク口成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外面の体部～底部 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	口縁部に部分的に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい橙色。
370	区中央部	第1遺構面直上層	土師器	焙烙	(32.60)	(5.80)		型作り成形。平底。体部は直立。口縁部に耳を貼り付け、さらに紐通しの孔を穿つ。	器面は剥離が著しい。内外面とも回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。播磨型 C類。
371	区中央部西半	遺構面直上	土師器	火鉢	長(9.70)	(7.30)		型作り成形。平面形状は方形。平底。体部は直立。	体部外面上半 縦方向のミガキ調整。体部外面下半 横方向のミガキ調整。体部内面 縦方向のナデ調整。底部内外面 1方向のナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。
372	区中央	SK1066	土師器	火鉢		10.15		型作り成形。平面形状は方形もしくは長方形。平底。体部は直立。口縁部は内側に引き出す。	器面は著しく摩滅。体部外面 ナデ調整か?体部内面 ヨコナデ調整。底部内面 円形にナデ調整。	口縁部内面に煤附着。焼成 ややあまい。色調 にぶい黄褐色。
373	区中央	墓域石垣南	土師器	火消し壺	(12.80)	(9.75)		体部は大きく内彎。口縁部は玉縁状に肥厚。口縁端部は上面に端面をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 ヨコナデ調整。体部内面 指おさえの後、ヨコナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。A類。
374	区北部西半	盛土直下層	土師器	火消し壺	(12.00)	(8.60)		体部は直線的に外上方に延び、上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は玉縁状に肥厚する。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 橙色。A類。
375	区北部	墓域攪乱12	土師器	火消し壺		(11.55)	(18.60)	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。	体部外面 ナデ調整。体部外面最下部 ヨコナデ調整。内面の体部～底部 指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成 良好。色調 橙色。類。
376	区北部西半	遺構面直上	土師器	火消し壺		(12.15)	(13.60)	粘土紐巻上げ成形。平底。体部直立。	体部外面 横方向のナデ調整。体部内面 ヨコナデ・指ナデ調整。底部外面 1方向の板ナデ調整。	焼成 良好。色調 橙色。類。

269次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
377	区北部	墓域 第2テラス	土師器	火消し壺蓋	(14.55)	(3.70)	つまみ径 3.40	器壁は全体に比較的厚い。上面は扁平。上面中央に円形のみみ貼り付け。体部は短く直立。口縁端部は丸味をもつ。	器面の摩滅が著しい。体部内外面 回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 橙色。類。
378	区南部	遺構面直上包含層	施釉陶器	擂鉢	(21.00)	(7.75)	(9.10)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は短く直立。口縁端部は上面に端面をもち、横方向に拡張する。	内面 6条1単位の櫛描きの描目を密に施文する。底部内面同心円状に描目施文。内外面とも鉄釉施釉。外面 全面に灰被り。	焼成 良好。色調 内面 黒褐色。丹波焼。類。18世紀末～19世紀。
379	区南部	遺構直上	無釉陶器	鉢	(39.60)	(10.40)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して断面長方形の縁帯を作る。	口縁部内外面 指おさえの後、強い回転ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内外面 回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 灰赤色。塚・明石産?
380	区南部	遺構直上	施釉陶器	甕	(27.60)	(34.00)	(19.00)	平底。体部は大きく内彎して、ほぼ直上に延びる。頸部は短く直立。口縁部は横方向に拡張して、上面に沈線をもつ。	内外面とも鉄釉施釉。暗赤褐色に発色。底部外面 露胎。	底部内面に目跡。焼成 良好。色調 暗赤褐色。丹波焼。甕 - 3 - a類。
381	区中央部	遺構面直上埋土	無釉陶器	皿	12.50	2.20	3.90	暮筭底。体部は内彎気味に緩やかに外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	底部内面～口縁部外面 回転ナデ調整。外面の体部～底部 回転ヘラケズリの後、丁寧なナデ調整。	焼成 良好。色調 灰黄色。
382	区北	6号棺	土製品	ミチュア灯籠	長 2.80	幅 1.25	厚 0.65	型作り成形。片型作り。背面は扁平。非常に小さい。	正面に型押しで灯籠型を施文。背面は無文。	焼成 ややあまい。彩色は全て剥落。色調 にぶい赤褐色。
383	区北部墓域西半中央	攪乱14	土師器	皿	8.80	2.00		非ロクロ成形。器形は大きく歪む。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外面の体部～底部 指おさえの後、ヘラ状工具によるナデ調整。	焼成 良好。色調 浅黄橙色。
384	区墓域北部	攪乱14	土師器	焙烙	(38.50)	(6.80)		型作り成形。器壁は全体に比較的薄い。丸底。体部は内彎して外上方に延びる。口縁部は断面三角形に肥厚する。口縁部外面に楕円形の把手貼り付け。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内面 ヨコナデ調整。	底部外面に煤附着。焼成 良好。色調 灰黄褐色。焙烙型 類。
385	区	攪乱坑11	土師器	火消し壺	(10.50)	(10.50)		体部は直線的に外上方に延び、上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は玉縁状に肥厚し、上面に端面をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。	焼成 普通。色調 橙色。B類。
386	区北部(墓域)	攪乱坑	土師器	火消し壺	(13.80)	(12.95)		体部は直線的に外上方に延び、上位で大きく「く」の字状に屈曲する。口縁部は玉縁状に肥厚し、上面に端面をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 横・斜め方向のナデ。体部内面 指おさえの後、ヨコナデ調整。	焼成 良好。色調 橙色。A類。
387	区北部(墓域)	攪乱坑	土師器	火消し壺蓋	(23.00)	3.40		体部は短く直立。口縁端部は下面に端面をもつ。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。B類。
388	区北部墓域	攪乱14	無釉陶器	擂鉢	(38.30)	16.75	(14.20)	平底。底部外面 浅い凹線1条。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。底部外面 ナデ調整。体部内面 9条1単位の櫛描きの描目を施文。底部内面 9条1単位の櫛描きの描目を放射状に施文。	焼成 堅緻。色調 黒褐色。明石産擂鉢。A類。18世紀中葉。
389	区	攪乱坑11・墓域攪乱12	施釉陶器	花立て		(18.60)		板状粘土から成形。底部は尖る。	内面 縦方向のケズリ調整。外面 鉄釉施釉。赤黒色に発色。	焼成 良好。丹波焼。
390	区墓域北部	攪乱14	無釉陶器	壺	(15.50)	22.70	(15.30)	平底。体部大きく内彎。体部外面上半に凹線6条。不遊環貼り付け。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。外面 赤土塗布。内面 露胎。	焼成 良好。色調 にぶい赤褐色。丹波焼。甕 - 2 - a類。
391	区南部墓域	攪乱14	施釉陶器	鍋	(20.20)	10.90	(9.00)	平底。やや上げ底気味。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。体部最下部に団子状の形骸化した脚を貼り付ける。口縁部は「L」字状に屈曲。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部上面に把手の貼り付け痕。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内面 回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ。内外面とも鉄釉施釉。暗赤灰色に発色。外面の体部下以下 露胎。	底部外面に煤附着。焼成 良好。京焼系。
392	区北部墓域	攪乱14	施釉陶器	鍋	(18.10)	9.00	(8.50)	器壁は全体に比較的薄い。平底。やや上げ底気味。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。体部外面の最下部に団子状の形骸化した脚を貼り付け。口縁部は外方に水平に折り曲げ、端部は上方につまみあげる。	内外面とも灰釉施釉。灰オリブ色に発色。外面の体部下以下 露胎。底部内面 ハリ支え痕2ヶ所。	底部外面に煤附着。焼成 良好。京焼系。
393	区北部墓域	攪乱14	施釉陶器	花瓶	(8.60)	(13.70)		体部は大きく内彎。頸部は直立。口縁部は大きく外方にひろく。	口縁部内面～外面 白濁釉施釉。灰白色に発色。内面 露胎。	焼成 良好。白釉陶器花瓶。尊形。丹波焼。
394	区南部	SK1007	土師器	皿	9.15	1.95		非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外面の体部～底部 指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面 ヨコナデ調整。	口縁部に煤若干附着。焼成 良好。色調 橙色。
395	区南部	SK1007	土師器	皿	9.00	(2.20)		非ロクロ成形。器形は著しく歪む。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	器面の摩滅が著しい。内外面ともヨコナデ調整。	焼成 普通。色調 浅黄橙色。
396	区南部	SK1007	土師器	鉢	(15.75)	6.90	(13.00)	器形は若干歪む。平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は上面に端面をもつ。	器面の摩滅が著しい。内外面ともヨコナデ調整。	焼成 ややあまい。色調 にぶい橙色。
397	区南部	SK1007	無釉陶器	擂鉢	(32.40)	(13.80)	(16.70)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は若干捻って片口を作り出す。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面 ヘラ描きの描目施文。	焼成 堅緻。色調 橙色。丹波焼。中世 B 3類。16世紀後半。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
398	区南部	SK1007	無釉陶器	擂鉢	(34.50)	14.00	(13.80)	体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面 ヘラ描きの擂目施文。	焼成 堅緻。色調 暗赤褐色。丹波焼。中世 B 3類。16世紀後半。
399	区南部	SK1007	無釉陶器	擂鉢	(21.90)	(8.35)	(8.00)	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して薄い縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁端部は尖り気味。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。体部内面 12条1単位の櫛描きの擂目施文。	焼成 堅緻。色調 暗灰黄色。備前焼 期。16世紀代。
400	区南部	SK1007	無釉陶器	擂鉢	(28.30)	14.15	(12.80)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して薄い縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。体部内面 8条1単位の櫛描きの擂目を放射状に施文した後、7条1単位の斜め方向の擂目を施文。底部内面 ×印状に擂目施文。底部外面 板ナデ調整の後ナデ調整。	焼成 堅緻。色調 灰赤色。備前焼 期。16世紀代。
401	区南部	SK1007	無釉陶器	甕	(35.40)	(40.20)	(14.00)	粘土紐巻上げ成形。平底。体部は大きく内彎して外上方に延びる。口縁部は若干外方にひらき、端部は内傾する。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 縦方向の粗いハゲ目調整 (猫描き)。体部外面の中心から下位 回転ナデ調整。体部内面 指おさえの後、ヘラケズリ調整。指頭圧痕が残る。外面 赤土塗布。自然釉が掛かる。	焼成 堅緻。色調 にぶい赤褐色。丹波焼。甕 類。16世紀後半代。
402	区中央部	SX1007	施釉陶器	甕		(41.60)	腹径 (41.6)	平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。	体部外面 不定方向のナデ調整。体部内面 横及び斜め方向の板ナデ調整と横方向のナデ調整。内面に刷毛塗りで薄く灰釉施釉。外面 露胎。	焼成 堅緻。色調 内面 黒褐色。外面 にぶい褐色。丹波焼。甕 類。
403	区北部	SK1009	土師器	皿	7.75	1.75		非ロクロ成形。器形は著しく歪む。器壁は比較的薄い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	器面の摩滅が著しい。口縁部～体部外面 指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。口縁部～体部内面 ヨコナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。
404	区北部	SK1045	土師器	皿	(9.00)	1.52	(3.90)	非ロクロ成形。器壁は薄い。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	器面は摩滅する。口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面 指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面 ヨコナデ調整。	焼成 ややあまい。色調 にぶい橙色。
405	区南西端	SX1001	土師器	皿	5.80	1.05	3.05	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。橙オリーブ褐色に発色。外面 露胎。	内外面とも煤附着。釉は部分的に剥落。色調 浅黄橙色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
406	区南西端	SX1001	土師器	皿	5.70	0.90	3.55	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面～口縁部外面 透明釉施釉。明褐色に発色。口縁部外面以下 露胎。	外面の露胎部に煤附着。焼成 良好。色調 露胎部 浅黄褐色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
407	区南西端	SX1001	土師器	皿	5.95	1.25	3.20	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面～口縁部外面 透明釉施釉。にぶい褐色に発色。口縁部外面以下 露胎。	内外面とも煤附着。焼成 良好。色調 露胎部 にぶい褐色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
408	区南西端	SX1001	土師器	皿	(5.90)	1.00	(2.40)	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。内面の底部と体部の界に段をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面～口縁部外面 透明釉施釉。にぶい褐色に発色。	外面 全面に煤附着。焼成 良好。色調 露胎部 褐色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
409	区南西端	SX1001	土師器	皿	5.90	0.90	2.48	ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面～口縁部外面 透明釉施釉。にぶい赤褐色に発色。底部外面 露胎。	底部外面に煤附着。焼成 ややあまい。色調 露胎部 にぶい黄褐色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
410	区南西端	SX1001	土師器	皿	5.70	0.95	3.40	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。底部内面に低い凸帯が1条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面～口縁部外面 透明釉施釉。にぶい黄褐色に発色。口縁部外面以下露胎。	外面の露胎部に煤附着。焼成 良好。色調 露胎部 黒褐色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
411	区南西端	SX1001	土師器	皿	(6.90)	1.25	4.00	器形は若干歪む。ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面～口縁部外面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。底部外面 露胎。	焼成 良好。色調 露胎部 褐色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
412	区南西端	SX1001	土師器	皿	(7.20)	1.25	(3.20)	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面～口縁部外面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。底部外面 露胎。	外面 全面に煤附着。焼成 良好。色調 露胎部 褐色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。

269次・平成15年度調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
413	区 南西端	SX1001	土師器	皿	(9.10)	1.80	(3.60)	ロク口成形。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。外面 露胎。	焼成 良好。色調 露胎部に ぶい橙色。いわゆる柿 釉の灯明皿。19世紀前半。
414	区 南西端	SX1001	土師器	皿	8.70	1.80	3.50	ロク口成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。橙色に発色。外面 露胎。	口縁部に煤附着。焼成 良好。色調 露胎部 浅黄色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
415	区 南西端	SX1001	土師器	皿	(5.90)	(0.95)	3.50	ロク口成形。平底。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。底部内面に低い凸帯が1条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 - 口縁部外面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。底部外面 露胎。	焼成 良好。色調 露胎部 明赤褐色。いわゆる柿 釉の灯明皿。19世紀前半。
416	区 南西端	SX1001	土師器	皿	(6.20)	1.15	(3.80)	ロク口成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。底部内面に断面三角形の低い凸帯が1条巡る。	口縁部 - 体部内外面 回転ナデ調整。底部内面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。外面 露胎。	口縁部に若干煤附着。焼成 良好。色調 露胎部 に ぶい橙色。いわゆる柿 釉の灯明皿。19世紀前半。
417	区 南西端	SX1001	土師器	皿	(6.60)	1.15	(3.10)	ロク口成形。平底。体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。底部内面に断面三角形の凸帯が1条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。橙色に発色。外面 露胎。	焼成 良好。色調 露胎部 明赤褐色。いわゆる柿 釉の灯明皿。19世紀前半。
418	区 南西端	SX1001	土師器	皿	8.55	1.50	(4.35)	ロク口成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。底部内面に断面半円形の低い凸帯が1条巡る。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。外面 露胎。	焼成 良好。色調 露胎部 にぶい橙色。いわゆる柿 釉の灯明皿。19世紀前半。
419	区 南西端	SX1001	無釉陶器	擂鉢	(25.70)	8.80	(11.80)	粘土紐巻上げ成形。平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して断面三角形の縁帯を作る。口縁部外面に沈線2条。口縁部内面に沈線2条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。体部内面 9条1単位の櫛描きの描目施文。底部内面 9条1単位の櫛描きの描目施文。	焼成 良好。色調 暗赤褐色。明石産擂鉢。 B 2類。18世紀末 - 19世紀前半。
420	区 南西端	SX1001	施釉陶器	德利	3.75	(12.20)		体部は大きく内傾。口縁部は大きく外方にひろく。口縁部は玉縁状に肥厚する。	外面 - 口縁部内面 鉄釉施釉。灰褐色に発色。体部内面 露胎。	焼成 堅緻。丹波焼。18世紀代。
421	区 南西端	SX1001	施釉陶器	椀	8.75	4.70	2.90	高台は断面台形状で低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は若干外方にひろく。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも灰釉施釉。浅黄色に発色。器面に細かい貫入。外面の高台脇以下露胎。	焼成 良好。京焼系。 B b類。
422	区 南西端	SX1001	施釉陶器	椀	(8.80)	4.90	2.75	高台は断面台形状で比較的低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内外面とも灰釉施釉。灰黄色に発色。器面に細かい貫入。外面に鉄釉で松葉文?施文。外面の高台脇以下露胎。	焼成 良好。京・信楽系。 B a類。小杉椀。19世紀前半。
423	区 南西端	SX1001	施釉陶器	蓋	19.10	(3.30)	つまみ径 5.40	つまみは若干外方にひろく。体部は山笠形で、僅かに内彎気味に外方に延びる。口縁部は尖り気味。	体部外面上位に6 - 7条の沈線施文。内外面とも灰釉施釉。灰色に発色。器面に細かい貫入。	焼成 良好。色調 灰色。広義の京焼系。19世紀前半。
424	区 南西端	SX1001	施釉陶器	鉢	24.25	(12.90)	18.65	平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。	底部外面 ナデ調整。若干煤附着。内外面とも白濁釉施釉。体部外面下位 - 底部外面 露胎。体部外面 灰釉を部分的に流し掛け。	底部内面 胎土目跡6ヶ所。焼成 良好。色調 灰白色。瀬戸・美濃系。
425	区 南西端	SX1001	施釉陶器	灯明皿	5.90	1.25	2.55	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内面に凸帯が1条巡る。凸帯に1ヶ所抉りを入れる。口縁部は丸味をもつ。	内面 透明釉施釉。灰黄色に発色。外面 露胎。露胎部に回転ヘラケズリ痕あり。	焼成 良好。京・信楽系。19世紀前半。
426	区中央 - 南部南 西隅	SD1004	土師器	焙烙	(30.00)	(4.90)		型作り成形。平底。体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	口縁部 - 体部内外面 強いヨコナデ調整。体部外面下半 部分的に不定方向のナデ調整。底部内面 ヨコナデ調整。	底部外面に煤附着。焼成 良好。色調 明赤褐色。播磨型 D類。
427	区	SD2002	無釉陶器	蓋	4.05	0.90	つまみ径 0.60	形態は扁平な円盤形。上面中央に短い棒状のつまみを貼り付け。	上面 赤土部を塗布。下面 基本的には露胎。	焼成 良好。色調 暗褐色。備前焼。
428	区	SK03	施釉陶器	椀		(5.40)	4.20	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。	内外面とも灰釉施釉。浅黄色に発色。外面の高台脇以下露胎。	肥前系。唐津。17世紀前半。
429	区		土師器	蓋	(24.70)	3.30	(25.10)	器壁は比較の厚い。形態は円盤状。体部は短く直立。	上面 板ナデ調整。内面 - 体部外面 回転ナデ調整。	内面に煤附着。焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。火消し壺の蓋。
430	区	重機掘削中	無釉陶器	擂鉢	(36.60)	(9.45)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部内外面に凹線2条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転板ナデ調整。体部内面 11条1単位の櫛描きの描目施文。	焼成 良好。色調 暗赤褐色。明石産擂鉢。 B 2類。18世紀末 - 19世紀前半。
431	区	重機掘削中	施釉陶器	德利	(25.70)		7.70	平底。体部は直立。体部上半に把手を貼り付ける。口縁部は欠落。	内外面とも施釉。褐色に発色。体部上半に楕円形の印花文施文。	重量が重い。焼成 堅緻。洋酒瓶模倣の德利。
432	区		施釉陶器	土瓶	(11.20)	(10.00)		平底。やや上げ底気味。底部の器壁は薄い。体部外面の最下部に脚状の粘土塊貼り付け。体部は算盤玉状に大きく内彎。	外面 灰釉施釉。灰オリブ色に発色。内面及び体部外面下半以下は露胎。	焼成 良好。京焼系。
433	区	包含層	施釉陶器	甕	(18.20)	(18.05)		体部は内彎。頸部は短く直立。口縁部は上面に端面をもち、横方向に拡張する。	内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。体部外面 灰釉を柄杓掛け。	焼成 ややあまい。丹波焼。甕 - 3 - b類。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
434	区	包含層	施釉陶器	壺	(14.50)	(9.40)	平底。やや上げ底気味。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり、上位で若干屈曲する。	内外面とも回転ナデ調整。内面ロクロ目が明瞭に観察される。外面 灰釉施釉、オリブ灰色に発色。内面及び外面の体部下半以下露胎。	底部外面に「信楽 谷 製」銘スタンプ。信楽焼。近代以降。	
435	区	SK12	無釉陶器	植木鉢	(16.60)	12.40	9.40	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は水平に外方につまみ出す。口縁部は丸味をもつ。底部外面 穿孔1ヶ所。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面 白泥のイッチン掛けで施文。	底部外面に砂附着。焼成良好。色調 にぶい赤褐色。丹波焼。
436	区	SK12	無釉陶器	播鉢	(32.60)	(12.70)	体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面 凹線2条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 横方向のケズリ調整。体部内面 9条1単位の櫛描きの播目施文。	焼成 堅緻。色調 赤褐色。明石産播鉢。A類。18世紀後葉。	
437	区	SK13	無釉陶器	播鉢	(17.00)	6.10	(8.60)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して、縁帯を作る。口縁部外面 凹線2条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ナデ調整。体部内面 10条1単位の櫛描きの播目施文。底部外面 不調整。	焼成 良好。色調 赤褐色。堺産播鉢。B類。18世紀後半～19世紀初頭。
438	区	包含層	無釉陶器	播鉢	(29.40)	(3.90)	口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面に凹線1条。	器壁は全体に比較的薄い。口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内面 7条1単位の櫛描きの播目施文。	口縁部外面に自然釉附着。焼成 堅緻。色調 にぶい赤褐色。丹波焼。B類。18世紀中葉～末。	
439	区	包含層	無釉陶器	播鉢	(31.40)	(12.55)	(14.60)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面 凹線2条。口縁部内面 凹線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリの後、回転ナデ調整。底部外面板ナデ調整。体部内面 10条1単位の櫛描きの播目施文。底部内面 櫛描きの播目(ウールマーク状?)を施文。	焼成 良好。色調 赤色。堺産播鉢。C類。19世紀前半～後半。
440	区	包含層	施釉陶器	鉢	(32.80)	17.60	(20.80)	浅い蛇の目高台を削り出す。体部は大きく内彎する。口縁部は玉縁状に肥厚する。	体部内面 回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ。内外面とも白釉施釉。外面の高台脇以下露胎。	体部内面に目跡。焼成 良好。
441	区	包含層	施釉陶器	鉢	19.70	10.45	8.90	高台は幅が広く低い。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は肥厚する。	内外面とも白釉施釉。褐灰色に発色。外面の高台脇以下露胎。浅黄褐色に発色。	底部内面に針目跡3ヶ所。焼成 良好。
442	区	包含層	施釉陶器	甕	(27.90)	(18.60)	体部は大きく内彎。頸部は短く直立。口縁部は大きく外方にひらく。	体部外面にロクロ目が見られる。内外面とも光沢のある鉄釉施釉。暗褐色に発色。	焼成 良好。丹波焼。甕類。	
443	区	包含層	施釉陶器	鍋	18.00	(7.20)	体部は内彎。口縁部は外方にひらく。口縁部は玉縁状に肥厚する。口縁部上面に把手を2ヶ所貼り付ける。	口縁部内外面 回転ナデ調整。体部外面 回転ケズリ調整。内外面とも鉄釉施釉。にぶい赤褐色に発色。底部外面 露胎。	焼成 良好。京焼系。19世紀前半以降。	
444	区	包含層	施釉陶器	椀	(7.20)	4.50	3.40	高台は断面台形状で比較的低い。体部はほぼ直立。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面 鉄釉と白濁釉をイッチン掛けする。内面 灰釉施釉の後、白濁釉を施釉。	焼成 堅緻。ビラカケ椀。
445	区	包含層	施釉陶器	德利	3.00	(10.80)	体部は内彎。頸部は短く直立。口縁部は小さい玉縁状に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも全面に鉄釉施釉。体部外面 白泥のイッチン掛けで「天神?」の文字施文。背面 同様に山形を施文。	焼成 堅緻。丹波焼。いわゆる貧乏德利。19世紀前半。	
446	区	包含層	施釉陶器	御神酒德利	1.65	8.15	3.05	高台は比較的細く高い。体部は内彎し、頸部は僅かに外反する。口縁部は若干内側に肥厚する。	外面 緑釉施釉。淡緑色に発色。外面の高台脇以下は露胎。	焼成 良好。
447	区	包含層	施釉陶器	御神酒德利	(1.60)	9.60	3.10	高台は断面台形状で比較的高い。体部は上半で大きく内彎する。頸部は短く直立。口縁部は丸味をもつ。	外面 緑釉施釉。淡緑色に発色。外面の高台脇以下は露胎。	焼成 良好。梅瓶形。
448	区	包含層	施釉陶器	御神酒德利	1.60	8.85	3.30	高台は断面台形状で比較的高い。体部は上半で大きく内彎する。頸部は短く直立。口縁部は丸味をもつ。	外面 緑釉施釉。淡緑色に発色。外面の高台脇以下は露胎。	焼成 良好。梅瓶形。
449	区	包含層	施釉陶器	インク瓶	2.40	13.25	6.60	平底。体部は直立。頸部は短く直立。口縁部は玉縁状に肥厚する。口縁部の一部を捻って注口を作る。	外面 鉄釉施釉。暗赤褐色に発色。底部外面 露胎。回転ヘラケズリ。	体部外面下に「TOKYO CHAMPION INK」銘をスタンプ。焼成 堅緻。丹波焼。近代以降。
450	区	包含層	施釉陶器	花瓶	(12.30)	10.00	平底。やや上げ底気味。体部は直線的に内傾して立ち上がり、中で屈曲、体部は大きく内彎する。口縁部は大きく外方にひらく。頸部に耳貼り付け。	外面 全面に鉄釉施釉。ガラス質の強い黒色に発色。内面 口縁部内面以下は露胎。底部外面に砂附着。	焼成 堅緻。尊形花瓶。丹波焼。近代以降か?	
451	区	包含層	施釉陶器	乗燭	7.60	4.10	4.50	平底。体部は直立。口縁部は端部を外方に若干つまみ出す。底部内面に灯芯台を貼り付ける。底部外面に穿孔1ヶ所。	内外面とも黒釉施釉。	焼成 良好。色調 暗灰色。
452	区	包含層	土製品	ミニチュア打手の小椀	長(3.50)	幅(3.60)	高2.75	型作り成形。両型作り。中央部に張り合わせ痕が見られる。持ち手は欠損。	外面 型押しで宝尽くし・隠れ裏・唐草文を施文。	彩色は全て剥落。焼成 良好。色調 橙色。
453	区	SK20	土師器	皿	(10.70)	(2.20)	非ロクロ成形。器形の歪みが著しい。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。外面の体部～底部 指おさえの後ナデ調整。内面の体部～底部 指ナデ調整。内外面とも指頭圧痕が残る。	口縁部内外面 煤附着。焼成 良好。色調 にぶい黄褐色。	
454	区	SD01	土師器	焼塩壺	(6.40)	(9.25)	(5.40)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上方につまみ上げる。	口縁部内外面 強いヨコナデ調整。体部内外面 不定方向のナデ調整。底部外面 ナデ調整。体部外面に「泉州麻生」銘スタンプ。	焼成 良好。色調 にぶい橙色。泉州堺産の焼塩壺。

平成15年度・255次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
455	区	SD01	無釉陶器	甕		(9.00)		口縁部は断面楕円形状に肥厚する。口縁部外面に凹線2条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。頸部外面に僅かに叩き目が残る。	口縁部内外面 部分的に灰被り。焼成 堅緻。色調 暗赤褐色。備前焼 期。16世紀代。
456	区	SD02	土師器	焼塩壺蓋	(7.20)	1.95		型作り成形。厚い円盤状。	上面～側面 ナデ調整。下面 布目圧痕が残る。	上面に長方形の角印跡が残る。焼成 良好。色調 明赤褐色。泉州堺産。
457	区	SD02	無釉陶器	甕		(7.40)		口縁部は断面楕円形状に肥厚する。口縁部外面に凹線2条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。	口縁部内外面 部分的に灰被り。焼成 堅緻。色調 暗赤褐色。備前焼 期。16世紀代。
458	区	堀内埋土	土師器	灯明皿	6.00	1.20	2.60	ロクロ成形。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	口縁部～体部内外面 回転ナデ調整。底部外面 不調整。糸切痕が残る。内面 透明釉施釉。明赤褐色に発色。外面 露胎。	口縁部内外面に煤附着。焼成 良好。いわゆる柿釉の灯明皿。
459	不明		無釉陶器	搦鉢	(40.00)	(8.40)		体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部内外面 沈線1条。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部外面 回転ヘラケズリ調整。体部内面 9条1単位の櫛描きの搦目施文。	焼成 堅緻。色調 赤色。堺産搦鉢。C類。19世紀前半～後半。
460	不明		無釉陶器	蓋	11.80	4.40		型作り成形。頂部は円盤状。体部は中空で外面に螺子溝を切る。	上面 鉄釉施釉。にぶい赤褐色に発色。下面 露胎。	焼成 堅緻。丹波焼。硝酸瓶の蓋か？
461	区	SE03	青磁	皿	10.87	2.20	6.55	高台は比較的細く高い。平底。体部は内彎気味に斜め上方に短く延びる。	内外面とも青磁釉施釉。高台裏のみ染付。内面 白釉・緑釉・鉄釉で白菊を上絵付け。	クローム青磁。近代以降。
462	区	SE03	染付磁器	輪花皿	(13.25)	2.90	8.10	蛇の目凹形高台。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は型打ちで波状に整形。	内面 銅版転写で、輪違ひ・鱗文・幾何学文などを施文。外面 銅版転写で草花文施文。	高台裏 露胎。産地不明。近代。
463	区	SE03	染付磁器	鉢	10.00	9.00	11.37	平底。周縁部に幅が広く低い高台を削りだす。体部は直立。口縁部は丸味をもつ。	内面 雷文帯。外面 市松文・龍文・草花文等を濃い酸化コバルトで施文。底部外面 露胎。	近代以降。
464	区	SK02	染付磁器	碗	(11.90)	5.25	(4.84)	高台は比較的高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 簡易な草花文・界線1・2条。底部内面 蛇の目状轆八ギ。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
465	区	SK02	染付磁器	杯	(6.88)	5.40	(4.65)	高台は比較的細く低い。平底。体部はほぼ直立。口縁部は尖り気味。	外面 松葉文？底部内面 ぐずれたコンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系。19世紀前半代。
466	区	SK03	染付磁器	碗	(10.00)	4.80	3.95	底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 簡易な草花文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
467	区	SK06	施釉陶器	鉢	(19.75)	(7.60)	7.55	高台は細く高い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は波状に成形。	外面 白泥を横方向に刷毛塗りした後、透明釉施釉。外面の高台脇以下は露胎。内面 白泥を波状に刷毛塗りした後、透明釉を施釉。底部内面に砂目跡。	産地？
468	区	SK06	染付磁器	碗	9.62	5.25	4.20	底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 コンニャク印判で菊花文施文。内面 無文。	焼成はややあまい。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
469	区	SK06	染付磁器	碗	9.60	5.00	4.40	底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 コンニャク印判で菊花文施文。内面 無文。	焼成はややあまい。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
470	区	SK06	染付磁器	鉢	(14.60)	4.60	(7.82)	型打ち成形。高台は比較的高い。平底。体部は内彎気味に外上方に延び、上位で屈曲。口縁部は外方にひらく。口縁部は輪花状に整形。	内面 粗い筆致で草花文を描く。底部内面 手描きの五弁花文。外面 雲文・界線1・2条。器面に粗い貫入。	焼成はややあまい。半磁器。肥前系 18世紀後半代？
471	区	SK08	青磁	碗		(3.30)	(4.94)	高台には4ヶ所抉りを入れる。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	外面 型押しで波文施文。内面 酸化コバルト・白釉で草花文施文。全面に透明釉施釉。明青灰色に発色。	近代以降か？
472	区	SK08	染付磁器	碗	10.20	4.87	3.30	高台は比較的細く高く、「八」の字状に外方にひらく。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 菱形文・菊花文？を型紙摺りで施文。内面 無文。	近代以降。
473	区	SK10	染付磁器	碗	(10.10)	5.30	4.10	高台は断面台形状。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 簡易な草花文施文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
474	区	SK10	染付磁器	鉢	(15.80)	6.77	(8.82)	高台は断面三角形で低い。平底。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁部は輪花状に成形。	外面 海浜風景。内面 四方禪文・梅樹文などを描く。	肥前系？
475	区	SK27	染付磁器	碗	6.63	3.65	2.62	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	色調 青味を帯びた灰白色。外面 崩れた丸文をコンニャク印判で施文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
476	区	SK27	染付磁器	碗	9.36	5.10	3.90	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	色調 灰白色。外面 劃筆で二重網目文を描く。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
477	区	SK30	染付磁器	碗	12.28	5.50	4.95	高台は断面台形状。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 蕨草文・界線1・2条。内面 無文。底部内面 蛇の目状轆八ギ。	半磁器。肥前系？

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
478	区	SK36	染付磁器	碗	(9.85)	4.88	(4.23)	高台は断面台形状で低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 淡い呉須で菊花文・草花文・界線2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
479	区	SK44	染付磁器	碗	(4.90)	5.35	(4.20)	器壁は全体に薄い。高台は比較的細く低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 淡い呉須で、草花文・流水文・界線1条。内面 無文。	肥前系。19世紀前半以降。
480	区	SX03	染付磁器	皿		(1.72)	(5.74)	高台は断面台形状で低い。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内面 淡い呉須で施文。内面に胎土目1ヶ所。	肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
481	区	SX05	染付磁器	碗	7.40	4.37	3.18	高台は比較的高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 簡易な草花文施文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
482	区	SX07	染付磁器	碗	(8.26)	4.36	(3.22)	高台は細く低い。体部は内彎して外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 氷裂文・菊花文。内面 無文。	肥前系。半球形碗。19世紀前半代。
483	区	SX09	染付磁器	皿		(1.30)	(5.10)	高台は浅く削りだす。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	内面 草花文施文。	畳付・高台裏に砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
484	区	SP01	染付磁器	碗	(9.54)	(5.30)	(4.10)	器壁は全体に厚く、特に底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	外面 コンニャク印判で菊花文施文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
485	区 B-4	第2面 包含層	施釉陶器	椀	(7.06)	5.30	(3.48)	高台は比較的幅が広く高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は僅かに外方にひらく。	外面 灰釉・白濁釉・黒釉を横方向に、イチチン掛け。内面 灰釉施釉の後、白濁釉を二重掛けする。	萩焼系。ピラ掛け椀。
486	区	第2面 精査	施釉陶器	蓋	(13.20)	3.35	つまみ径 (3.45)	山笠形。体部は内彎気味に斜め方向に延びる。つまみは比較的高く、若干外方にひらく。	内面 灰釉施釉。淡緑灰色に発色。外面 白・赤・緑の3種掛け分け。	口縁端部の釉はかきとる。京焼系。明石・舞子焼。
487	区 B-4	第2面 包含層	施釉陶器	蓋	15.18	3.40	つまみ径 3.80	山笠形。体部は内彎して斜め上方に延びる。つまみは若干外方にひらく。	内面 灰釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。外面 トビガンナ施文。鉄釉を薄く施釉。白泥のイチチン掛けと緑釉で草花文施文。	京焼系。明石・舞子焼。19世紀前半以降。
488	区 B-4	第2面 包含層	染付磁器	碗	7.04	5.73	3.34	高台は比較的幅が広い。体部は内彎して立ち上がり。ほぼ直立する。	色調 白色。外面 比較的濃い酸化コバルトで、斜格子文(網目文の変形)・界線1・2条。	産地不明。近代～現代。
489	区 B-5	第2面 包含層	染付磁器	蓋	(10.52)	2.80	つまみ径 3.70	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。つまみは若干外方にひらく。	内外面とも銅版転写で細かい草花文施文。	碗蓋。近代以降。
490	区 A-1・2	第2面 包含層	染付磁器	皿	(12.70)	3.35	(4.98)	高台は浅く削りだす。高台裏にト巾が残る。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調 青味を帯びた灰白色。内面 縦線・界線2条・山水文? 外面 無文。	畳付に若干砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
491	区 B-4	第2面 包含層	染付磁器	皿	12.70	3.65	7.90	平底。底部の器壁は非常に厚い。蛇の目凹形高台。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は玉縁状に肥厚する。	内面 格子状文・界線1条 笹文。底部外面の釉は蛇の目状にかきとる。	肥前系。19世紀前半代。
492	区 B-5	第2面 包含層	色絵磁器	蓋	9.36	3.40	つまみ径 4.00	山笠形。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。つまみは比較的細く高い。	外面 赤絵と金彩で斜格子文と草花文施文。内面 界線・草花文・「魁」を赤絵で施文。	肥前系。
493	区 B-4	第3面 包含層	施釉陶器	椀	(9.20)	(7.00)	(5.10)	高台は断面長方形形状。平底。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面に鉄絵で草花文施文。内外面とも透明釉施釉。淡黄褐色に発色。	焼成 良好。京焼系。B類。
494	区 B-4	第3面 包含層	施釉陶器	鉢		(6.75)	(10.30)	高台は幅が広く、比較的低い。体部は内彎気味に緩やかに外上方に立ち上がる。	内面 白濁釉・鉄釉・緑釉の3釉を掛け分ける。	肥前系。二彩唐津。17世紀後半～18世紀前半。
495	1区	第3面 包含層	青磁	皿		(1.40)	7.60	高台は幅が広く低い。平底。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	型押しで扇面・雲形・束ね熨斗・亀甲文などを施文。内外面とも青磁釉施釉。淡青緑色に発色。畳付の釉かきとり。	肥前系。
496	区 B-4	包含層	染付磁器	碗	9.50	6.58	3.85	高台は比較的細く高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 淡い呉須で半截菊花文施文。内面 無文。	畳付に若干砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
497	区 B-4	第3面 包含層	染付磁器	碗	(9.75)	6.30	4.10	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。	外面 1重網目文と魚文? 内面 無文。	生掛けの為、釉のノリは悪い。器面に虫喰いが目立つ。呉須の発色は淡い。肥前系。17世紀後半代。
498	区 B-4	第3面 包含層	染付磁器	碗	(7.62)	6.21	(4.20)	高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に立ち上がり、ほぼ直立する。口縁端部は尖り気味。	外面 界線2条・矢羽根文・太い界線1条・界線2条。	瀬戸系。19世紀前半以降。
499	区 B-4	第3面 包含層	染付磁器	皿	(12.78)	3.48	4.95	高台は浅く削りだす。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調 青味を帯びた灰白色。内面 縦線・界線2条・御堂に柳文。外面 無文。	畳付に若干砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
500	区 B-4	第3面 包含層	染付磁器	皿		(1.62)	(6.00)	高台は浅く削りだす。体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。	色調 青味を帯びた灰白色。内面 界線1条・簡易な草花文。外面 無文。	畳付に若干砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
501	区 B-4	第3面 包含層	染付磁器	皿		(2.70)	(5.90)	高台は浅く削りだす。高台裏はト巾状に削り残す。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。	色調 やや青味を帯びた白色。内面 界線1条・笹と人物文。	畳付に若干砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
502	区	堀上層・ 包含層 (焼土まで)	染付磁器	碗	(9.80)	5.30	4.60	器壁は全体に薄い。高台は細く低い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 菊唐草文・界線1・2条。底部外面1条に渦福文。内面 無文。	肥前系。京焼碗。19世紀前半代。

255次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
503	区	堀上層・包含層(焼土まで)	染付磁器	鉢	(16.40)	(6.15)		体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	色調 やや青味を帯びた灰白色。釉のノリは悪い。器面に釉切れ・貫入が目立つ。外面 淡い呉須で牡丹唐草文。内面 界線2条・草花文・界線2条。	漳州窯系青花か? 17世紀初頭。
504	区	西側堀包含層	施釉陶器	椀	(9.36)	6.03	(3.24)	高台は比較的細く端正。底部の器壁は比較的厚い。体部は大きく内彎してほぼ直上に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。内外面とも灰釉施釉。外面の高台脇以下露胎。灰白色に発色。外面 緑釉で草葉文施文(上絵付け)。	京焼系。B a類。
505	区	西側堀包含層	青磁	鉢		(4.00)	7.60	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	内面 型押しで花卉文施文。内外面とも青磁釉施釉。	肥前系。
506	区 A B - 1・2	攪乱	染付青磁	碗	(12.68)	6.84	(4.86)	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。明緑灰色に発色。高台裏 渦福施文。内面 四方禪文・界線2条・草花文。	肥前系。18世紀代。
507	区 C-7	攪乱	染付青磁	碗	10.78	5.74	4.10	高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面 トビガンナ施文の後、枇杷の実を型押しして施文し、さらに染付で枝・葉を描く。全面に透明釉施釉。	産地不明。近代～現代。
508	区 B - 4	包含層	染付磁器	碗	(10.40)	7.02	(5.00)	高台は比較的細く高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 淡い呉須で1重網目文施文。内面 無文。	畳付に若干砂附着。肥前系。17世紀後半。
509	区	SK30・31	染付磁器	碗	11.80	5.20	4.40	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内面 無文。外面 コンニャク印判で菊花文・界線1・1条	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
510	区 B - 4 附近	包含層	染付磁器	碗	(9.44)	5.44	(3.94)	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味に収める。	外面 雪持ち笹文・界線2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半代。
511	区 A B - 1・2	攪乱	染付磁器	碗	10.58	4.63	3.70	高台は断面台形状で幅が広く、比較的低い。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 雪持ち笹文・界線1・2条。内面 無文。底部内面 蛇の目状釉八千。	釉ムラが著しい。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
512	区 B - 4 附近	包含層	染付磁器	碗	(9.40)	5.47	(3.60)	高台は比較的細く小さい。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	外面 雪持ち笹文施文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
513	区	調査区南東 攪乱	染付磁器	蓋	7.60	2.30	つまみ径(2.75)	つまみは短く外方にひらく。体部は直線的に外方に延びる。口縁部は尖り気味。	内面 五弁花文。外面 梅と鶯図。	肥前系。
514	区	西側堀包含層	染付磁器	皿		(2.20)	(10.50)	平底。体部は緩やかに外上方に延びる。	内面 草花文?	明青花。16世紀後半代。
515	区 B - 4	包含層	染付磁器	皿	(13.50)	3.00	(6.30)	底部は暮箭底状に浅く削りだす。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内面 簡易な草花文。外面 無文。	畳付に若干砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
516	区 B - 4	包含層	染付磁器	皿	9.45	2.75	5.33	高台は断面台形状。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。口縁部は僅かに輪花状に成形。	体部内面 型押しで水龍を施文。底部内面 草花文。外面 草花文施文。	畳付に砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
517	区	機械掘削	染付磁器	皿	13.70	2.92	7.66	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内面 草花文・界線2条・コンニャク印判で五弁花文施文。底部内面 蛇の目状釉八千。外面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀代。
518	区	東側包含層	染付磁器	皿	14.76	3.55	8.20	高台は断面台形状で幅が広く、低い。平底。底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 簡易な唐草文・界線1・2条。底部外面 界線1条・渦福文。内面 草花文・界線2条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀代。
519	区 A B - 2	包含層	染付磁器	皿	(12.80)	2.50	7.60	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は比較的厚い。平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内面 細かい網目文と金魚文をプリントで描く。外面 界線2条・文字文。	酸化コバルトを使用し、発色は比較的鮮やか。近代以降の製品。
520	区 B - 4 附近	包含層	染付磁器	皿	11.02	2.42	6.26	高台は幅が広く比較的低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	外面 無文。口縁部 鉄釉施釉(口紅)。内面 松葉文・鶴文を型紙摺りで施文。	近代～現代。
521	区 C-7	攪乱	染付磁器	皿	11.00	2.16	5.84	高台は非常に低い。平底。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は尖り気味。	内面 菊花文・格子文などを型紙摺りで施文。口縁部に鉄釉施釉(口紅)。	産地不明。近代～現代。
522	区	調査区南東攪乱	染付磁器	手塩皿	9.58	2.20	5.24	高台は断面三角形で低い。平底。体部は短く外反。口縁部は大きく外方にひらく。	内面 岩に波文? 外面 無文。	産地不明。近代。
523	区	SE03	染付磁器	鉢	10.68	8.32	7.10	平底。周縁部に低い高台を削りだす。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲、ほぼ直立する。	外面 楕文・界線2条・縦線を銅版転写で施文。内面 無文。口縁部・畳付の釉はかきとる。	蓋付き鉢。近代。
524	区	SK63	染付磁器	碗	(11.60)	(4.75)	(4.50)	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面 呉須。簡易な草花文。界線1・2条。内面 界線2・2条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文。	底部内面 蛇の目状釉八千。肥前系。くらわんか手。18世紀後半。
525	区	SX10	染付青磁	蓋	9.80	3.30	つまみ径3.95	つまみは短く直立。体部は大きく内彎する。口縁部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。内面 四方禪文。界線2条 コンニャク印判で五弁花文。	肥前系。18世紀代。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
526	区	SX10	染付磁器	碗	(9.90)	(5.05)	(4.40)	器壁は全体に厚い。高台は断面台形状。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 劃筆で二重網目文・界線1・2条。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
527	区	SX10	染付磁器	碗	(10.50)	(5.30)	4.50	器壁は全体に厚く、特に底部は厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 淡い呉須で簡易な草花文。内面 無文。	生掛けのため釉のノリは非常に悪い。底部内面 蛇の目状釉ハギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
528	区	SX10	染付磁器	碗	11.90	5.50	4.65	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 淡い呉須で丸文・界線1・2条。内面 界線2条・崩れたコンニャク印判で五弁花文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
529	区	SX10	染付磁器	碗	7.40	3.65	3.20	高台は断面台形状で低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 簡易な笹葉文。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
530	区	SX10	染付磁器	碗	(6.60)	3.30	(2.60)	高台は断面台形状で低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 簡易な笹葉文。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
531	区	SX10	染付磁器	碗	(9.80)	(5.45)	(3.80)	高台は比較的細く、高い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線2条・植物文・界線2条。内面 界線2条・草花文。	産地不明。近代以降か？
532	区	SX10	染付磁器	杯	(7.85)	(3.95)	3.55	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	内外面とも草花文施文。	清朝青花写し。瀬戸・美濃系か？19世紀前半以降。
533	区	SX10	染付磁器	皿	11.60	4.25	5.70	器壁は全体に非常に厚い。高台は断面台形状で幅が広く低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 無文。内面 淡い呉須で簡易な草花文・界線2条。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。環状に砂附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
534	区	SX11	施釉陶器	椀	(13.38)	(4.45)		体部は内彎気味に外上方に延び、上位で屈曲、口縁部は外方にひらく。	内外面とも透明釉施釉の後、赤・緑・鉄釉で、縦線を描く。	京焼系。B b類。
535	区	SX11	施釉陶器	蓋	6.80	3.40	つまみ径2.15	体部はほぼ円盤状。扁平なつまみを中央部に貼り付け。かえりは細く高く、直立する。	上面 灰釉施釉の後、白泥のイチン掛けで、網目文・雲文？などを描く。下面 露胎。	京焼系。明石・舞子焼？19世紀前半。
536	区	SX11	施釉陶器	皿	(25.20)	(4.80)		体部は内彎気味に緩やかに外上方に延びる。	内面 鉄釉で馬の目文施文の後、内外面とも透明釉施釉。	美濃系。馬の目皿。19世紀前半以降。
537	区	SX11	施釉陶器	急須の 把手	長(8.30)	幅3.50		型作り成形。中央部に接合痕あり。	外面上面に型押しで施文。人物・山水文？全面に灰釉施釉。淡緑灰色に発色。	広義の京焼系。
538	区	SX11	施釉陶器	燭台		(1.70)	5.85	平底（やや上げ底気味）。底部外面中央に穿孔1ヶ所。体部上面に透かし彫り。	上面 透明釉施釉。灰黄色に発色。底部外面 露胎。	広義の京焼系。
539	区	SX11	施釉陶器	鉢	(15.34)	5.62	6.80	高台は比較的幅が広く高い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	内面 松原と帆掛け舟。底部内面 界線2条・松原と帆掛け舟。外面 松原と帆掛け舟。	焼成はあまい。陶彩染付鉢。
540	区	SX11	青磁	鉢		(3.75)		型作り成形。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は外方に大きくひらく。口縁部は波状に成形。	内面 型押しで草花文施文（牡丹唐草文？）。内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。	三田青磁。19世紀前半。
541	区	SX11	染付磁器	碗	(9.78)	5.30	(4.20)	高台は比較的高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 蟹文？・細かい草花文。内面 不明文・界線2条・崩れた寿字文？	産地不明。近代以降？
542	区	SX11	染付青磁	杯	(7.42)	6.23	(3.78)	高台は断面台形状。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面全面に青磁釉施釉。オリブ灰色に発色。量付の釉かきとり。内面 四方禪文。底部内面 界線1条・コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系。18世紀代。
543	区	SX11	染付青磁	鉢	(13.00)	5.70	(7.60)	型打ち成形。蛇の目状凹形高台。平底。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり、中位で屈曲、また内彎気味に外上方に延びる。口縁部は型打ちで花弁状に成形する。	内面の底部から体部 染付で菊花文施文。口縁部内面～外面 青磁釉施釉。明オリブ灰色に発色。高台裏 露胎。	肥前系。18世紀代。
544	区	SX11	染付磁器	碗	7.75	3.38	3.00	高台は断面三角形。底部の器壁は比較的厚い。口縁端部は尖り気味。	外面 格子状文。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
545	区	SX11	染付磁器	碗	12.10	6.85	(4.83)	器壁は全体に厚い。高台は断面台形状。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 簡素な丸文・界線1・2条。底部内面 界線2条・崩れた五弁花文をコンニャク印判で施文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。砂が環状に附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
546	区	SX11	染付磁器	碗	(11.88)	5.77	4.46	底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調 青味を帯びた灰白色。外面 丸文・界線1・2条。底部内面 界線2条・崩れた五弁花文をコンニャク印判で施文。蛇の目状釉ハギ。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
547	区	SX11	染付磁器	碗	11.06	5.35	4.50	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調 青味を帯びた灰色。外面 丸文・界線1・1条。内面 界線1条。底部内面 蛇の目状釉ハギ。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
548	区	SX11	染付磁器	碗	10.50	4.90	4.35	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。外面 丸文。内面 界線1条・くずれたコンニャク印判で五弁花文？施文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。

255次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
549	区	SX11	染付磁器	碗	(11.80)	4.90	4.95	高台は比較的細く高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調 青味を帯びた灰白色。外面 簡易な草花文・界線1・2条。内面 界線2・2条。底部内面 コンニャク印判で崩れた五弁花文施文。底部内面 蛇の目状軸八千。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
550	区	SX11	染付磁器	碗	(10.90)	5.43	4.50	器壁は全体に厚い。高台は比較的幅が広く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 やや淡い呉須で、丸文・界線2条施文。内面 界線2条・コンニャク印判で、五弁花文施文。底部内面 蛇の目状軸八千。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
551	区	SX11	染付磁器	碗	(12.04)	6.13	(4.40)	底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調 やや青味を帯びた灰白色。外面 丸文・界線1・2条。内面 無文。	肥前系。くらわんか手。18世紀後半。
552	区	SX11	染付磁器	碗	(9.00)	4.84	(3.74)	体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 界線2条・草花文・界線。内面 界線2・2条・不明文。絵付けは稚拙。	明末 - 清初青花磁器の写しか？
553	区	SX11	染付磁器	碗	(11.90)	6.80	6.44	高台は細く高い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 やや濃い呉須で、笹葉文・草花文施文。内面 界線1・2条。底部内面 蝙蝠文？	広東碗。瀬戸系？19世紀前半以降。
554	区	SX11	染付磁器	碗	(13.50)	(6.60)		器壁は比較的薄い。体部は僅かに外反気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 蝙蝠文。内面 口縁部に幾何学文。	京焼風。19世紀前半以降？
555	区	SX11	染付磁器	碗	(12.43)	6.60	(5.85)	高台は比較的細く低い。底部の器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 菱形文・界線2条・草花文・人物文。外面 草花文と梅・書籍・巾着など。	半球形碗。肥前系。19世紀前半？
556	区	SX11	染付磁器	碗	10.75	5.60	4.70	高台は「八」の字状に外方にひらく。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	外面 花鳥文・界線3条。内面 四方禪文・界線2条・草花文。	産地不明。京焼系？19世紀前半以降？
557	区	SX11	染付磁器	碗	(8.82)	4.83	(3.40)	高台は比較的細く高い。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁端部は尖り気味。	外面 太い界線1条・草花文・界線1・2条。内面 太い界線1・2条・底部内面 不明文。	瀬戸系。19世紀前半以降。端反碗 A。
558	区	SX11	染付磁器	碗	(8.70)	(5.00)	(3.50)	体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面 界線1条・草花文・界線1・1条。内面 太い界線1条・界線1・1条。	瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
559	区	SX11	染付磁器	碗	8.98	4.75	3.66	高台は比較的細く高い。平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。(端反碗)	外面 界線1条・寿字・梅花文・界線1・2条。内面 太い界線1条・界線2条・草花文？	瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
560	区	SX11	染付磁器	碗	(8.94)	4.37	(3.84)	高台は細く比較的高い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。(端反碗)	外面 丸文(簡略化された草花文?)。内面 太い界線1条・界線2条・不明文。	瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
561	区	SX11	染付磁器	碗	(9.18)	4.43	(3.72)	高台は細く比較的高い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。(端反碗)	外面 梅花文・壽字文。内面 太い界線1条。界線1・2条。	瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
562	区	SX11	染付磁器	碗	(10.36)	5.78	4.22	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。(端反碗)	外面 界線2条・鶴文・蓮弁文。界線2条。高台裏 文字文。内面 界線2・2条・草花文。	産地不明。19世紀前半以降。
563	区	SX11	染付磁器	碗	(9.28)	5.20	(3.80)	高台は細く高い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は尖り気味。(端反碗)	やや青味を帯びた灰白色。外面 界線1条・唐草文・界線。内面 太い界線・界線2条。	瀬戸系端反碗 A。19世紀前半以降。
564	区	SX11	染付磁器	碗	(9.30)	4.53	(3.52)	高台は細く比較的高い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。(端反碗)	外面 太い界線1条・草花文?・界線2条。内面 太い界線1条・界線2条。	瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
565	区	SX11	染付磁器	碗	(8.70)	5.48	(3.60)	高台は断面三角形で比較的小く高い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。(端反碗)	外面 界線1条・島嶼文・界線2条。内面 界線1・2条・不明文。	焼成 やや軟質。産地不明。端反碗。19世紀前半代。
566	区	SX11	染付磁器	碗	(8.10)	(4.05)	3.40	高台は比較的細い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は僅かに肥厚して外方にひらく。	外面 草花文・文字文・界線1・1条。内面 太い界線1条・界線2条・草花文。	瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
567	区	SX11	染付磁器	碗	(8.62)	(4.62)		体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 太い界線・横線に草花文・界線1条。内面 界線2・1条。	瀬戸系。19世紀前半以降。
568	区	SX11	染付磁器	碗	(8.10)	4.30	(3.16)	底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	口縁端部 鉄軸施釉(口紅)。外面 文字文?施文。底部内面 文字文施文。	瀬戸系端反碗 A。19世紀前半以降。
569	区	SX11	染付磁器	碗	(9.80)	4.45	3.80	高台は比較的幅が広い。平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。(端反碗)	外面 界線1条・草花文・界線1・2条。内面 太い界線1条・界線1条。	瀬戸・美濃系。19世紀前半以降。
570	区	SX11	染付磁器	碗	(10.22)	5.80	(4.00)	高台は比較的高い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 一重網目文。体部内面上半 一重網目文。底部内面 崩れた「永楽年制」銘施文。	産地不明 近代以降か？
571	区	SX11	染付磁器	杯	(6.84)	5.23	3.32	高台は細く低い。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 帆掛け舟・波文。内面 界線2・1条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系。19世紀前半。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備 考
					口 径	器 高	底 径			
572	区	SX11	染付磁器	杯	(6.78)	5.25	(3.56)	高台は細く低い。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 界線1条。梅花文。内面 四方禪文・界線1条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系。19世紀前半。
573	区	SX11	染付磁器	杯	6.80	5.03	3.40	高台は細く低い。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 菊花文。内面 四方禪文。底部内面 界線1条・コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系。19世紀前半。
574	区	SX11	染付磁器	杯	6.86	5.54	3.20	高台は断面台形状で低い。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 草花文?内面 四方禪文・界線1条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系。19世紀前半。
575	区	SX11	染付磁器	杯	(7.24)	5.60	3.44	高台は比較的低い。平底。体部は直立する。口縁端部は尖り気味。	色調 灰白色。外面 やや黒ずむ呉須で、草花文・界線1条。底部内面 界線1条・コンニャク印判で施文するが、流れて文様は不明。	肥前系。19世紀前半代。
576	区	SX11	染付磁器	碗	(7.30)	5.60	3.70	高台は比較的幅が広い。平底。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は上面に端面をもつ。	色調 青味を帯びた白色。外面 横線・草花文・横線・界線1・1条。内面 無文。	豊付の釉は丁寧にかきとる。瀬戸系。18世紀後半以降。
577	区	SX11	染付磁器	碗	(6.80)	5.60	(4.74)	高台は蛇の目状で非常に低い。平底。体部はほぼ直立。	外面 丸文・雲竜文?・界線2条・渦文。内面 雷文帯。	豊付の釉はかきとる。産地不明。
578	区	SX11	染付磁器	碗	(7.44)	(5.51)		高台は欠失。平底。体部は直立。口縁端部は尖り気味。	外面 酸化コバルトで、牡丹文施文。内面 山水文。	産地不明。近代～現代。
579	区	SX11	染付磁器	碗	(8.55)	6.73	(4.20)	高台は断面台形状で低い。平底。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 梅花文。内面 雷文帯。	産地不明。
580	区	SX11	染付磁器	碗	(7.80)	(5.60)		体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 窓絵で花鳥図。百壽図。内面 雷文帯。	産地?19世紀前半以降。
581	区	SX11	染付磁器	碗	(7.04)	5.42	3.68	高台は比較的幅が広い。平底。体部はほぼ直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 斜格子目文状の網目文・界線1条。内面 太い界線1条。底部内面 界線1条・島嶼文。	瀬戸系。19世紀前半以降。
582	区	SX11	染付磁器	杯	6.28	4.18	2.98	高台は断面台形状。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 酒宴図・詩文を施文。内面 無文。底部外面 「逸々」?施文。	近代以降の製品?
583	区	SX11	染付磁器	蓋	11.20	3.35	つまみ径 4.42	つまみは短く直立。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。器壁は全体に比較的薄い。	外面 線描きの草花文。内面 変形の雷文帯?麒麟文?	産地不明。19世紀前半以降。
584	区	SX11	染付磁器	蓋	(10.30)	3.00	つまみ径 (5.0)	つまみは比較的高い。体部は内彎する。口縁端部は尖り気味。	つまみ外面 蝙蝠文。体部外面 界線1条・草花文。内面 界線2・1条・草花文?	瀬戸系。19世紀前半以降。
585	区	SX11	染付磁器	蓋	9.40	2.91	つまみ径 5.60	体部は内彎。口縁端部は尖り気味。上面に円形つまみをもつ。	外面 松葉文・界線1・2条・松葉文。内面 界線2・1条・壽字文。	京焼系。碗蓋。19世紀前半。
586	区	SX11	染付磁器	蓋	(9.15)	3.10	つまみ径 4.13	つまみは比較的高い。体部はほぼ直線的に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 凹凸文・草花文。内面 雷文帯・界線1条・蝶文。つまみ裏に文字文。	碗蓋。588と形態は類似するが、給付けは全く別物。
587	区	SX11	染付磁器	蓋	8.88	2.80	つまみ径 (3.70)	体部は僅かに内彎気味に外方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。	外面 やや滲んだ呉須で、山水文・草花文等を描く。内面 太い界線1条。界線2条。島嶼文。	瀬戸系。19世紀前半以降。
588	区	SX11	染付磁器	蓋	9.70	3.20	つまみ径 4.20	つまみは比較的高い。体部はほぼ直線的に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 線描きの草花文施文。内面 雷文帯・界線1条・菊文?つまみ裏に文字文。	碗蓋。肥前系。19世紀前半以降。
589	区	SX11	染付磁器	蓋	7.85	2.47	つまみ径 3.80	つまみは短く直立。体部は山笠形。	外面 不明文施文。内面 壽字文。	産地不明。近世後半～近代。
590	区	SX11	染付磁器	蓋	7.88	2.29	つまみ径 3.16	つまみは短く直立。体部直線的に緩やかに外方に延びる。口縁端部は僅かに外反する。	外面 蝙蝠・斜格子文。内面 太い界線・界線2条・変形の壽字文?	瀬戸・美濃系。19世紀前半以降。
591	区	SX11	染付磁器	皿	(12.18)	3.50	(4.60)	器壁は全体に非常に厚い。高台は断面台形状で幅が広く低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 無文。内面 非常に淡い呉須で草花文・界線2条施文。	底部内面 蛇の目状釉八ギ。環状に砂附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
592	区	SX11	染付磁器	皿	12.40	2.80	5.86	器壁は全体に比較的厚い。高台は暮笥底状に浅く削りだす。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	色調 青味を帯びた灰白色。内面 簡易な草花文・界線1条・五弁花文(コンニャク印判)。底部内面 蛇の目状釉八ギ。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
593	区	SX11	染付磁器	皿	12.71	3.25	6.62	高台は断面三角形で低い。器壁は全体に厚い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 底部内面は蛇の目状釉八ギ。唐草文・界線2条。外面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
594	区	SX11	染付磁器	皿	(13.80)	3.64	(8.05)	高台は断面台形状で低い。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁部輪状に成形。	外面 唐草文・界線1・2条。底部外面 渦福文。内面 松葉文。	肥前系。
595	区	SX11	染付磁器	皿	(12.80)	4.00	(7.30)	高台は断面台形状で低い。底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面 簡易な唐草文。界線1・2条。底部外面 界線1条・渦福文。内面 草花文・界線1条・五弁花文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
596	区	SX11	染付磁器	皿	(12.35)	3.20	(8.36)	蛇の目凹形高台。高台は浅く削り出す。平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は短く外上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。	外面 無文。底部外面 中央部を残して、周囲は露胎。内面 格子目文・笹文。	産地不明。19世紀前半以降か?
597	区	SX11	染付磁器	皿	(13.04)	3.83	6.10	高台は比較的幅が広く低い。器壁は全体に比較的厚い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	色調 やや黄色味を帯びた白色。外面 簡易な草花文。内面 やや滲んだ呉須で、草花文・界線2条・五弁花文?	瀬戸系。19世紀前半以降。

255次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
598	区	SX11	染付磁器	皿	(13.60)	3.50	(8.00)	蛇の目凹形高台。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面 簡易な唐草文。体部内面 花文・丸文・矢羽根文。底部内面 菊花文。底部外面 中央部を残して、蛇の目粗ハギ。	肥前系。19世紀前半代。
599	区	SX11	染付磁器	皿	(12.72)	3.26	(7.40)	高台は比較的幅が広く高い。平底。体部は内彎して、外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は波状に成形する。	内面 やや濃い呉須で、松葉・竹・鹿・楼閣などを施文。外面 竹文。	近代以降。
600	区	SX11	染付磁器	皿	13.50	4.40	8.58	蛇の目凹形高台。平底。底部の器壁は厚い。高台は細く低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は小さい玉縁状に肥厚する。	外面 源氏香施文。内面 草花文?・界線2条・丸に不明文。	肥前系 19世紀前半以降。
601	区	SX11	染付磁器	皿	(9.25)	2.70	(6.30)	高台は断面台形状。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 梅花文施文。外面 飛天状文施文。	京焼系。19世紀前半以降。
602	区	SX11	染付磁器	皿	7.75	2.15	3.83	高台は断面三角形で低い。平底。体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 海浜風景、島嶼・帆掛け舟・建物などを描く。外面 無文。	産地不明。近世か?
603	区	SX11	染付磁器	鉢	(20.60)	(8.56)		型作り成形。体部は内彎して、ほぼ直上に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	外面 芭蕉文・山水文。口縁部上面 雷文帯。内面の口縁部以下は露胎。	植木鉢か。
604	区	SX11	染付磁器	鉢	(16.44)	8.00	7.74	型打ち成形。口縁部の平面形状は八角形。高台は平面形状は円形で、比較的幅が広く低い。平底。体部は僅かに外反気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面 格子の中に牡丹文・山水文。x状文。内面 格子の中に牡丹文。底部内面 巾着文。	焼き継ぎ痕あり。畳付の釉は丁寧にかきとる。産地不明。
605	区	SX11	染付磁器	鉢	(14.00)	6.54	(9.58)	器壁は全体に比較的厚い。高台は浅く基筒底状に削りだす。平底。体部は直立する。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	口縁端部は露胎。外面 蛸唐草文・界線1・1条。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
606	区	SX11	染付磁器	鉢	(7.00)	5.45	4.20	高台は比較的細く高い。平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部上端にほぼ直立する短い蓋受けをもつ	外面 山形文・菱形に騎馬図と山水図・牡丹唐草文・x文。内面 無文。蓋との接触面は露胎。	蓋付き小鉢。近代か?
607	区	SX11	染付磁器	鉢	(23.50)	7.70	(13.94)	蛇の目凹形高台。平底。底部の器壁は厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は玉縁状に肥厚する。	外面 線描きの草花文。内面 窓絵・草花文・界線2条。底部外面は中央部を残して、露胎。	肥前系。19世紀前半以降。
608	区	SX11	染付磁器	仏具碗	6.05	5.88	3.40	底部外面 蛇の目状に中央部を削る。脚部は短く直立。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 蛸唐草文・界線1・2条。内面 無文。底部外面 露胎。	肥前系。18世紀代。
609	区	SX11	染付磁器	仏具碗	(6.38)	6.40	4.30	平底。底部外面を蛇の目高台状に浅く削り出す。脚部は短く直立。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 コンニャク印判で崩れた菊花文施文。内面 無文。底部外面 露胎。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
610	区	SX11	染付磁器	仏具碗	(7.12)	5.70	4.46	平底。底部外面を幅の広い蛇の目高台状に浅く削りだす。脚部は短く直立。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 斜格子状文。内面 無文。	肥前系。19世紀前半代?。
611	区	SX11	染付磁器	御神酒德利	1.50	7.35	2.60	高台は外周を削り残す形。体部は内彎気味にほぼ直上に延び、頸部は直立する。口縁部は若干外方にひらく。	外面 五曜星?と草花文を描く。	肥前系。
612	区	SX11	染付磁器	御神酒德利		(8.35)	4.40	高台は比較的高い。平底。体部は大きく外反し、外上方にひらく。	体部外面 蛸唐草文施文。	肥前系。18世紀代。
613	区	SX11	染付磁器	御神酒德利		(4.60)	4.15	高台は細く比較的高い。平底。体部は直立。	外面 蛸唐草文・界線2条。内面 露胎。	肥前系。仏花瓶。18世紀代。
614	区	SX12	染付磁器	碗	9.75	5.20	4.10	底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 コンニャク印判で丸に花文・界線2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
615	区	SX13	施釉陶器	碗	(13.10)	(5.85)	4.65	高台は断面台形状で比較的端整。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも白泥をランダムに塗布した後、透明釉施釉。高台は露胎。	京焼系。B a類。
616	区	SX13	染付青磁	碗	(11.18)	6.60	4.60	高台は比較的細く高い。底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。明オリーブ灰色に発色。高台裏 渦福文。内面 四方禪文・界線2条・手描きの五弁花文。	肥前系。18世紀代。
617	区	SX13	染付青磁	碗	(11.28)	6.42	4.18	高台は断面長方形で比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。明オリーブ灰色に発色。高台裏 渦福文。内面 四方禪文・界線2条・五弁花文。	肥前系。18世紀代。
618	区	SX13	染付青磁	碗	(10.94)	6.12	(4.60)	高台は断面台形状。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。明緑灰色に発色。高台裏 染付。内面 四方禪文・界線2条。	肥前系。18世紀代。
619	区	SX13	染付青磁	蓋	(10.50)	3.64	つまみ径(3.84)	つまみは細くやや長い。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉 オリーブ灰色に発色。内面 四方禪文・界線2条・五弁花文。	肥前系。18世紀代。
620	区	SX13	染付青磁	蓋	9.42	3.27	つまみ径3.86	つまみは短く直立。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。つまみ上面 渦福文。内面 四方禪文・界線2条・五弁花文。	肥前系。18世紀代。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
621	区	SX13	染付青磁	蓋	(9.86)	(3.44)		体部はやや内彎。	外面 青磁釉施釉。オリブ灰色に発色。内面 四方禪文。界線2条・五弁花文。	肥前系。18世紀代。
622	区	SX13	染付青磁	蓋	10.20	3.00	つまみ径 3.85	つまみは短く直立。口縁端部は直立する。	外面 青磁釉施釉。明オリブ灰色に発色。つまみの内側渦福文。内面 四方禪文・界線2条・手描きの五弁花文。	肥前系。18世紀代。
623	区	SX13	染付磁器	碗	(11.60)	6.00	4.55	器壁は全体に厚い。高台は断面台形状で比較的高い。口縁端部は尖り気味。	外面 丸文・界線1・2条。内面 四方禪文・界線2条。底部内面 界線1条。コンニャク印判で五弁花文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
624	区	SX13	染付磁器	碗	(12.92)	(5.88)	4.87	高台は外方にひろく。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 淡い呉須で草花文施文。	肥前系？
625	区	SX13	染付磁器	碗	7.60	4.23	3.35	底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雨降り文。界線1・2条。内面 無文。	肥前系。
626	区	SX13	染付磁器	鉢	(16.00)	7.05	(10.16)	蛇の目凹形高台。高台は断面台形状で低い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部は輪花状に整形。	外面 唐草文。内面 唐草文。底部内面 松文(松竹梅文?)。底部外面 中央部を残して、露胎。	産地不明。19世紀前半以降か？
627	区	SD05	染付磁器	皿	(11.00)	(3.15)	(4.20)	高台は比較的細く高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 簡易な草花文・界線1・1条。内面 無文。底部内面 蛇の目状袖八千。	肥前系 18世紀代。
628	区	SD06	染付磁器	碗	8.75	(5.10)	3.45	高台は細く、比較的低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線1条・花鳥文・界線1・2条。内面 界線1条。底部内面 鳥嶼文？	肥前系？
629	区	SD06	染付磁器	碗	(8.10)	(4.30)	(3.20)	高台は断面台形状。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひろく。	外面 壽字文と簡易な草花文。内面 太い界線1条・界線2条・草花文。	瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
630	区	SD06	染付磁器	碗	(9.00)	(4.60)	(3.40)	高台は比較的細い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は若干外方にひろく。	外面 草花文・界線1条。内面 太い界線1条・界線2条。	清朝青花写し。瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
631	区	SD06	染付磁器	蓋	(8.80)	(2.30)	つまみ径 (3.40)	器壁は全体に薄い。つまみは短く直立。体部は僅かに内彎気味に外方に延びる。口縁部は若干外方にひろく。	外面 線描きの簡易な草花文。内面 雷文帯。	産地不明。
632	区	SD06	染付磁器	蓋	(9.55)	(2.55)	つまみ径 4.10	つまみは細く短く直立。体部は緩やかに直線的に外方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひろく。	外面 窓絵で草花文を描く。内面 太い界線・草花文。	瀬戸・美濃系。
633	区	SD06	染付磁器	皿	(12.90)	(4.00)	(8.50)	蛇の目凹形高台。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	底部内面 蛇の目状袖八千。底部外面 (高台裏) 露胎。内面 格子目文・斜め格子文。外面 無文。	肥前系。19世紀前半。
634	区	SD06	染付磁器	段重	9.00	3.50	9.60	平底。体部は直立。口縁部は短く内傾。	外面 やや濃い呉須で牡丹唐草文。内面 無文。接触面は上下とも露胎。	肥前系。
635	区	SD06	染付磁器	御神酒德利	(8.40)	3.50		高台は短く直立。平底。体部は外反して立ち上がり、中位で屈曲、大きく内彎する。	外面 やや黒味を帯びた呉須で、杜若？文施文。内面 露胎。	肥前系。18世紀代。
636	区	SD07	施釉陶器	蓋	10.70	3.70	つまみ径 5.13	つまみは短く直立。体部は直線的に外方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 鉄釉で竹葉文施文の後、白濁釉施釉。内面 鉄釉で波状文施文の後、白濁釉施釉。	瀬戸・美濃系。19世紀前半代。
637	区	SD07	施釉陶器	蓋	(6.60)	(2.50)		山笠形。かえりは直立。	上面 灰釉施釉の後、白泥で網目文・雲形文を施文。下面 露胎。	京焼系。19世紀前半以降。
638	区	SD07	施釉陶器	蓋	(8.60)	(2.50)		山笠形。かえりは直立。	上面 灰釉施釉の後、白泥で松葉文？を施文。下面 露胎。	上面に目跡2ヶ所残る。京焼系。19世紀前半以降。
639	区	SD07	施釉陶器	蓋	(7.30)	(2.75)	つまみ径 1.80	体部は扁平な円盤状。かえりは直立。中央に、歪な楕円形状のつまみを貼り付ける。	上面 白濁釉施釉の後、一重網目文施文。下面 露胎。	産地不明。陶胎染付蓋。
640	区	SD07の裏込め	青磁	蓋	(10.02)	2.93	つまみ径 3.64	つまみは細く、短く直立。体部は内彎して、外方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉の後、緑釉・赤色釉で草花文施文。釉調は明緑灰色。つまみの裏に酸化コバルトで「千峰園製」銘。内面 白磁。	クローム青磁。近代～現代。
641	区	SD07	釉裏青	皿	(10.92)	2.14	(5.60)	高台は幅が広く低い。平底。体部は緩やかにほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。型打ちで口縁部を花卉状に成形。	内面 型打ちで草花文施文。内外面とも淡い呉須を全面に施釉。明青灰色に発色。	肥前系。瑠璃釉皿。
642	区	SD07	染付磁器	碗	(11.80)	5.70	4.98	高台は比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 丸文・界線1・2条。底部内面 界線2条・くずれたコンニャク印判で五弁花文？施文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
643	区	SD07	染付磁器	碗	7.70	3.00	2.70	高台は断面台形状で低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 鳥嶼文？内面 無文。	肥前系。18世紀代。
644	区	SD07	染付磁器	碗	(9.82)	4.14	3.88	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。	外面 簡易な草花文。内面 界線2・1条。底部内面 くずれたコンニャク印判で五弁花文施文。	底部内面 蛇の目状袖八千。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。

255次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
645	区	SD07	染付磁器	碗	(12.90)	(6.30)	(5.10)	高台は比較的細く高い。平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 連続花弁文・丸に人物文・壽字文・界線2条。内面 界線2条・界線1条・人物文?	産地不明。19世紀前半以降か?
646	区	SD07	染付磁器	碗	(9.75)	(5.88)	(4.20)	高台は細く高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線1条・線描きの草花文・界線2・1・1条。内面 線描き施文。底部内面 界線1条・草花文。	肥前系。19世紀前半。
647	区	SD07	染付磁器	碗	(11.20)	(6.15)	(5.00)	高台は「八」の字状に外方にひらく。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 牡丹文。内面 帯状文・界線2条。	肥前系。
648	区	SD07	染付磁器	碗	(11.60)	(4.65)	(4.50)	高台は「八」の字状に外方にひらく。器壁は全体に薄い。体部は内彎して外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 銅版転写で細かい花鳥文施文。口縁部内面 銅版転写で瓔珞文。	明治以降。
649	区	SD07	染付磁器	碗	8.20	(4.00)	(2.90)	高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面 やや濃い呉須で染色体状文。口縁端部 薄く鉄釉施釉。底部内面 簡易な草花文。	瀬戸・美濃系端反碗。19世紀前半以降。
650	区	SD07	染付磁器	杯	(6.53)	5.22	(3.15)	高台は断面台形状。平底。体部は直立。	外面 コンニャク印判で草花文・菱形文。内面 変形した四方禪文。底部内面 界線1条・くずれたコンニャク印判で五弁花文。	肥前系。19世紀前半。
651	区	SD07	染付磁器	皿	(12.10)	3.72	4.78	器壁は全体に厚く、特に底部は厚い。高台は断面台形状で幅が広い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味を持つ。	外面 無文。内面 簡易な草花文。	底部内面 蛇の目状釉八ギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
652	区	SD07	染付磁器	皿	(13.80)	3.22	(7.30)	高台は断面台形状で低い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 無文。内面 唐草文・界線2条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文施文。	底部内面 蛇の目状釉八ギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
653	区	SD07	染付磁器	皿	13.30	(4.05)	7.70	高台は幅が広く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 簡易な唐草文・界線1条。底部外面 界線1条・文字文。内面 草花文・界線2条。底部内面 崩れたコンニャク印判で五弁花文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
654	区	SD07	染付磁器	皿	(11.80)	3.35	7.50	蛇の目凹形高台。底部は外周を浅く削り残す。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は小さな玉縁状に肥厚する。	外面 無文。底部外面 中央部を残して、周囲は露胎。内面 格子目文・笹文。	肥前系。19世紀前半。
655	区	SD07	染付磁器	鉢	(14.10)	(6.35)	(9.80)	高台は断面三角形で低い。平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 蛸唐草文・界線2条。内面 無文。口縁部内面の釉かきとり。	肥前系。18世紀代。
656	区	SD07	染付磁器	鉢	(17.00)	(5.55)	(5.60)	高台は断面台形状で比較的高い。体部大きく内彎して外上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	外面 銅版転写で山水文・李白「雑説」を施文。内面 銅版転写で瓔珞文・界線1条・麒麟文。	近代以降の製品?
657	区	SD07	染付磁器	御神酒德利	(6.30)		腹径(4.8)	体部は大きく内彎。頸部は短く直立。	外面 蛸唐草文。内面 露胎。	肥前系。18世紀代。
658	区	SD07	色絵磁器	蕎麦猪口	(7.70)	6.70	5.60	器壁は全体に薄い。高台は細く高い。平底。体部はほぼ直立。口縁部はやや外方にひらく。	外面 呉須・赤絵・金彩で雲龍文・凸凹文施文。底部内面 呉須で草花文。底部外面 赤絵で「大明成化年製」銘。	肥前系。19世紀前半以降。
659	区	SD07	色絵磁器	鉢	(14.50)	5.90	(10.30)	高台は幅広く低い。平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 赤・青・緑・金襴手で草花文施文。内面 無文。	肥前系?
660	区	SD08	染付磁器	碗	(11.95)	5.15	(4.70)	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面 簡易な草花文。内面 界線2条。	底部内面 釉八ギ。肥前系? 端反碗。
661	区	SD11	染付青磁	蕎麦猪口	(6.88)	6.40	(5.28)	底部の器壁は薄い。高台は外縁を細く低く削り残す形。体部は僅かに外傾。口縁上端はヘラ状工具で波状に整形。	外面 青磁釉施釉。明緑灰色に発色。高台裏 染付。内面 菱形文・界線2条。	肥前系。19世紀前半以降。
662	区	SD11	染付青磁	蓋	9.35	3.10	つまみ径4.30	器壁は全体に厚い。つまみは短く直立。体部は僅かに内彎気味に外方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。淡オリーブ灰色に発色。内面 四方禪文・界線1条。くずれたコンニャク印判で五弁花文施文。	内面 蛇の目状釉八ギ。砂附着。肥前系。18世紀代。
663	区	SD11	染付青磁	皿	14.40	4.43	9.40	蛇の目凹形高台。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面 青磁釉施釉。明緑灰色に発色。内面 界線2条。海浜風景。建物・鳥・帆掛け舟などを描く。底部外面 中央部を残して、蛇の目状に釉八ギする。中央部 渦福文施文。	肥前系。18世紀代。
664	区	SD11	染付磁器	碗	(12.20)	6.40	4.30	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線1条・紅葉唐草文・界線1・2条。内面 界線1条。底部内面 界線1・1条・コンニャク印判で菊花文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
665	区	SD11	染付磁器	碗	(11.79)	6.21	(4.00)	器壁は全体に厚く、特に底部は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線1条・菊唐草文・界線1・2条。内面 界線1・1条。底部内面 界線2条・コンニャク印判で菊花文施文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
666	区	SD11	染付磁器	碗	11.80	6.15	(4.65)	高台は比較的細い。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	界線1条・菊唐草文・界線1・2条。内面 界線2・1条。底部内面 界線1条・コンニャク印判で施文(文様不明)。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
667	区	SD11	染付磁器	碗	(10.10)	5.43	4.45	高台は断面台形状で比較的高い。器壁は全体に厚く、特に底部は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。	外面 劃筆で二重網目文・界線2条。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
668	区	SD11	染付磁器	碗	(7.25)	3.70	(2.60)	底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 崩れた笹葉文施文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらか手。18世紀代。
669	区	SD11	染付磁器	碗	(10.20)	5.00	(4.88)	器壁は全体に厚く、特に底部は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雪輪文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらか手。18世紀後半。
670	区	SD11	染付磁器	碗	(10.70)	4.30	(4.15)	器壁は全体に厚く、特に底部は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雪輪文・界線1・2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらか手。18世紀後半。
671	区	SD11	染付磁器	碗	(9.50)	4.90	5.10	高台は細く高い。器壁は全体に薄い。口縁端部は尖り気味。	外面 山水文・界線2条。底部外面 文字文。内面 界線2条。底部内面 界線2条。草花文。	肥前系。広東碗。19世紀前半。
672	区	SD11	染付磁器	碗	9.30	5.15	4.05	高台は比較的細く高い。平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面 界線1条・菊唐草文・界線1・2条。内面 界線1・1条。底部内面 界線2条・コンニャク印判で菊花文施文。細かい草花文・松葉文。内面 太い界線・界線1条。底部内面 界線2条・草花文。	瀬戸・美濃系? 端尻碗 A。19世紀前半以降。
673	区	SD11	染付磁器	杯	(7.80)	6.20	(3.80)	平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 半截菊花文。并桁状文。内面 界線2条。底部内面 界線1条・崩れたコンニャク印判で五弁花文。	肥前系。19世紀前半。
674	区	SD11	染付磁器	杯	(7.00)	5.50	3.48	高台は断面台形状で低い。平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 草花文・界線1条。内面 界線2条。	肥前系。
675	区	SD11	染付磁器	鉢	(16.20)	(7.95)		底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	外面 界線1条・草花文・界線1条。内面 不明文・界線1条。	肥前系。18世紀代。
676	区	SD11	染付磁器	仏具碗	7.40	5.60	3.80	平底。底部外面は外周を残して浅く削る。脚部は短く直立。体部は内彎して外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 淡い呉須で芒文施文。底部外面 露胎。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
677	区	SD11	染付磁器	水滴	6.50× (5.60)	(3.30)		型作り成形。平面形状は長方形。上面は型押しで菊花文施文。上面に1ヶ所穿孔。葉の部分は呉須で塗る。	葉は呉須で塗る。	京焼系。
678	区	SD12	染付青磁	蓋	(10.60)	3.30	つまみ径 (4.80)	つまみは短く直立。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。淡青緑色に発色。つまみの裏 文字文。内面 菱形文・界線2条・花文。	肥前系。
679	区	SD12	染付磁器	碗	(11.00)	6.90	(6.20)	高台は細く高い。底部の器壁は高い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 八曜星?・界線2条。内面 界線2条。底部内面 界線1条・壽字文?	肥前系。広東碗。18世紀後半～19世紀前半。
680	区	SD12	染付磁器	碗	(10.80)	5.95	(4.00)	高台は細く「八」の字状に外方にひらく。器壁は全体に薄い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 線描きの草花文・界線1・2条。内面 菱形文。底部内面 松竹梅文。	京焼風。肥前系か? 19世紀前半以降。
681	区	SD14	染付磁器	皿	(13.10)	2.80	(7.25)	高台は三角形で低い。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 無文。内面 唐草文・界線2条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文施文。	底部内面 蛇の目状釉八ギ。肥前系。波佐見産。くらか手。18世紀後半。
682	区	SP11	染付磁器	碗	(10.00)	5.40	(3.80)	高台は比較的細く高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 劃筆で二重網目文施文。界線2条。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
683	区	第1面 包含層	染付青磁	蓋	(9.80)	3.05	つまみ径 (3.90)	つまみは短く直立。体部は僅かに内彎気味に外方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面はつまみの裏以外は青磁釉施釉。淡緑灰色に発色。内面 菱形文・界線2条・五弁花文。	肥前系。18世紀代。
684	区	第1面 包含層	染付磁器	碗	(12.30)	6.00	5.20	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 丸文・界線1・2条。内面 界線2条。底部内面 界線2条・くずれたコンニャク印判で五弁花文。	底部内面に重ね焼き痕。肥前系。波佐見産。くらか手。18世紀後半。
685	区	第1面 包含層	染付磁器	碗	(11.10)	5.25	4.70	高台は断面台形状。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 界線1条・草花文・界線1・2条。内面 界線2条。底部内面 界線1条・壽字文。	肥前系。
686	区	第1面 包含層	染付磁器	碗	(10.40)	5.10	(4.20)	器壁は全体に薄い。高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線2条・水龍・界線1条。内面 界線2条。底部内面 界線1条・不明文。	関西系(京焼系)。産地不明。
687	区	第1面 包含層	染付磁器	碗	(10.86)	5.79	(5.08)	高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線1条・蝶・唐草文・界線1・2条。内面 やや太い界線1条・底部内面 界線1条・草花文。	瀬戸・美濃系。広東碗。19世紀前半。
688	区	第1面 包含層	染付磁器	碗	(7.20)	(4.50)		平底。体部はほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	外面 金魚文。内面 無文。	湯呑み碗。近代～現代。
689	区	第1面 包含層	染付磁器	杯	(6.90)	5.43	(3.70)	高台は断面台形状。平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 矢車文? 内面 四方禪文。底部内面 崩れたコンニャク印判で五弁花文。	肥前系。19世紀前半。
690	区	第1面 包含層	染付磁器	鉢	(18.20)	(8.83)		体部は内彎気味に外上方に延びる。端部は上面に水平に端面をもち、端部を水平に若干引き出す。	外面 体部上半 松竹梅文・体部下半 沈線施文。内面 松竹梅文・界線1条。	肥前系。

255次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
691	区	包含層	施釉陶器	鉢		(5.40)		型作り成形。体部は外反気味に外方にひらく。口縁端部は輪花状に整形。	内面 型押しで唐草文・蓆文等を施文。内外面 緑釉施釉。濃緑色に発色。	緑釉陶器。
692	区	東沿い土坑	染付青磁	碗	(12.20)	(7.90)	(5.10)	高台は比較的細く高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 青磁釉施釉。淡青緑色に発色。内面 四方禪文・界線2条。	肥前系。18世紀代。
693	区	SX10・SX13	染付青磁	碗	9.20	5.20	3.40	高台は細く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部はほぼ直立。口縁端部は上面に端面をもつ。	外面 青磁釉施釉。灰オリーブ色に発色。内面四方禪文・界線2条・崩れた五弁花文。	肥前系。18世紀代。
694	区	SD06・07	染付青磁	鉢	(17.60)	(6.15)	(9.30)	蛇の目凹形高台。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面 青磁釉施釉。淡青緑色に発色。底部外面中央 朱書の落款。周辺部は露胎。内面 草花文・界線2条・樓閣・帆掛け舟・島嶼などを施文。	肥前系。
695	区	包含層	色絵磁器	碗	(8.40)	4.60	(4.40)	高台は比較的細い。体部は内彎して外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 朱・群青・緑・茶色の釉で花文などを施文。朱色の界線1条。内面 朱色の界線2条。	産地不明。近代以降か？
696	区	SE06・SD07	染付磁器	碗	(8.40)	4.25	(3.30)	高台は比較的細く高い。底部の器壁は厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文施文。口縁端部鉄釉施釉。内面 無文。	瀬戸・美濃系。19世紀前半以降。
697	区	SX11・包含層	染付磁器	碗	(8.90)	4.82	(3.50)	高台は断面台形状。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味をもつ。	外面 寿字文・梅花文。内面 太い界線1条・界線2条・不明文。	瀬戸・美濃系端反碗。19世紀前半以降。
698	区	SD06・07	染付磁器	碗	10.90	5.80	3.90	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 やや濃い呉須で、草花文(柳文?)・界線2条。内面 網目文・界線1条・草花文?	産地不明。近代以降か？
699	区	包含層	染付磁器	皿	(13.57)	3.65	(7.95)	高台は断面台形状。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 唐草文・界線1・2条。内面 松・梅文・界線2条。	肥前系。18世紀代。
700	区	包含層	染付磁器	皿	(15.10)	4.10	(8.50)	高台は断面台形状。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。型打ちにより口縁部を波状に成形。	外面 無文。底部外面 露胎。内面 宝尽くし図。	肥前系。
701	区	包含層	染付磁器	皿	(9.20)	2.30	(4.60)	型打ち成形。高台は断面台形状で低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。	外面 無文。内面 型打ちで梅花文・唐草文を施文。梅花文の周囲を呉須で彩色。	肥前系or瀬戸・美濃系。
702	区	包含層	染付磁器	鉢(段重)	(14.00)	5.30	(10.32)	高台は細く低い。平底。体部は直立。	外面 草花文施文。内面 無文。口縁部内面・底部外周の釉がきとり。	肥前系。
703	区	包含層	染付磁器	仏具碗	6.67	6.10	3.75	蛇の目凹形高台。脚部は短く直立。底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎して外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 蛸唐草文・界線1・2条。内面 無文。底部外面 露胎。	肥前系。18世紀代。
704	区	排土	施釉陶器	蓋	6.10	3.56	つまみ径1.94	形態は浅い山笠形。中央に球形のつまみを貼り付ける。かえりは細く直立。	上面 白濁釉施釉の後、鉄釉で巴文施文。さらに緑釉をタンパン状に5ヶ所に施釉。下面 露胎。	京焼系。
705	区	排土	染付磁器	碗	(10.00)	5.45	(3.78)	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 劃筆で二重網目文施文。界線1・2条。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
706	区	側溝	染付磁器	碗	(9.64)	5.63	(3.77)	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面 劃筆で二重網目文施文。界線1・2条。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
707	区	機械掘削	染付磁器	蓋	(9.70)	2.98	つまみ径4.94	つまみは短く直立。体部は内彎気味に外方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 柳文?施文。内面 界線2・1条・壽字文。	産地不明。
708	区	包含層	染付磁器	皿	11.58	3.51	4.95	高台は断面台形状で幅が広く低い。器壁は全体に非常に厚い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。	外面 無文。内面 簡易な草花文。界線2条。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。砂が環状に附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
709	区南部	SK1015	染付磁器	皿	(12.00)	3.15	(4.60)	器壁は全体に非常に厚い。高台は断面台形状で幅が広く、低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 無文。内面 格子状文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
710	区	SK1015	染付磁器	仏花瓶	(7.15)	3.90		高台は長方形で低い。体部は大きく内彎。	外面 蛸唐草文・松・竹文。	肥前系。18世紀代。
711	区中央部	SK1017	施釉陶器	急須	(7.40)	3.60	3.70	平底。やや上げ底気味。体部は大きく内彎。口縁部は外方に引き出し、端部を上方向につまみ上げる。	外面 トビガナ施文。一部帯上に鉄釉施釉。内面 全面に鉄釉施釉。	京焼系。煎茶器。
712	区南部	SK1022	染付磁器	碗	(10.40)	5.25	(3.70)	底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 界線1条・コンニャク印判で菊花文・界線1・2条。内面 無文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
713	区南部	SK1022	染付磁器	蓋	10.20	(2.75)		つまみは剥落。体部は内彎。口縁部はほぼ直立。	外面 笹葉文。簡略化された蓮弁文。内面 界線 界線2条・草花文。	碗蓋。産地?19世紀前半代。
714	区中央部	SK1023	施釉陶器	椀	(9.90)	6.45	4.45	高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線1条・草花文・界線1条。底部外面 文字文。内面 無文。	産地不明。陶胎染付椀。
715	区南部	SK1023	染付磁器	碗	(9.60)	6.15	5.00	高台は断面台形状。平底。体部は内彎気味に直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 窓辺の人物図・百壽図。底部外面 「明」銘。内面 無文。	京焼系。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
716	区	SK1024	施釉陶器	蓋	17.10	4.60		つまみは短く直立。体部は内彎。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内外面とも透明釉施釉。外面鉄釉・白泥で施文。口縁部の内外面は露胎。	鍋蓋。京焼系。19世紀前半以降。
717	区中央部	SK1024	染付磁器	碗	11.20	5.15	4.70	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面丸文・界線1・2条。内面界線2・1条。見込みコンニャク印判でつづれた五弁花文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
718	区中央部	SK1029	染付磁器	碗	10.85	5.30	4.40	高台は断面台形状。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面丸文・界線1・2条。内面界線2条。見込み丸文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
719	区中央部	SK1029	染付磁器	碗	10.90	5.65	4.15	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に外上方にひろく。口縁部は僅かに外方にひろく。	外面二重格子目文・界線2・2条。内面界線2・1条。見込み斜格子文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。肥前系。波佐見産。
720	区中央部	SK1047	施釉陶器	蓋	6.50	9.50	5.20	体部は円盤状。かえりは短く直立。	鉄釉と白泥で草花文施文の後、透明釉施釉。身との接触部は露胎。	京焼系。壺蓋。
721	区中央部	SK1048	施釉陶器	杯	(4.80)	2.90	(2.40)	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直上に延びる。口縁部は僅かに外方にひろく。	内外面とも白濁釉施釉の後、赤・黄・緑釉で草花文施文。外面の高台脇以下露胎。	京焼系。
722	区南区	SK1049	染付磁器	碗	7.30	3.55	2.80	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひろく。	外面馬の目文・界線2条。内面太い界線1条・界線1条。	瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
723	区南区	SK1049	染付磁器	碗	(17.20)	7.95	(8.00)	高台は比較的細く高い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひろく。	外面草花文・界線2条。内面界線2条。見込み草花文。	清朝青花写し。19世紀前半。
724	区南西端	SK2001	染付磁器	碗	(10.45)	7.00	4.00	高台は断面三角形で比較的高い。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は尖り気味。	外面くずれた一重綱目文施文。焼成は不良。高台部は露胎。	肥前系。17世紀代の綱目文碗。
725	区南西端	SK2001	染付磁器	碗	(7.85)	(3.55)	3.65	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面粗雑な筆致で唐草文・界線数条。内面無文。	肥前系。くらわんか手。18世紀後半。
726	区中央部	SK2002	染付磁器	碗	(9.30)	5.00	(4.00)	高台は細く、比較的高い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面文字文(漢詩か?)・界線1・2条。内面太い界線1条・界線1・2条。見込み草花文。	瀬戸・美濃系。19世紀前半以降。
727	区中央	SK2098	染付磁器	碗	(9.60)	(4.80)		体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	外面簡易な草花文。内面無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
728	区北部	SX1012	施釉陶器	椀	(8.20)	6.25	(3.80)	高台は断面台形状。比較的低い。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。淡黄褐色に発色。高台脇以下露胎。体部外面に鉄絵で松葉文施文。	京焼系。B類。
729	区北部	SX1012	施釉陶器	椀	(9.60)	(4.95)		器壁は全体に比較的薄い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。淡黄褐色に発色。外面鉄絵で草花文(重?)施文。	京焼系。B類。
730	区北西端	攪乱坑9-SX1012	施釉陶器	椀	(9.90)	(4.80)		体部はほぼ直立。口縁部は丸味をもつ。	内面・外面上半 灰釉施釉。淡黄緑色に発色。外面下半 鉄釉施釉。黒褐色に発色。	瀬戸・美濃系。19世紀前半。
731	区北部	SX1012	施釉陶器	鉢	36.00	12.80	14.70	高台は断面台形状で比較的幅が広く、低い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げ、端部は玉縁状に肥厚し、上方につまみ上げる。	外面口縁部外面のみ灰釉施釉。暗緑灰色に発色。体部外面以下露胎。内面白泥で縦線・波状文・界線2条・波状文・界線2条施文の後、口縁部内面に灰釉施釉。	焼成良好。色調露胎部に近い赤褐色。肥前系。刷毛目唐津。17世紀後半～18世紀前半。
732	区北部	SX1012	施釉陶器	鉢	(19.45)	(8.70)	7.00	高台は比較的高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は玉縁状に肥厚する。	内外面とも灰釉施釉の後、ハケで、白濁釉を横方向に施釉。外面の高台脇以下露胎。	産地?刷毛目唐津に類似。
733	区北部	SX1012	染付磁器	碗	9.80	5.35	4.30	高台は断面長方形。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面コンニャク印判で、丸に桐門と菊花文・界線1・2条施文。底部外面施文。内面無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
734	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(10.30)	5.53	4.00	高台は断面台形状で低い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面コンニャク印判で草花文?・界線2条。内面無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半代。
735	区北部	攪乱坑9-SX1012	染付磁器	碗	(11.40)	(4.85)	4.10	高台は断面台形状。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	外面コンニャク印判で鶴文施文・界線1・2条。内面無文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
736	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(9.70)	4.80	3.90	高台は断面台形状で比較的低い。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	外面コンニャク印判で草花文施文・界線1・2条。内面無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半代。
737	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(9.50)	(5.10)	3.70	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面雪輪文・界線2条。底部外面文字文施文。内面無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半代。
738	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(9.90)	5.50	3.70	高台は比較的細い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は尖り気味。	外面梅花文・露草・界線2条。底部外面文字文。内面無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
739	区北部	SX1012	染付磁器	碗	10.20	5.40	4.30	高台は細く、低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は丸味をもつ。	外面蝶に唐子文・界線2条。底部外面渦福文。内面無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。

269次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
740	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(9.50)	(5.85)	3.80	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 唐草文・界線1・2条。内面 無文。底部外面 文字文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半代。
741	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(9.50)	(5.45)	(3.80)	高台は断面台形状で比較的高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 雪輪文・界線1・2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半代。
742	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(9.70)	(5.80)	(4.30)	高台は断面台形状。体部は僅かに内彎気味に外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雪輪文。内面 無文。	豊付に砂附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
743	区北西端	SX1012	染付磁器	碗	10.00	5.22	3.80	高台は断面台形状。体部は僅かに内彎気味に外上方へ延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雪輪文。内面 無文。	豊付に砂附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
744	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(9.66)	5.43	(3.62)	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文・界線3条。内面 無文。底部外面 不明文。	豊付に砂附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
745	区北部	SX1012	染付磁器	碗	9.86	5.70	(4.22)	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文・界線1条。内面 無文。	豊付に砂附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
746	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(11.74)	6.60	(4.60)	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雪輪文・界線1・2条。底部外面 不明文。内面 無文。	豊付に砂附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
747	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(9.40)	5.33	4.04	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 コンニャク印判でつづれた桐文・界線3条。内面 無文。	豊付に砂附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
748	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(10.52)	5.33	4.14	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雪輪文・界線2条。内面 無文。底部外面 草花文。	豊付に砂附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
749	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(9.80)	(5.20)	(3.40)	高台は断面台形状。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文(松葉か?)・界線1・2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
750	区北部	SX1012	染付磁器	碗	9.85	5.10	4.10	高台は比較的細く、低い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 コンニャク印判と手描きで草花文・界線1・2条施文。内面 無文。	肥前系。くらわんか手。18世紀代。
751	区北部	SX1012	染付磁器	碗	10.00	5.15	4.00	高台は断面三角形で低い。器壁は全体に薄い。体部は内彎して外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文。内面 無文。	肥前系。半球形碗。19世紀前半。
752	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(10.00)	(4.60)	(3.80)	高台は比較的細く、低い。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 氷裂文・菊花文。内面 無文。	肥前系。半球形碗。19世紀前半。
753	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(9.70)	(5.00)	(3.80)	高台は断面三角形で細く低い。器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 氷裂文・窓絵に草花文・山水文・波頭文。内面 無文。	肥前系。半球形碗。19世紀前半。
754	区北西端	攪乱坑9・SX1012	染付磁器	碗	(9.30)	(4.80)	(3.20)	高台は断面台形状。器壁は全体に薄い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 線描きの松葉文か・界線1・2条。内面 界線2・1条。	産地不明。19世紀前半代。
755	区北西端	SX1012	染付磁器	碗	(9.50)	(4.95)	(3.80)	高台は断面台形状。比較的高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 草花文・界線1・2条。底部外面 界線1条・文字文。内面 無文。	肥前系。京焼風碗。
756	区北部	SX1012	染付磁器	蕎麦猪口	7.45	6.00	4.50	平底。高台は外周を低く削りだす。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文・界線2条。底部外面 くずれた文字で「大明年製」銘。内面 無文。	産地不明。19世紀前半以降。
757	区北部	SX1012	染付磁器	碗	(6.65)	(2.85)	(3.00)	高台は断面三角形。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雨降り文施文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。18世紀代。
758	区北部	SX1012・攪乱坑9	染付磁器	蓋	(6.20)	(1.80)		把手は剥落。体部は内彎。かえりは短く内傾。	外面 草花文・細かい格子目文。内面 無文。かえりは露胎。	産地不明。
759	区北部	SX1012	染付磁器	皿	(13.00)	(3.55)	(8.20)	高台は断面台形状で低い。器壁は全体に比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 唐草文・界線1・2条。底部外面 界線1条。内面 墨弾きで草花文・界線2条。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半代。
760	区北部	SX1012	染付磁器	皿	13.30	(3.70)	7.60	高台は断面三角形で低い。平底。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 唐草文・界線1・2条。底部外面 界線1条・渦福文。内面 葡萄唐草文・界線2条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半代。
761	区北部	SX1012	染付磁器	皿	(13.00)	(3.80)	(7.15)	高台は断面台形状で低い。器壁は全体に比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 唐草文・界線1・2条。底部外面 界線1条。内面 草花文・界線2条。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半代。
762	区北部	SX1012	染付磁器	皿	10.90	(3.10)	4.30	高台は断面台形状。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面 比較的濃い呉須で、松葉文。外面 無文。	底部内面 蛇の目状輪八千。砂附着。肥前系。19世紀前半。
763	区北部	SX1012・攪乱坑9	染付磁器	皿	10.30	2.95	5.20	高台は断面台形状で低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 唐草文・界線1・2条。底部外面 界線1条・文字文。内面 紅葉文。	肥前系。
764	区北部	SX1012・攪乱坑9	染付磁器	鉢	(20.10)	(7.70)		体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線1条・草花文。内面 界線2条。	肥前系。18世紀代。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
765	区北部	SX1013	染付磁器	碗	(10.00)	(5.20)	(3.60)	高台は断面台形状。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 菊唐草文・界線1・2条。 内面 無文。	肥前系。19世紀前半代。
766	区中央部	SX1014	染付磁器	碗	(8.50)	(3.80)		体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらき、端部は玉縁状に肥厚する。	外面 不明文。内面 太い界線1条・界線1条。外面 草花文。	瀬戸・美濃系端反碗 A。近代か？
767	区中央部	SX1014	染付磁器	香炉		(5.30)	(5.60)	高台は断面台形状で幅が広く、低い。体部は大きく内彎して外上方に延び、中位で屈曲して、ほぼ直立する。	外面 呉須 施文。内面 露胎。	肥前系。
768	区中央部	SX2002	染付磁器	碗	(9.60)	6.69	4.42	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 一重網目文と水草文？内面 無文。	内面に灰被り、釉切れなどが見られる。肥前系。粗製碗。18世紀代。
769	区中央部	SX2002	染付磁器	皿	(13.12)	2.86	(6.90)	高台は断面三角形。平底。体部は僅かに内彎気味に緩やかに外上方に延びる。	内面 界線1条。草花文。外面 無文。	肥前系。初期伊万里。17世紀前半？
770	区北西部	SD1004 (堀)	無釉陶器	擂鉢	36.50	14.90	(14.50)	平底。底部はやや上げ底気味。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁端部は内側に引き出す。口縁部の1ヶ所を捻って片口を作り出す。	口縁部内外面 強い回転ナデ調整。体部内面 11条1単位の櫛描きの掃目を下から上方向に施文。体部外面 板ナデ調整。底部外面 不調整。	片口上面に「びぜん」銘スタンプ。堺産擂鉢。A類。18世紀前半～中頃。
771	区北西端	SD1004 (堀)	施釉陶器	擂鉢	(34.40)	(13.25)	(10.80)	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁部内面に凹線が1条巡る。	底部内面～体部内面にかけて一連の9条1単位の櫛描きの掃目を施文。口縁部内外面に鉄釉施釉。内面 胡麻状に灰被り。	肥前系。
772	区北西端	SD1004	施釉陶器	鉢	(22.90)	(11.70)	(9.80)	高台は断面台形状で幅が広く、比較的低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は小さい玉縁状に肥厚する。	内面 白濁釉を刷毛で横方向に口口の回転を利用して施釉の後、灰釉を施釉。外面 白濁釉を波状に施釉した後、薄く灰釉を施釉。外面の高台脇以下は露胎。露胎部は回転ヘラケズリが見られる。	肥前系。刷毛目唐津。17世紀後半～18世紀前半。
773	区中央～南部	SD1004	染付青磁	碗	(9.40)	(5.30)	(4.10)	高台は僅かに「八」の字状に外方にひらく。底部の器壁は厚い。体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 青磁釉施釉。内面 四方禪文・界線2・1条。蝶文。高台裏 渦福文。	肥前系。18世紀代。
774	区北西端	SD1004	染付磁器	碗	9.95	5.35	4.25	高台は比較的細い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 コンニャク印判で花文・界線1・2条。内面 無文。底部外面 文字文？	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
775	区北西端	SD1004 (堀)	染付磁器	碗	10.20	5.80	4.20	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	外面 山水文。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
776	区北西端	SD1004	染付磁器	碗	(9.70)	(5.15)	3.80	高台は比較的細く高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 劃筆を用いて二重網目文施文・界線2条。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
777	区北西端	SD1004	染付磁器	碗	(9.90)	5.40	4.00	高台は断面台形状。底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文(雪輪文?)・界線1・1条。内面 無文。高台裏 文字文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
778	区中央部	SD1004 (堀)	染付磁器	碗	(10.05)	5.32	4.05	高台は細く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 劃筆で二重網目文施文。高台裏 福文。内面 一重網目文。菊花文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
779	区北西端	SD1004 (堀)	染付磁器	碗	(10.20)	5.71	(4.08)	高台は比較的細い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雪輪文・界線2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。18世紀代。
780	区北西端	SD1004 (堀)	染付磁器	碗	10.32	5.65	4.08	高台は断面台形状。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雪輪文。底部外面 文字文？	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
781	区北西端	SD1004 (堀)	染付磁器	碗	9.70	4.95	3.90	高台は比較的細い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 コンニャク印判で紅葉文・界線2・1条。内面 無文。底部外面 渦福文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
782	区中央部	SD1004	染付磁器	碗		(5.10)	6.35	高台は細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	外面 草花文・界線2条。内面 界線2条・壽字文	肥前系。広東碗。18世紀後半～19世紀前半。
783	区	西側溝	染付磁器	碗	(7.50)	(3.80)	2.30	高台は断面三角形で低い。体部は大きく内彎してほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 氷裂文・菊花文。内面 無文。	肥前系。半球形碗。19世紀前半。
784	区北西端	SD1004	染付磁器	碗	(8.70)	(6.05)	(5.10)	体部は大きく内彎。口縁端部は尖り気味。	外面 界線2条・牡丹唐草文・界線1・2条。内面 無文。	産地？19世紀代か？
785	区北西端	SD1004	染付磁器	碗	9.70	5.00	3.55	高台は断面三角形。底部の器壁は比較的厚い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。器壁は比較的薄い。	外面 丸に桜花文。内面 無文。	近世後半～近代。
786	区北西端	SD1004 (堀)	染付磁器	碗	(9.70)	6.70	(4.90)	高台は比較的細く高い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。	外面 界線1条・一重網目文・界線1・1条。内面 無文。	肥前系。18世紀中頃。
787	区中央部西端	SD1004 (堀)	染付磁器	碗	(9.40)	(6.88)	4.30	高台は断面台形状で比較的高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 半截菊花文施文。内面 無文。	肥前系。初期伊万里。17世紀前半。

269次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
788	区中央部	SD1004 (堀)	染付磁器	碗	(6.55)	(2.65)	3.10	底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 簡易な草花文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
789	区中央部	SD1004 (堀)	染付磁器	皿	(12.88)	2.85	(4.78)	高台は断面台形状で低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 界線1条・松葉文・界線2条・草花文。外面 無文。	畳付に砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
790	区北西端	SD1004	染付磁器	皿		(1.80)	(5.10)	高台は断面台形状で低い。体部は直線的に緩やかに外上方に延びる。	内面 淡い呉須で、界線2条・草花文。外面 無文。	畳付に砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
791	区中央部	SD1004	染付磁器	皿	(13.40)	(2.65)	6.20	高台は幅が広く低い。底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は輪花状に成形。	内面 界線1条・柳に月文。外面 無文。	畳付に砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
792	区北西端	SD1004 (堀)	染付磁器	皿	(11.90)	(4.00)	4.60	高台は断面台形状で幅が広い。底部の器壁は非常に厚い。	内面 松葉文施文。	底部内面 蛇の目状釉八千。外面の高台脇以下 露胎。肥前系。波佐見産。粗製の皿。18世紀前半。
793	区中央部	SD1004	染付磁器	皿	(12.50)	(3.50)	4.75	高台は断面台形状。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面 界線1条。唐草文・界線2条・コンニャク印判で五弁花文。外面 無文。	底部内面 蛇の目状釉八千。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
794	区中央部	SD1004	染付磁器	皿	11.95	(3.60)	5.10	高台は断面台形状で幅が広く低い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面 二重の円弧文・界線2条。外面 無文。	底部内面 蛇の目状釉八千。肥前系。波佐見産。18世紀後半。
795	区	SD2001	染付磁器	皿	(12.40)	(2.75)	(4.00)	高台は断面台形状で低い。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 草花文。外面 無文。	高台裏にト巾が残る。畳付に砂附着。肥前系。初期伊万里。17世紀前半。
796	区	P1013	染付磁器	皿	(13.10)	(3.10)		器壁は全体に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 唐草文。内面 草花文・胡唐草文・界線2条。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
797	区中央部	SP1016	染付磁器	皿	(12.80)	(3.15)	(7.30)	高台は比較的細い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部～体部型打ちで波状に整形。	外面 無文。内面 草花文	肥前系。19世紀前半以降。
798	区中央部	SP1023	染付磁器	蓋	(9.60)	(3.25)	つまみ径(4.00)	つまみは比較的細く、高い。器壁は全体に薄い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文。内面 太い界線1条・草花文。	瀬戸・美濃系。19世紀前半以降。
799	区	SK1024・P1016	施釉陶器	蓋	(13.40)	(3.50)	つまみ径(3.40)	つまみは短く直立。体部は内彎。口縁部は屈曲して外方にひらく。	外面 トビガナ施文。鉄釉を輪状に施した後、白泥と緑釉で草花文施文。	鍋蓋。京焼系。体部内彎類。19世紀前半以降。
800	区南西部	SX1023・SD1004	半磁器	碗	(10.45)	(7.15)	4.45	高台は断面三角形。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 淡い呉須で、一重網目文。内面 露胎。外面の高台脇以下露胎。施文・施釉・焼成は粗雑。器面に気泡が著しく目立つ。	肥前系。17世紀後半代か？
801	区北部	攪乱坑9・SX1012・SX1004	染付磁器	碗	10.00	5.20	4.00	高台は比較的細い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 コンニャク印判で桐文・界線2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
802	区北部	攪乱坑9・SX1012・SX1004	染付磁器	碗	9.90	4.70	4.10	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。	外面 コンニャク印判で菊花文・界線2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
803	区北部	SD1004・SX1013	染付磁器	碗	(7.60)	(4.15)	3.30	高台は比較的細い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文・界線3条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
804	区北西端	攪乱坑9・SX1012・SD1002	染付磁器	杯	7.70	(4.25)	3.15	底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 コンニャク印判で紅葉文・界線2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
805	区北部	SD1004・SX1013	染付磁器	蕎麦猪口	(7.90)	6.25	5.20	器壁は全体に薄い。高台は断面三角形で低い。平底。体部はほぼ直立。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面 草花文・界線1・2条。底部外面 文字文？底部内面 五弁花文をコンニャク印判で施文。	肥前系。
806	区北部	SD1004・SX1013	染付磁器	皿	(13.70)	4.00	(8.00)	高台は断面三角形で低い。平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 唐草文・界線2条・渦巻福文。内面 草花文・界線2条・コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
807	区北部	SX1012・SD1004	染付磁器	皿	(13.50)	(3.95)	(8.80)	高台は断面三角形で比較的低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 菊唐草文・界線1・2条。底部外面 界線1条。口縁端部 鉄釉施釉。内面 波頭文・界線2・2条・龍文？	肥前系。19世紀前半以降。
808	区中央部	SK1029・SK2002	染付磁器	仏具碗	5.15	5.55	3.10	器壁は全体に厚い。脚部は短く直立。体部は外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 半載菊花文・界線1条。内面 無文。底部外面 露胎。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
809	区北部	SX1012・SD1004・攪乱坑9	染付磁器	仏具碗	7.10	(4.90)	3.50	蛇の目凹形高台。脚部は短く内傾。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雨降り文。底部外面 露胎。内面 無文。	肥前系。19世紀前半。
810	区	攪乱坑8	施釉陶器	蓋	1.75	1.45		型作り成形。中実。外面 型押しで蓮弁文施文。	外面 緑・黄釉で三彩風に施釉。下面 露胎。	ミニチュア 壺蓋。
811	区南端	盛土内	施釉陶器	德利		(24.00)	9.00	平底。体部は中位までほぼ直立。中位で屈曲して内傾する。頸部はほぼ直立。	白泥を横方向に八ヶ塗り。横縞状。透明釉施釉。底部外面 露胎。	産地？

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
812	不明		染付磁器	碗	(9.90)	5.00	(4.10)	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 梅花文・雪輪文・界線1条。内面 無文。	畳付に砂附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
813	中央礎石附近	西側溝	染付磁器	碗	(9.50)	(4.95)		体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雨降り文・界線1条。内面 無文。	肥前系。19世紀前半以降。
814	区	遺構面直上精査	染付磁器	蓋	(8.75)	2.00		体部は僅かに内彎。かえりは短く内傾する。つまみは剥落。	外面 同心円を施文。内面 無文。	産地？
815	区南端	盛土内	染付磁器	皿	8.10	2.20	4.70	高台は断面台形状。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。口縁部は型打ちで輪花状整形。	外面 唐草文・界線1・1条。内面 界線1条・雷文帯・界線2条・草花文。底部外面 不明文。	産地不明。
816	区中央	SX1024内SK1024	染付青磁	碗	10.50	6.30	4.30	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。底部外面 渦福文。内面 四方禪文・界線2条・五弁花文。	肥前系。18世紀代。
817	区中央	SK1062	染付磁器	碗	(10.50)	(5.50)	4.00	高台は細く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 太い界線・草花文(菊花文?)・簡易な草花文。界線1条。内面 滲んだ界線1条・界線1条・草花文?	瀬戸・美濃系。19世紀前半以降。
818	区中央	SK1066	染付青磁	碗	(10.80)	(6.00)	(4.40)	高台は「八」の字状に外方に踏ん張る。体部はほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。暗黄緑色に発色。内面 四方禪文・界線2条。	肥前系。18世紀代。
819	区中央	SK1066	染付磁器	碗	10.60	5.00	4.50	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文・界線1・2条。内面 無文。	底部内面 蛇の目状釉八ギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
820	区中央	SK1066	染付磁器	皿	(12.20)	3.60	4.30	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 無文。内面 簡易な唐草文・界線2条。	底部内面 蛇の目状釉八ギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
821	区中央	SK1067	施釉陶器	椀	(7.20)	(3.30)		体部は直立。	内外面とも灰釉施釉の後、外面中に横縞状に鉄釉を施釉。	瀬戸・美濃系。19世紀前半以降。
822	区南部・中央部南側	SK1068	青磁	鉢	(14.80)	(3.95)		体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	外面 青磁釉施釉の後、白・茶・緑釉で植物文施文。内面 透明釉施釉。	近代以降のクローム青磁。
823	区中央	SK1069	施釉陶器	急須	(8.80)	(9.10)	7.15	やや上げ底気味の平底。体部は内彎してほぼ直上に延びる。口縁部は短く直立。	体部に1ヶ所注口を貼り付け。口縁部につる掛けを2ヶ所貼り付け。外面 体部上半に白濁釉施釉の後、胴に「花野峰」を鉄釉で施文。内面 体部のみ灰釉施釉。	広義の京焼系。19世紀前半以降。
824	区中央	SK1069	染付磁器	鉢	(9.10)	(7.05)	(7.00)	平底。周縁部を残して、内側を浅く削り出す。体部は直立。	外面 銅版転写で扇・梅花・蓮弁文などをプリントする。内面 無文。	近代以降。
825	区北部(墓域)	SK1073	染付磁器	碗	(11.00)	(5.15)		器壁は比較的薄い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線2条・梅花・草花文。内面 界線1条。	肥前系。
826	区北部(墓域)	SK1077	青磁	急須	5.10	(5.50)	(9.70)	型作り成形。体部は内傾。口縁部 短く内傾。	体部外面 型押しで唐草文施文の後、青磁釉施釉。暗黄緑色に発色。口縁部内面 露胎。	三田青磁。19世紀前半。
827	区北部(墓域)	SK1077	染付磁器	碗	(10.80)	(5.05)		体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面 梅と笹文。内面 無文。	産地・時期とも不明。端反碗。
828	区北部(墓域)	SK1077	染付磁器	碗	8.85	5.05	4.00	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部が外方にひらく。	外面 太い界線1条・草花文・界線1条。内面 太い界線1条・界線1条・草花文。	瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
829	区北部(墓域)	SK1077	染付磁器	杯	(6.65)	(5.50)	3.65	高台は比較的細く低い。底部の器壁は厚い。平底。体部は直立。	外面 半截菊花文・菱形文。内面 界線2条。底部内面 くりしたコンニャク印判で五弁花文。	肥前系。19世紀前半。
830	区北部(墓域)	SK1077	染付磁器	蓋	8.50	2.60	つまみ径3.60	つまみは短く直立。山笠形。体部は直線的に外方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも線描きの鳥に藤?文施文。	肥前系。
831	区中央	SK2101	染付磁器	碗	8.00	4.95	3.40	高台は断面台形状。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雨降り文・界線1・2条。内面 無文。	肥前系。19世紀前半以降。
832	区墓域	SX1023	染付青磁	碗	(8.85)	4.65	3.35	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 青磁釉施釉。淡黄緑色に発色。底部内面 五弁花文施文。	肥前系。18世紀代。
833	区墓域	SX1023	染付磁器	仏具碗	(5.70)	5.35	3.50	底部は周縁部を残して浅く削り出す。脚は短く直立(中実)。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 丸文。底部外面 露胎。内面 無文。	肥前系。
834	区北部墓域	SX1028・攪乱11	土製品	ミニチュア皿	4.45	1.22	2.10	型作り成形。外面から見ると梅花状に成形。	外面 型押しで施文・露胎。内面 緑釉施釉。	焼成は軟質。玩具か。
835	区北部墓域	SX1028・攪乱11	土製品	ミニチュア碗	4.00	2.00	1.30	型作り成形。高台は貼り付け。体部は内彎気味に外上方に延びる。	外面 回転ナデ調整。内面 - 口縁部外面 緑釉施釉。体部外面以下は露胎。	焼成は軟質。玩具か。
836	区北部墓域	SX1029	染付青磁	蓋	(9.60)	(3.20)	つまみ径4.10	つまみは短く、やや外方にひらく。体部は短く外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 青磁釉施釉。つまみの裏 渦福文。内面 四方禪文・界線2条・五弁花文。	肥前系。18世紀代。
837	区北	SX1038	染付磁器	仏具碗	5.80	5.70	(4.15)	平底。高台は周縁部に浅く削り出して成形。脚部は短く直立。(中実)。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 コンニャク印判で紅葉文施文。内面 無文。	畳付に砂附着。肥前系。18世紀代。

269次調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
838	区北部墓域	SX1038	施釉陶器	碗	9.10	(5.35)	3.20	高台径は小さく、若干外方にひらく。体部は大きく内彎。口縁端部は尖り気味。	内外面とも灰釉施釉。外面の高台脇以下 露胎。外面 赤・緑?・鉄釉で草花文(桜花・笹葉など)を施文。内面 無文。	京焼系。A 類。
839	区北	SX1038	染付磁器	碗	10.10	5.15	4.10	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。口縁端部は尖り気味。	外面 劃筆で二重網目文・界線1・2条。内面 一重網目文。見込みは菊花文施文。	肥前系。18世紀代。
840	区北	SX1051	染付磁器	碗	(9.75)	4.25	3.75	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 草花文。内面 草花文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
841	区北部墓域	SX1051	染付磁器	碗	9.75	(5.35)	4.05	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 コンニャク印判で丸に紅葉文・界線1・1条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半
842	区北部墓域	SX1051	染付磁器	碗	10.20	(6.15)	(4.60)	高台は断面台形状で比較的細く高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面 二重格子文と窓絵で山水楼閣文。内面 円弧状文・界線1条・草花文。	産地?19世紀前半代?
843	区北	SX1077	施釉陶器	椀	10.20	6.00	4.30	高台は断面台形状で低い。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面中位に凹線が5条巡る。内面~口縁部外面 鉄釉施釉。淡黄緑色に発色。外面の体部~底部 灰釉施釉。暗茶褐色に発色。	瀬戸・美濃系腰錆茶椀。19世紀前半以降。
844	区北	SX1077	染付磁器	碗	11.30	4.45	4.00	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 梅花文。内面 無文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
845	区北部	SX2066	染付磁器	皿	12.95	2.95	6.25	高台は断面台形状で低い。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 無文。内面 露草・界線2条・紅葉文。	畳付の釉かきとり。器面に虫喰いが見られる。肥前系。初期伊万里。
846	区北部	SX2077	施釉陶器	蓋	5.85	2.65	つまみ径1.75	器形は浅い山笠形。かえりは直立。中央部に扁平な渦巻き状のつまみを貼り付ける	上面に灰釉を施釉の後、白泥で草花文・斜格子文を施文。上面は灰被りで白っぽく変色。下面露胎。	京焼系。壺蓋。
847	区北部	SX2077	染付磁器	鉢	(13.00)	(3.65)	(7.80)	高台は断面三角形。底部の器壁は比較的厚い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 簡易な唐草文・界線1・2条。内面 草花文・界線2条。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
848	区北	SX2079	染付磁器	碗	(9.45)	(5.45)	3.90	高台は比較的細い。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。	色調 灰色。外面 草花文・界線2条。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
849	区中央西側	SD1004	染付磁器	碗	(7.80)	(4.45)	(3.30)	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雨降り文。内面 無文。	肥前系。19世紀前半代。
850	区南部	SD2021	染付磁器	杯	7.35	6.10	3.95	高台は断面台形状で低く、細い。底部の器壁は厚い。平底。体部は直立。口縁部は上面に水平に端面をもつ。	外面 界線1条・梅花・松・菊花文・界線1・1・1条。内面 界線2・1条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文。	肥前系。19世紀前半。
851	区中央	SX1024・SK1024・SK1067	染付磁器	碗	11.15	6.05	4.00	高台は「八」の字状に外方に踏ん張る。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 墨弾きで桜花文施文・界線1・2条。内面 菱形文・界線2条・毬状文	肥前系。19世紀前半。
852	区中央部	遺構面直上	染付磁器	皿	(11.45)	(3.55)	4.65	高台は断面台形状で低い。底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 無文。内面 円弧状文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。肥前系。波佐見産。粗製の染付磁器皿。18世紀前半。
853	区中央部	遺構面直上	染付磁器	皿	(13.60)	(3.95)	(8.50)	高台は断面台形状。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 唐草文・界線1・2条。内面 竹葉文・界線1条。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
854	区南部	遺構面直上	染付磁器	皿	(14.30)	(4.10)	(8.20)	高台は断面台形状。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 唐草文・界線1・1条。内面 花唐草文・界線2条。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
855	区中央部	遺構面直上包含層	色絵磁器	鉢	7.30	3.70	4.60	高台は断面台形状で低い。底部の器壁は厚い。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 赤絵・金襷手で巻物などを施文。内面 無文。口縁部内面の釉かきとり。	重鉢。
856	区北部墓域	盛土直下層	施釉陶器	椀	(8.10)	(5.40)	(3.60)	高台は断面長方形形状で低い。平底。体部は直立。口縁端部は尖り気味。	体部外面 細かくトビガンナ施文。内外面 全面に灰釉施釉の後、口縁部外面~内面全面に鉄釉施釉。	瀬戸・美濃系。錯茶椀。19世紀前半。
857	区中央	墓域石垣南	染付磁器	皿	(13.30)	(4.35)	9.70	高台は底部の周縁部を浅く削り出す。平底。底部の器壁は非常に厚い。蛇の目凹形高台。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 界線2条。内面 草花文・界線2条・草花文。底部外面 蛇の目状に露胎。	肥前系。19世紀前半以降。
858	区中央	墓域石垣南	染付磁器	皿	13.20	2.00	6.90	高台は断面三角形形状で低い。蛇の目凹形高台。体部は内彎気味に緩やかに外上方に延びる。口縁部は輪花状に成形。	外面 濃い酸化コバルトで、稚拙な唐草文。内面 格子状文に草花文・線描きの草花文?底部外面 蛇の目状に露胎。	近代以降。
859	区北部墓域・区南部	攪乱14	染付磁器	鉢	(19.70)	(10.10)	(7.45)	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線2条・松竹文・界線1・1・2条。高台裏 渦文。底部内面 界線2条・草花文と五弁花文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
860	区北部墓域	攪乱14	染付磁器	火舎香炉	(15.30)	(7.70)	(6.10)	高台は断面台形状で低い。底部に3ヶ所獣足状の脚を貼り付け。体部は大きく内彎して外上方に延びる。頸部は短く直立。口縁部は大きく外方にひらく。	外面 界線1・2条・宝尽くし・界線1条。内面 露胎。砂附着。	肥前系?

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
					口径	器高	底径			
861	区北部	SK1045	染付磁器	皿	(12.90)	2.90	(6.10)	高台は断面台形状で比較的低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面 草花文。外面 無文。色調 やや青味を帯びた灰白色。	肥前系か。
862	区南西端	SX1001	施釉陶器	椀	7.75	5.80	3.80	高台は比較の細く高い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面 鉄絵で梅花文施文。内外面とも灰釉施釉。	京焼系。C b類。
863	区南部	SX1001	施釉陶器	椀	(7.10)	6.10	3.60	高台は細く高い。体部はほぼ直立。口縁部は外方にひらく。	外面 鉄釉で文字文施文。内外面とも灰釉施釉。	広義の京焼系。C b類。近代か？
864	区南西端	SX1001	施釉陶器	蓋	7.20	(2.35)		断面形状は山笠形。かえりは短く直立。つまみは剥落。	外面 灰釉施釉の後、イッチン掛けで施文。(水面に網か?)	京焼系。19世紀前半以降。
865	区南西端	SX1001	施釉陶器	鉢	(17.90)	(14.10)	14.05	平底。体部はほぼ直立。口縁部は若干肥厚。端部は内外に引き出す。	内外面とも回転ナデ調整。体部外面の下位 ヘラケズリ調整。底部外面 板ナデ調整。外面土部を流し掛けの後、灰釉を流し掛け。	丹波焼。建水？
866	区南西端・区南部	SX1001・SD2002	施釉陶器	土瓶	(6.80)	(10.40)	腹径(18.65)	体部は大きく内彎。断面形状は算盤玉形。頸部は短く内傾。体部上面に注口1ヶ所とツル掛けを2ヶ所貼り付け。	体部外面上半部 トビガンナ施文。外面の口縁部～体部上半白濁釉施釉。体部外面下半以下露胎。	京焼系。
867	区南西端	SX1001	青磁	鉢	12.30	6.10	6.00	高台は外反。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部～体部は花弁状に成形。高台に5ヶ所円孔を穿孔。	外面 型押しで草花文施文。内外面とも青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。高台置付は露胎。灰白色～赤褐色に発色。	三田青磁。19世紀前半。
868	区南西端	SX1001	染付磁器	碗	(9.00)	(4.10)		体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面 太い界線1条・細かい草花文。内面 太い界線1条・界線1・1条。	瀬戸・美濃系端反碗 A。19世紀前半以降。
869	区南西端	SX1001	赤絵磁器	碗	(11.75)	6.55	6.10	器壁は全体に薄い。高台は細く高い。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも赤絵で菊唐草文施文。口縁端部に赤絵で圈線1条。	肥前系広東碗。
870	区	SK02	染付磁器	碗	(9.60)	(5.15)	(3.65)	高台は断面台形状。器壁は全体に厚く、特に底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 雪輪文・界線1・2条。底部外面 文字文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
871	区	表採	施釉陶器	蓋	(6.80)	(4.10)	つまみ径2.50	山笠形。上面中央部に山笠形のつまみを貼り付ける。	外面 灰釉施釉の後、イッチン掛けで施文。内面 露胎。	京焼系。19世紀前半以降。
872	区	重機掘削	施釉陶器	鉢	(19.30)	(4.90)		体部は大きく内彎。口縁部は水平に外方にひらく。	内外面とも回転ナデ調整。外面に草花文を印花で施文。外面 灰釉施釉。内面 白濁釉施釉。	美濃産。19世紀前半以降。
873	区	表採	青磁	鉢		(2.20)	高台幅(6.00)	形抜き成形。高台は八角形。	内面に型押しで草花文施文。内外面に青磁釉を厚く施釉。高台置付は露胎。淡赤褐色に発色。	三田青磁。19世紀前半。
874	区	重機掘削	青磁	碗	7.95	4.10	2.90	高台の内側を斜め方向に削る。底部の器壁は比較の厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 トビガンナ施文。内外面とも青磁釉施釉。高台裏は露胎。	近世末～明治？
875	区	表採	染付青磁	蓋	(9.30)	(3.55)	つまみ径4.20	体部は内彎。つまみは短く直立。	外面 青磁釉施釉。内面 四方禪文。界線2条。	肥前系。18世紀代。
876	区	染付磁器	碗	(12.30)	(4.70)	4.50		高台は断面台形状で低い。器壁は全体に厚く、特に底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 界線1条・丸文・井桁文・界線1・2条。内面 界線2条・2条。底部内面 くずれたコンニャク印判で五弁花文。	底部内面 蛇の目状釉ハギ。砂が環状に附着。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
877	区	重機掘削	染付磁器	碗	11.52	5.34	4.48	高台は比較の細く高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。体部～口縁部 内外面とも型打ちで花弁状に整形。	内外面とも細かい幾何学文をプリント。	近代～現代。
878	区	包含層	染付磁器	蓋	9.00	2.70	つまみ径3.47	つまみは短く直立。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 草花文・太い界線1条・桜花文。内面 草花文。	産地不明。19世紀前半以降。
879	区	包含層	染付磁器	蓋	9.80	1.84		体部は円盤状。かえりは短く内傾。	外面 扇・鼓・羽子板・桜などをプリント。内面 無文。身との接触部分は露胎。	化粧用。合子の蓋。近代～現代。
880	区	包含層	染付磁器	皿		(3.95)	(13.40)	高台は断面台形状。平底。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	外面 草花文。内面 草花文・界線2条。外面 草花文。	焼き継ぎ痕あり。
881	区	重機掘削	染付磁器	皿	(13.10)	3.05	5.90	高台は断面台形状で幅が広く低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 唐草文・界線1条。底部内面 コンニャク印判で五弁花文。外面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
882	区	重機掘削	染付磁器	皿	(12.55)	3.05	7.65	蛇の目凹形高台。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 無文。底部外面 中央部を残して、輪状に釉かきとり。内面 二重格子目文・笹葉文。	産地不明。19世紀前半以降。
883	区	染付磁器	皿	10.75	2.20	6.36		高台は断面台形状で低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 銅版転写で小さい楕円形を放射状に施文・界線2条・楕と雀文。口縁端部 鉄釉施釉。外面 無文。	近代以降。
884	区	重機掘削	染付磁器	鉢	16.70	5.05	8.50	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面 縦線・雷文帯・放射状文・壽字文。外面 縦線。	近代～現代。
885	区	重機掘削	染付磁器	鉢	15.48	6.55	6.60	高台は断面台形状で比較的高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。	外面 界線1条・草花文・界線1条。口縁部内面 墨弾きで雲文・界線1条・草花文。	口縁部内面は一部呉須が流れる。清朝青花写し。肥前系？

平成15年度調査

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備 考
					口 径	器 高	底 径			
886	区	包含層	染付磁器	ミルク ボット	2.48	5.33	5.26	平底。やや上げ底風。体部はやや外反気味に外上方に延びる。口縁部は短く内傾。体部の上半に環状の把手と注口を貼り付け。	外面 濃い酸化コバルトで葉文施文。	現代。
887	区	SK10	染付磁器	蓋	8.30	1.30		体部は僅かに内彎。かえりは短く直立。	外面 九曜文。内面 無文。かえりの部分は露胎。	合子の蓋。
888	区	包含層	施釉陶器	蓋	12.20	3.55	つまみ径 3.15	つまみは扁平な円形。体部は笠形。口縁端部は水平に引き出す。かえりは短く直立。	外面 鉄・赤・褐釉で枝葉文施文の後、内外面とも透明釉施釉。かえり部分は露胎。	近代～現代。
889	区	包含層	染付磁器	碗	(9.90)	(5.65)	3.90	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 コンニャク印判で菊花文・界線1・2条。底部外面 渦福文。内面 無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀前半。
890	区	包含層	染付磁器	碗	9.65	5.20	3.95	高台は比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	体部外面 劃筆で二重網目文施文。内面 無文。	肥前系。18世紀代。
891	区	包含層	染付磁器	碗	11.60	5.35	4.40	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 丸文・菱形文・界線1・2条。底部内面 界線1条・コンニャク印判で五弁花文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
892	区	包含層	染付磁器	碗	11.45	6.40	6.55	高台は細く高い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	島嶼・山水樓閣文・界線1条。内面 界線2条。底部内面 界線1条・島嶼文。	肥前系。広東碗。19世紀前半。
893	区	包含層	染付磁器	碗	11.50	(5.60)	4.60	高台は断面台形状。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 界線1条・草花文・界線1・2条。内面 界線2条。底部内面 界線1条・壽字文？	産地不明。19世紀前半以降。
894	区	包含層	染付磁器	碗	11.80	7.00	4.30	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 松に帆掛け舟文・界線1・2条。内面 幾何学文。底部内面 界線1条・草花文。	近代以降。
895	区	包含層	染付磁器	碗	5.80	6.45	4.00	高台は幅が広く比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は直立。口縁端部は尖り気味。	外面 銅版転写で梅・市松文・細かい草花文等を施文。内面に漆喰状のものが附着する。	近代以降。
896	区	包含層	染付磁器	皿	11.50	3.30	4.35	高台は断面台形状で幅が広く、低い。器壁は全体に厚い。体部は内彎気味に緩やかに外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面 簡易な草花文・界線2条。外面 無文。	底部内面 蛇の目状釉八ギ。肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
897	区	包含層	染付磁器	皿	(10.40)	(2.50)	(7.00)	蛇の目凹形高台。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 唐草文・界線2条。内面 菊花文。底部内面 菊花文？施文。	底部外面は中央部を残して、露胎。肥前系。19世紀前半。
898	区	包含層	染付磁器	皿	(20.70)	(4.20)	(12.00)	器壁は全体に薄い。高台は断面台形状。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部～体部内外面 型押しで花卉状に整形。	内面 蓮弁文・鹿・松文。外面 草花文。	器面に虫喰い。明末～清初の中国製青花の写し。京焼系。19世紀前半以降。
899	区	包含層	染付磁器	皿	7.40	1.35	4.40	高台は断面三角形で低い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面 巴文。外面 無文。	近代以降。
900	区	包含層	染付磁器	鉢	(13.05)	(6.45)	5.30	高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁部は輪花状に整形。	外面 算木文・牡丹文・蓮弁文。底部外面 文字文。内面 算木文。底部内面 界線2条・水龍文。	肥前系。
901	区	包含層	染付磁器	御神酒 徳利	(1.60)	(7.60)		体部は僅かに外反気味に外上方に延び、体部上半は大きく内彎する。頸部は短く直立。口縁端部は僅かに外方にひらく。	外面 蛸唐草文施文。	肥前系。18世紀代。
902	区	包含層	染付磁器	徳利		(13.00)	6.25	平底。底部の外周に断面三角形の比較的低い高台を削りだす。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延び、上位で内側に屈曲し、頸部はほぼ直立する。	外面 福寿草・花文をプリントするが、ズレが著しい。	近代以降。
903	区	包含層	色絵磁器	碗	10.60	4.75	4.80	高台は断面台形状。体部は内彎気味に外上方に延び、中位で屈曲。口縁部は内彎する。	底部内面 「福」字を呉須で施文の後、内外面とも透明釉施釉。さらに部分的に鉄釉を流し掛ける。	近代以降。
904	区	SK22	染付磁器	碗	(11.00)	4.80	4.40	高台は比較的低い。器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 淡い呉須で簡易な草花文施文。内面 無文。	底部内面 蛇の目状釉八ギ。生掛けのため釉のノリが悪い。肥前系。18世紀代。
905	区	SD02	染付青磁	碗	(10.80)	(6.35)	(4.50)	高台は僅かに外方にひらく。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 青磁釉施釉。内面 四方禪文・界線2条。	肥前系。くらわんか手。18世紀代。
906	区	SD02 (南側)	染付磁器	碗	(10.80)	(6.25)	(5.50)	高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 線描きの蓮弁文に扇文・界線2条。内面 界線1・1条。	肥前系。広東碗。19世紀前半。
907	区	SD02	染付磁器	杯	(4.80)	(5.85)	3.55	高台は断面台形状。器壁は全体に厚い。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 銅版転写で流水状に細かい草花文と菊花文施文。	近代以降。
908	区	SD02 (中央)	染付磁器	蓋	7.40	3.30	つまみ径 1.20	中央部に円柱状のつまみを貼り付け。体部は内彎。口縁部は僅かに外方にひらく。かえりは短く内傾。	外面 コンニャク印判で紅葉文を施文。内面 無文。かえりは露胎。	肥前系。壺蓋。18世紀代。
909	区	SK22・SD 02(中央)	染付磁器	碗	11.45	5.80	6.40	高台は細く高い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 やや淡い呉須で火燭文？などを施文。内面 界線2・1条・草花文？	肥前系。広東碗。19世紀前半。

報告	出土地区	出土遺構	種類	器種	法 量 (cm)			形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備 考
					口 径	器 高	底 径			
910	区	包含層	染付磁器	蓋	(10.10)	(2.80)	つまみ径 4.50	つまみは短く外傾する。体部は内彎気味に外方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面 細かい草花文を全面に施文。内面 菱形文・界線2条・松竹梅文。	肥前系?
911	区	包含層	染付磁器	水滴	長(4.20)	(3.15)	-	型作り成形。形状は直方体。6枚の粘土板を貼り合わせて成形。	外面 上面 呉須で山水楼閣文施文。内面 露胎。	京焼系。
912	区	包含層	染付磁器	碗	(8.70)	(6.40)	(4.60)	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直上に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 淡い呉須で一重網目文と魚文。内面 無文。	肥前系。17世紀代。
913	区	堀内埋土	染付磁器	碗	(9.50)	(5.40)	(4.10)	高台は断面台形状。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 雑な筆致で半截菊花文・稲束状文・界線2条。内面 山形文・界線1条。	産地不明。19世紀前半以降。
914	区	堀内埋土	染付磁器	碗	(7.40)	(3.55)	2.85	高台は断面台形状で比較的幅が広く、低い。平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は僅かに外方にひらく。	外面 やや濃い酸化コバルトで、草花文・界線2条。内面 草花文・同心円文。	清朝青花の写し。
915	区	堀内埋土	染付磁器	皿	8.25	2.55	4.35	高台は比較的細く高い。平底。体部は内彎。口縁部は僅かに外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	外面 草花文。内面 太い界線1条・花鳥文?	瀬戸産? 19世紀前半。
916		表採	染付磁器	杯	(7.00)	5.50	(3.30)	高台は断面台形状。平底。体部は直立。口縁端部は尖り気味。	外面 菊花文・氷裂文。底部内面 コンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系。19世紀前半。
917		表採	染付磁器	蓋	(11.80)	(3.35)	つまみ径 (4.70)	体部は内彎。つまみは短く直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面 よろけ文・墨弾きで雷文帯施文。内面 墨弾きで雷文帯・界線1条。	産地不明。19世紀前半代。
918	表採		染付磁器	皿	12.60	2.75	7.45	高台は断面台形状で比較的低い。平底。体部は内彎して外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面 酸化コバルトで梅花文施文。外面 無文。	近代～現代。
TR1	1トレンチ		土製品	ミニチュア硯	長(4.35)	幅(3.30)	厚(1.25)	型作り成形。平面形状は長方形。	内外面ともナデ調整。	焼成 良好。色調 にぶい 橙色。携帯用硯か?
TR2	1トレンチ		土製品	ミニチュア橋	長(3.90)	幅(3.55)	厚(0.75)	型作り成形。片型作り。	内面 ナデ調整。	彩色は全て剥落。焼成 良好。色調 浅黄橙色。箱庭の部品か?
TR3	5トレンチ		無釉陶器	搦鉢		(4.00)		口縁部は上下に拡張して、縁帯を作る。口縁部外面に沈線2条。口縁部内面に凸帯が1条巡る。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面 10条1単位の櫛描きの搦目施文。	焼成 堅緻。色調 にぶい 赤褐色。堺産搦鉢。A類。 18世紀前半～中頃。
TR4	5トレンチ	包含層	染付磁器	皿	13.05	2.75	7.90	器壁は全体に比較的厚い。高台は断面三角形で低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面 唐草文・界線1・2条。内面 墨弾きでS字状文。底部内面 端正なコンニャク印判で五弁花文施文。	肥前系。18世紀代。

第 章 自然科学分析

第 1 節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡正覚寺墓地跡出土人骨

京都大学大学院理学研究科 自然人類学研究室

藤澤珠織 片山一道

平成14年度（269次）に兵庫県教育委員会によって調査された有岡城跡・伊丹郷町遺跡（正覚寺墓地跡）から、近世に属する人骨が出土した。以下に土葬人骨についての性別判定、死亡年齢推定の結果、および遺存歯の歯式等を示す。

1号棺出土人骨

頭蓋冠が遺存する。他に全身の各部位が残っているが、それらは全て破片である。性別はおそらく男性であろう。これは眉上隆起、乳様突起および外後頭隆起がどちらかといえば発達しているからである。死亡年齢は熟年（40歳～59歳）程度と考えられる。これは頭蓋の冠状・矢状縫合が内板でほぼ癒合完了し外板で未癒合なためである。

	右								左							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎			△		△			△		△		△		△	△	
下顎		△		△	△	△	△		△		△		△		△	

△ : 釘植, △ : 遊離歯として遺存, △ : 歯冠または歯根のみ。

2号棺出土人骨

全身の骨がほぼ完形で遺存する（写真1, 2）。性別は男性骨と判定できる。これは寛骨の恥骨下角が鋭角で大坐骨切痕の湾入も深いことによる。死亡年齢は老年（60歳以上）段階に達していた可能性が高い。これは頭蓋の冠状・矢状縫合が内板・外板ともにほぼ癒合完了しているためである。また右大腿骨最大長の計測値から、推定身長（藤井1960）は156.1cmであった。なおこの人骨には椎骨、胸骨、鎖骨、左大腿骨の骨幹上部など、全身の各所に増殖性の骨病変がある（写真9～12）。腰椎前面に口ウ状の骨化（写真7）が顕著にみられることから、原因疾患としてDISH（Diffuse Idiopathic Skeletal Hyperostosis）が考えられる。だが、発症の原因は現代においても不明であり、詳細については更に検討を要する。

	右								左							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎	▲			△									△		△	△
下顎				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			

3号棺出土人骨

頭蓋骨がほぼ完形で遺存する（写真3, 4）。他に全身の各部位が残っているが、それらは全て端部を破損するか、小さな破片である。性別は女性の可能性が高い。これは眉上隆起が無く前頭結節の発達認められるためである。死亡年齢は老年段階に達していたと考えられる。これは頭蓋骨の冠状・矢状縫合が内板で癒合完了し外板でもほぼ完了に近いことによる。なお3号棺出土人骨は上顎骨や下顎骨および上下顎歯の一部が重複して遺存する。よって、3号とされる人骨の最小個体数は2体分である。重複する人骨の性別は不明だが、死亡年齢は骨の大きさなどから成人段階に達していたと考え

られる。

	右								左							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		
下顎										○	○	○				○

4号棺出土人骨

次の歯式で示すような乳歯と永久歯のみ遺存する。歯冠および歯根の形成状態より、2～3歳程度の幼児の歯である。

	右								左								
乳歯																	
	m2	m1	c	i2	i1	i1	i2	c	m1	m2							
上顎										△							
下顎			△	△	△	△	△	△	△	△							
永久歯	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	
上顎																	
下顎							△	△	△	△					△		

5号棺出土人骨

粉々になった少量の頭蓋骨破片と、数点の歯が残る。性別は不明である。死亡年齢は、歯の咬耗の進行程度から成人段階に達していたものと考えられる。

	右								左							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎								▲								
下顎			▲			▲								▲		

6号棺出土人骨

頭蓋冠が遺存する(写真5, 6)。他にほぼ全身の各部位が残っているが全て破損する。性別は女性と判定できる。寛骨の大坐骨切痕が鈍角であることなどがその理由である。死亡年齢は壮年(20～39歳)段階であろう。これは上下顎歯のほとんどで咬耗がエナメル質に留まっていることによる。他に遊離した上下顎歯が数点出土しているが、これらは上記の歯と歯種が重複する。よって6号棺出土人骨の最小個体数は2体分となる。なお、この遊離歯からの性別判定や年齢推定は困難である。

	右								左							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	
下顎		○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	○	○	○	

7号棺出土人骨

頭蓋骨がほぼ完形で遺存する(写真7, 8)。他にほぼ全身の各部位が残っているが、多くは端部を破損している。性別は男性と判定できる。これは寛骨の大坐骨切痕が鋭角であり、頭蓋骨の乳様突起が頑強なためである。死亡年齢は熟年段階であろう。これは寛骨耳状面および第一肋骨の胸骨端の形状による。

	右								左							
	M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
上顎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○
下顎		○	○	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○			○

8号人骨 (SX1004出土)

中手骨片などが残る。

9号～21号人骨 (SX1027・1040・1045・1050・1051内の蔵骨器3点・1052・1055・1056・1060・1061・2065出土)

火葬骨である。火葬骨は被熱による捻転、破片化などが著しく、一般に形態観察に基づく性別判定や死亡年齢推定は困難である。

まとめ

正覚寺墓地跡から出土した人骨は、棺内から出土した土葬人骨(1～7号)、棺外から出土した人骨(8号)、火葬骨(9～21号)にわけられる。このうち棺外出土骨および火葬骨については、性別判定・死亡年齢の推定が困難である。

棺内から出土した土葬人骨は、最小個体数が9体分あった。このうち性別および死亡年齢が推定できたものは、男性が熟年2体、老年1体、女性は壮年1体、老年1体である。他に2～3歳の幼児が1体、性別不明の成人が2体、詳細不明の人骨1体分が出土した。特記事項として老年男性と推定される2号棺出土人骨の各所に、増殖性の骨病変が認められた。この人骨は身長推定が可能で、結果は156.1cmであった。

謝辞

本人骨を調査する機会を与えていただきました兵庫県教育委員会の皆様に深く感謝いたします。

参考文献

藤井明, 1960 : 四肢長骨の長さとの関係に就いて ; 順天堂大学体育学部紀要 3: 49 - 61.

瀬田季茂・吉野峰雄, 1990 : 白骨死体の鑑定 ; 令文社

S.Molnar, 1970 : Human tooth Wear, Tooth function and Cultural Variability ; American Journal of Physical Anthropology 34: 175-190.

T.D.White, 2000 : Human Osteology, Second Edition: p346 Fig.17.3 ; Academic press



写真1, 2号人骨 頭蓋正面觀



写真2, 2号人骨 頭蓋側面觀



写真3, 3号人骨 頭蓋正面觀



写真4, 3号人骨 頭蓋側面觀



写真5, 6号人骨 頭蓋正面觀

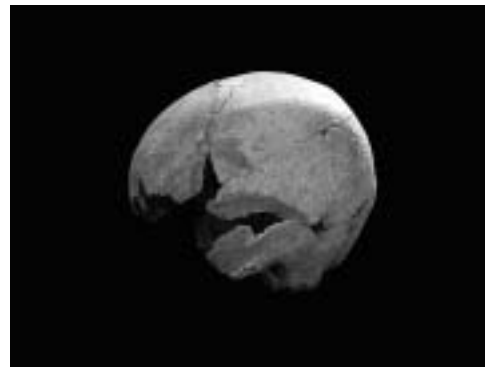


写真6, 6号人骨 頭蓋側面觀



写真7, 7号人骨 頭蓋正面觀



写真8, 7号人骨 頭蓋側面觀

第1図 頭蓋骨写真

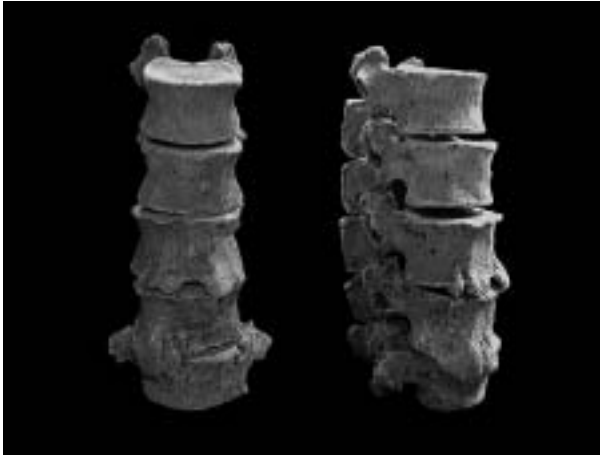


写真9, 2号人骨 腰椎 (正面観・側面観)



写真10, 2号人骨 胸骨



写真11, 2号人骨
左右大腿骨 正面観

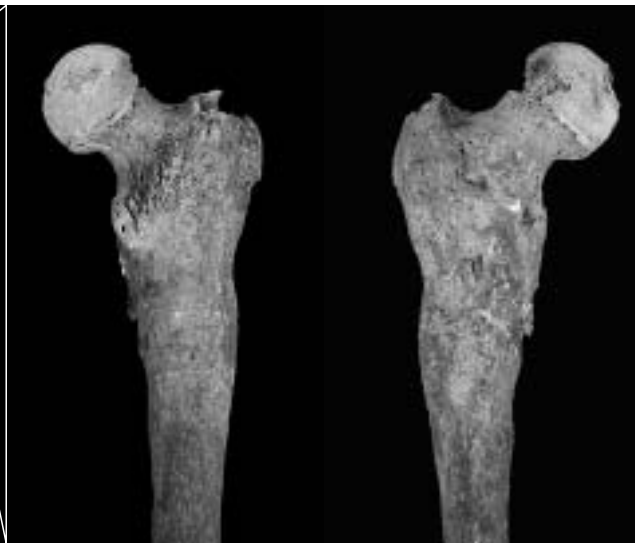


写真12, 2号人骨
左大腿骨 正面観 左大腿骨 後面観

第2図 腰骨・胸骨・大腿骨写真

第2節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

有岡城跡は、猪名川右岸の伊丹段丘東縁部に伊丹氏によって築かれた伊丹城を前身とし、後に荒木氏によって有岡城と改名された。有岡城は、1579年に落城している。伊丹郷町は、有岡城の西側に形成された城下町を前身として、有岡城落城後も周辺地域の中心として発展したとされる（藤井・川口，1986）。

本分析の対象となる269次調査区では、町屋に伴う礎石・埋桶遺構・溝・ゴミ穴等の遺構のほか、正覚寺に関わる墓地・本堂との境界となる石列溝等が検出されている。

本報告では、土葬墓内から出土した木床義歯の台の樹種および義歯の石材を明らかにするための樹種同定・石材鑑定を実施する。また、出土した布片の織り方・材質に関する観察・分析を実施する。

(1) 木床義歯の分析

1 - 1 試料

試料は、区2号棺より出土した木床義歯4点（W26・27・28・29）である。W26～28の3点は、木製の台に石材製の義歯が装着されている。一方、W29は、破片にみられる組織から骨製の台に石材製の義歯が装着されている。

W26～28の木床を対象とした樹種同定と、W26～29から各1点、計4点選択した義歯について石材鑑定を実施する。

1 - 2 分析方法

(1) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

(2) 石材鑑定

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。個々の石材の正確な岩石名は、薄片作製観察、X線回折試験、全岩化学組成分析等を併用することにより調べることができるが、今回は肉眼鑑定のみに留めるため、鑑定された岩石名は概査的な岩石名であることを留意されたい。

1 - 3 結果

(1) 樹種同定

W26～28は、いずれも常緑広葉樹のツゲに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・ツゲ (*Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica* (Muell.Arg.) Rehd.et Wils) ツゲ科ツゲ属

散孔材で、道管径は極めて小径、管壁は厚～中庸で、横断面では角張った楕円形、単独または2個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～30細胞高。

(2) 石材鑑定

肉眼観察の結果、義歯4点はすべて変質粘土鉱物岩と鑑定される。肉眼的には、W26、W27およびW28が淡灰色を呈し、W29が乳白色を示している。義歯裏面の表面部には、多数の線状の加工痕が認められ、義歯おもて面には無方向性の浅く細かな使用痕が多数認められる。加工痕や使用痕の分布状況から、いずれの試料も、同程度の硬度を持つ粘土鉱物からなるものと考えられる。

1 - 4 考察

木床義歯の木床は、3点(W26～28)が木製、1点(W29)が骨製である。木製の木床は、いずれも歯茎が当たる面が柁目となる木取りであり、樹種は全て広葉樹のツゲである。ツゲは、重硬・緻密な材質を有し、加工はやや困難な部類に入るが、緻密なことから細かな加工には適している。木製の木床は、3点全てがツゲであることから、ツゲが選択的に利用されていた可能性がある。同様の木床義歯については、寛永寺護国院(東京都)の18世紀以降とされる墓から出土した例があり、木床は今回と同じツゲが利用されていた(橋本・辻本, 1990)。

一方、義歯は、肉眼的にはいずれの試料も非常に弱い透光性を有することから、構成鉱物としては葉蠟石などの熱水変質鉱物が想定される。兵庫県下には、白亜紀後期～古第三紀の流紋岩～安山岩およびその同質火砕岩を主体とする相生層群や有馬層群が分布しており、これらには熱水変質作用により形成された鉱床が各所に点在している。遺跡に、より近い採取地の候補としては、武庫川流域の有馬層群分布域があり、加東市平木の平木鉱山では葉蠟石のほか、カオリナイト、ディッカイトなどの熱水変質鉱物が鉱石として採取されてきたとされている(尾崎・松浦, 1988)。歯のモース硬度は一般に6～7とされていることから、爪で傷がつく硬度1～2の葉蠟石である可能性はほとんどないと考えられる。しかし、義歯の表面にみられる傷の程度からは硬度3前後と推定され、硬度2～3のディッカイトなどの可能性が示唆される。いずれにしても、粘土鉱物の正確な種別同定は、肉眼観察からは不可能であり、今後、X線回折試験からの解析を要する。

(2) 布片の分析

2 - 1 試料

試料は、区2号棺の布片1点と、区7号棺の布片1点(M129)の2点である。

2 - 2 分析方法

布片は、いずれも未炭化で保存状態が良いことから、電子顕微鏡観察よりも効果のある薄片作製・観察を実施する。布片の全景を撮影した後、端部を切り取る。切り取った布片を合成樹脂で包埋し、樹脂を固化させる。繊維の横断面が出るようにダイヤモンドカッターで切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドガラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で繊維の断面形状、大きさ、本数などを観察する。なお、同定に際しては、布目(1992)を参考

にする。

2 - 3 結果

(1) 区2号棺

布片は、約2cm四方で、一部が緑色になる。経糸・緯糸共にほぼ同じ太さで、1本ずつ交互に編まれており、いわゆる平織である。横断面の観察では、片方の糸の間をもう一方の糸が縫うように入っており、交互に編まれている様子が薄片でも確認できる。糸を構成する繊維は、直径20～50 μ mの円形～不定形を呈し、40～50本で1本の糸を構成している。

(2) 区7号棺 (M129)

布片は、約6cm×3cmあり、外れていた約1cm四方の布片を分析に用いた。褐色を呈するが、一部が赤褐色を呈する。布の特徴は2号棺の試料とよく似ており、経糸・緯糸共にほぼ同じ太さで、1本ずつ交互に編まれており、いわゆる平織である。横断面の観察では、片方の糸の間をもう一方の糸が縫うように入っており、交互に編まれている様子が薄片でも確認できる。糸を構成する繊維は、直径30～50 μ mの円形～不定形を呈し、2号棺の試料よりもやや大きい。40～50本で1本の糸を構成している点は同様である。

2 - 4 考察

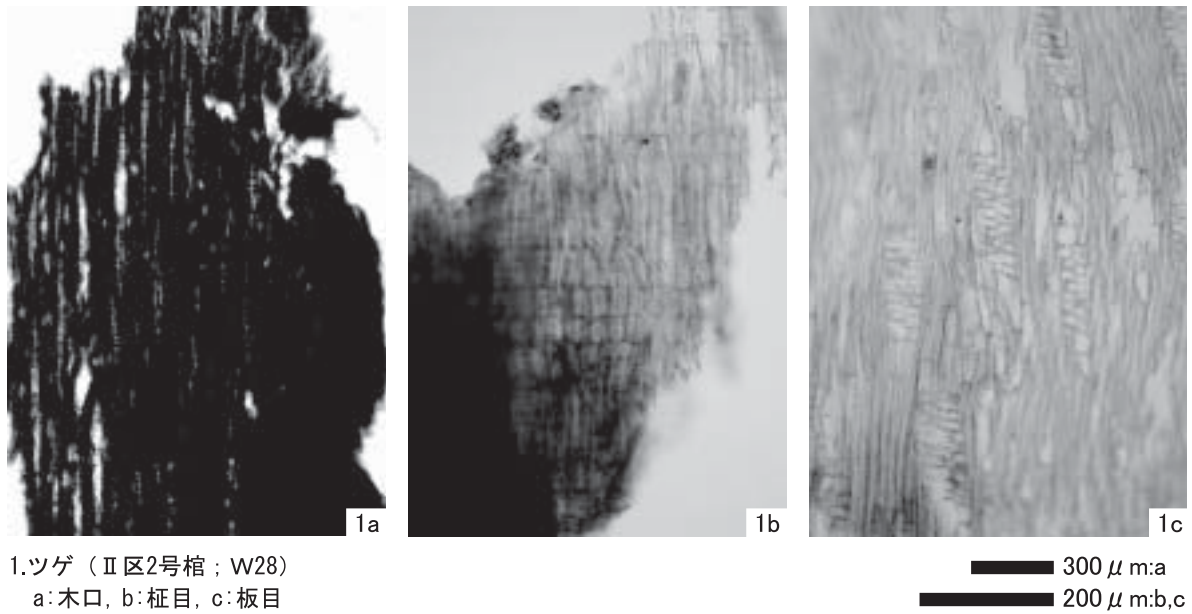
布片のうち、7号棺から出土した試料は、煙管を包むように出土しており、衣類の懐等に煙管が入れられていた可能性が指摘されている。布片を構成する繊維は、断面形状や大きさから絹の可能性もある。そこで、繊維識別用の試薬（ポーケンステイン）を用いて検査した結果、断面観察と同じく絹との結果が得られた。これらの結果から、布片は絹を平織で編んで作られたものと判断できる。

平織は、経糸と緯糸を1本ずつ交互に編んで作ることから、単純であるが比較的丈夫で破れにくいとされる。江戸時代は、木綿の衣類が一般的で、絹の着用には規制があったことから(丸山,2007)、今回の結果は被葬者の身分・立場を考える上で興味深い結果といえる。

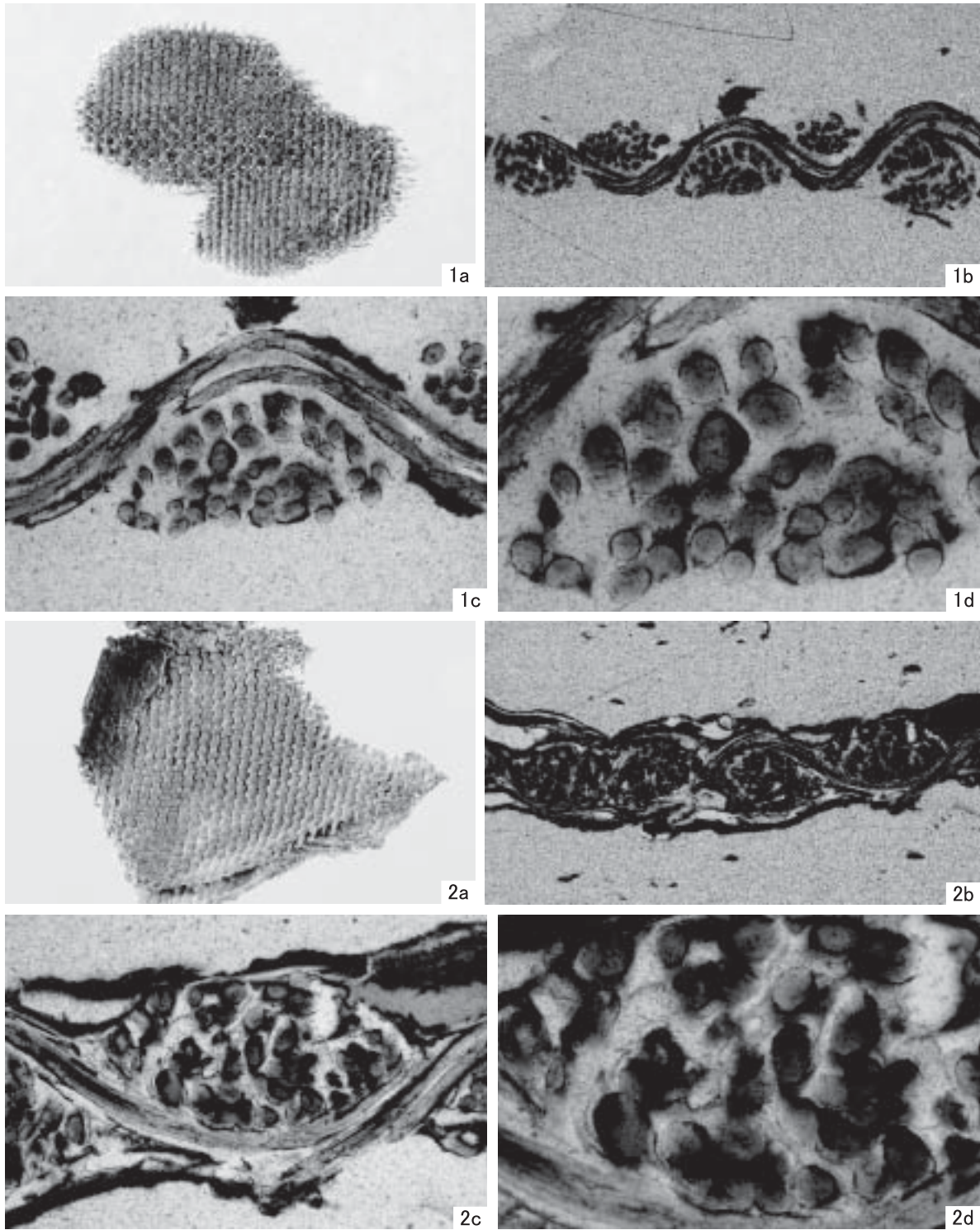
引用文献

- 藤井直正・川口宏海, 1986, 有岡城跡と伊丹郷町.大手前女子学園, 27p.
- 橋本真紀夫・辻本崇夫, 1990, テフラ分析・木製品の樹種・焼物の胎土分析.「東叡山寛永寺護国院 都立上野高等学校 内埋蔵文化財発掘調査報告書」, 都立学校遺跡調査会, 349-368.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 .木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 丸山伸彦 (編), 2007, 江戸のきものと衣生活.小学館, 175p.
- 布目順郎, 1992, 目で見る繊維の考古学.染織と生活社, 314p.
- 尾崎正紀・松浦浩久, 1988, 三田地域の地質, 地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 地質調査所, 93p.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織.地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・

藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



第3図 木材写真



1. II区2号棺の布片
 2. II区7号棺の布片
 a: 全景, b-d: 薄片

300 μ m: 1b, 2b
 200 μ m: 1c, 2c
 100 μ m: 1d, 2d
 1 cm: 1a
 5 mm: 2a

第4図 布片写真

第 章 おわりに

第 1 節 正覚寺墓地跡の検討

以下の点を検討課題とする。 漆喰を使用した槨を持つ土葬墓 (= 漆喰方形棺と呼称しておく) の構造と時期・被葬者の検討、 正覚寺墓地の時期区分と変遷、 土葬墓と火葬墓の変遷からみる家族墓の成立について。

1. 漆喰を使用した槨を持つ土葬墓の構造と時期・被葬者の検討

漆喰を使用した槨を持つ土葬墓 (漆喰方形棺) 7 基については遺構の章において概略を述べている。ここでは、更に各墓の調査結果から想定される「漆喰を使用した槨を持つ土葬墓 = 漆喰方形棺」の構築過程を、概念図をもとにまとめておく。

[構築過程]

墓壇の掘削：一辺約1.2m前後、深さ約1.5m前後の墓壇 (棺の約 2 倍の深さ) を掘る。

外棺を据える：一辺約75cm前後、高さ約85cm前後の外枠 (外棺) を据える。

内棺を据える：外棺底に厚さ10cm程度の漆喰を敷き、一辺約60cm前後、高さ約75cm前後の内棺 (内棺) を据える。内棺の下層からは棺を下した縄痕などは確認できていない。このことから、遺体を棺に納める前に内棺を設置したと考えられる。

漆喰槨の構築：外棺と内棺の間に漆喰を 3 回ほどに分けて充填し、漆喰槨を構築する。強度の面から推して、墓壇にもこの時点までに土砂を入れている。

遺体の埋納：遺体を納め、内棺に蓋をする。

棺の密封：内棺の蓋の上を漆喰で密封し、外棺の蓋をする。

標石の設置：外棺の蓋の上、周囲に漆喰を盛り、墨書面を下にして、標石を据える。

墓壇の埋め戻し：墓壇内を土砂で埋める。

墓石の設置：上部に墓石を据える。

以上の工程を経て墓を造営したと考えられる。

[墓の時期と被葬者の階層について]

漆喰を槨とする本遺跡の類例は、管見の限り、見つけることはできなかった。ここでは類似する要素を持つ墓を参考に漆喰方形棺の時期・被葬者の階層を推測する。

周辺において、方形型棺を使用する例は伊丹市宮ノ前所在、光明寺墓地跡にある。光明寺墓地例ではSX216・SX228・SX236に類例がある。これらの例は木棺を直葬しており、木棺のサイズは若干小さいが、棺の倍近い方形の墓壇を掘削し、複数の墓壇を連結する点が類似点としてあげられる。更にSX236では蓋上に 2 本の延石を置いている点が注目される。SX236では墨書が確認できなかったが、豊富な地下水によって長期間水没しており、文字が抜け落ちていた可能性が高い。また、SX216は楽茶碗の写しと茶道具をもつ富裕商人層が被葬者であると指摘されており、19世紀中頃以降の時期が考えられている。

漆喰が棺槨に使用される例は、江戸において確認されている。自証院墓地の調査では墓壇に槨を設え、木炭を充填し、内部に二重に木棺を入れ間に漆喰を充填する、複雑な多重構造をもつ、いわゆる木炭・漆喰 (石灰) 床・郭木棺墓が報告されている。そして、被葬者として旗本、大名家の家老・用人などの上級武士が当てられている。

正覚寺の例は光明寺墓地例と同じ方形型棺に標石をもつが、光明寺墓地例にはない漆喰柳が存在する。しかし、自証院墓地例にある木炭郭がない。以上の例から推して、埋葬施設の構造の複雑化と被葬者の階層が関連すると考えるならば、正覚寺例は光明寺例よりも上位にあり、自証院墓地例よりも下位に位置づけることが可能であろう。

現正覚寺墓地では、移転前まで調査地点の墓地に伊丹郷町屈指の豪商 山口家の代々墓が存在していたことが分かっている。今回検出した漆喰方形棺墓群は、山口家一族の墓が並ぶ区画の下に存在している。しかし、移転前の山口家の個々の墓地区画と方形棺とは位置的にずれており、各棺が直接の埋葬施設ではない。両者が結びつく積極的な根拠はないが、光明寺墓地例を念頭におけば、漆喰方形棺墓群が光明寺墓地の被葬者を凌ぐ、山口家を含む酒造業を営んだ豪商クラスの一族墓であった可能性は高いと考えられよう。

では、漆喰方形棺墓群の時期はいつであろうか。構造面からは、光明寺例と同じく19世紀代に考えておきたい。また、2号棺から出土した木床義歯は、江戸時代を通じて作製されるが、明治期後半には西洋歯科医学の導入により衰退してゆき、1930年代までには消滅している。また、正覚寺に残る地籍図には、明治28年にはすでに現墓地は本堂の裏庭になっていた記載がある。

以上の点を考慮するならば、19世紀後半代を中心とする時期に漆喰方形棺墓群が形成された可能性を考えておきたい。

2. 正覚寺墓地の時期区分と変遷

墓地遺構は10cm程度の土壌層を挟み上下から検出されている。検出できた遺構は以下の通りにまとめることができる。

下面（第2面）：土葬墓 - 桶棺、火葬墓 - 土師質火消し壺

上面（第1面）：土葬墓 - 漆喰方形棺、火葬墓 - 土師質火消し壺・瓦質火消し壺・丹波焼壺

下面是主に桶棺（早桶）による土葬墓によって墓地が形成されているが、火葬墓SX2073が検出されている。大型の土師質火消し壺を蔵骨器としており、18世紀前半の時期に編年される個体である。土葬墓からの時期を特定できる出土遺物はなく、18世紀前半よりも遡って墓地形成がなされていたかは詳らかではない。

上面は土葬墓 - 漆喰方形棺、火葬墓 - 土師質火消し壺・瓦質火消し壺・丹波焼壺によって墓地が形成されている。土葬墓が19世紀後半代の可能性が高いことはすでに述べた。火葬墓に使用されている土師質火消し壺・瓦質火消し壺・丹波焼壺は18世紀後半から19世紀代にかけてのものがあり、比較的長い期間墓地が使用されていることが判明している。

上下の墓地遺構の変遷は、大まかに述べれば早桶を使用した土葬墓から、火消し壺を使用した火葬墓と方形棺を使用した土葬墓への変遷ととらえることができる。

前述した光明寺墓地跡の調査結果においても18世紀前半には火葬墓を交えるものの、早桶を使用した土葬墓が墓地の主体であり、後半になって火葬墓が主体となり、土葬墓は子供用の襖棺を除けば富裕層が使用する方形型棺のみとなる、19世紀代へと至る流れが指摘されている。今回の調査結果と近似した様相である。

3. 土葬墓と火葬墓の変遷からみる家族墓の成立について

今回の墓地調査において興味深い事例としてSX1051の存在がある。SX1051は砂利敷きの円形土壌に丹波焼花立てが残る遺構である。砂利敷き下からは5個の火消し壺が階層状になって検出されており、一

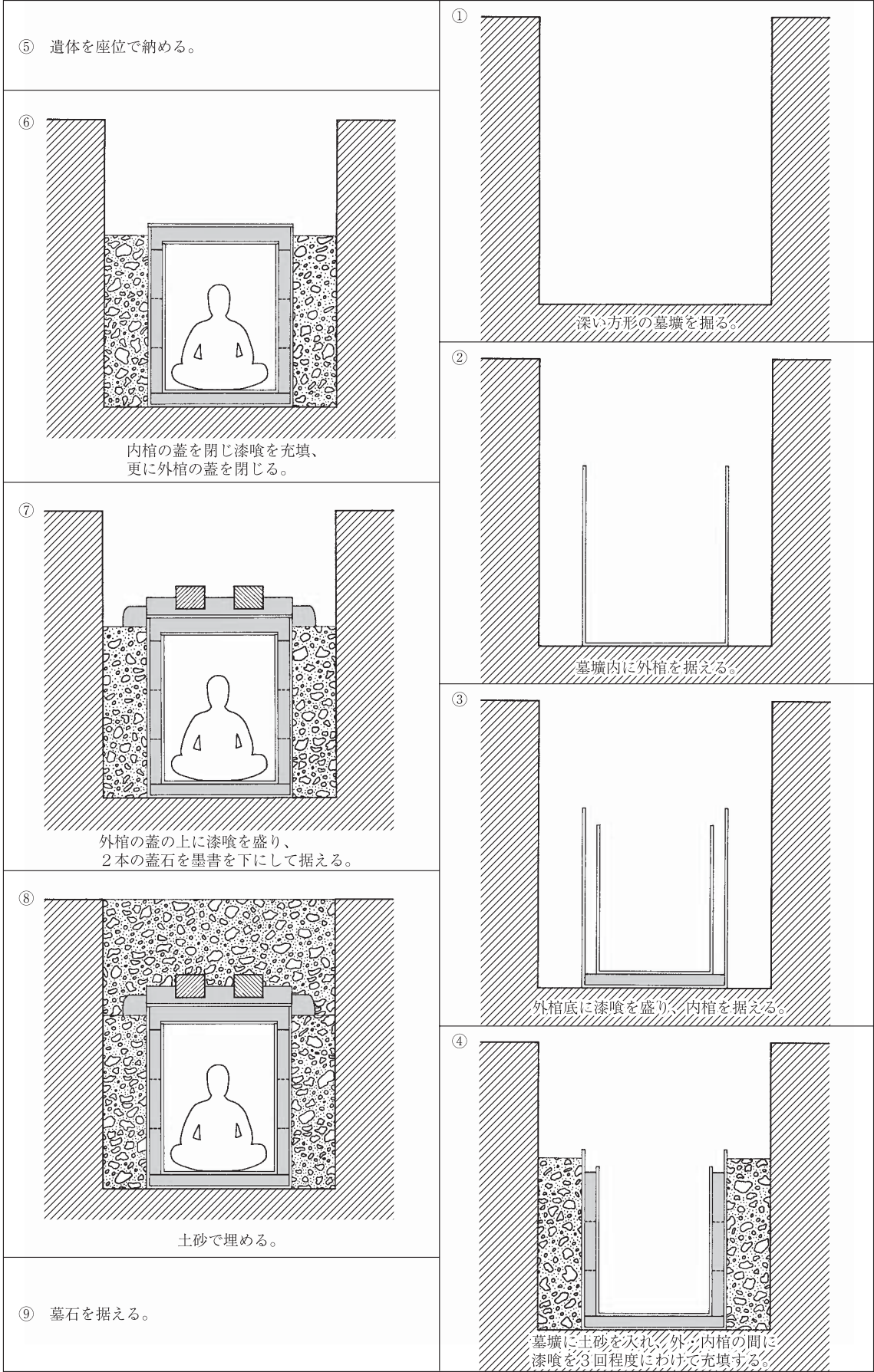
所に時間差をもって蔵骨器が埋納された、家墓の状況が明らかな遺構である。

更に興味深い点としてSX1051の円形土壙自体が、更に下層にある早桶1基の掘り方に対応している点である。即ち、当初(18世紀前半)、1人(個人)の土葬墓として占有した空間が、後(18世紀後半)には複数人(家族)の墓として使用されていることが明らかである。

この様な状況は光明寺墓地においても確認されているが、今回の調査例は上部の砂利敷き・花立てまでもが残っており、伊丹郷町において18世紀を通じて個人の墓から家墓への転換が行われたことを示す具体的な遺構として評価できるのである。

参考文献

江戸遺跡研究会編『墓と埋葬と江戸時代』2004年 吉川弘文館



第5図 方形棺埋葬の手順

第2節 遺物の検討

(1) 土器・陶磁器の分類

(ア) 土師器及び瓦質土器

土師器および瓦質土器には、器種別には皿、土製煮炊具、火消し壺、火舎・火鉢、灯火具、焼塩壺、鉢、その他がある。

A 皿

皿には非ロクロ成形のものと同口径成形のものがある。また、ロクロ成形のものには内面に透明釉を施すいわゆる柿釉の灯明皿と未施釉のものがある。

非ロクロ土師器

非ロクロ成形の土師器は口径が10cm以下の小型のものと10cm以上の比較的大型のものに区分される。小型のものは、体部の形態から、体部が直線的に外上方に延びるもの（5・43～45・283・364・394・403）と、体部が内彎気味に外上方に延び、体部と底部の界が不明瞭なもの（41・42・80・201・216・241・242・244・283・299・308・357・358・383・395・453）に分類される。

大型のものも同様に、体部が直線的に外上方に延びるもの（6・18・46・98・99・152・153・214・215・239・345・346）と内彎気味に外上方に延びるもの（7・46・47・208・246・247・284・369・453）に分類される。

ロクロ土師器

ロクロ土師器は形態的には平底で体部は直線的に外上方に延び口径が10cm未満の小型のもの（99・206・207・209・243）が大部分であるが、体部が内彎するもの（205）、大型のもの（208）も1点ずつ含まれる。

内面に透明釉を施すいわゆる柿釉の灯明皿は、248を除きほとんどが口径10cm未満の小型のもので占められる。内面に凸帯をもたないもの（144・187～189・199・210・211・213・318・405～409・411～414・458）と凸帯をもつもの（212・410・415～418）に分類される。

(岡田)

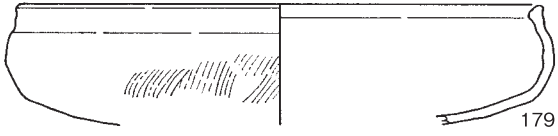
B 土製煮炊具

いわゆる「焙烙形」の土製煮炊具については、鍋・釜などの土製煮炊具の系譜関係を整理するなかで分類・編年案が提示されている（兵庫県教育委員会2004）。また中世からの系譜関係の追える土製煮炊具のほかに、近世になって成立する「型作り」成形により製作された「焙烙型」の土製煮炊具についても、別途分類・編年案が提示されている（兵庫県教育委員会1993）。ここでは、それらの分類・編年案に準拠して概略を述べる。

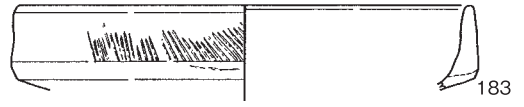
焙烙形の土製煮炊具は、14世紀後半に成立した播磨型の土製煮炊具から系譜関係が追える。焙烙の成立過程は、16世紀中葉～後半の「焙烙形」の土製煮炊具の祖形といえる播磨型類から、16世紀後葉～17世紀前葉には「焙烙」の初現形態ともいえる播磨型類へと変遷し、その後17世紀中葉に播磨型類としていわゆる「焙烙形」の土製煮炊具が成立する。

播磨型類は、体部が比較的深い形状から順次浅く扁平になる変遷過程をたどり、深手のA類（174・179・183・202・250・275・359）、やや浅いB類（173・180・181・219・220・249・251・276・368）、扁平なC類（81・182・217・218・252・253・370）、扁平で体部と底部の境界が垂直を呈するD類（12・231・365・426）に分類できる。

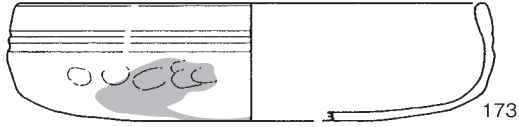
播磨型 IVA1類



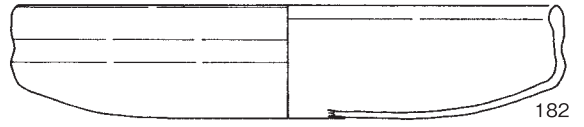
IVA2類



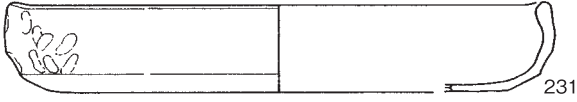
IVB類



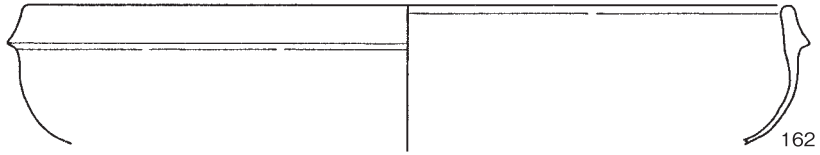
IVC類



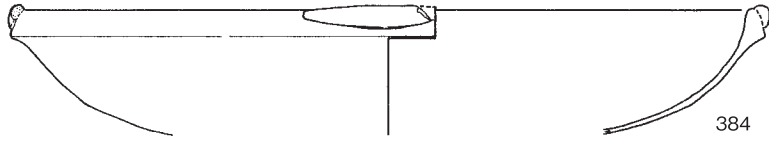
IVD類



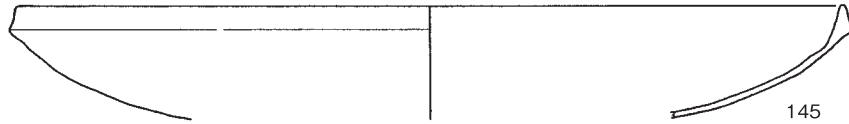
焙烙型 I類



II類



III類



第6図 土師器焙烙分類表

これら播磨型土製煮炊具の通有の製作技法は、いわゆる「粘土紐積上げ」手法を用い、成形時に底部から口縁部までタタキ技法によって成形される。しかしながら、播磨型 A類のなかには粘土紐積上げ手法による同 A1類 (179) と「型作り」成形の同 A2類 (183) がある。播磨型 B類～同 D類は播磨型 A2類の系譜を引き、成形技法にタタキ技法はみられず、すべて型作りで成形されている。また播磨型 A2類には、成形時のタタキ痕の認められるもの (174・183) と認められないもの (202・250・275・359) があり、前者がより古相の様相を示す。なお、播磨型 類のうち型作り成形のものは、底部が型作りで口縁部は粘土紐積上げ手法で成形されている。

なお、これらのいわゆる「焙烙形」の播磨型 類は、A類が17世紀中葉～後半に、B類が18世紀前半に、C類が18世紀後半に、D類が19世紀前半以降におのおの比定されている。

一方、近世になって成立する型作り成形の焙烙型は、播磨型 類とは異なり、成形時に底部から口縁部まで凹形の型を用いて成形するもので、口縁部が比較的明瞭な 類 (162) と退化した口縁部を持つ 類 (190・221・384)、形骸化した口縁部の 類 (145) に分類できる。また焙烙型の土製煮炊具は、播磨型と同様に体部が比較的深い形状から順次浅く扁平になる変遷過程をたどり、 類は深手の体部を持ち、 類は体部がやや浅くなり、 類は扁平な体部となる。

なお、これら焙烙型土製煮炊具は、 類は18世紀前半に、 類は18世紀後半に、 類は19世紀前半以降におのおの比定できる。

C 火消し壺 同蓋

火消し壺および同蓋については、分類・編年案が提示されている (兵庫県教育委員会2000)。ここでは、その分類・編年案に準拠して概略を述べる。

火消し壺には、ロクロ未使用の 類とロクロ使用の 類がある。 類 (362・375・376) は、粘土積み上げによって成形されており、体部内面に成形時のオサエの痕跡を残し、体部外面はナデ調整で、口縁部内外面にはヨコナデ調整が施されている。

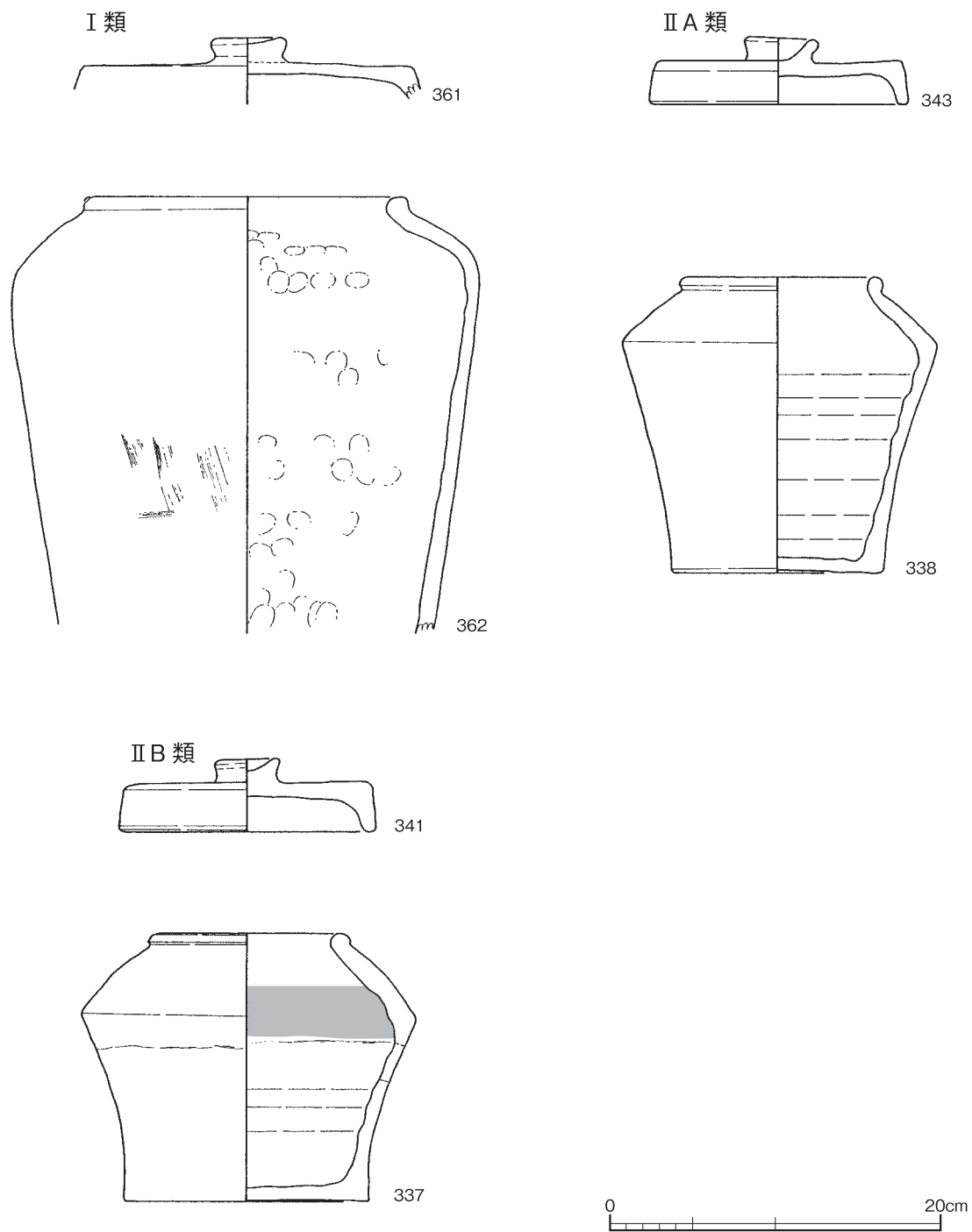
類は、 類と同様に粘土の積み上げによって成形されるが、体部の粘土積み上げは2回に分けておこなわれている。また、1回目の粘土積み上げ部分が、底部から外反気味ではあるがほぼ直線的に立ち上がる A類 (334・338・344・348・373・374・386) と、大きく外反して立ち上がる B類 (332・333・335～337・339・340・349・353・385) に分けられる。なお332・353は、形態などの特徴から B類に分類されるが、体部外面にはナデ調整が施されている。

なお出土状況から、361・377は 類に伴う蓋で、343・347は A類、331・341・342・354は B類におのおの伴う蓋である。

これらの火消し壺および蓋の存続期間は、 類は18世紀前半、A類は18世紀中頃～末、B類は18世紀末～19世紀前半におのおの比定されている。 (長谷川 眞)

D 火舎・火鉢

火舎・火鉢には土師器 (137・155・301・371・372) と瓦質土器 (24・154・191・195・254・286・330) がある。土師器は高台を持たず、平底で体部が直立するもの (301・371・372) と高台をもち、平底で体部が内彎するもの (137)、高台をもち、平底で体部が直立するもの (155) に分類される。また、瓦質土器は粘土板を貼り付けて成形し、平面形状が方形を呈する 類 (195) と平面形状が円形の 類に大きく分類される。 類に分類した195は底部外面の四隅にL字形の脚を貼り付け、口縁部上面に端面をもつ。 類は体部の形状から体部が直立する A類 (24・154・286)、体部が内彎する B類 (191・



第7図 土師器・瓦質土器火消し壺分類表

254・330) に分類される。 A類は口縁部が外方にひらく A 1類 (24・286) と口縁部を内側に引き出す A 2類 (154) に細分される。154は外面に型押しで魚々子文が、286は刺突文がそれぞれ施される。 B類も口縁部が外方にひらく B 1類 (191) と口縁部を内側に引き出す B 2類 (254・330) に細分される。191の外面には型押しで亀甲文が施文される。

E 風炉

287は瓦質土器風炉である。型作り成形で外面に型押しで青海波文を施文する。体部には透かしが入

る。色調は灰色を呈する。

F 灯火具

灯火具には、瓦灯の下部と考えられるものが2点見られる(100・255)。100は脚部に半月状の透かしをもち、口縁部に1ヶ所抉りを入れる。255は「八」の字状にひらく高い脚をもち、脚の上位に透かしを入れる。皿部の平面形状は楕円形で、内面に粘土紐を×印状に貼り付ける。いずれも上部に瓦傘をもつ瓦灯と考えられる。

G 焼塩壺

土師器の焼塩壺は身と蓋がそれぞれ1点ずつ出土している(454・456)。454は外面に「泉州麻生」銘をスタンプする焼塩壺の身である。456は蓋で、下面に布目圧痕が残る。いずれも堺産と考えられる。

H 鉢

鉢(396)は平底で体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は上面に端面をもち、色調はにぶい橙色を呈する。

I その他

その他、七輪の五徳と考えられるもの(1)がある。体部内面に鍋受けと考えられる粘土塊を貼り付ける。129は内外面に透明釉を施釉する乗燭である。(岡田)

(イ) 陶器

陶器には丹波焼、備前焼、肥前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、京焼系陶器、産地不明のものなどがある。A 丹波焼 丹波焼には器種別では、播鉢、甕、壺・壺蓋、德利、鉢、火入れ、花瓶、尿瓶、花立て、インク瓶、硝酸瓶の蓋などがある。

播鉢

中近世の播鉢の分類・編年については、先学の研究がある(長谷川2004・2005・2006)。ここでは、その分類・編年案に準拠して概略を述べる。

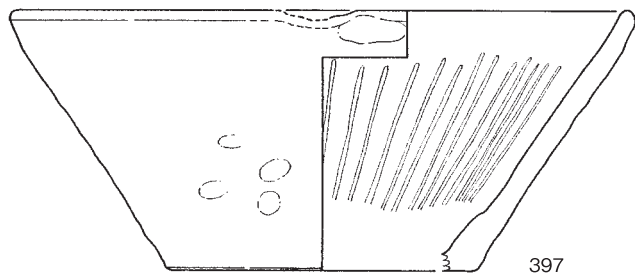
播鉢には、口縁部と体部が一体的に成形される中世播鉢 B 3類(82・397・398)と近世播鉢 類・同 類・同 類がある。近世播鉢 類は、中世播鉢 B 3類から派生して16世紀後半に成立する。その後、近世播鉢 類さらには近世播鉢 類へと系譜関係が追える。今回の調査では、近世播鉢 類・類・類のうち A 1類(289・292)と A 2(ヘラ)類(256)、B 2(ヘラ)類(23)、B 3類(28・39・50・281)、A類(134・240)、B類(438)、類(378)が出土している。

なお、中世播鉢 B 3類は16世紀後半に、近世播鉢 A 1類は16世紀後半～17世紀前葉に、同 A 2(ヘラ)類は16世紀後葉～17世紀中頃に、同 B 2(ヘラ)類は17世紀初頭～中葉に、同 B 3類は17世紀中頃～18世紀前半に、同 A類は17世紀後葉～18世紀中頃に、同 B類は18世紀中葉～後半に、同 類は18世紀末～19世紀代におのおの比定されている。(長谷川)

甕

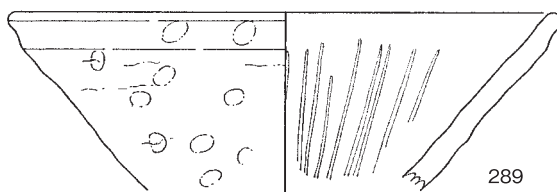
今回出土した江戸時代の丹波焼の甕は、口縁部の形態でおおまかに3分類できる。1. 端部が内外方向に拡張し、上面に端面をもつもの(類)、2. 受口状のもの(類)、3. 外側に開くもの(類)、の3種類である。今回出土した中で最も多い 類の甕を中心に記載する。

中世 ⅢB3類



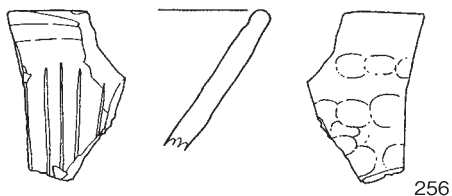
397

近世 I A 1類



289

I A 2類



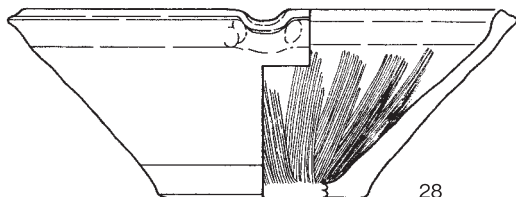
256

IB2類



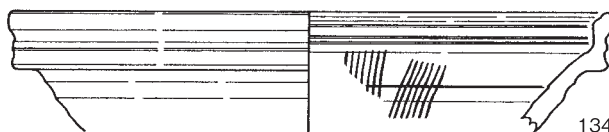
23

IB3類



28

IVA類



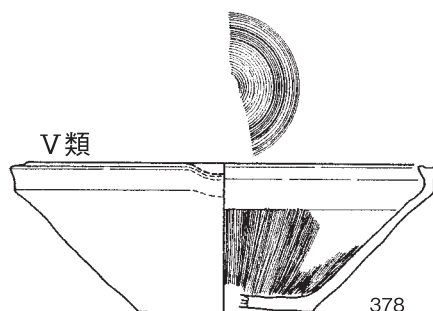
134

IVB類



438

V類



378



第8図 丹波焼播鉢分類表

丹波焼は江戸時代に入ると、それまでの無釉陶器から、釉薬や土部（化粧土）を塗布する技術が始まり、施釉陶器の生産を行なう。まず江戸時代の初めには灰釉を、その後、地元では「赤土部」とよばれる赤褐色に発色する土部（化粧土）が多用され、17世紀～18世紀にかけて、土部（化粧土）と釉薬を組み合わせながら、装飾技法が多様化する。19世紀になると土部は使用されなくなり、鉄釉が使用される。

装飾技法についても江戸時代に入ると変化が見られる。この中で、甕や徳利、鉢、桶などによくみられるものに、釉薬の上から灰釉を重ねがけする技法がある。飛び掛けと称して柄杓から釉薬を直接かけたものや、ロク口の回転を利用して柄杓を使い釉薬を流したものがある。これらの技法は、赤土部と組み合わせられることが多い。

その後、イッチン、もしくは筒と呼ばれる細い竹筒下部に穴を空けて、細い竹を差込んだ道具に釉薬を入れ、文字や文様を描く、筒描き、イッチン描きとも呼ばれる技法が生まれる。これらの技法は鉄釉などに使用されることが多い。

丹波焼の甕の場合、形のバリエーションはさほど多くないが、釉薬や装飾技法など、製作技法の進化が加わり、甕の多様性と変遷が生まれている。このため今回は、口縁部の形態とともに、製作技法の変化をより重視した分類を行なう。

類 口縁部が内側もしくは外側方向に拡張し、上面に端面をもつもの（184・390・58・329・322・288・323・351・352・119・200・120・433・380・307）

- 1 無釉のもの（184）

184は口縁部上面に水平な端面をもつ。口縁端部は外方に引き出す。内外面焼き締め。

- 2 土部を塗布しているもの（390・58・329・322・288・323・351・352）

土部を塗布しているものの中には、土部だけを塗布するもの（ - 2 - a ）と、その上に灰釉を流し掛けているもの（ - 2 - b ）の2種類がある。

- 2 - a 土部だけを塗布するもの（390・58・329・322）

390は口縁部がやや拡張気味であるが、後出するものほどには拡張していない。体部外面には凹線が施され、不遊環が貼り付けられている。外面にのみ赤土部が塗布され、内面は無釉である。58は口縁端部は水平方向に内側に引き出して上面に端面をもち、その端面に沈線5条を施す。329は口縁部上面に端面をもち、両横方向に拡張。凹線が2条巡る。体部外面上位全面に凹線が巡る。内外面とも赤土部を塗布している。322は大甕で、口縁部上面の端面には凹線2条を施す。体部外面上位には、凹線をもつ。内外面とも赤土部を塗布している。

- 2 - b 土部の上に灰釉を重ね掛けているもの（323・351・352・288）

323は口縁部は上面に端面をもち、両横方向に拡張する。口縁部上面に凹線2条を施す。内外面とも赤土部を塗布し、外面にはその上からロク口を使って灰釉を柄杓で掛けている。351・352は体部外面上半に凹線が全面に巡る。口縁部は両横方向に拡張し、上面に端面をもち、沈線が3条巡る。内外面とも薄く赤土部を塗布し、外面にはその上からロク口を使って灰釉を柄杓で掛けている。288は口縁部は上面に水平に端面を持つが、端面の凹線は明確ではない。赤土部の後、灰釉を柄杓で流し掛ける。内面は灰釉を施釉する。

- 3 鉄釉を塗布しているもの（120・433・380・307・119・200）

鉄釉を塗布しているものの中には、鉄釉だけを塗布するもの（ - 3 - a ）と、その上に灰釉を流

し掛けているもの（ - 3 - b）の2種類がある。

- 3 - a 鉄釉だけを塗布するもの（120・380・307）

120は口縁部は横方向に拡張し上面に端面をもつ。端面にすでに凹線はみられない。外面は鉄釉、内面は灰釉施釉。380は口縁部は両横方向に拡張して、上面に凹線をもつ。内外面とも鉄釉施釉。底部内面に重ね焼きの目跡。外面には焼き台の砂目痕跡。307は口縁部は横方向に拡張する。体部外面上位に櫛描きで鋸歯文状文様を施す。体部外面上半横方向の刷毛目調整。内外面とも鉄釉施釉。底部内面に砂目跡4箇所。底部外面に円形の重ね焼痕跡の砂目跡。

- 3 - b 鉄釉の上に灰釉を重ね掛けているもの（119・200・433）

433は口縁部は上面に端面をもち、横方向に拡張する。内外面とも鉄釉施釉。体部外面はその上に灰釉を流し掛ける。119は口縁部は横方向に拡張。口縁端部は上面に端面をもつ。外面は鉄釉を施しその上に筒描きで灰釉を流し掛ける。内面は灰釉施釉。200は口縁部は上面に端面をもち、横方向に拡張する。外面に鉄釉施釉の後、筒描きで灰釉を流し掛ける。内面は全面に灰釉施釉。底部内面に重ね焼の痕跡で砂目跡5箇所。底部外面は焼台痕跡で砂附着。

類 口縁部が受け口状のもの（402・87・401）

この口縁部の形状は、備前焼の大甕と類似する形態である。

402は口縁部は若干外方にひらき、端部は内傾する。窯印「x」「ヤ」が見られる。体部外面上位には、丹波では「猫描き」とよばれる縦方向の粗いハケ目調整。内外面は焼締めでその上に淡緑色の自然釉がかかる。87は口縁部は体部との界で屈曲し、内彎して直上に延びる。外面は赤土部塗布。灰釉を部分的に流し掛ける。401は上半部欠損だが、類もしくは類の口縁部である可能性が高い。体部内面は横及び斜め方向の板ナデ調整と横方向のナデ調整。内面に刷毛塗りで薄く灰釉施釉。外面は焼締め。

類 口縁部が外側に開くもの（261・442）

口縁部が外側に開く形態は、中世段階からすでにみられ、中世段階から継続する丹波的な形態ともいえる。

261は口縁部は大きく外方にひらき、内外面は焼締めで、無釉である。442は体部は大きく内彎し、頸部は短く直立。口縁部は大きく外方にひらく。体部外面にロクロ目が見られ、内外面に鉄釉が施釉される。

類の甕は、江戸時代前期からみられる形態であり、丹波焼の甕では最も出土例が多い。今回の遺物の形態と技法の組み合わせをみると、端面や外面に凹線をもつものは、赤土部を塗布したものに多い傾向があり、鉄釉で施釉される19世紀頃には、端面の凹線は形骸化し消滅している。またこの時期になると、筒描きでの装飾が多用されている。これは甕だけではなく、壺・甕・徳利に共通した特徴である。

壺

今回出土した多くは、壺蓋であり、壺本体と蓋がセットになったものは、1つのみである。

壺・蓋（355・356）

355は山笠形の蓋で、外面は鉄釉施釉の後、灰釉をイッチンで流し掛けて施文する。内面は無釉。

356は蓋の受け部をもつ壺である。外面は全面に鉄釉施釉の後、灰釉をイッチンで流し掛けて施文している。内面及び底部外面は無釉。

壺蓋 (34・70・89・113・112・170)

34・113は中央部が高まっている山笠形である。上面中央に棒状のつまみを貼り付ける。外面は鉄釉施釉、内面は無釉である。112・170は円盤形である。上面に棒状のつまみを貼り付ける。外面に鉄釉施釉の後、灰釉を筒描きで施文する。内側は無釉である。

70は円盤状の形態で、上面に棒状のつまみを貼り付ける。外面は鉄釉、内面は無釉である。

89はかぶせ蓋であり、上面は扁平である。上面に棒状のつまみを貼り付ける。外面には灰釉施釉、内面は無釉である。

壺蓋はいずれも鉄釉を用いており、伊丹郷町の調査でもよく出土する器種であり、19世紀以降のものである。

徳利

32は長い頸部をもつ大変薄作りの徳利で、備前などでは糸目徳利などとも呼ばれる形態のものである。表面は薄く鉄釉を施す。20はらっきょう形徳利である。表面に灰釉を施し、その上に鉄釉を筒描きで流しかけている。420もらっきょう形徳利で、外面には鉄釉、内面は無釉である。

123・360・445は通い徳利とも貧乏徳利とも呼ばれる徳利である。江戸の終わりから明治・大正と酒屋が小売り用に貸し出した徳利であり、ガラス瓶が普及する大正時代ごろまで使用された。回収のため、徳利の器面には現行のラベルに相当する銘酒名、酒屋名、地名などが書かれ、酒屋の宣伝容器でもあった。

360は大変薄作りで、表面にはうすく鉄釉が施されている丁寧な作りの通い徳利である。先の尖ったもので、「河内屋 二条」の文字が線刻されている。内面は施釉されず、精緻な土で作られている。123・445は鉄釉を施し、その上で、筒描きで文字が書かれている。今回は破片で判読できないが、酒屋の屋号などが記されていると考えられる。123の内面には灰釉が、445の内面には鉄釉が施されている。

江戸時代後期の丹波焼の徳利生産には大きく2つの特徴がある。1つは、多様な形の徳利を生産したことである。このさまざまな形を作り出せたのは、それまでの土よりもより極めて細やかで、成形しやすい粘土を使用したためであり、出土数は多くはないが、江戸時代後期の徳利の中には、大変薄く軽い徳利が認められる。今回出土の徳利でいえば、32・360がそれにあたる。もう1つの特徴は、通い徳利の生産である。江戸時代後期の大坂や京都などの町屋では、必ずといってよいほど、丹波焼の通い徳利が出土する。丹波ではこの時期に都会にむけて、通い徳利が量産されるようになる。このため、今回の徳利の資料も江戸時代後期の丹波焼徳利の特徴を反映しているといえよう。

鉢

丹波焼で、江戸時代後期以降よく知られている鉢は、植木鉢と睡蓮鉢である。今回出土したものの多くは植木鉢である。

9は口縁端部は外方に水平に折り曲げ、口縁部側面は指整形で凹凸をつける。底部中央に穿孔が1ヶ所あり、体部最下部には型で作った脚を3箇所に貼り付ける。外面の装飾は円形浮文・菊花文を貼り付け施文している。内外面には鉄釉が施釉される。310は口縁部は水平に外方に折り曲げ、外面には円形浮文と花文を貼り付ける。内外面に鉄釉を施釉。

15は底部の1ヶ所をへら状工具で抉り、体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は水平方向に外方につまみ出す。内外面は焼き締め。435は口縁端部は水平に外方につまみ出す。底部外面は穿孔1ヶ所。

焼締めの上に白泥のイッチン掛けで施文。底部外面に砂附着。

火入れ

体部の形態は類似するが、把手があるもの (53・259)、ないもの (54～56・258・280) があり、また、多くは無釉だが、口縁部から体部にかけて土部を塗布するもの (54～56) がある。

53は口縁部は上面に端面をもち、端部は若干内側に引き出す。外面に把手を貼り付ける。内外面とも無釉である。54は口縁端部は上面に端面をもち、口縁部～体部内外面上半に赤土部を塗布。口縁部に欠けた箇所が多く見られる。55は口縁部は断面方形に肥厚する。口縁部内外面は赤土部が塗布され、下半部は重ね焼きの痕跡がある。56は口縁端部上面に端面をもち、外面の口縁部から体部上半は赤土部が塗布される。下半部は重ね焼きの痕跡がある。口縁端部に打ち欠き痕が残る。258は口縁部は上面に端面をもち、内外面とも無釉で、口縁部に多数の打ち欠き痕が残る。259は体部外面にねじり棒状の把手を貼り付ける。口縁部は上面に端面をもち、内外面とも無釉で、指頭圧痕が残る。口縁部に多数の打ち欠き痕が残る。280は口縁部は上面に端面をもち、内外面は無釉で、口縁部に灰釉が付着する。

これらの火入れの口縁部には敲打痕がみられるため、煙管の灰を落とした痕跡と考えられる。

その他

花瓶 (393・450)

尊形花瓶である。393は口縁部内面から外面全体に白化粧が施されている。450は体部と口縁部を接合した痕跡が内面に顕著に残る。頸部に耳を貼り付ける。外面は全面に鉄釉施釉、内面は口縁部のみ鉄釉施釉で以下は露胎である。底部外面に砂が付着する。

尿瓶 (319)

体部上面に注口と把手を貼り付ける。外面全面に灰釉施釉、内面は無釉。底部には砂が付着する。

花立て (389)

板状粘土から成形。底部は尖る。外面は鉄釉を施釉、内面は無釉である。

インク瓶 (449)

口縁部の一部を捻って注口を作る。体部外面下位に「TOKYO CHAMPION INK」銘をスタンプ。外面は鉄釉施釉。

硝酸瓶の蓋? (460)

頂部は円盤状。体部は中空で外面に螺子溝を切る。上面は鉄釉施釉で、下面は無釉。

(松岡千寿)

B 備前焼・備前系陶器 備前焼には器種別では、擂鉢、甕、壺、皿、徳利、火入れ、壺蓋、急須、その他がある。

擂鉢

擂鉢には、備前焼といわゆる「備前系陶器」がある。

このうち、備前焼の分類・編年については先学の研究がある (乗岡2000・2005、間壁・間壁1966a・1966b・1968・1994)。ここではその分類・編年に準拠して概略を述べる。

今回の調査では、期 (51) と 期 (399・400) の製品が出土している。前者は15世紀代に、後者のうち399は中世6期に相当し16世紀後半に、400は近世1期に該当し16世紀後葉～17世紀前葉におのこの比定されている。

一方備前系陶器は、堺擂鉢・明石擂鉢などと一般的に呼称されている一群の擂鉢で、備前焼とは製作

技法上の相違が認められる（岡山市教育委員会2000、乗岡2007）。また堺播鉢と明石播鉢についても、分類・編年案とともに製作技法上の相違が指摘されている（稲原2000、嶋谷1996・2002、白神1992）。

備前焼・備前系陶器は、両者とも整形時にケズリ技法を用いて体部外面を整えている。その際の砂粒の動きは、正位で備前焼は左方向に移動する状況が観察でき、備前系陶器はその逆に右方向に砂粒が移動する。また播目の施文は、備前焼では口縁部の最終調整の後におこなわれるため、口縁部内面の播目のナデ消しは観察できない。一方備前系陶器は、播目の施文の後、口縁部の最終調整をおこなうため、口縁部内面の播目はナデ消される。窯詰技法は、備前系陶器は焼台を使用するため底部内面にその痕跡が認められることがあり、底部外面に溶着防止のための砂が付着していることが多い。一方備前焼は焼台を使用せず、製品を直接重ね焼きするため、底部外面に砂の付着が認められず、口縁部上端と縁帯部下部に溶着痕が残存する事例がある。

なお、備前系陶器と総称される堺播鉢・明石播鉢をみると、口縁部形態や底部内面の播目の施文方法に差異が認められる。とくに底部内面の播目の施文方法の差異は大きく、堺播鉢は初期段階では備前焼と同様に交差する3～4単位の播目で、その後いわゆる「ウールマーク状」の播目が施文される。それに対して明石播鉢の底部内面の播目は、いわゆる「放射状」に施文される事例が多い。

これらのことを前提にすると、備前焼とは異なる製作技法が観察される備前系陶器には、口縁部内面に凸帯を持つ 類と段を持つ 類がある。

類は、突起状の凸帯の A類（8・19・52・84・85・222・257・277・303・770・TR3）と、やや退化した突起状の B類（37・156・163・320・437）、凸帯が形骸化した C類（102・439・459）に細分できる。

A類は、口縁部のロクロナデによる整形時に摘み出され突起状の凸帯が形成され、凸帯下部は凹面状を呈する。 B類は、整形時の口縁部のロクロナデによる摘み出しが弱くなり、突起状の凸帯が退化し段状の形態となるが、凸帯下部には A類と同様凹面が形成されている。 C類は、凸帯は痕跡化しているものの、凸帯下部にはなだらかな曲線を呈する凹面が残存する。縁帯部の形状は、 A類はほとんど張り出しが認められないが、 B類では張り出し気味の形状を呈し、 C類は大きく張り出す。

一方、 類は段状の形態を呈する B類から系譜関係が追え、 B類から派生して成立したと想定でき、明瞭な段を持つ A類（94・103・388・436）と退化した段の B類、段が形骸化した C類（101・146）に細分できる。

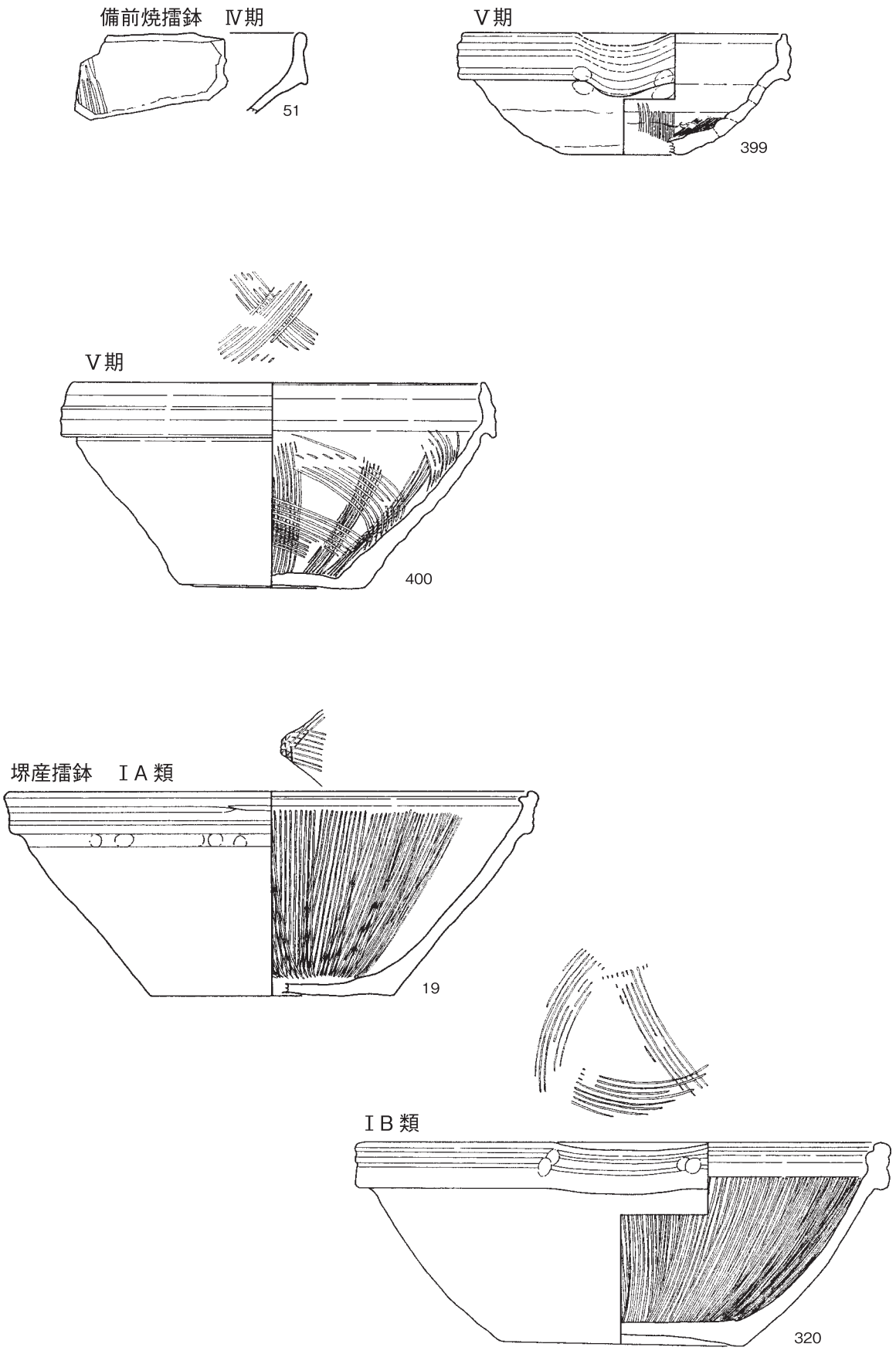
A類は、 B類と同様口縁部内面に段が認められるが、段下部には顕著な凹面は形成せず、内面の口縁部と体部の境界にも段が形成される。 B類は A類に比べ口唇部が肥大するが、段下部が凹線状にロクロナデされる B1類（2・83・104・168）と凹線が沈線化した B2類（86・419・430）に分けられる。 C類は段が痕跡としてしか認められず、沈線も痕跡化している。

縁帯部の形状は、 A類・ B類はやや張り出し気味の形状を呈し、 C類は大きく張り出す。

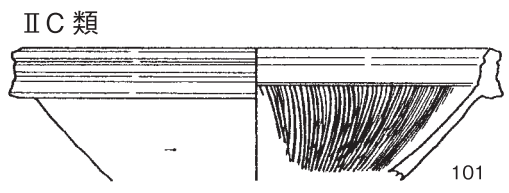
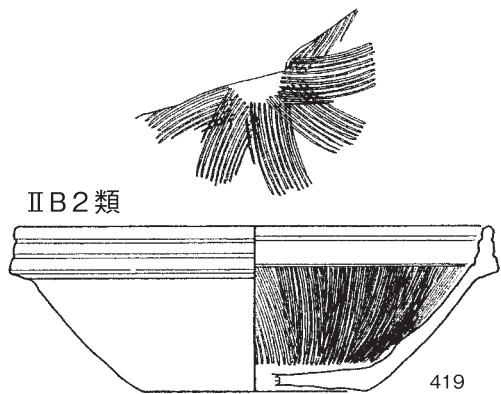
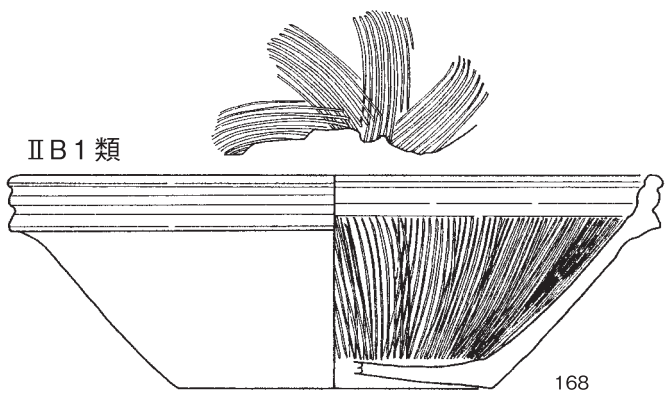
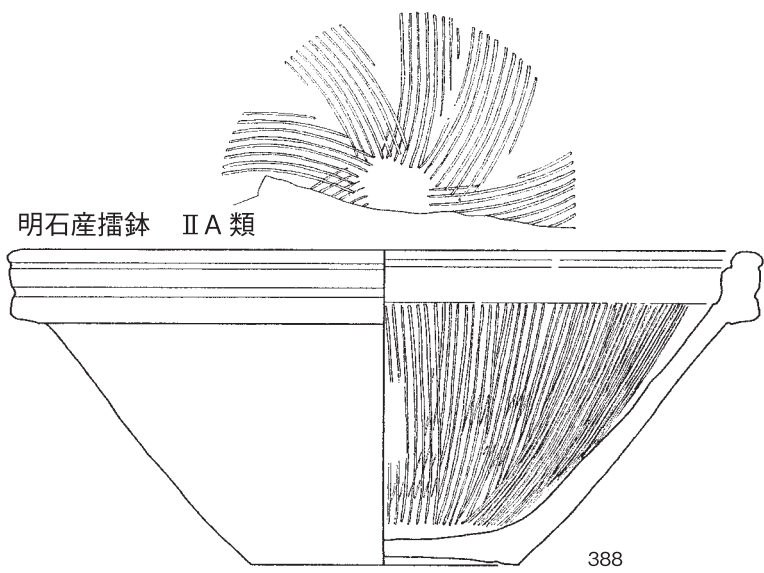
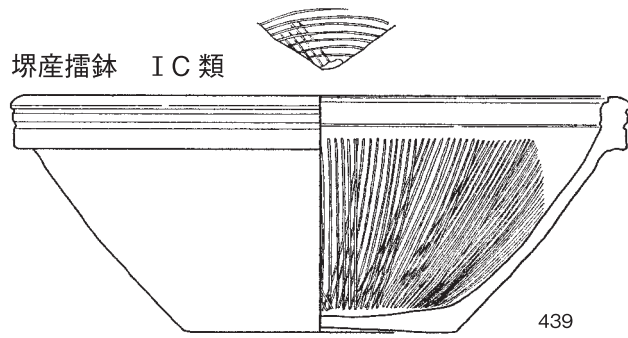
また底部内面には、 A類（19・770）に交差する播目が、 B類（320・437）・ C類（439）にウールマーク状の播目が、 A（388）・ B類（168・419）に放射状の播目がおのおの観察される。

なお先に述べた堺播鉢と明石播鉢の異同を参考にすると、 類は堺播鉢、 類は明石播鉢とでき、 A類は18世紀前半～中頃に、 B類は18世紀後半～19世紀初頭に、 C類は19世紀前半～後半に、 A類は18世紀後葉に、 B類は18世紀末～19世紀前葉に、 C類は19世紀におのおの比定されている。

（長谷川）



第9図 備前焼・備前系陶器播鉢分類表



第10図 備前系陶器播鉢分類表

甗

備前焼甗はいずれも口縁部の破片である。口縁部が楕円形状に肥厚する備前焼 期相当のもの (57) と、口縁部が楕円形状に肥厚し、外面に凹線が2条巡る備前焼 期相当のもの (17・135・455・457) とがある。 期 of もの は15世紀代に、 期 of もの は16世紀代にそれぞれ比定される。

壺

備前焼壺には朱泥小壺 (122)、鳶口壺 (260) と壺底部 (290) がある。朱泥小壺 (122) は平底で体部は大きく内彎してほぼ直上に延びる。内外面とも赤土部を塗布して、赤褐色に発色する。19世紀代に比定される。鳶口壺 (260) は平底で体部は大きく内彎する。頸部は短く直立する。口縁端部は玉縁状に肥厚し、口縁部の1ヶ所を捻って鳶口状に成形する。16世紀代の製品と考えられる。290は平底で体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。底部外面にヘラ描きで「吉」の字を施文する。

皿

備前焼と考えられる皿には、平底で体部が直線的に外上方に延びるもの (16)、平底で器壁は全体に薄く、体部と底部の界が不明瞭で、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる灯明皿 (48・49)、型打ち成形で、口縁部は輪花状に成形し、内面に型押しで鶴に草花文を施文するもの (234) がある。いずれも近世後半代の製品と考えられる。

德利

278は体部のみが残存であるが、船德利と考えられる。外面には赤土部を塗布し、内面の上半部には絞り目が見られる。

火入れ

火入れは2点出土している (95・142)。いずれも粘土紐巻上げ成形で、平底で体部は直立する。142の外面には火襷が見られる。

蓋

427は壺蓋である。扁平な円盤状を呈し、上面中央に短い棒状のつまみを貼り付ける。色調は暗褐色を呈する。

急須

313は煎茶用の急須と考えられる。平底で体部は直立し、口縁部は内傾する。体部外面に注口と把手を貼り付ける。色調は暗赤灰色を呈する。

その他

13は筒形容器である。体部は直立し口縁端部は丸味をもつ。体部外面には全面にヘラ描きの沈線を施文し、色調は赤褐色を呈する。建水あるいは水指として使用された可能性がある。379は鉢である。

C 肥前系陶器

肥前系陶器には器種別には椀、皿、鉢、搦鉢、向付などがある。

椀

肥前系陶器椀には、その残存部分から、口縁部から底部まで残るもの (224・225・315)、口縁部を欠き、体部から底部まで残るもの (61・64・136・161・238・428)、底部のみの破片 (59・233・262・316) に区分される。

口縁部から底部まで残るもの (224・225・315) は、高台はいずれも断面台形状で低い。224は内外面とも銅緑釉を施釉し、底部内面は蛇の目状に釉ハギする。外面の体部下半以下は露胎である。17世紀後

半～18世紀前半代の緑釉唐津である。225は平底で体部はほぼ直立する。内外面に灰釉施釉の後、白濁釉を施釉する。いわゆる朝鮮唐津で17世紀前半代に比定される。315は体部が僅かに内彎してほぼ直上に延び、外面に鉄絵で山水文を施文する。肥前系京焼風陶器と考えられ、17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

体部から底部まで残存するものは、高台の形態から高台が低いもの(161)、高台が断面台形状で比較的低いもの(61・62・136・238・428)、高台が細く高いもの(63・64)に分類される。また、底部のみ残存するものも同様に高台の低いもの(59・233)、高台が断面台形状で比較的低いもの(262)と高台が断面長方形形状で比較的低いもの(316)に分類される。

これらのうち、316は内面に山水文を施文し、外面に「木下弥」のスタンプをもつ。肥前系京焼風陶器で17世紀後半から18世紀前半代に比定される。また高台の細く高い63は内外面とも全面に灰釉を施釉するもので、17世紀後半代から18世紀前半代の所産と考えられる。その他はいずれも体部外面の高台脇以下が露胎で土見せが見られることから、17世紀前半～中ごろの所産と考えられる。

皿

皿も椀と同様に、その残存の度合いから、口縁部から底部まで残るもの(29・36・38・66・67・265・266・273・314)と底部の破片(60・232)に区分される。口縁部から底部まで残るものは、高台を浅く削り出し、胎土目跡を残すもの(38・66)、高台は断面台形状で比較的低く、砂目跡を残すもの(67・273・314)、高台の断面は台形状で、口縁部内面に凹線が巡る溝縁皿(29・265)、内外面とも銅緑釉を施釉し、底部内面を蛇の目状に釉八ぎする緑釉皿(36・266)に分類される。38・66は17世紀初頭、67・273は17世紀前半、29・265は17世紀中頃、36・266は17世紀後半～18世紀前半代にそれぞれ比定される。また、底部の破片は内外面とも灰釉を施釉し、外面の高台脇以下は露胎のもの(60・232)で17世紀前半代に比定される。

鉢

鉢には内面に鉄・緑・白濁釉を施釉する二彩唐津鉢(494)と、外面に白泥で波状文を施文する刷毛目唐津鉢(731・772)とがある。いずれも17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

摺鉢

摺鉢(771)は口縁部が僅かに外方にひらき、体部内面に9条1単位の櫛描きの摺目を施文する。口縁部の内外面には鉄釉を施釉する。17世紀中頃の時期が考えられる。

向付

向付(267)は底部内面に低い段を持ち、体部は屈曲して外上方に立ち上がる。内外面とも灰釉を施釉し、暗灰白色に発色する。17世紀前半代に比定される。

D 瀬戸・美濃系陶器

瀬戸・美濃系陶器には器種別には椀、皿、鉢、蓋、水盤などがある。

椀

瀬戸・美濃系と考えられる椀には、体部が直立し口縁部が外方にひらき、内外面とも長石釉を施釉する志野椀(309)、体部が内彎気味に外上方に延び、内外面とも緑釉を施釉する総織部椀(263)、体部は内彎し、体部外面に5～6条の凹線を巡らし、内面から体部外面上半に鉄釉を施す腰鑄椀(21・169・730・843)、体部は直立し、体部外面に細かいトビガンナ施文を施し、内外面とも灰釉施釉の後、口縁部外面から内面に鉄釉を施す鎧茶碗(856)などが見られる。志野椀、織部椀は17世紀前半代に、腰鑄

椀、鎧茶碗は19世紀前半代にそれぞれ比定される。またこの他に、体部がほぼ直立し、内外面に灰釉を施す灰釉椀（14）、体部が直線的に外上方に延び、体部外面に太い帯状に鉄釉を施す椀（97）、ロク口成形の後、外面に型押しで亀甲文を施す灰釉椀（96）などがあり、いずれも19世紀前半代に比定される。

皿

皿には長石釉を施す志野皿（35・88）、体部内面にヘラ彫りで菊花文を施す黄瀬戸菊皿（350）、口縁部が外方にひらき、端部を波状に成形するひだ皿（138）、体部は内彎気味に外上方に延び、内面に鉄釉で馬ノ目文を描く馬ノ目皿（536）などがある。志野皿は体部が内彎気味に外上方に延びるもの（35）と、口縁部～体部内外面を型押しで菊花状に成形するもの（88）とがある。志野皿は17世紀前半代に、黄瀬戸皿は16世紀後半代に、ひだ皿、馬ノ目皿は19世紀前半代にそれぞれ比定される。

鉢

鉢には体部は内彎気味に外上方に延び、内面から体部外面上半にかけて白濁釉を施すもの（117）と、平底で体部はほぼ直上に延び、口縁部は玉縁状に肥厚し、内外面に白濁釉を施すもの（424）、外面に草花文を印花で施すもの（872）がある。

蓋

蓋には壺蓋（148・235）と椀蓋（636）がある。壺蓋は体部が山笠形を呈するもの（148）と、円盤状を呈し上面に棒状のつまみを貼り付けるもの（235）とがある。いずれも外面に灰釉を施す。椀蓋はつまみが短く直立し、体部は直線的に外方に延びる。外面には鉄釉で竹葉文、内面は波状文を描く。

水盤

116は桶を模倣した水盤と考えられる。体部外面に凸帯を2条貼り付け箍を表現する。底部外面には台形状の脚を貼り付ける。内外面とも灰釉を施し、オリーブ黄色に発色する。

E 京焼系陶器

京焼系陶器には器種別には椀、皿、鉢、蓋、土瓶、急須、壺、鍋、片口、注口、灯火具、杯などがある。

椀

京焼系と考えられる椀には様々なタイプのものである。体部の形態から、体部が大きく内彎するA類、内彎気味のB類、直線的に延びるC類に大別される。さらにA類は体部が外上方に延びるA類（108）、ほぼ直上に延びるA類（110・838）に細分される。B類も同様に外上方に延びるB類とほぼ直上に延びるB類（493・728・729）に細分される。さらに、B類は口縁部の形態から直口するB a類（422・504・615）、外方にひらくB b類（106・159・421・534）に分けられる。C類も同様に体部が外上方に延び、口縁部が直口するC a類（226）、口縁部が外方にひらくC b類（105）、体部が直立し、口縁部が直口するC a類（264・274）、口縁部が外方にひらくC b類（862・863）に分類される。なお、A・B類及びC類は口縁部形態がいずれも直口するa類のみである。

皿

皿はいずれも灯明皿である。やや大型のもの（68・312）と小型のもの（10・115・157・425）がある。大型のものは、平底で体部が僅かに内彎して外上方に延び、体部内面にヘラ描きで格子状文を施すもの（68）、内面に菊花文を貼り付け、櫛描き施すもの（312）がある。いずれも内面に透明釉を施す。小型のものは、体部が直線的に外上方に延び、内面に凸帯が1条巡り、凸帯には袂りが1ヶ所

入る。いずれも内面に透明釉を施釉する。これらの灯明皿はいずれも19世紀前半代に比定される。

鉢

鉢には高台をもち、底部は緩やかに外上方に立ち上がり、体部はほぼ直立するもの(4)、平底で団子状の形骸化した脚を貼り付け、体部は大きく内彎するもの(328)、平底で体部は直立するもの(363)などがある。4は体部外面にイチチン掛けで松葉文を施文する。328・363はいずれも灰釉を施釉し、328は灰オリーブ色に、363は灰白色に発色する。

蓋

蓋は形態から、体部が短く直立し口縁部を水平に折り曲げ、外面中央部につまみを貼り付ける落とし蓋(22・69・114)、体部が山笠形を呈するもの(25・268・535・637・638・704・846・864・871)、体部が内彎するもの(40・236・423・486・487・716・799)、体部が扁平な円盤状を呈するもの(720)に分類される。体部が内彎する蓋は口縁部が直口する類(40・236・423・486)と口縁部を外方に水平に折り曲げる類(487・716・799)に細分される。落とし蓋、山笠形、円盤状蓋は壺蓋、体部内彎の類は鉢あるいは椀の蓋、体部内彎の類は鍋蓋と考えられる。

また、体部外面にトビガンナ施文する487・799は舞子・明石産の鍋に類例が多く見られる。

土瓶

土瓶には体部が大きく内彎するもの(26・432・866)と、体部が直線的に外上方に立ち上がり中位で大きく「く」の字状に屈曲して算盤玉状を呈するもの(27)とがある。866は体部外面上半にトビガンナ施文を施し、白濁釉を外面の口縁部～体部上半にかけて施釉する。26・432はいずれも灰釉を施釉する。27は体部外面上半に27条の沈線を施し、灰釉を施釉する。いずれも内面及び体部外面下半以下は露胎である。

急須

急須には素焼きで器壁は全体に薄く体部が大きく内彎し、体部外面に把手と注口を貼り付けるもの(227)、型作りで全面に灰釉を施釉する把手(537)、やや上げ底で外面にトビガンナ施文をするもの(711)、平底で体部は内彎気味にほぼ直上に延び、外面に鉄釉で丸に「花野峰」を施文するもの(823)などがある。227・711は煎茶器、823は近代以降の製品と考えられる。この他、京焼系陶器として摂津の古曽部焼の急須(165)がある。165は体部が直線的に外上方に延び、体部外面上面に注口を貼り付ける。底部外面に「古曽部」銘を押印する。19世紀前半以降に比定される。

壺

京焼系と考えられる壺には緑釉小壺(121)、灰釉四耳壺の口縁部(166)と、体部が内彎し外面に灰釉を施釉する壺(434)がある。434の底部には「信楽 谷 製」銘がスタンプされ、近代以降の製品と考えられる。

鍋

鍋には体部が内彎してほぼ直上に延び、口縁部が「L」字状に屈曲するもの(391・392)と、口縁部が外方にひらき端部が玉縁状に肥厚するもの(443)がある。391・443が鉄釉を、392が灰釉をそれぞれ内面から外面の体部上半にかけて施釉する。

片口

片口鉢(192)は体部が大きく内彎し、体部外面の上半に鉄釉を施釉する。外面の体部下半以下は露胎である。

注口

126は油差と考えられる注口容器である。平底で体部は直立し、内外面とも白濁釉を施釉する。外面の高台脇以下は露胎である。

灯火具

灯火具には秉燭（147）と燭台の底部と考えられる底部片（538）がある。秉燭（147）は平底で体部は大きく外反する。口縁部内面には凸帯が1条巡り、抉りが1ヶ所入る。口縁部内面～体部外面にかけて灰釉を施釉する。燭台の底部片と考えられるもの（538）は平底で底部外面中央に穿孔が1ヶ所見られる。底部上面には透かし彫りが施され、透明釉が施釉される。

杯

721は小型の杯である。体部はほぼ直上に延び、口縁部は僅かに外方にひらく。内外面とも白濁釉施釉の後、赤・黄・緑釉で菊花文を施文する。外面の高台脇以下は露胎である。

F 大谷焼

ごく少量ではあるが、大谷焼と考えられる甕（30・31・118）が出土している。

G 産地の特定できない陶器

産地の特定できない陶器には、器種別では椀、蓋、急須、徳利、花瓶、秉燭、皿、鉢がある。

椀

椀には体部が屈曲して外上方に延び、内外面とも白濁釉を施釉するもの（107）、底部が緩やかに外上方に延び、体部が短く直立するもの（109）、口縁部が外方にひらき、外面に灰・白濁・鉄釉でイッチン掛け施文するいわゆるピラ掛け椀（444・485）などがある。

蓋

蓋には外面に透明釉を施釉し、赤褐色に発色する落とし蓋（111）、円盤状で一重網目文を描く陶胎染付（639）、ミニチュアで三彩風の蓋（810）、山笠形で直立する短いかえりをもち、外面に鉄・赤・褐釉で枝葉文を施文する近代～現代の壺蓋（888）などがある。

急須

急須には素焼きのものが2点見られる。164は体部が大きく内彎し、頸部は短く内傾する。色調は褐灰色を呈する。

徳利

徳利には小型のいわゆる御神酒徳利（124・446～448）と通常の徳利（175・811）、洋酒瓶を模倣したもの（431）などがある。御神酒徳利は体部がややふくらむ下蕪形で緑釉を施釉するもの（124・446）と、体部上半で大きく内彎し、頸部が短く直立し、緑釉を施釉する梅瓶形のもの（447・448）とがある。通常の徳利は体部はほぼ直立し、中位で屈曲して内傾し、白泥を横縞状に刷毛塗りするもの（811）がある。洋酒瓶を模倣したもの（431）は体部が直立し、体部上半に長い把手を貼り付け、褐釉を施釉する。福山市鞆の浦の保命酒瓶に類例が見られる。

花瓶

花瓶には竹筒を模倣して、外面にガラス質の鉄釉を施釉するもの（125）がある。近代以降の製品と考えられる。

秉燭

秉燭には平底のもの、平底で短い脚部をもち、体部は大きく内彎するもの（285）とがある。平底

のものには体部が直線的に外上方に延びるもの（127・128）と体部が直立するもの（167・451）とがある。いずれも内面に灯芯立てを貼り付け、内外面に鉄釉を施釉する。

皿

皿には碁笥底を呈し、体部は内彎気味に外上方に延び、灰黄色を呈する素焼きのもの（381）がある。

鉢

鉢には幅が広く低い高台を持ち、体部が内彎し、内外面に白釉を施釉するもの（440・441）、高台が細く高く、口縁部を波状に成形し、白泥を波状に刷毛塗りするもの（467）、陶胎染付口縁部が外方にひらくもの（539）、口縁部が玉縁状に肥厚し、内外面とも白濁釉を横方向に施釉するもの（714）、型作り成形で内面に型押しで唐草文、蓆文を施文する緑釉鉢（691）などがある。691は清朝の緑釉陶器を模倣したものと考えられる。

（ウ） 磁器

磁器には産地別では肥前系、瀬戸・美濃系、三田系のほか産地の特定できないものがある。

A 肥前系

肥前系磁器には種別では白磁、青磁、染付青磁、染付磁器、色絵磁器がある。

a 白磁

白磁には碗、皿、紅皿、壺がある。

碗

碗には波佐見産の全体に器壁が厚い粗製の碗（73・228）、体部がほぼ直立する碗（141）、体部がほぼ直線的に外上方に延びる碗（72・269）、体部が外反気味に外上方に延び、口縁部が若干外方にひらく碗（270）などがある。

皿

皿には波佐見産の器壁が全体に厚く、底部内面を蛇の目状に釉ハギし、外面の体部下半以下は露胎の粗製の皿（11・74・75）、蛇の目凹形高台をもち、型押しで菊花状に成形する皿（130・149）がある。

紅皿

紅皿（131・196・197・229）は型作り成形で花卉状に成形し、内面に透明釉を施釉する。外面は露胎である。

壺

132は高台の幅が広く低い。体部は内湾気味にほぼ直上に延びる。

b 青磁

青磁には皿、鉢がある。

皿

皿には内面にヘラ状工具で菊花文を施文するもの（71）、型押しで扇面、雲形文を施文するもの（495）がある。

鉢

鉢には無文のもの（171）と内面に型押しで花卉文を施文するもの（505）がある。

c 染付青磁

染付青磁には 碗、蓋、鉢、皿、杯がある。

碗

碗は体部の形態から、体部が内彎して外上方に延びるもの（506・616～618・816・832）、直線的に外上方に延びるもの（692・905）、ほぼ直立するもの（693・773・818）に分類される。体部が内彎する碗では832以外はいずれも口縁部内面に四方禪文を描き、616・617はいずれも高台裏に渦福文を描く。体部が直線的に外上方に延びる692は内面に四方禪文を描く。体部が直立するものも口縁部内面に四方禪文を描き、693は崩れた五弁花文を、773は渦福文を描く。

蓋

蓋はいずれも碗蓋と考えられる。体部の形態からは、口縁端部が短く直立するかぶせ蓋（622）と体部が内彎する落とし蓋（525・619～621・662・678・683・836・875）に大別される。いずれも口縁部内面には四方禪文、内面には五弁花文、つまみの内面には渦福文などを施文する。

鉢

151は体部が直立する筒形を呈する。543・694はいずれも蛇の目状凹形高台を呈する。543は型打ち成形で口縁部は型打ちで花弁状に成形し、内面に菊花文を描く。694は口縁部が若干外方にひらき、内面に島嶼、帆掛け舟などを描く。

皿

663は蛇の目凹形高台をもち、体部は直線的に外上方に延びる。内面に海浜風景、帆掛け舟などを描く。

杯

542は断面台形状の高台をもち、体部は直立する。内面に四方禪文とコンニャク印判で五弁花文を施文する。661は高台は外縁を細く低く削り出し、体部は僅かに外傾する。口縁部は波状に成形し、内面に菱形文を描く。661は蕎麦猪口として使用されたものと考えられる。

d 染付磁器

染付磁器には碗、皿、杯、仏具碗、瓶、鉢、蓋、蕎麦猪口、香炉などがある。

碗

今回出土した肥前系磁器の中で、器種別では碗が最も多く出土している。碗の中では波佐見産のくらわんか手碗（464・466・468・469・473・475・478・481・484・509～512・524・527・528・545～551・614・623・642・644・664～666・669・670・684・712・717・718・725・727・733～750・774・777～781・801～804・812・819・840・841・844・848・870・876・889・891・904）がもっとも多く見られる。

その他、形態別では、体部が大きく内彎する半球形碗（482・555・751～753・783・800）、高台は「八」の字状にひらき端整な形に成形する京焼風碗（479・502・680・685・755・851）、高台が細く高い広東碗（671・679・782・892・906・909）、口縁部が外方にひらく端反碗（660）、器壁が比較的厚く、外面に笹葉文や雨降り文を描く粗製の小碗（529・530・544・625・643・668・757・788・849）などが見られるが、くらわんか手碗の占める割合が圧倒的に高い。

また、文様別では一重網目文を描くもの（497・508・724・768・786・912）、二重網目文を描くもの（476・526・667・682・705・706・776・778・839・890）、外面に半載菊花文を施文する初期伊万里碗（496・787）、線描きの草花文を描くもの（646）、菊唐草文を描くもの（765）、山水文を描くもの（775）、雨降り文を描くもの（813・831・849）などがあるが、雪輪あるいは簡易な草花文を描く、くらわんか手碗が最も多い。

皿

皿は碗について出土点数が多い。また、碗と同様に波佐見産のくらわんか手のもの（517・518・533・591～593・595・651～653・681・708・709・759～761・792～794・796・806・820・847・852～854・881・896）が最も多く見られる。また、低い断面三角形の高台をもち、高台畳付に砂が附着する初期伊万里皿（480・483・490・499～501・515・516・769・789～791・795・845）も破片ではあるが、比較的多く見られる。また、その他に、蛇の目凹形高台をもつ粗製の皿（491・598・600・633・654・797・857・897）、体部が内彎するもの（627・699・762・807・TR4）が見られる。中でも797は口ク口成形の後、型打ちで口縁部を波状に成形する。この他、口縁部を輪花状に成形するもの（594）、内面に紅葉文を施文するもの（763）などがある。

杯

杯（465・571～575・650・673・674・689・829・850・907・916）は形態的には、断面台形状の低い高台をもち、平底で体部は直立する。底部内面にくずれたコンニャク印判で五弁花文を施文するものが比較的多く見られる（571～575・650・673・689）。外面の文様には、帆掛け舟（571）、梅花文（572・850）、コンニャク印判の草花文（650）、半截菊花文（673・829）、菊花文（573）、草花文（574・575・674）、矢車文（689）、銅版転写の流水状の細かい草花文と菊花文（907）、菊花文と氷裂文（916）などがある。907が近代以降に比定される他はいずれも19世紀前半代の製品である。

仏具碗

仏具碗はいずれも蛇の目高台あるいは蛇の目凹形高台に作り、短く直立する脚部をもち、碗部の形態には内彎気味に外上方に延びるもの（608・676・703・808）、内彎気味にほぼ直上に延びるもの（609・809・833・837）、直線的に外上方に延びるもの（610）などがある。外面の文様には蛸唐草文（608・703）、コンニャク印判の菊唐草文（609）・紅葉文（837）、斜格子文（610）、半截菊花文（808）、雨降り文（809）、丸文（833）、芒文（676）などがある。時期は608・703・809・837が18世紀代、609・808が波佐見産で18世紀後半代、610が19世紀前半代にそれぞれ比定される。

瓶

瓶は体部が大きく内彎する仏花瓶（710）と、小型の御神酒徳利がある。御神酒徳利は体部上位が大きく内彎する梅瓶形を呈するもの（612・613・635・657・901）と頸部が細長く直立する鶴首形のもの（611）とがある。外面の文様には蛸唐草文（612・613・657・901）、杜若文（635）と五曜星（611）がある。

鉢

鉢には、体部が内彎気味に外上方に延び、口縁部が外方にひらき、型打ちで口縁部を輪花状に成形するもの（470）、体部がほぼ直立し、口縁部は外方にひらき輪花状に成形するもの（474）、体部が直立するもの（702）、高台は碁笥底状を呈し体部が直立する重ね鉢（605・634・655）、蛇の目凹形高台をもち、体部は直線的に外上方に延び、口縁端部が玉縁状に肥厚するもの（607）、体部が大きく内彎して外上方に延び、口縁部が大きく外方にひらくもの（656・675）、体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部を若干水平に引き出すもの（690）、碗形のもの（764・859・900）、清朝青花写し（885）など様々なタイプがある。

蓋

蓋には碗蓋と壺蓋がある。壺蓋（908）は外面中央に円柱状のつまみを貼り付け、外面にコンニャク

印判で紅葉文を施文する。碗蓋は体部が山笠形を呈するもの（513・588・830）と体部が内彎して外方に延びるもの（910）とがある。外面の文様には梅と鶯（513）、線描きの草花文（588）、鳥と藤（830）、細かい草花文（910）などがある。

蕎麦猪口

805は器壁が全体に薄く、高台は断面三角形状で低い。体部は直立し、口縁部は僅かに外方にひらく。外面に草花文を描く。19世紀前半代の製品であろう。

香炉

香炉はほぼ同タイプのもので2点出土している（767・860）。底部は高台と獣足状の脚の両者を持ち、体部は大きく内彎し、頸部は短く直立する。口縁部は大きく外方にひらく。外面には宝尽くし文等を施文する（860）。内面は露胎である。

e 色絵磁器

色絵磁器には碗、皿、鉢、蓋、蕎麦猪口がある。

碗

869は高台が細く高い広東碗である。内外面に赤絵で菊唐草文を描く。

皿

641は内面に型打ちで草花文を施文し、内外面とも薄い呉須を全面に施釉する瑠璃釉の皿である。

鉢

659は平底で体部は直立する。外面に赤・青・緑・金襴手で草花文を施文する。

蓋

492は碗蓋である。山笠形でつまみは比較的細く高い。外面に赤絵と金彩で斜格子文と草花文、内面に草花文と「魁」を施文する。

蕎麦猪口

658は器壁が全体に薄く、高台は細く高い。体部はほぼ直立し、口縁部はやや外方にひらく。外面に呉須・赤絵・金彩で雲龍文などを描く。底部外面には赤絵で「大明成化年製」銘を施文する。

B 瀬戸・美濃系

瀬戸・美濃系磁器は白磁と染付磁器がある。

a 白磁

白磁には皿がある。

皿

90は体部が僅かに外反気味に外上方に延び、口縁部は外方にひらく。底部内面に印花で文字文（壽）を施文する。色調は白色を呈する。

b 染付磁器

染付磁器には碗、皿、杯、蓋がある。

碗

碗には体部の形態から、体部が内彎気味に外上方に延びる 類、体部が直線的に外上方に延びる 類、体部が直立する 類（498・576・581）に大きく分類される。 類は口縁部が外方にひらく A類（557・558・563・629・630・649・766・868）と口縁部が直口する B類（553・687・817）に分類される。 類も同様に口縁部が外方にひらく A類（559～561・564・566・568・672・722・828）と口縁部が直口

する B類 (567・569・696・697・726) に細分される。 A類・ A類はいわゆる端反碗で、碗の主体を占めている。

皿

皿には外面にやや滲んだ呉須で簡易な草花文を描くもの (597) と、口縁部が僅かに外方にひらき、外面にやや濃い呉須で草花文を描くもの (915) がある。

杯

杯には口縁部が外方にひらき、外面に草花文を施文する清朝青花写しのもの (532) がある。

蓋

蓋はいずれも碗蓋で、体部が内彎し、つまみの外面に蝙蝠を描くもの (584)、体部が僅かに内彎して外方に延び、口縁部が外方にひらくもの (587・590・632・798) がある。外面の文様には、山水文 (587)、蝙蝠 (590)、草花文 (632・798) などがある。

C 三田系

三田系磁器は青磁のみで器種別では鉢、急須、碗がある。

鉢

鉢はいずれも型作り成形で、外面に型押しで牡丹唐草文を施文するもの (143・150・540)、草花文を施文するもの (867)、高台の平面形が八角形を呈するもの (873) がある。

急須

826は型作り成形で、体部は内傾し、口縁部も短く内傾する。外面に型押しで唐草文を描く。

碗

133・158はいずれもロクロ成形で、無文である。高台畳付の釉はかきとり、赤褐色を呈する。

D 産地の特定できない磁器

産地の特定できない磁器には白磁、青磁、染付青磁、染付磁器、色絵磁器がある。

a 白磁

白磁には碗と皿がある。

碗

140は体部が内彎してほぼ直上に延び、体部内面には針目跡が見られる。

皿

294は口縁部が外方にひらき、底部外面は露胎である。肥前系の可能性も考えられる。

b 青磁

青磁には碗、碗蓋、鉢、皿がある。

碗

碗には外面にトビガンナ施文する小碗 (874) と、青磁の地に酸化コバルトと白釉で草花文を施文するもの (471) がある。いずれも幕末から明治期の製品と考えられる。

碗蓋

640は近代以降のクローム青磁で、緑・赤釉で草花文を施文する。つまみの内面に「千峰園製」銘を施文する。

鉢

822もクローム青磁で、外面に白・茶・緑釉で植物文を施文する。近代以降の製品である。

皿

461も同様に近代以降のクローム青磁で、内面に白・緑・鉄釉で白菊を施文する。

c 染付青磁

染付青磁には碗がある。

碗

507はトピガンナ施文の後、枇杷の実を型押しで施文し、青磁釉を施釉した後、酸化コバルトで枝・葉を描く。近代～現代の製品であろう。

d 染付磁器

染付磁器には碗 蓋、皿、鉢、植木鉢、杯、水滴、蕎麦猪口、合子、徳利、ポットなどがある。

碗

碗には様々なタイプのもが含まれるが、大きく近代以降の製品、中国青花写し、広義の京焼系と考えられるもの、19世紀前半代の肥前系あるいは瀬戸・美濃系磁器に類似するもの(645・754・784・842・893・913)、その他(565・715・827)に区分される。

近代以降の製品には、外面の文様を型紙摺りで施文するもの(472・877)、銅版転写で施文するもの(541・648)、筒形の湯呑み碗(577・578・688・895)、その他(488・531・556・570・698・894)がある。中国製青花写しの碗には明末～清初の青花写し(552)と19世紀代の清朝青花写し(723・914)がある。

広義の京焼系磁器には高台が比較的細く高く、形態の端整なもの(562・579・580・686)が比較的多く見られる。

蓋

蓋にはかえりをもつ壺あるいは蓋物の蓋(758・814)と、かえりをもたない碗蓋(489・583・585・586・589・631・707・713・878)がある。758・814はいずれも体部が内彎し、かえりは短く内傾する。碗蓋には体部が内彎するもの(489・583・585・631・707・713)と体部が山笠形を呈するもの(586・589・878)がある。

皿

皿には文様の施文方法から銅版転写で施文するもの(462・519・883)、型紙摺りで施文するもの(520・521)、酸化コバルトの手描きで施文するもの(602・858・884・918)などがあり、これらはいずれも近代以降の製品と考えられる。またその他、中国製青花磁器の写しと考えられるもの(514・898)などがあり、広義の京焼系あるいは関西系磁器と考えられる。蛇の目凹形高台をもち、口縁部が肥厚する596・882は肥前系の可能性も考えられる。さらに、口縁部が大きく外方にひらく手塩皿(522)、口縁部を型打ちで波状に成形するもの(599・815)、内面に巴文を施文するもの(899)などがあり、いずれも近代以降の製品と考えられる。

鉢

鉢には、体部が直立する筒形のもの(463・824)、蓋付き鉢(523・606)、型打ち成形で高台が円形、口縁部が八角形を呈するもの(604)、蛇の目凹形高台をもち、体部は直線的に外上方に延び、大皿状で比較的器高の低いもの(626)、体部が直線的に外上方に延び、器面に釉切れが見られるもの(503)などさまざまなタイプのもが見られる。なお、503は漳州窯系青花の可能性が考えられる。

植木鉢

603は体部が内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部は水平に外方に折り曲げる。外面には草花文を描き、内面は無文である。

杯

582は体部が直線的に外上方に延び、体部外面には酒宴図・詩文を施文する。近代以降の製品と考えられる。

水滴

677・911はいずれも型作り成形で、形状は直方体である。677は上面に型押しで菊花文を施文し、911は呉須で山水樓閣文を描く。いずれも広義の京焼系の製品と考えられる。

蕎麦猪口

756は平底で体部は直線的に外上方に延びる。外面に草花文を描き、底部外面に「大明年製」銘を施文する。19世紀前半代に比定される。

合子

合子は蓋が2点(879・887)出土している。879は体部が円盤状を呈し、かえりは短く直立する。外面に扇・鼓・羽子板などをプリントする。近代～現代の製品と考えられる。887は体部が内彎し、外面に九曜文を施文する。

徳利

902は平底で体部は僅かに内彎気味に直上に立ち上がり、上位で屈曲して内傾する。体部外面に福寿草などをプリントする。近代以降の製品と考えられる。

ポット

886は平底で体部は若干外反気味に外上方に延び、口縁部は短く内傾する。体部上半に環状の把手と注口を貼り付ける。外面に酸化コバルトで葉文を施文する。近代以降のミルクポットと考えられる。

e 色絵磁器

色絵磁器には碗、鉢がある。

碗

695は体部が内彎して外上方に延びる。外面に朱・群青・緑・茶の釉で花文などを描く。903は体部が内彎気味に外上方に延び、中位で屈曲して口縁部は内傾する。内外面に呉須と鉄釉で施文する。いずれも近代～現代の製品と考えられる。

鉢

鉢(855)は平底で体部は直立する。外面に赤絵と金襴手で巻物などを施文する。段重と考えられる。

(岡田)

(2) 時期設定と土器・陶磁器組成の変遷

前項で述べた土器・陶磁器の分類をもとに、ここでは、16世紀後半代から19世紀後半代に至る時期を大きく～期に区分し、今回の調査地点における土器・陶磁器組成の変遷について概観したい。

期(16世紀後半～17世紀前半)

この時期の遺構は今回の調査では極めて少ない。この時期の遺物がまとまって出土したものにSK1007出土遺物がある。

ここでは、土師器皿（394・395）鉢（396）、丹波焼甕（401・402）播鉢（397・398）、備前焼播鉢（399・400）などの出土が見られる。

土師器皿はいずれも非口口成形で体部が内彎気味に外上方に延び、内面の体部と底部の界が不明瞭なものである。丹波焼甕は口縁部が受け口状を呈する類（401・402）がある。播鉢は内面にヘラ描きの播目を施す中世 B 3類（397・398）の播鉢が出土している。また備前焼には間壁編年 期相当の播鉢（399・400）がある。

この他、この時期の陶磁器類では肥前系唐津の胎土目の椀（161）、皿（38・66）、向付（267）などが見られるが、量的には少量である。

期（17世紀中頃）

この時期の遺物も比較的少量ではあるが、土師器では播磨型焙烙 A 1類（179）・A 2類（183）が見られる。また、丹波焼では甕類（87）、播鉢 B 3類（28）などが見られるが、備前焼は姿を消す。

肥前系陶器では灰釉陶器椀（62）、溝縁皿（29）などが見られる。また、肥前系磁器には初期伊万里皿（500）、一重網目文碗（768・800）などが少量見られる。

期（17世紀後半～18世紀前半）

この時期は肥前系の磁器が急速に増大し、また、無釉陶器でも堺産播鉢が出現し、丹波焼播鉢に代わって主体を占めるようになるなど、土器・陶磁器が種類・量とも急速に増大する時期である。

まず、土師器では播磨型焙烙 B類（173）に加えて、焙烙型類が出現する。さらに、火消し壺類（362）が出現する。丹波焼では、甕 - 2 - a類（329）、 - 2 - b（323）類が見られる他、瓶形徳利（420）が見られる。対照的に播鉢は少なくなり、B 3類（28）、A類（134）が見られる程度である。また、それに代わって、堺産播鉢 A類（19）が出現し、量的には丹波焼を凌駕するようになる。

肥前系陶器では京焼風陶器椀（315）、緑釉陶器椀（224）、皿（36）、二彩唐津鉢（494）、刷毛目唐津鉢（731）などが多く見られる。肥前系磁器は、染付青磁碗・皿の他、波佐見産の粗製のいわゆるくらわんか手碗（804・802）、皿（794）を中心に、鉢（764）、仏具碗（837）などが大量に見られる。

期（18世紀中頃）

土師器では火消し壺 A類が出現する。丹波焼では、甕 - 3 - b類（119）、播鉢 B類などがみられる。また、播鉢では堺産播鉢 A類が前代に引き続き使用されている。肥前系磁器では前代に引き続き波佐見産の粗製の碗（780・682）、仏具碗（703）などが大量に使用されている。

期（18世紀後半～19世紀前半）

土師器では播磨型焙烙 C類・D類が出現する。また、焙烙型類・類も見られるようになる。火消し壺は B類が出現する。丹波焼播鉢では B類・類が僅かに見られる。堺産播鉢では B類が見られる。さらに、明石産播鉢の A類・B1類・B2類が出現し、播鉢の主体は明石産播鉢が占めるようになる。丹波焼では播鉢は減少するものの、甕では甕 - 3 - b類（200）が比較的多く使用されている。またラッキョウ徳利（32・360）、貧乏徳利（445）、壺（356）なども多く見られ、製品の主体が播鉢から甕・壺、さらにこの時期の後半には徳利へと移行する。

肥前系陶器はこの時期はほとんど見られず、代わって瀬戸・美濃系の鎧茶椀（856）・腰錆椀（843）、灰釉ひだ皿（138）、馬ノ目皿（536）などが出現する。

京・信楽系陶器では、小杉椀（422）、半球形椀（838）などが見られる。また、明石産と考えられる体部が算盤玉状を呈する土瓶（27）もこの時期になって出現する。

磁器は肥前系のものに加えて、瀬戸・美濃系、京焼系の三田焼が出現する。

肥前系の磁器碗では波佐見産のくらわんか手碗に加えて、広東碗（892・909）が新たに出現する。さらにこの時期の後半には半球形碗（482）、端反碗（719）などが出現する。皿では蛇の目凹形高台を持つ粗製の皿（633）がある。この他に、鉢（607）・外面に雨降り文を描く仏具碗（809）、外面に半截菊花文を描く杯（673）・蕎麦猪口（805）などが見られる。

瀬戸・美濃系磁器では端反碗で外面に馬ノ目文を描くもの（722）・染色体状文を描くもの（696）などがある。京焼系の三田焼では青磁鉢（867・540）・急須（826）など型物の青磁が少量みられる。

期（19世紀中葉以降）

幕末～明治にかけてのこの時期は引き続き前代のもものが継続して使用されているが、染付磁器では新たに酸化コバルトを使用した濃い藍色で施文するものが出現する。

土師器では、内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉の灯明皿が使用されている。擂鉢では堺産の C 類（439）が前代から継続して使用されている他に、明石産 C 類（101）の使用が見られる。丹波焼では外面にイチチン掛けで施文するいわゆる貧乏徳利（445）が引き続き使用されている。

肥前系磁器では端反の清朝青花を模倣したと考えられる鉢（885）の他、外面に斜格子文を描く仏具碗（610）などが見られる。瀬戸・美濃系磁器では前代に引き続き端反碗が使用されている。三田青磁も同様に型物の鉢・急須が使用されている。

さらに、産地は特定出来ないが、この時期に新たに出現するものに、酸化コバルトを用いて、銅版転写で施文する湯呑み碗（895）・碗（648）などがある。

(3) まとめ

以上、今回の調査地点での土器・陶磁器組成の変遷について時期を ～ 期に区分して、その概要を述べてきた。最後にそれぞれの土器・陶磁器について、食膳具・調理具・貯蔵具・その他に分けてその変遷をまとめ、土器・陶磁器組成の変遷から窺える社会的背景について若干検討を加えて本節のまとめに代えたい。

1. 食膳具

今回出土した中で最も多いのは碗・皿・鉢などの食膳具である。中でも碗はもっとも個体数が多く、普遍的に出土している。

碗

碗は 期では、磁器碗は見られず、肥前系陶器の唐津胎土目碗・砂目碗で占められている。なお、瀬戸・美濃系の志野・織部などの碗も極少量であるが出土している。

期になると、唐津碗に加えて、肥前系の一重網目文碗などの磁器碗が出現するが、主体は肥前系陶器碗が占めている。

期になると、肥前系陶器碗には刷毛目唐津、緑釉唐津、京焼風陶器碗などがあり、依然として使用は継続しているが、新たに、染付青磁の蓋付き碗、波佐見産の粗製のくらわんか手碗などが出現し、徐々に碗の主体は磁器碗へと移行してゆく。

期になると肥前系陶器碗はほとんど姿を消し、染付青磁碗と肥前系波佐見産の粗製の染付磁器碗が

主体を占めるようになる。

期には肥前系磁器碗に、新たに広東碗が加わる。また、瀬戸・美濃系の陶器碗・磁器碗、京焼系の陶器碗・磁器碗が出現し、肥前系磁器碗の独占状態は崩れる。

期には肥前系の端反碗など肥前系磁器も継続使用されているが、瀬戸・美濃系の陶器碗・磁器碗、京焼系の陶器碗、三田焼などの磁器碗が増大し、肥前系磁器碗の占める割合が低下してゆく。

皿

皿は 期には肥前系唐津の胎土目皿 (38)、砂目皿 (66) が見られる。他に、極少量ではあるが土師器皿がある。

期には肥前系の溝縁皿が見られる。また、肥前系磁器の初期伊万里皿も比較的多く見られる。

期には肥前系唐津灰釉皿 (67) ・ 緑釉皿 (36) に加えて、碗と同様に肥前系波佐見産の粗製の白磁皿・染付皿 (794・795) が出現する。

期には肥前系陶器皿が急速に姿を消し、肥前系波佐見産の粗製の磁器皿が主体を占めるようになる。

期は波佐見産の粗製の皿が依然として主体を占めるが、それに瀬戸・美濃系陶器のひだ皿 (138)、馬ノ目皿 (536)、三田焼の型物の青磁皿が加わる。

期は資料が少なく実態はつかみにくい。肥前系磁器の蛇の目凹形高台をもつ皿 (600)、瀬戸・美濃系陶器皿に加えて、瀬戸・美濃系磁器皿も少量みられる。

2. 調理具

調理具を代表するものとして播鉢がある。播鉢は 期ではすでに主体は備前焼から丹波焼に移っており、備前焼は 期のものが少量見られる程度であるのに対して、丹波焼では中世 B 類 (397)、近世 A 1 類 (291) ・ B 2 類 (23) など量のみならず、種類も豊富である。

期には播鉢は丹波焼 B 3 類 (28) のみで、備前焼が姿を消し、播鉢は丹波焼のみで占められるようになる。

期に入ると丹波焼 B 3 類 (28)、 A 類 (134) に加えて、堺産播鉢 A 類 (19) が出現する。

期は丹波焼播鉢 B 類 (438)、堺産播鉢 A 類が継続して使用されている。

さらに、 期には、堺産播鉢 B 類 (320)、明石産播鉢 A 類 (388) ・ B 1 類 (168) ・ B 2 類 (419) などが加わり、播鉢の主体は堺・明石産播鉢に移行する。

期には丹波焼播鉢 類が僅かに見られるものの、播鉢の主体は堺産播鉢 C 類 (439)、明石産播鉢 C 類 (101) など完全に堺・明石産播鉢に移ってゆく。

3. 貯蔵具

貯蔵具には甕・壺・壺の変形した徳利などがある。

甕

甕は 期に備前焼が見られる他は 期～ 期を通じて丹波焼が使用されている。

期には受け口状の口縁部をもつ 類が見られる。

期の資料は少ないが、依然として 類の甕が継続して使用されている。

期には、T字形の口縁部をもち、土部を塗布する - 2 - a 類 (329)、同様の口縁部をもち土部の上に灰釉を柄杓掛ける - 2 - b 類が使用されている。

期には鉄釉を塗布し、さらに筒描きで灰釉を流し掛ける - 3 - b 類 (119) が出現する。

期にも甕 - 3 - b 類が継続して使用されている。

壺

壺は良好な資料が乏しいが、期に受け口をもつ長谷川分類 B類相当のもの(356)が、蔵骨器として転用されて使用されている。

徳利

壺の変形である徳利では、期に瓶形徳利が見られる。期には徳利は見られないが、期以降急速に増加し、ラッキョウ徳利(32・360)、貧乏徳利(445)などが見られ、徳利の使用が顕著になる。

4. その他

その他の器種では、期以降に出現し、その後急速に増加するものに、京焼系陶器の土瓶(27)がある。また、灯火具では内面に透明釉を施釉するいわゆる柿釉の灯明皿が期以降に出現し、また、京・信楽系陶器の灯明皿・乗燭も期以降急増する。

以上、器種別に当遺跡で出土した土器・陶磁器の組成の変遷を概観してきた。最後に、これらの土器・陶磁器組成の変化の背景について若干触れてみたい。

期では、食膳具の主体は肥前系陶器の椀・皿類で占められており、磁器は若干の中国製青花を除いて使用されていない。また若干ではあるが、美濃系の志野あるいは織部の椀・皿類が認められる。

また、中世には食膳具として使用されていた非ロクロ成形の土師器皿は、その使用目的が灯明皿に限定されるようになる。

調理具では、播鉢はすでに備前焼が極少量見られる程度にまで減少し、丹波焼がすでに主体を占めている。

貯蔵具も同様に、備前焼はほとんど姿を消し、備前焼を模倣したと考えられる受け口状の口縁をもつ丹波焼類の甕が主体を占めている。

期も同様に、食膳具では肥前系の陶器椀・皿類が主体を占めるが、これに肥前系磁器碗・皿が加わる。また、調理具では期に引き続き、丹波焼播鉢が独占的に使用され、備前焼播鉢は姿を消す。

貯蔵具も同様に、丹波焼甕のみとなり備前焼は見られない。

このような状況に変化が生じるのは、続く期である。期になると、食膳具は肥前系陶器の椀・皿類が依然として使用されているが、波佐見産の粗製の染付磁器を中心に肥前系の磁器碗・皿類が急速に普及し、食膳具における磁器の占める割合が増加する。

調理具においても、それまでの丹波焼の独占状態に変化が生じ、新たに堺産播鉢が出現する。

一方、甕・壺類を中心とする貯蔵具は、依然として丹波焼が主体となっており、前代との間に変化は認められない。この様に、期には肥前系磁器の増加と堺産播鉢の出現と言う2つの大きな変化が生じる。

このような磁器碗の増加の要因には、碗の用途が抹茶に供する茶碗から、漸く食膳に供する飯碗へと変化して行くことがその背景にあるものと考えられる(長佐古 2002)。

また、備前焼の系譜を引く堺産播鉢の出現と普及には、中世以来の伝統的な備前焼ブランドへの希求の他、丹波焼生産における主要な流通商品の播鉢から伝統的な甕・壺生産への回帰、丹波焼播鉢の普及に大きな力をもった大坂商人の丹波焼播鉢流通からの撤退(長谷川 2005 a)などの要因が考えられる。

このような状況は続く期にも引き継がれ、食膳具では、いわゆるくらわんか手の碗・皿類を中心に肥前系磁器がますます普及し、肥前系陶器の椀・皿類は対照的に急速に減少してゆく。また、調理具では

丹波焼播鉢と堺産播鉢が使用されているが、徐々に丹波焼播鉢は減少してゆく。

期は 期と並んで土器・陶磁器組成に大きな変化が生じる時期である。まず、食膳具の碗・皿類では、前期まで主体となっていた肥前系磁器碗・皿に加えて、瀬戸・美濃系陶器碗・皿、京焼系陶器碗・皿が加わり、さらに、この時期の後半すなわち19世紀前半以降になると、瀬戸・美濃系磁器、三田焼などの京焼系磁器が加わり、食膳具の組成が大きく変化する。

とくに、京焼系陶器の普及は著しく、碗・皿などの食膳具のみならず、土瓶、土鍋などの煮炊具、灯明皿、乗燭などの灯火具などにも比較的多く見られるようになる。また、瀬戸・美濃系陶器の碗・皿には腰鑄碗、鎧茶碗、馬ノ目皿などが見られる。

この他、京焼系の磁器である三田青磁には碗・皿の他、型作り成形の鉢・急須などが極少量ではあるが見られる。

また調理具では、丹波焼播鉢が依然少量見られるが、堺産播鉢に加えて明石産播鉢がこれに加わり、播鉢が丹波焼から堺産さらには明石産へと移行していることが窺われる。

しかし、貯蔵具では、甕は依然として丹波焼が主体を占め、これに大谷焼などが若干加わる。また、壺も丹波焼が主体であり、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器は少量認められる。

丹波焼では壺の変形である徳利の使用が顕著になる。徳利はこの時期の前半にはラッキョウ徳利が見られるが、後半になると、外面にイッチン掛けて酒屋の屋号など記すいわゆる貧乏徳利が多く見られるようになる。

またこの時期以降になると、灯火具も増加する傾向が見られ、従来のロクロ土師器の灯明皿に加えて、内面に透明釉を施すいわゆる柿釉の灯明皿・乗燭、信楽焼の灯明皿・乗燭が目につくようになる。

このような傾向は続く 期にも引き継がれ、食膳具では肥前系磁器の優位はくずれ、瀬戸・美濃系、京焼系の陶器・磁器が増加する。

期における陶磁器組成の変化の背景には、18世紀後半～19世紀前半代の地方の中小窯の勃興、磁器生産の肥前窯から瀬戸・美濃系窯、京焼系諸窯をはじめとする地方窯への流出、京焼系陶器の普及に見られる京風文化の地方への普及、煎茶あるいは番茶の普及などさまざまな要因が指摘される。これにより、近世後半期の社会的・経済的背景の変化が、今回出土した土器・陶磁器組成にも色濃く反映されていることが指摘出来る。

引用・参考文献

- 石井 啓 2006 「生産 備前」『江戸時代のやきもの - 生産と流通 -』記念講演会・シンポジウム資料集
- 稲原昭嘉 2000 「明石播鉢の編年について」『近世の実年代資料』 p.p.171～182
- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布 - 発掘資料を中心として -」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館
- 1993 『肥前陶磁』 ニューサイエンス社
- 岡山市教育委員会 2000 『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1998年度
- 関西陶磁史研究会 2001 『近世信楽焼をめぐって』研究集会資料集
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 嶋谷和彦 1996 「堺播鉢の生産と流通」『考古学ジャーナル』 409 p.p.36～43
- 2002 「近世・堺における陶器生産 堺播鉢を中心に」『関西近世考古学研究』 p.p.82～93
- 白神典之 1992 「堺播鉢考」『東洋陶磁』19 p.p.83～103
- 乗岡 実 2000 「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』 p.p.61～69
- 2005 「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集 p.p.121～142

- 2007 「各地で作られた備前焼に似た焼き物」『備前市歴史民俗資料館研究紀要』9 p.p.119～136
- 長佐古真也 2002 「お茶碗考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集 国立歴史民俗博物館
- 長谷川 眞 2004 「中世丹波焼における擂鉢生産」『中近世土器の基礎研究』 p.p.249～268
- 2005 a 「丹波焼における中核窯と周辺窯」『兵庫陶芸美術館研究紀要』第1号 兵庫陶芸美術館
- 2005b 「丹波」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』資料集 p.p.165～188
- 2006 「生産 『丹波』～近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの 生産と流通』記念講演会・シンポジウム資料集 p.p.149～173
- 2007 「近世丹波焼の生産と流通」『近世丹波焼の研究』大手前大学史学研究所オープンリサーチセンター
- 畑中英二 2006 「生産 『信楽』～近世の信楽焼」『江戸時代のやきもの - 生産と流通 -』記念講演会・シンポジウム資料集
- 兵庫県教育委員会 1993 『伊丹郷町発掘調査報告書』
- 2000 『有岡城跡・伊丹郷町』
- 2004 『兵庫津遺跡』
- 藤澤良祐 2006 「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきもの - 生産と流通 -』記念講演会・シンポジウム資料集
- 堀内秀樹 1996 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学埋蔵文化財調査紀要』
東京大学文化財調査室
- 間壁忠彦・間壁霞子 1966a 「備前焼研究ノート（1）- 備前焼の成立 -」『倉敷考古館集報』1 p.p.20～37
- 1966b 「備前焼研究ノート（2）- 中世備前焼の推移 -」『倉敷考古館集報』2 p.p.24～38
- 1968 「備前焼研究ノート（3）- 備前窯址の分布」『倉敷考古館集報』5 p.p.42～55
- 1994 「備前焼研究ノート（4）- その後の新資料 -」『倉敷考古館集報』18 52～65

土 師 器 · 瓦 質 土 器

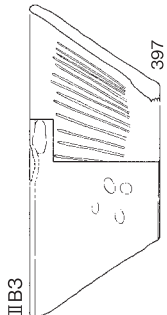
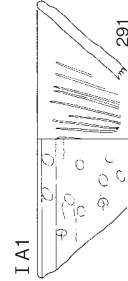
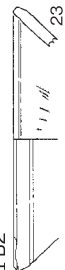
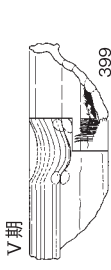
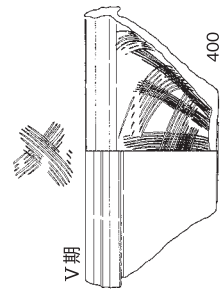
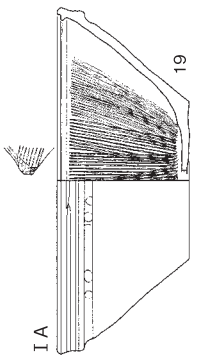

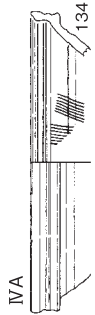
火 消 し 壺

焙 烙 型

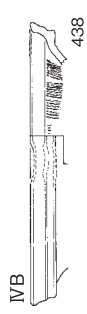
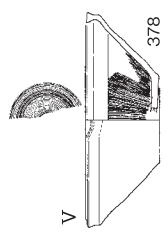
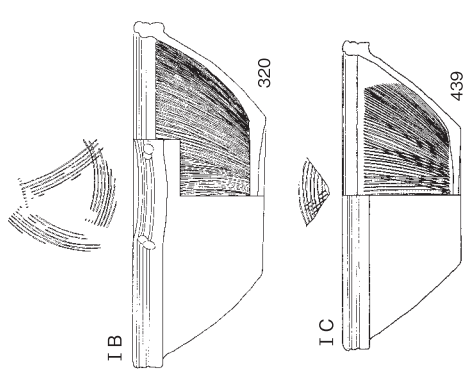
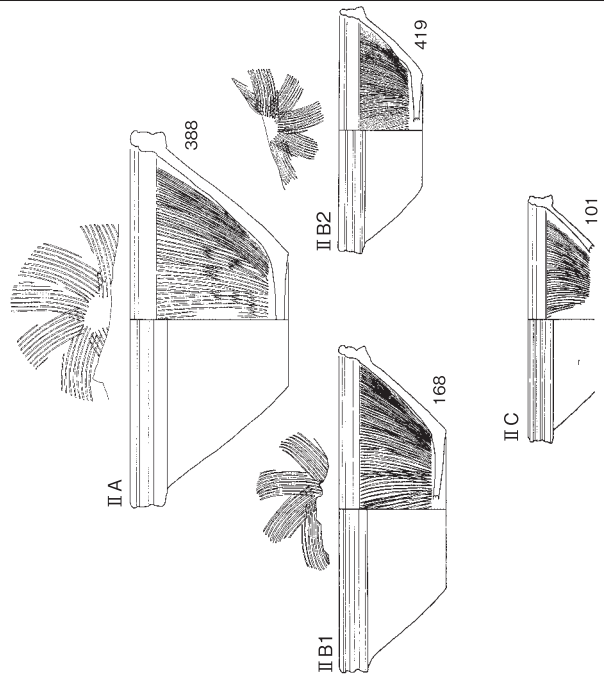
焙 磨 型

		焙 烙 型		焙 磨 型		火 消 し 壺	
II 期	1650			IVA1	179	I	361
	1700			IVA2	183		
III 期	1750			IVB	173		
	1800			IVC	182	IIA	343
IV 期	1850			IVD	231	IIA	338
						II B	341
V 期							
VI 期							

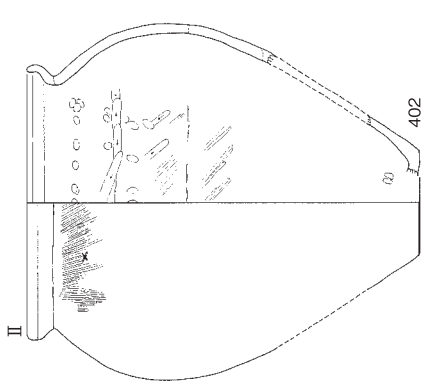
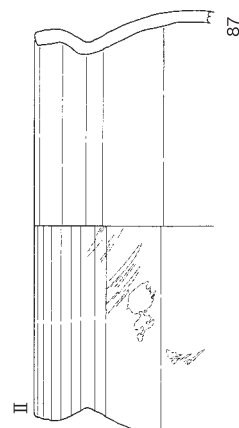
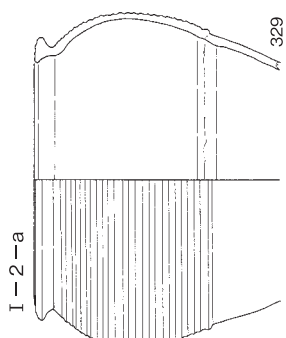
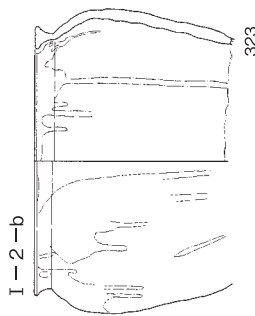
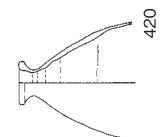
第11圖 土器・陶磁器変遷表 (1)

		鉢			明石産
		備前焼	堺産		
I 期	1600	 III B3 397  IA1 291  IB2 23	 V期 399  V期 400	 IA 19	
	1700	 IB3 28  IVA 134			
II 期	1650				
III 期	1750				
IV 期					

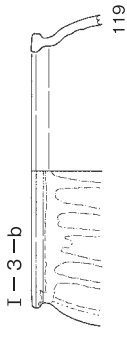
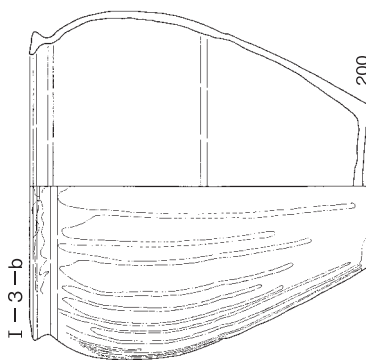
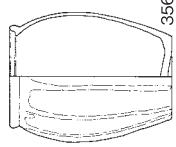
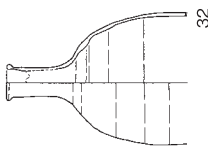
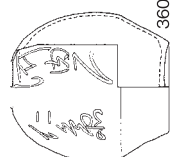
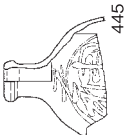
第12図 土器・陶磁器変遷表(2)

		鉢			
		丹波焼	備前焼	堺産	明石産
IV 期					
V 期	1800				
VI 期	1850				
	1900				


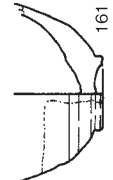

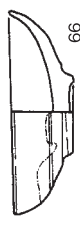

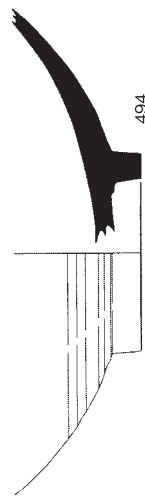
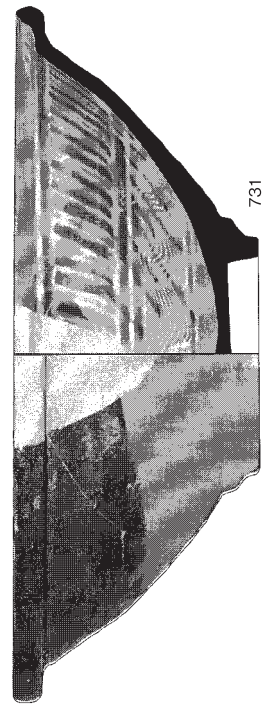
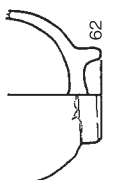
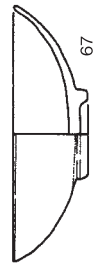
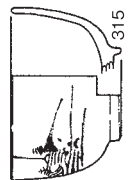
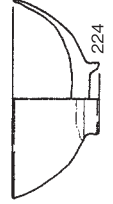
第13図 土器・陶磁器変遷表(3)

		丹		波		烧		壺・德利	
		藝		藝		藝		壺・德利	
I 期	1600	 <p>402</p>							
	1650	 <p>87</p>							
	1700	 <p>I-2-a</p> <p>329</p>							
	1750	 <p>I-2-b</p> <p>323</p>							
		 <p>420</p>							


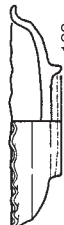

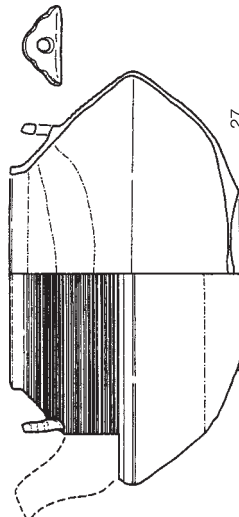





第14図 土器・陶磁器変遷表(4)

		丹		波		烧	
		甕				壺・德利	
IV 期							
V 期	1800						
VI 期	1850						
	1900						

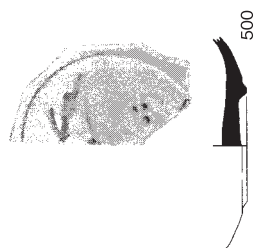



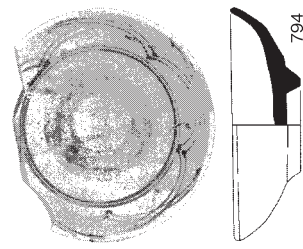


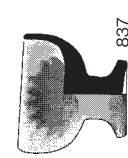
第15図 土器・陶磁器対応表(5)

		肥		前		系		陶		器	
		碗		皿		鉢				鉢	
I 期	1600										
II 期	1650										
III 期	1700										
IV 期	1750										



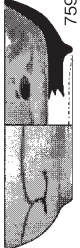



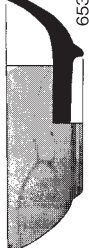


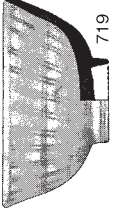
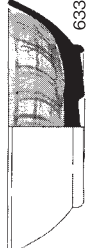




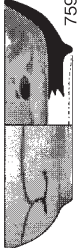



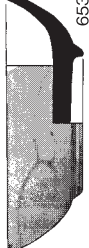


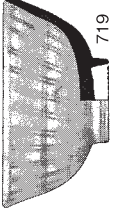
第16図 土器・陶磁器変遷表(6)

		瀬戸・美濃系陶器		京焼系陶器	
		碗	皿	碗	土瓶
IV 期					
V 期	1800	 856	 138	 422	 27
VI 期	1850	 843	 536	 838	
	1900			 863	 823

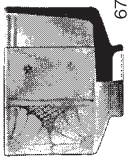



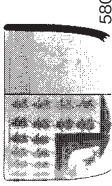


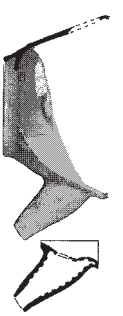
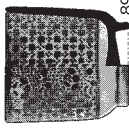
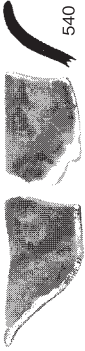
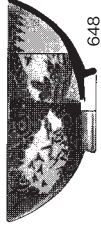
第17図 土器・陶磁器変遷表(7)

		肥				前		磁		器	
		碗				皿				鉢	
										仏具碗	
I 期	1600										
	1650										
II 期	1700										
	1750										
III 期	1700										
	1750										
IV 期	1700										
	1750										

第18図 土器・陶磁器変遷表(8)

		肥			前			磁			器			碗					
IV 期						1800	V 期					1850	VI 期						
																			
						1900													

第19图 土器・陶磁器类一览表(9)

	肥前系磁器		瀬戸・美濃系磁器	三田青磁	その他
	杯	蕎麦猪口	碗	鉢・急須	碗
IV期	 673  689		 722	 867	 580
V期	 805		 696	 826	 895
VI期				 540	 648
	1800	1850	1900		

第20図 土器・陶磁器対応表 (10)